

起きたらチェンジ・ザ・ワールドしてた件

change

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしも、カードゲームが、デュエルマスターズがスポーツのジャンルに入る世界があったら。これはそんな世界で目を覚ましたデュエマプレイヤーの物語。

そして描かれるもう一つの物語。2018年に自分の前から姿を消した友人の存在から、悲しさと虚しさに苛まれ、カードゲームから離れた者が切り開くカードゲームの歴史。本編とは1年後の別世界を舞台としたアナザーストーリー、『material world』。

未来と過去、別世界の2つの物語が絡み合うとき、物語は遂にその正体を現す。

大体更新するとしたら12:00か18:00、0:00にする予定。

最初から読むのダルい、どんな感じなのか手っ取り早く知りたい、という方は『イツツ・ショーカイ・タイム【UA3000突破記念】』を読むとmaterial world第4話までの内容と本編1章までの重要な内容やちよつとした設定が大体分かると思われる。

←Twitterへのリンクです。

<https://twitter.com/Deetx13Ns07fytss09>

# 目次

m a t e r i a l w o r l d

アイツの居ないN・ワールド

1

天下統一 オオモリ・サン

9

再誕のデュエリスト

17

闘い踊る狂気の獣

27

六奇怪の二 ～連続癌死亡事件～

45

デス・メンドクーサ

53

本編 第1章 変革 | I n d i s t i n c t |

開幕デリート小説

61

名も無き主人公の召喚時効果で名称付けますね～

69

リハビリ・プログラム

77

アイム・ユツキー・キル・ユー！

85

A D A M ってこんな気持ちだったのかな

92

レッツ！焼肉パーティー

100

ネタデツキ・デスマッチ

109

アンラツキー・雪

118

タイマンやろうぜ

127

学校を破壊したい男

135

完全防御作戦

143

特別編【U A 1 0 0 0 突破記念】メリークルシメマス

151

うごめく物語

160

特別編【U A 約 2 0 0 0 突破記念】メデタイン2019

171

未知の考え方との遭遇

184

恐怖の影

194

漆黒の亡者	205
過去からのプレリユード	213
逆転の決闘	221
特別編【エイプリルフル記念】フル・ライフ	231
失われし記憶の復元	239
虚構空間のチェイサー・ハンド	247
リソースフエミドロ	257
不諦の遺志	264
蘇る蒼の遺志	271
Eyes of an ugly flame	278
イツツ・シヨーカー・タイム【UA3000突破記念】	290
第2章	
フー・アー・ユー	296
知識と臆病と愚人の決断	306
特別編【UA4000突破記念】ホーリー・メール	315

m a t e r i a l   w o r l d

## アイツの居ないN・ワールド

竹宮<sup>たけみや</sup> 深<sup>しん</sup>。それが俺の名前だ。どこにでも居る大学3年生。趣味はSNS。最近は就職予定の会社の先輩と良く話す。

現在、2019年7月26日、14時23分、天気は雨、温度は25度で湿度は60%と体には心地よい。

「あーあ、つまんねーな……」

外の天気を見ながら、重い溜め息をつく。

空模様は荒れる一方。黒い空は、まるで自分の心を映し出しているかのようだ。

雪が消えてからカードゲームに興味が湧かず、とうとうデュエマプレイヤーを引退してしまった。馬鹿みたいに楽しんで、話し合っていた奴が消えてしまっただけからだ。

深は暗い気持ちを誤魔化す為に部屋の机に向かい、勉強を進める。

「……」

電気も点いていない暗い部屋で、雨の音とシャーペンが文字を書く音だけが響く。それが酷く彼の心を女々しくさせる。

ふと、ペンを止める。

「……ここら辺にあつたかな」

深は部屋に置いてある棚から1冊のアルバムを引き抜く。表紙には2018/7と書かれていた。

ペラペラと中を捲る。色とりどりの写真が目に入って来る中、1枚の写真を取り出す。

そこに写っていたのは自分とデュエマをする雪の姿。次の一手を考え過ぎて、カメラに気付いていなかったのだろう。手札と睨めっこしている姿が納められている。

「懐かしいな……もう1年も経つのか……」

雪の消えた日の前日に撮られた写真。Skypeではなく実際に会ってデュエマをしたのはこれが最後だった。

確かあの日は……

「ガロウズ・ホール殿堂で弱体化した悠久チェンジを改良したのを使ってたんだっけアイツ……。俺は確か5cドラゴンだったかな？で、悠久チェンジは自分には駄目だとか言っただけ崩したんだっけ……………」

自分の記憶を確かめるようにその日のアルバムを捲る。

深は懐かしい思い出が鮮やかに蘇るのを感じる。

「デュエマかあ……。カードゲーム自体もう興味も湧かないから調べものとかしてなかったけど、今どうなってんだろうなあ……」  
深はふと自分がやっていたカードゲームの現状に興味を湧いたが、すぐに面倒臭く思い、PCを立ち上げようとした手を止める。

「止めよう……。今更調べた所で何にもならないし、どうせ理解出来ないだろ……。カードゲームなんてそんなものだろうし」  
アルバムを横に置き、机に突っ伏して昼寝を始める。もう雪との思い出を振り返らないようにしよう。と自分に言い聞かせ、思考を放棄する。この行動を何ヶ月も続けて来ている為、どうせまたいつか振り返ってしまうのだろうが。

そう考えると、自分が如何に後ろ向きなのかが分かってしまう。そんな自分がより嫌に感じ、寝る気分さえ害してしまう。

深は昼寝に集中出来ず、仕方なくPCで現在のカードゲームについて調べた。デュエマについて、でないのはせめてもの女々しい自分への反抗だ。

「カードゲームも増えたな……………」

自分がカードゲームをしていた頃より確実に増えているカードゲームの数に若干の驚きとこんなことを調べている自分への呆れの表情を浮かべる。

深は様々なカードゲームを話題にするまとめサイトを幾つか調べて行く内に、興味深い話題を目にする。

【速報：遊戯王、遂にVRシステムをカードゲームに搭載する。カードゲーム業界に走る衝撃】

VR、バーチャル・リアリティ。現物や実物ではないが機能として

の本質は同じであるような環境を、ユーザの五感を含む様々な感覚を刺激することにより理工学的に作り出す技術のことだ。もう一つの世界があるかのような技術から、仮想現実とも言われている。

調べると遊戯王がVRを搭載したゲームシステムを開発する計画は前々から、およそ2年前頃からあったらしい。しかし既存のカードにマイクロチップを埋め込み新たに発売することは遊戯王プレイヤーからの反感の声が挙がる可能性がある為、カードを読み込み、立体映像にする機材、技術が必要となった。勿論それには莫大な資金と売れる見込みが無ければ実行出来ない。それらを解決し、とうとう実行段階に至ったのが今年のようなようだ。まだ制作段階の映像です。と注意書きはされているが。

「何々・・・2020年秋頃始動予定の遊戯王VRをプレイするにはCONAMI IDの作成、登録とVRスキャナーが必要となります・・・と。VRスキャナーって何だ？」

すぐさま検索すると、画面に少し縁が太い眼鏡が表示される。これがVRスキャナーという物らしい。

「成る程な・・・この眼鏡型のを掛けるとカードの絵柄などの情報からモンスターが出現すると・・・」。確かにこんなアニメみたいな技術がCONAMIで発明されたのなら他のカードゲーム業界は焦りを感じるか・・・」

案の定遊戯王の売上は大きく向上し、今月のカードゲーム業界の中でも一番の売上を見せているらしい。これには他にはない魅力などを武器に売っていたデュエマやバトスピ、ポケモンなども大打撃を食らってしまったようだ。

『インフレ凄いいけどここら辺りでやってみようかな・・・？』

『前から遊戯王ってARとかに力入れてたと思ってたけどここまで来たのか』

『眼鏡は必ず必要って訳じゃなさそうだな。仕組みが分かればパソコンみたいに自分で作れそう』

『→でもCONAMIに不正だとか言われそうだよな』

ネットを見ればこんな風な発言が他にもチラホラ確認出来る。試

作映像が共に添付してあり見てみたが、予想以上に出来が良い。ヌルヌル動くモンスターに綺麗なフィールド魔法などは正に圧巻だった。「……………そういえば、ファミコンが流行ったのもこういう革新的なのがウケてゲーム業界で無双していたんだっけな……………。眼鏡も安いみたいだし、これは本格的にカードゲームに革命が起きるのかもな……………なんて」

予想されるのはカードゲームがARやVRで実際に絵に描かれたモンスターが動いたりする、そんな時代。

「まるで、子供の描く夢の世界だな……………」

頭の中に広がるTCGのアニメのような世界。当然命を賭けたりはしないし、普通のカードに何百万もかかったりはしないが、それはカードゲームをプレイする子供たち、いや、子供に限らず様々な人が一度は夢見るだろう世界。

「良いなあ……………そんなことが実現するかもしれない、そんな可能性があるだけでも、技術ってというのは素晴らしく、同時に恐ろしい物なんだな」

自分が小さい子供の頃には所詮は夢物語、実現する方法などあるはずがない。と、その年の子にしては多少、夢が無かったが、今では可能性があることを知り、興味を抱いている。TCGが出来てからその手の話は笑い話に終わっていた、それがたったの数十年で夢じやなくなる。凄いことだとは当然思ったが、実はそんなことよりもとても恐ろしく感じるのだ。

簡単に例えるなら、アニメの実写化のようなものだ。

雪が前に言っていたことなのだが、夢やイメージとは脆く強固な建築物だ。イメージには法則や外敵は存在せず、想像力のままに頭の中にモノを創造することが出来る。これは科学や技術、時間や空間の概念、あらゆる障害を無視することの出来る最高の建築所と例えることが出来るだろう。

しかし、それは現実性を帯びた瞬間に夢では無くなってしまっただ。一度まとわりついた現実性という外敵は更に現実性という問題を積もらせて行き、結果として大きな障害を前に、実際にイメージし

ていた物から変化した、つまらない物になってしまふのだ。故に、イメージというものは酷く脆いものであると雪は言っていた。このVRTCG問題について当てはめるなら、外敵とはユーザーと金銭、信頼と期待などだろう。ユーザーの信頼と期待に応えようと足掻けば足掻く程に、実際の理想からは離れて行く。ユーザーが求める物を作るのが仕事なのに、求める物が何なのかを追求すればする程、ユーザーの夢は現実性を帯び劣化して行くとは、何とも悲しいものだ。夢はイメージの中でじっとしていきたくれ、と俺は思う。

そして、この計画は恐らくこのままでは微妙な結果で終わる。ネット上でもそういった心配の声があがっているが、竹宮 深という一個人の意見としても、そう思わざるを得ない。

「カードゲームに必要なシステムのままじゃきつと一時的ブームで終了だ。そんなの、製作した側からしたらもう少し続いて欲しいと思うだろうなあ……。何か後1手あれば変わるかもしれないけれど……」

方法なら思いつく中にはあるのだが、それは多くのアドバンテージを手放すことでもあるわけで。例えば、カードゲーム業界やその他の企業全体へのVR技術の提供、もしくは、複数の企業との合併である。「もし企業が合併し、巨大なTCG企業が出来れば、資金や人員、技術力というイメージの障害になり得るだろう問題の殆どが解決される。オマケに他のカードゲームによって自社のカードゲームプレイヤーが減る。ということも工夫次第では少なくなるかもしれない。だがそれは、今回の出来事により発生するであろう利益を、独占出来なくなるということでもある……」

例えるなら宝くじで当たった大金を他者に分け与え、仲の悪かった人に友達になってくださいと言うようなものだ。

『~~~~』

記事を読みこれから起きうることを思考していると、昔を感じる電子音が深い居る部屋に響く。スマホから流れるPlainetesの8bit音アレンジ版に反応した深はそつと手を伸ばし、机に置いてあったスマホの液晶をタップする。

『もしもし、竹宮です』

『あ、竹宮さんですか？夢木です。ちよつと君に今すぐ会社に来て欲しいんだけど時間大丈夫かな？』

電話に出ると、少々ストイックな若い女性の声がした。この声に聞き覚えがあるような気がして深は了解しましたと言った後、誰だったかを思い出す。

夢木 ゆめぎ 奈々 なな。俺の行きたい会社で先輩と良く一緒に働いていたと記憶している。先輩の想い人でもある。

あまり接点は無かったと思うが、友達の友達は友達理論で納得する。取り敢えずは今すぐとのことだった為、ちゃんとした服装に着替え、会社へと向かう。何故呼ばれたのか、もしかしたら採用したいという要望ではないだろうか。と微かに期待するが、その可能性は低いだろう。

「何かあったのかな・・・」

社員では無い人物を急に呼ぶだなんて事態に興味が湧く。どんなトラブルが起きたのかワクワクしながら駅に着き、電車に乗り、会社へと少し早足で向かう。

「すみません、遅くなりました。竹宮 深です。今回はどのような御用件で・・・？」

「ああ、竹宮君！助かった。君の力を貸してくれないかな！」

俺の力を・・・？？？どういことだろうか？

「実は今、会社にCONAMIさんが来てて・・・」

「え、CONAMIさんですか？」

さっきまで記事を見て心配をしていた会社が何故こんな所に来たのだろうか？

「ホラ、ここってDAKARATOMYさんとそれなりに仲良いだろ？だから多分交渉の架け橋になって欲しいってことで来たんだと思う・・・」

「・・・それってもしかして・・・VRについてじゃないですか？」

疑問に思っていたことを先輩に聞くと、先輩は、誰かから聞いたの

!?と驚いた様子でそれを肯定する。やっぱりそうだったか・・・でも、俺を呼んだ理由には全くなならない。

「俺関係ないですよ？こんなただの大学生には全く」

「それでも無いんだよ。実はね、CONAMIさんはDAKARATOMYさんのカードゲームプレイヤーの意見を聞きたいらしいんだ。どうやらDAKARATOMYさんのカードゲームを理解しておくことで交渉を有利に進めたいんだとか・・・一応、竹宮君はカードゲームの大会で優勝したこともあるんだろ？だからすぐ連絡が取れる君を選んだ」

成る程、今度こそ納得がいった。アポもない急な来訪ではあったが、DAKARATOMYさんとの交渉をしたというCONAMIさんを無碍には出来ない。それで求められていたDAKARATOMYさんのカードゲームプレイヤーとして俺が選ばれ、呼ばれた訳だ。

「でも先輩、俺もう殆どカードに触れてないですよ。触ってたのなんて1年前ですし」

「そんなこと言ったらうちには触った経験の無い人しか居ないんだよ。頼む！どうかこの通り！」

「私からもお願い出来ないかな？」

先輩が目の前で頭を下げる。それだけでも止して欲しいのに、追撃に今日電話で聞いたことのある声の人が頭を下げてくる。夢木さんだ。良く見れば盆を持っている。社長と話しているCONAMIさんの所へお茶でも渡しに行っていたのだろう。

「ちよ、先輩顔上げて下さい、夢木さんも・・・一応、こんなので良ければ、お力添え出来るかは分かりませんが、出来る限りを尽くさせてもらいます」

「ごめんね、急にこんな・・・無理せずに、質問に答えられなかったら分かりませんと答えて良いからね。そこまで強要なんて出来ないから」

「今度、美味しい物でも私が奢るよ。本当に助かったから」

此方の心配をしてくれる先輩と、約束を取り付ける夢木さんの顔は

安心したようでまだどこか不安そうでもあったが、今の現状を考えれば無理もないことだ。

まず、CONAMIという大きな会社がこの小さな会社に来た時点で胃がやられる。それに急な来訪だったが為に歓迎の用意も出来ていないのだ。とても安心なんて出来る環境ではない。俺もかなり緊張している。実は遊戯王をしていたこともある自分からしたら、何でこんなカード彫ったんだよ！アホかつ！と不満を口にしていた所と会話をしなくてはならないのである。胃痛どころか生きている感覚がしない。

それでも俺は、自分の任された仕事をこなさなくてはならない。社長が会話している部屋のドアをノックする。

「失礼します……」

「おお、急に呼んでしまつてすまないね、CONAMIホールディングス株式会社を経営しています。大森<sup>おおもり</sup>明<sup>あきひ</sup>です」

プレッシャーか、効き過ぎた冷房のせいなのか、これから自分は魔王と戦わなくてはならない小鹿の気持ちを体験することになるのだろう。俺は目の前に立つ優しそうな顔をしたお爺さんを見て、死ぬ覚悟を決めた。

「こんにちは、たきえ……竹宮 深です。宜しくお願ひします……」

## 天下統一 才オモリ・サン

「成る程、それではここを——」

「ならここは——」

現在、深の目の前では信じられない光景が広がっていた。

子供の頃にやっていた遊戯王の運営会社CONAMIの社長と自分が就職する予定の会社の社長が話し合っているのだ。

当然、緊張が襲ってくる。自己紹介も噛み噛みで、足も生まれただの子鹿を通り越して海月のようにふにやふにやして力が入らない。ソファに座るのを許可されなければ今頃は床に座っていたことだろう。

「.....」

発言はしたい。だが、それが出来ない。

この会社に入りたいのだから、目の前で話している社長に自分出来ますアピールはなるべくしていききたいのだ。しかし、自分はカードゲームプレイヤー。それもデュエマ経験者として召喚されたのだ。デュエマの話やカードゲームに関する話を振られない限りは下手に発言してはいけないと思っているのだ。それに、絶賛話し合い中の両者に水を刺して悪いイメージを与えてしまう可能性もないとは限らない。

どこか焦っている自分を落ち着かせるために、机に置かれているお茶を一口飲む。淹れたてで熱かったお茶は、いつの間にか猫舌の自分には調度良い温度になっていた。

「.....やはり、我社のカードゲームにのみVR技術を使うのは一時的な脚光を浴びる程度なのが事実のようですね。ここまで漕ぎ着けたVR企画を無かったことになど今更出来るはずもない。深君、私はVR技術をやがては全カードゲームに浸透させたいんだ。この事について、君はどう思う？」

「.....全カードゲームに、ですか」

デカイ。やっと空気だった自分が発言できる場が設けられたかと思えばあまりにもデカイ話題であったことに持っていたお茶を落と

しそうになる。

全カードゲームにVR技術を。それは深が考えていたVR企画の利益を最大限にまで高める為に必要なプロセスでもあった。

少し夢の無い話にはなるが、今年まで遊戯王の売上は全カードゲーム上でかなり高い数値を記録してきた。ギネスにも乗る偉大なカードゲームだ。カードゲームをしていない人でも、遊戯王という名前は知っているという人はかなり多いのではないだろうか。

そんな世界的にも有名な遊戯王だが、近年、その勢いは徐々にだが落ちていく。

度重なるルール変更、加速するインフレ、複雑なルール、と、人が入って来辛いのが現状だ。

つまり、VRという技術を導入した所で、長く遊んでくれる新たなユーザーを確保し辛い状態にあるのに変わりはないのだ。

これが何を意味するのかというと、VR技術に使った金額や時間が無駄遣いという結末に終わってしまいかねないということ。

このCONAMIさんの企画は、かなりの確率で自分の首を締め、下手をすれば企業を終わらせてしまいかねないということだ。

まあ、勿論それは今のままでは、という話なのだが。

「良いんじゃないや、ないでしょうか。その、自分の様な庶民にそのような盛大な話へ正しい意見が出来るかどうかについてはいささか疑問ではあるのですが、私はこのままの状態で、つまり遊戯王にのみこの企画を実行した場合、最悪、御社にかなりの不利益が被られると考えています」

「正しい意見である必要などないよ。意見があればある程、後でこうしとけば良かったと後悔しないで済む。それに、君の意見は最もだ。きつと、君の考えている通りのことを、今、我社は実行すべきか考えている」

流星は大企業の社長だ。そこは既に考えていたということだろう。そうでなければ話し合いになど来ないはずだ。

「何故、それを迷っていられるのかお聞きしても宜しいでしょうか？」  
「もし、このVR技術を他のカードゲームに導入したとして、信じられ

ない程に反響が出るカードゲームというのが幾つか想像出来てしまっていてね。正直、何年かすれば、売上で追い抜かれ、ユーザー数も追い付かれてしまう気がしてならないんだよ」

「成る程、確かにデュエル・マスターズはルールが御社のカードゲームより分かり易いという声は確かにありますし、月の売上も最近では遊戯王を追い抜くこともありましたから、その迷いは仕方のないものかと……」

カードゲームと言えば遊戯王。MTGだという人も中には居るが、そのイメージが崩された場合、遊戯王がもう一度その座に落ち着くことは厳しい筈だ。

「恥ずかしながら、名声で売れている部分がありますから。それが無くなれば、如何に遊戯王と言えど、カードのインフレを進めて行くしかないのでは、衰退からの消滅というものを免れることは出来ない」  
「そうですね……。遊戯王を破滅させる要因があるとすればインフレ、そして、存続させるにはその危険分子を大きくさせ続けなければならぬ……。もし仮にインフレを抑え、それまでのカードを大幅修正しようものなら、ユーザーからの批判とユーザーの減少は免れず、やがては遊戯王を終わらせるしかなくなる、と」

改めて考えてみると予想以上に切羽詰まった状態であることが分かる。これらの情報は全てCONAMIさんの用意した参考資料から読み取ることの出来た考察ではあるが、かなりの的を得ている気がする。過去にルールの大幅な修正があったが、多くのユーザーが離れてしまっていることから、インフレの修正は困難だと伺えたのだ。

「すみません、インフレが原因で危機に陥っている現状であることはわかりましたが、そこで何故DARKARATOMYさんに協力を仰ぐのかそろそろお聞きになっても宜しいでしょうか？」

社長の発言で自分達が遊戯王の現状についての話にのめり込んでいたことに気付く。これはいけないと思い、ついさっきまで話していた大森さんを見ると、頭をポリポリと掻いて、しまった、という顔をしていた。余程焦っていたのだろう。少し話すの止めて社長と大森さんの話し合いに耳を傾ける。

「すみません、話し込んでしまいました。そのですね、DAKARATOMYさんと言うより、全カードゲーム会社を一つに纏め、企業を立ち上げようと考えているんです」

「CONAMIにVANDAI、DAKARATOMYなどの会社のカードゲームを統一するというのは、それだけのメリットが無ければ通らないものではないでしょうか……」

「そうですね。その為に今、私達CONAMIは全力でVR技術を遊戯王だけでなく、全カードゲームに対応出来るように改良を施していきます」

つまりだ。つまり、CONAMIさんはVR技術を交渉材料に使う気なのだ。DAKARATOMYさんからその交渉を行うのには理由があるのだろう。例えば、金銭面での補助やカードゲームの運営の補助などの要請だろうか。

ただこの計画、一つだけ大きな問題がある。

「今、改良しているのですか？こう言っては失礼ですが、それは発売時期に間に合うのでしょうか？」

そうだ。そこが問題なのだ。どう考えても今から全カードゲームに対応させるには圧倒的に時間が足りない。

「その点は大丈夫です。最近、優秀な技術担当が大量に手に入りましたね。次世代を代表出来るんじゃないだろうか、と思うような奴らが多いんですよ。部下に恵まれて、嬉しい限りです」

「間に合うんですか……驚いた、優秀な部下をお持ちなんですね」

「はい、私の自慢です」

会社の、ではなく、大森さん個人としての自慢なのだろうと思い、良い話だな。と感心していた所で、何の話をしていたのか思い出す。今の優秀な部下の話が本当なら、きっとそれも交渉材料の一つなのだろう。短期間で全カードゲームに対応させられる程の技術の提供というのはかなりの魅力があるのではないだろうか。

「因みに、その技術力も交渉材料に？」

「はい、もし協力して貰えるのならば、惜しみなく提供しようと考えて

います」

「そうですか……」

社長は納得したような雰囲気を出しながら、少し疑問が残ったような顔をしている。こういうのは聞いていった方が高評価なのだろうか。少し聞いてみることにした。

「どうかしましたか？社長」

「ん、いやね、そこまで交渉材料が揃っていて、何故D A K K A R A T O M Yさんのカードゲームについて良く知りたいと仰られたのか不思議に思ってますね」

「それは——」

それは、何故だ？

大森さんがD A K K A R A T O M Yさんについて知りたいのならまだ分かる。面接と同じで会社にある程度の理解があつた方が良いでしょう。何故、カードゲームについて知りたいのだろうか。技術の提供さえしていれば、交渉相手の会社からはその後も文句は無いと思えるが……

言葉が詰まる。

「カードゲームの統一をするのなら、デュエル・マスターズを深く知るのには礼儀だと思えます。それに、その、恥ずかしながら、私の息子がデュエル・マスターズをしていましたね」

「ええ」  
深く知るのが礼儀だとしたら世の中の交渉を行っている会社の何割かは礼儀知らずになるのでは？と思つたが、そこは個人の感覚によるだろう。

「というか、息子さんが自社のカードゲームではなく他社のカードゲームをしているのは、どんな気持ちなのだろうか……」

「えっと、つまりは……」  
「いえ、もし交渉が上手くいった場合、長い時間を共にする相手ですから。相手のことは良く知っておかないと、と思つただけです。それに、竹宮君というデュエマプレイヤーからの意見は私達C O N A M I社員にはなかなか出せないものもあるかもと思つてね」

自分の社員から出ないで学生である俺から出せる意見など無いだろうに。

「何か提案があったりしないかな？ DAKARATOMYさんに実現してもらいたいものとかが好ましいんだけど」

「……まあ、先程話していたVR技術でクリーチャー……ああ、遊戯王で言う所のモンスターですね。それを立体映像でゲームを行うとか。ゲームする時の周囲の景色をVRで好きなものに変えられるとかですかね。アニメのデュエル・マスターズの再現とえば良いでしょうか？」

辞めてしまった自分の意見が今のデュエマプレイヤーの望みと一致するかは分からないが、こんな自分の願ったことが叶う可能性を捨てる訳にはいかない。過去の自分が夢見たことを口に出す。

「後は……クリーチャーをデュエマ以外でもVRによる立体映像化が出来たら尚良いですね。呪文とかは勿論。城とか、あ、クロスギアやドラグハート、遊戯王で言う装備魔法を自分にも装備出来るように、とか」

「成る程ね……VRでのカードゲームというのはやはりどんなカードゲームでもプレイヤーは喜ぶと見て良さそうだな。これで自信を持って交渉しに行ける」

あとは、そうだな……

「世界大会で、VR技術を搭載した戦いが見てみたいですな」

「ああーそれは良いねーうん、すっかり失念していたが、それは確かに。世界大会という注目が集まる場でVR技術を使うということは、周囲の反応を確認出来る上に、VR技術を他社などに見せるチャンスにもなる！」

お、おお。どうやらお気に召してもらえたようだ。大森さんのリアクションに驚きながら、お茶を飲んで渴いた口の中を潤す。温かいお茶だったとは信じられないくらいに冷たくなっている。気付けば外も暗くなっており、社員はチラチラと此方を見ていた。かなり長い時間話していたのだろう。

「満足頂けたでしょうか……。その、やはり自分のような者が

大森さんのような大企業の社長さんに意見して良いものかと不安だったのですが」

「ああ、ごめんね。不安にさせちゃってたか。その、どうしても知りたくてね。焦ってたんだ。私のこの判断は間違っていないか、正しいことか。それを色んな人に確認したかったんだよ」

不安、か。それが本当の目的だったのかもしれない。アイツもそうだったけど、不安があるだけで行動出来なくなり、慎重になり過ぎてしまう人っていうのはこの世界に何人も居る。大森さんはその不安を取り除きたかったのだろう。そしてそれは、俺というカードゲームへの質問という形で解消されていったのだ。何だかんだ言っただけに建てたような気がする。

「では、ここらで一息」

「そうですね。この度は貴重な御時間を私の為に割いて頂き、ありがとうございました」

お開きの合図共に、社長と大森さんが握手し、お互いがお互いの今後を鼓舞する言葉を掛ける。やっと緊張から解放されると思うと、足に少しずつ力が戻ってくる。

「ああ、竹宮君」

「？」

さて、立つか。と思つた矢先、大森さんが此方へ手を伸ばしてきた。手を出せ、ということだろう。俺は手汗をスーツにこすりつけ、大森さんの手を握る。

「ありがとう。君のお陰で、きっとカードゲームは更なる進化を遂げる」

「そんな、大袈裟ですよ。元から大森さんはカードゲームを進化させることが出来た筈です。俺はただそれを質問に答えるといふ形で応援しただけですよ」

流星にこの程度で君のお陰など言われては困る。恥ずかしくて仕方がないというものだ。

「いいや、君のお陰で自信を持てた。そうだな……デュエル・マスターズで例えるなら、君は私の計画を促進させる《フェアリー・

ライフ》のような役割をしてくれたんだよ」

「《フェアリー・ライフ》、ですか……」

《フェアリー・ライフ》。それが指す意味は過去にデュエマプレイヤーであった俺には直ぐに分かった。

「そうですか……。それなら、私は役に建てたんですね」

「そうだとも。君はもつと自信を持つべきだ。……なんて、私の言えたことでは無いだろうけどね」

大森さんはそう言い終えると、社員の皆さんに一礼し、会社から出て行った。それまで静かだった社内がガヤガヤと騒がしくなる。どうやら、緊張していたのは俺だけではなかったようだ。社長も疲れきってソファに横になっている。

「お疲れ様、竹宮君。今日はもう暗いし、送るよ」

先輩、もし途中で寝てたらちゃんとして下さい。そういつて俺は先輩の後ろに付いていった。

## 再誕のデュエリスト

ぼやけた視界に映る一つの卓とその向こうに座る黒髪黒目の青年。懐かしさを感じるその少年の眼は真っ直ぐ此方を見ている。

『竹宮さんの最初のエースカードって何でしたか?』

最初のエースカード、というのが青年の趣味であるカードゲームの話であることは直ぐに分かった。今でも忘れない。最初のエースカードの名前は――

『ん? 《Z》だったな』

『いやいや、《Z》って言われても、どの《Z》か判りませんって』

そうだった。種類も沢山あるしフルネームでなければ伝わらないか。

『俺の一番最初のエースは――』

ベッドの上で目を覚ます。目覚ましにと設定した『NAMINO YUKUSAKI』は、その音色を大音量で流し始めるまで後3分という所だった。

ベッドから出ずに時計を視線を動かし確認する。現在7時37分。目覚ましをOFFにして洗面所へ行き顔を洗う。

冷水が不拔けた顔を引き締める。

懐かしい夢だった。あれは俺とアイツが会って仲が良くなり始めた頃の出来事だった・・・かな?流石にそこまで鮮明では無いが、そんな時だった筈だ。

「今頃になって、またデュエマに関わることになるとはね……」  
アイツに聞かせたら驚くだろうか？と、ふと考える。もし目の前にアイツが居たとして、大して驚かないのだろうか、と思った。アイツは他人に興味があるようで殆ど無いのだから、適当に、「え！そんなですか!?凄いですねえ……へえ……」と、まるで本当に驚いたかのように見せるだろう。デュエマではハツタリが上手かったが、実際、それ以外では半年くらい付き合いがあればそれなりに分かる程度のものであった。

CONAMIの社長である大森さんからプロジェクトへの勧誘が来たが、少し迷っている自分が居る。

あれだけ励ましてくれた大森さんには悪いが、正直、プロジェクトに参加してもチームから意見しか出さないと叩かれるのが用意に想像出来てしまうからだ。それに、俺の知っているデュエマは過去の物であり、現在の物では無い。そこを理解している自分が未来のデュエマを、カードゲームを支える等、あまりにも許せないのだ。

タオルで顔を拭き、深く溜め息をつく。廊下のヒンヤリとした空気が自分の心と体を冷やす。

大森さんとの話し合いから数日後、時間が出来た俺と先輩、夢木さんとで飲みに行った。

本当にただ先輩達の良く通う居酒屋という理由だけでそこで飲んだのだが、正直、先輩が夢木さんに好意を抱いていることを知っている俺はどこか邪魔ではないか、と思ってしまう、あまり居心地の良いものでは無かったが。

先輩とは飲んだことが無い訳では無いが、仕事の詫びでの飲みは初めてで、何だか自分が就職に成功したような気分だった。

最初は、先輩の働くあの会社で働こう、と思った。

しかし、今は未来にカードゲームを統括する会社への勧誘が来ている。

どっちが高収入で難しい仕事なのかは分かりきっている。自分の嘗ての趣味が活かせる仕事だということも。

——趣味を仕事にして嫌いになるのだけは、絶対に嫌ですね

「はあ………」

洗面所の鏡に、また深い溜め息をつく男の姿が写される。

この所の、アイツの言葉が何度も思い出される。自分の考えを正当化出来るものだけが、こうして記憶から掘り起こされる。

悪い傾向だ。自分の都合の良いように解釈してはいけない。要は趣味だったものを仕事にしても嫌いにならなければ良いのだ。

これにはまず、その仕事によって生じるであろうストレスの発散や、専門知識の不足や一般知識の不足から来る罪悪感や劣等感などの問題を解決出来るようにすることが大切だ。

その為には――

「………久し振りに、触るか」

一度は止めてしまったことを、もう一度、始めてみるのが良いのかもしれない。

「どこだったかな……」

散乱する段ボールの群れ。本来は見えていた筈の木の床も、その殆どが物置部屋から持って来た段ボールの中に入っていたノートやファイルで隠れてしまっている。

行動に移したままでは良いが、所詮は1年前の片付けの記憶。どの段ボールに入れたのか等、欠片も覚えていない。

普段名前を書く行為を面倒臭がっているからこうなるのである。完全に自業自得というものだ。

「おつかしいなあ．．．．．」

片っ端から段ボールを中身をひっくり返したが、やはり見つからない。デツキケースとカードボックスが一緒に入った段ボールが確かにある筈なのだが。

床に落ちた眼鏡を探す人の様に、四つん這いになって移動する。そんな時、足に何かプラスチックのような物が当たった感触がした。冷たさを感じるそれに、まさかと思ひ顔を向ける。

「あ、あつたああ．．．．．」

ボルメテウスクロニクルデツキに付属していた赤いデツキケースだった。中には自分のカードが入っていることが重量から分かる。この付近にまだある筈、と目を凝らす、それ以外は見つからなかった。当然、プラスチックケースも発見出来なかった。

そんな時だった。発見したデツキケースの中に、何やら白い紙が入っているのが確認出来たのは。

思わずデツキケースを開け、中のカードに目もくれず一目散に紙に目を通す。

「．．．．．そういえば、そうだった．．．．．」

紙に書かれた内容に、時間を掛けてプラスチックケースを探し回ったのは意味が無かったと判明し落胆する。

紙というのは、自分が昔に走り書きしたメモだった。

『他カード実家』

大凡書いた本人以外解読出来ないだろう文字で書かれたそれは、残りのカードの在処を示していた。

しかし実家に今から行くのも面倒だ。ここは東京、向こうは宮城。およそ360kmの距離があり、車で行ったとしても往復で8時間以上、電車でも2時間は掛かる上に1万以上の出費になる。今の時期に1万は自分からすると少々痛い。

大学の面倒な提出レポートもあるから休日は実質1日くらいしか無いと考えて良いだろう。卒業論文も本格的に作成し始めなければマズい、と同じ大学の奴らが嘆いていた。其方もそろそろやらなければならぬか。

カードなんか大人になつてからすれば良い。今は勉強。と親に言われていた時期があつたが、「大人になつてからなど何年後だと思つている。その頃には日本の労働環境がもっと悪化して、休暇なんてほぼ取れないかもよ」と反発していたことを思い出す。あの時は何だかんだ休日に好きなことをする時間が割とあつたのだが、今はアルバイトなどで疲れきつた体を短い期間で癒やすことで必死だ。休日が伸びて欲しいという願いは、どうやら、小学生時代から変わらないようだ。

「仕方ない、今はコイツでも動かしてみるか……」

そう言つて片付けもせずにデツキケースから懐かしき溢れるデツキを取り出し、その中のカードを一通り見て感覚を思い出す。

2ターン目に《リセット》、3ターン目に《タッチ》……よし。

「カードショップは……カードプールに差があるから、取り敢えずネット対戦で要望出して待機するか……」

パソコンの電源を付けると即座にパスワード入力画面へと移行する。

pass:\*\*\*\*\*

9文字のパスワードを入力し、見慣れたホーム画面に移る。しばらくして画面右下にロード中の表示が現れ、喪服の様な服を着た女性キャラクターが表示される。色とりどりのPC画面に表示される白黒のキャラクターは、どこか暗いイメージを持っていた。

『要件は何ですか』

「――」

「Duel Masters Calculator……っ」と

Enterを押すと、目的であつたサイトが開かれる。

Duel Masters Calculator ――通称D

MCと呼ばれるソレは、簡単に纏めるとD A K R A T O M Yが公式ホームページに設置したデッキ作成ページを応用し、通信対戦を可能にしたサイトだ。現在でも多くのDMPが参加しているのが、画面端にあるページ閲覧者数の数字ですぐに分かった。

手元にあるデッキを双極編までの殿堂に合わせ再現し、対戦する為の部屋を作る。『双極編までのカードプールと3月までの殿堂』と注意書きされたその部屋は、数ある対戦部屋の中でもかなり珍しい要求メッセージであった為、非常に目立った。

カード検索をしていると、そのカードが収録されたパックの情報も表示される。竹宮はそこで双極編が『ツインパクトNO. 1』というパックで終了している事を知った。しかし、自分が実際にカードを使ってプレイを続けていたのは《Q. Q. Q. X》のパックまで。正直、その頃もありやる気が無かった為そこまでプレイもしていなかった。殿堂について調べたが、自分の知っているものとかかなりの差異があった。まさか《アストラル・リーフ》がもう何ヶ月も前に帰って来ていたとは……

双極編が終了すると、GRゾーンという物が出来たらしく、簡単に言えば第2サイキックゾーンの様な感じだろうか。サイキックが出た当初、混乱するDMPが多かったらしいが、今の自分もかなり混乱している。これは順序立てて追って行くしか無いなと思い、まずは自分がやっていた双極編までの環境でデュエマを試してみることにしたのだ。

しばらくして、ポーンとPCからハ長調ラ音の通知音が。来たかと思ひ、PCの方に向かい、座っていた椅子を引く。

久し振りのデュエマだ。

bamboo：宜しくお願ひします

グルコサ民：よろしくお願ひします

対戦待ちのページから、対戦ページへと画面が切り替わり、《FOR BIDDEN STAR》世界最後の日《が自分のフィールドに展開される。

先行は……相手からか。

「グルコサ民は、手札の《撃髓医 スパイナー》をマナへ置いた」(マナ1)

「グルコサ民は、ターン終了した」

「成る程、墓地ソか魔導具と言った所か……?もしくは9軸ガチロボ?」

前者2つは可能性があるが、後者は少し可能性は低いだらう。

「bambooは、カード《マインド・リセット》をドローした」

「bambooは、手札の《超次元ガード・ホール》をマナへ置いた」(マナ1)

「bambooは、ターン終了した」

このチャット画面だが、プレイヤー自身が引いたカードなどは自分のチャット画面にのみ表記されるように出来ている。巻き戻しの際に何ターン目に何を引いたかなどが分かるように、どこがプレミだったかを後から分かるように、など理由は様々だ。

「グルコサ民は、カードをドローした」

「グルコサ民は、手札の《暴走龍 5000GT》をマナへ置いた」(マナ2)

「グルコサ民は、マナの2枚をタップした」

「グルコサ民は、《カツラデランス／「アフロ行きまくす!!」》を唱えた」

「グルコサ民は、手札の《一なる部隊 イワシン》を墓地へ捨てた」

「グルコサ民は、カード《フェルナンド・ソシユール／プライマル・スクリーム》をドローした」

「グルコサ民は、カード《一なる部隊 イワシン》をドローした」

「グルコサ民は、《一なる部隊 イワシン》の効果を解決」

「グルコサ民は、カード《フェルナンド・ソシユール／プライマル・スクリーム》をドローした」

「グルコサ民は、手札の《一なる部隊 イワシン》を墓地へ捨てた」

「グルコサ民は、カード《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》をドローした」

「グルコサ民は、手札の《フェルナンド・ソシユール／プライマル・

スクリーム』を墓地へ捨てた」

「グルコサ民は、バトルゾーンの《カツラデランス／「アフロ行きま  
す!!」》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、ターン終了した」

「なあにこれえ」

竹宮はPCの画面を前に意味不明といった顔でフリーズしていた。

——今の墓地ソってこんないきなり墓地肥やせんの………  
?

軽く、恐怖した。

しかし、弱点らしき物も分かった。相手の墓地を見るに、どうやら  
ツインパクトカードが多いらしい。いつかツインパクト対策として  
強くなるかも知れない、と入れていたカードが今自分の手札にある。  
そして墓地ソの基本は1:1交換。それが墓地ソの強味であり、弱点  
でもある。害悪ブラチナ・ワルスラススライムのような物が居ない限り増えることはほぼ  
無いと考えて良い筈だ。

「bambooは、カード《英雄奥義 スパイラル・ハリケーン》を  
ドローした」

「bambooは、手札の《英雄奥義 スパイラル・ハリケーン》を  
マナへ置いた」(マナ2)

「bambooは、マナの2枚をタップした」

「bambooは、《マインド・リセット》を唱えた」

《マインド・リセット》。効果は呪文版《解体人形ジェニー》だ。ツイ  
ンパクトはクリーチャーと呪文の混合カード。クリーチャーとして  
も呪文としても扱えるカードというのは途轍もない力を持つが、代償  
として、致命的な弱点を作るのだ。

「bambooは、《マインド・リセット》の効果を解決」

「bamboo: 失礼します」

「bambooは、相手の手札4枚を見た《爆撃男》《龍装鬼 オブ  
ザ08号／終焉の開闢》《フェルナンド・ソシユール／プライマル・ス  
クリーム》《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》

ハンデス出来るのは3枚、選択肢は2択。相手のマナは2マナ、次

のターンには3だ。どうせここで《プライマル・スクリーム》を落としたとしても、《終焉の開闢》で回収されるだけ。ここは……

「bambooは、相手の手札の《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》を墓地へ捨てた」

「bambooは、バトルゾーンの《マインド・リセット》を墓地へ置いた」

「bambooは、相手の手札3枚を元の向きに戻した」《爆撃男》  
《フェルナンド・ソシユール／プライマル・スクリーム》《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》

「bambooは、ターン終了した」

「グルコサ民は、カードをドロウした」

「グルコサ民は、手札の《爆撃男》をマナへ置いた」(マナ3)

「グルコサ民は、マナの3枚をタップした」

「グルコサ民は、《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》を唱えた」

「グルコサ民は、山札の上の《カツラデランス／「アフロ行きまゝす!!」》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、山札の上の《撃髓医 スパイナー》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、山札の上の《フェルナンド・ソシユール／プライマル・スクリーム》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、墓地の《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》を手札へ加えた」

「グルコサ民は、バトルゾーンの《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、ターン終了した」

《オブザ》回収にまだ墓地を肥やすつもりなのが分かる。大方、《クロスファイア》か《5000GT》辺りが落ちるのを待っているのだろう。

しかし――

「まあ、関係無いけど」

——呪文が手札に残るといふ考えは、このデッキ相手には通用しない。

「bambooは、カード《超次元リバイヴ・ホール》をドロ―した」

「bambooは、手札の《超次元リバイヴ・ホール》をマナへ置いた」(マナ3)

「bambooは、マナの2枚をタップした」

「bambooは、《復讐のバイス・カイザーZ》を召喚した」

## 闘い踊る狂気の獣

部屋の一室に置かれたPCの画面に映る1枚の《Z》。ツインパクトが搭載されている墓地ソとの対決において、その《Z》は恐ろしい程に強い。

「bambooは、バトルゾーンの《FORBIDDEN STAR》  
《世界最後の日》の左上の封印《マインド・リセット》を墓地へ置いた」

「bambooは、《復讐のバイス・カイザーZ》の効果を解決」

「bamboo： 失礼します」

「bambooは、相手の手札3枚を見た《フェルナンド・ソシール／プライマル・スクリーム》《百万超邪 クロスファイア》《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》」

「bambooは、手札の2枚を墓地へ捨てた《フェルナンド・ソシール／プライマル・スクリーム》《龍装鬼 オブザ08号／終焉の開闢》」

これで相手の手札は《クロスファイア》1枚のみ。更に封印が1枚解除。ツインパクト墓地ソの強味は手札が減らずに墓地が肥やせること。そして、弱味は手札が増やせないこと。ツインパクトになったことで呪文としての性質を得たカードは、呪文をハンデスする《バイス・カイザーZ》により無慈悲にも墓地へと送られる。

この青黒ドルマゲドンは、対ツインパクトを強く意識したデザインとなっている。《マインド・リセット》、《拷問ロストマインド》、そして、《バイス・カイザーZ》。どれも手札を見て呪文をハンデスするカードである。ツインパクトがデッキの殆どを占める《バラギアラ》デッキなどは最も大きな被害に遭うことだろう。

「bambooは、相手の手札《百万超邪 クロスファイア》を元の向きに戻した」

「bambooは、ターン終了した」

画面の向こうで、相手はどのようなことを考えているのだろうか。イラついているだろうか、冷静に分析しているだろうか。相手の顔が

見えないネット上でのデュエマは、相手の顔から何を考えているかという情報が入って来ない。一部の視界を奪われているのと同じだ。

リアルでのデュエマよりも、得られる情報は少ない。

しかし、ネット対戦にはログがある。ログを辿れば、相手の見せたカードなどを思い出すことが出来る。勿論自分もだ。一度公開すれば、ログという名のメモに内容を記載されるであろう。

「グルコサ民は、カードをドロートした」

「グルコサ民は、《百万超邪 クロスファイア》を召喚した」

そんなことを考えている内に、相手の場にG10で《クロスファイア》が手札から解き放たれる。しかし、これに自分が喜んでいることなど、相手は知る由も無いだろう。

「グルコサ民は、《百万超邪 クロスファイア》でプレイヤーを攻撃」  
「攻撃して来たか……」

しかし、それは想定済みだ。ここで《5000GT》を出さないのなら、引いたカードは《5000GT》で無い可能性がとても高い。相手がキープした手札は《バルチュリス》か《ハヤブサマル》、もしくは自分にハンデスさせ、使えるマナを減らす為のブラフのどれかだろう。

「《百万超邪 クロスファイア》は、相手のシールドを2枚ブレイク」  
(1, 2)

「bambooは、手札に加えられる《Dの博才 サイバードイス・ベガス》をバトルゾーンへ出した」

「bambooは、手札に加えられるカードを手札へ加えた」  
「《ベガス》を展開、後はジワジワと追い込むだけか……えー、これを選択してっ、と……」

手札にあるカードをマウスでクリックし、それを公開してから発動する。昔で言う『リベンジチャンス』のような能力を持つそのカードは、この竹宮のデッキにおいて重要なコマンド持ちのクリーチャーでもあり、踏み倒して来た相手へのカウンターカードでもある。

「グルコサ民は、ターン終了した」

「bambooは、手札《ZEROの侵略 ブラックアウト》を見せ

た」

「bambooは、《ZEROの侵略 ブラックアウト》の効果を決」

「bambooは、《ZEROの侵略 ブラックアウト》を召喚した」

「bambooは、バトルゾーンの《FORBIDDEN STAR

〜世界最後の日〜》の左下の封印《ZEROの侵略 ブラックアウト》を墓地へ置いた」

「あー、1枚封印落ちしてたかあ……まあ墓地にあるなら回収出来るし良いか。さて、俺のターン」

嘗ては『踏み倒し出来る《ザガン》』などと言われていた《ブラックアウト》。

《ブラックアウト》の持つ『侵略ZERO』という能力は、相手ターン中に相手がクリーチャーをコストを支払わずに出したターンの終わりに発動し、場に出るというカウンター系の能力だ。今回はG10によって踏み倒された《クロスファイア》がその引き金となり、《ブラックアウト》がノーコストで場に躍り出たのだ。

そして、《ブラックアウト》は自分の場にD2フィールドがある時、真の力を発揮する。

「bambooは、カード《天使と悪魔の墳墓》をドロウした」

「bambooは、手札の《天使と悪魔の墳墓》をmanaへ置いた（マナ4）」

「bambooは、manaの3枚をタップした」

「bambooは、《ブレイン・タッチ》を唱えた」

「bambooは、《ブレイン・タッチ》の効果を解決」

「bambooは、相手の手札からランダムに《メガゴーワン・チュリス／ゴゴゴ・Gol・ナツクル》を墓地へ捨てた」

「bambooは、カード《英雄奥義 スパイラル・ハリケーン》をドロウした」

「bambooは、バトルゾーンの《ブレイン・タッチ》を墓地へ置いた」

まずは相手が残した手札の処理。墓地に落とされたのはブラフと

思わしきツインパクトカード。これでは《クロスファイア》を処理して妨害と耐久を続けるだけだ。

「bambooは、《ZEROの侵略 ブラックアウト》でプレイヤールを攻撃」

「する時に、っと」

「bambooは、《ZEROの侵略 ブラックアウト》の攻撃するときの能力を発動」

「bambooは、《ZEROの侵略 ブラックアウト》の効果を解決」

「bambooは、相手のバトルゾーンの《百万超邪 クロスファイア》を対象として宣言」

「グルコサ民は、バトルゾーンの《百万超邪 クロスファイア》を墓地へ置いた」

《ブラックアウト》は自分の場にD2フィールドがあることにより、攻撃時に一番パワーの高い相手クリチャーを1体破壊することが出来る。相手の場には《クロスファイア》が1体のみ。つまり、《クロスファイア》は破壊され、相手の手札のみならず、場までもが0となった。

「《ZEROの侵略 ブラックアウト》は、相手のシールドを2枚ブレイク」(1, 2)

「これで《5000GT》と《クロスファイア》抱えられたらちよい厳しいが……どうだ？」

「グルコサ民は、手札に加えられる《撃髓医 スパイナー》をバトルゾーンへ出した」

「グルコサ民は、相手のバトルゾーンの《復讐のバイス・カイザーZ》を対象として宣言」

「グルコサ民は、相手のバトルゾーンの《復讐のバイス・カイザーZ》を対象として宣言」

「グルコサ民は、相手のバトルゾーンの《ZEROの侵略 ブラックアウト》を対象として宣言」

「《スパイナー》か。なら良い。えーっと？パワーマイナス3000×

2で《バイス・カイザーZ》が死ぬか」

此処まで流れを持って来てくれたのは間違いなく《バイス・カイザーZ》のおかげである。それだけで十分仕事は果たしている。もう破壊されても困りはしない。

「bambooは、バトルゾーンの《復讐のバイス・カイザーZ》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、手札に加えられるカードを手札へ加えた」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》の能力を発動」

「bambooは、カード《悠久を統べる者 フォーエバー・プリンセス》をドロートした」

「bambooは、ターン終了した」

《ダイスベガス》の効果により《ヴォルグ》対策の《悠久》を引く。L Oによる負けはこのデッキで起きやすく、呪文が多いこのデッキは、特にクリーチャーが2枚捲れるまで山札の上から墓地に送る《ヴォルグ》に弱かった。

「グルコサ民は、カードをドロートした」

「グルコサ民は、《百万超邪 クロスファイア》を召喚した」

「引いたんかい・・・」

棒読みではあるが、少し驚いてはいる。まさか除去してからすぐに《クロスファイア》を出して来るとは。今はまだ脅威と言う程の物では無いが、相手のドロート力は自分よりも少し良いようだ。

「グルコサ民は、《百万超邪 クロスファイア》で《ZEROの侵略 ブラックアウト》を攻撃」

「《百万超邪 クロスファイア》 vs 《ZEROの侵略 ブラックアウト》のバトル」

「bambooは、バトルゾーンの《ZEROの侵略 ブラックアウト》を墓地へ置いた」

パワーアタッカープラス100万はそうそう超えられない。《ブラックアウト》を大人しく墓地へと送る。

「グルコサ民は、《撃髓医 スパイナー》でプレイヤーを攻撃」

「相手、焦ってるのか・・・?」

「《撃髓医 スパイナー》は、相手のシールドを1枚ブレイク」(3)

「グルコサ民は、相手のシールドゾーンのシールド3の1を手札へ加えた」

「グルコサ民は、ターン終了した」

「どうやら、相手は《5000GT》を待っていられないらしい。ここから削らなければ負ける、と思っているのだろうか。」

「bambooは、カード《拷問ロスト・マインド》をドロウした」

「bambooは、手札の《天使と悪魔の墳墓》をマナへ置いた(マナ5)」

「bambooは、マナの3枚をタップした」

「だが、まだ5マナだ。場の流れの移り変わりが早く、ターンが物凄い勢いで流れているように見えるが、実はそこまでターンは経過していない。」

「bambooは、《魂と記憶の盾》を唱えた」

「bambooは、《魂と記憶の盾》の効果を解決」

「bambooは、相手のバトルゾーンの《百万超邪 クロスファイア》をシールド6へ置いた」

「盾に送れば墓地から回収せざるを得ない。そして、回収するには山札を削らなければならない」

「竹宮が相手に勝つ方法は2つ。ビートとLO。ビートはこのまま行けばどうにかなりそうだが、LOは回復手段の無い墓地ソには対策のしようが無いだろう。」

「いざとなれば、耐久勝ちすれば良い。」

「bambooは、バトルゾーンの《魂と記憶の盾》を墓地へ置いた」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》の効果を解決」

「bambooは、カード《ZEROの侵略 ブラックアウト》をドロウした」

「bambooは、ターン終了した」

「グルコサ民は、カードをドロウした」

「グルコサ民は、手札の《爆撃男》をマナへ置いた（マナ4）」  
「グルコサ民は、《撃髓医 スパイナー》でプレイヤーを攻撃」

「またも攻撃してくる《スパイナー》に若干苦笑いする竹宮。手札があれば、相手もこうはならなかっただろう。」

《撃髓医 スパイナー》は、相手のシールドを1枚ブレイク」（4）

「お、トリガー」

「bambooは、手札に加えられる《テック団の波壊Go!》をバトルゾーンへ出した」

「bambooは、《テック団の波壊Go!》の効果を解決」

「bambooは、相手のバトルゾーンの《撃髓医 スパイナー》を対象として宣言」

「グルコサ民は、バトルゾーンの《撃髓医 スパイナー》を墓地へ置いた」

「bambooは、バトルゾーンの《テック団の波壊Go!》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、ターン終了した」

「遂に《スパイナー》が撃破される。相手はもう、捲ったクリーチャーを出して殴る、を決め込んでいるのだろう。回収効果のある呪文があれば使うだろうが、それでも1体出すのが精一杯の筈。《モールス》があれば《クロスファイア》を合わせ2体並べられるが。」

「bambooは、カード《超次元ガロウズ・ホール》をドローした」

「bambooは、手札の《英雄奥義 スパイラル・ハリケーン》をマナへ置いた（マナ6）」

「bambooは、マナの4枚をタップした」

「bambooは、《拷問ロスト・マインド》を唱えた」

「かなり勿体ない使い方だが、相手の手札は残さず抹消しなければならぬ。《ロストマインド》の能力により、相手の手札が公開される。さて、その手札を見せてもらおうか……」

「bambooは、《拷問ロスト・マインド》の効果を解決」

「bamboo： 失礼します」

「bambooは、相手の手札《一なる部隊 イワシン》を見た」

「……………」

「bambooは、相手の手札《一なる部隊 イワシン》を元の向きに戻した」

「bambooは、バトルゾーンの《拷問ロスト・マインド》を墓地へ置いた」

何事も無かったかのように手札を元に戻す。

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》の効果を解決」

「bambooは、カード《英知と追撃の宝剣》をドロウした」

「bambooは、ターン終了した」

「グルコサ民は、カードをドロウした」

「グルコサ民は、マナの1枚をタップした」

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》を召喚した」

「遂に引かれたかぁ……………」

しかし、この程度なら処理出来る。《ダイスベガス》のDスイッチを使い、手札から1枚の呪文を唱える。

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》でプレイヤーを攻撃」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》の効果を解決」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》のDスイッチを発動」

「bambooは、《超次元ガロウズ・ホール》を唱えた」

《5000GT》の能力は自分が場に居る間、パワー5000以下のクリチャーとサイキック・クリチャーを出せなくするという物。

ならば、サイキック・クリチャーを呼び出す前に御退場願えば良い。

「bambooは、《超次元ガロウズ・ホール》の効果を解決」

「bambooは、バトルゾーンの《暴走龍 5000GT》を対象に宣言」

「グルコサ民は、バトルゾーンの《暴走龍 5000GT》を手札へ戻した」

「bambooは、超次元ゾーンの《勝利のリユウセイ・カイザー》をバトルゾーンへ出した」

これで良い。次のターンにまた《5000GT》が出てくるかはハ  
ンデス結果にもよるが、ひとまず除去出来れば良いのだ。

「アタッククリーチャーがいなくなつたので、攻撃処理を終了しま  
した」

「bambooは、バトルゾーンの《超次元ガロウズ・ホール》を墓  
地へ置いた」

「グルコサ民は、ターン終了した」

さて、2枚の内どちらかが《5000GT》という訳だ。

「bambooは、カード《ブレイン・タッチ》をドロ―した」

「bambooは、手札の《悠久を統べる者 フォーエバー・プリン  
セス》をマナへ置いた(マナ7)」

「bambooは、マナの3枚をタップした」

「bambooは、《ブレイン・タッチ》を唱えた」

ランダムハンデスは完全に運だ。これで《5000GT》を当てら  
れれば………!

「bambooは、《ブレイン・タッチ》の効果を解決」

「bambooは、相手の手札からランダムに《一なる部隊 イワシ  
ン》を墓地へ捨てた」

「違う、そうじゃない」

「bambooは、カード《デモンズ・ライト》をドロ―した」

「bamboo:《イワシン》使いますか?」

「グルコサ民: いいえ」

「デスヨネー………」

「bamboo: 了解です」

「bambooは、バトルゾーンの《ブレイン・タッチ》を墓地へ置  
いた」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》の効果を  
解決」

「bambooは、カード《英雄奥義 スパイラル・ハリケーン》を

ドローした」

「bambooは、ターン終了した」

《5000GT》の攻撃により此方の盾は0になる。そろそろ後が無くなって来たのを感じ、マウスに自分の手汗がべっとりと付着する。

「グルコサ民は、カード《一なる部隊 イワシン》をドローした」

「グルコサ民は、マナの《暴走龍 5000GT》をタップした」

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》を召喚した」

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》の効果を解決」

「bambooは、バトルゾーンの《勝利のリユウセイ・カイザー》を超次元ゾーンへ置いた」

《5000GT》のcipにより、超次元ゾーンへと戻される《勝利のリユウセイ・カイザー》、略して醤油。しかし、それよりもスピードアタッカーである追撃の《クロスファイア》が来ないか、竹宮は心配でならない。

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》でプレイヤーを攻撃」

「いよおっし！《クロスファイア》無しッ！」

《暴走龍 5000GT》は、相手のシールドを1枚ブレイク（5）

「bambooは、シールドゾーンのシールド5の1《ブレイン・タッチ》を手札へ加えた」

「グルコサ民は、ターン終了した」

竹宮は力強くマウスをクリックする。その目、その姿は、勝利に飢える獣のようにも見えた。

「bambooは、カード《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》をドローした」

「bambooは、手札の《ZEROの侵略 ブラックアウト》をマナへ置いた（マナ8）」

「bambooは、マナの5枚をタップした」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》をバトルゾーンに出した」

「bambooは、バトルゾーンの《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》を墓地へ置いた」

「張り替えは確定、3マナで……」

「bambooは、マナの3枚をタップした」

「bambooは、《ブレイン・タッチ》を唱えた」

「bambooは、《ブレイン・タッチ》の効果を解決」

「bambooは、相手の手札からランダムに《一なる部隊 イワシン》を墓地へ捨てた」

「bambooは、カード《怒流牙 サイゾウミスト》をドローした」  
相手は《イワシン》の効果を使わない。手札が無ければただの墓地肥やしだからだ。ここまで徹底すれば後は耐久してジワジワと攻めるのみ。

「bambooは、バトルゾーンの《ブレイン・タッチ》を墓地へ置いた」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》の効果を解決」

「bambooは、カード《ZEROの侵略 ブラックアウト》をドローした」

「bambooは、ターン終了した」

「グルコサ民は、カードをドローした」

「グルコサ民は、手札の《メガゴウワン・チユリス／ゴゴゴ・Goi・ナツクル》をマナへ置いた（マナ5）」

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》でプレイヤーを攻撃」

勿論、これを通す筈も無い。またもや竹宮は《ダイスベガス》のDスイッチを使い、2度目の《5000GT》の攻撃を止める。

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》の効果を解決」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》のDスイッチを発動」

「bambooは、《英知と追撃の宝剣》を唱えた」  
「マナも破壊させてもらうぞぉー……」

制限カードの純粋なパワーが相手を襲う。《5000GT》は手札に行くだろうが、マナには少し被害にあってもらう。

「bambooは、《英知と追撃の宝剣》の効果を解決」

「bambooは、相手のバトルゾーンの《暴走龍 5000GT》を対象として宣言」

「グルコサ民は、バトルゾーンの《暴走龍 5000GT》を手札に戻した」

「bambooは、相手のマナの2枚を対象として宣言」《暴走龍

5000GT》《メガゴーン・チュリス／ゴゴゴ・G01・ナツクル》

「グルコサ民は、マナの《メガゴーン・チュリス／ゴゴゴ・G01・ナツクル》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、マナの《暴走龍 5000GT》を手札へ加えた」

「アタッククリーチャーがいなくなったので、攻撃処理を終了しました」

これで相手の手札には《5000GT》が2枚。少し辛いですが、どうにかまだ次のターンは耐えられそうだな。

「bambooは、バトルゾーンの《英知と追撃の宝剣》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、ターン終了した」

「ふうー……」

少し心臓の鼓動が早くなっているのを感じる。手汗もびしょびしょだ。おかげでマウスもベトベトしている。

だが、

この感覚は――

「bambooは、カード《拷問ロスト・マインド》をドロ―した」

「bambooは、手札の《拷問ロスト・マインド》をマナへ置いた（マナ9）」

「bambooは、マナの5枚をタップした」

「bambooは、《超次元リバイヴ・ホール》を唱えた」

「bambooは、《超次元リバイヴ・ホール》の効果を解決」

「bambooは、墓地の《復讐のバイス・カイザーZ》を手札へ加えた」

「bambooは、超次元ゾーンの《勝利のリユウセイ・カイザー》

をバトルゾーンへ出した」

「bambooは、バトルゾーンの《超次元リバイヴ・ホール》を墓地へ置いた」

マナにアンタップした赤は置かせない。そういった意志が強く見える《勝利のリユウセイ・カイザー》が出現し、次のターンの《5000GT》を封じる。

「盛り上がって来た……！」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》の効果を解決」

「bambooは、カード《悠久を統べる者 フォーエバー・プリンセス》をドロークした」

「bambooは、ターン終了した」

ここで相手に《クロスファイア》を引かれたら、そこで竹宮の負けが確定する。たった一枚のカードが、勝敗を分ける。

「グルコサ民は、カードをドロークした」

引いたカードは――

「グルコサ民は、手札の《メガゴウワン・チュリス／ゴゴゴ・Goal・ナツクル》をマナへ置いた（マナ4）」

「グルコサ民は、ターン終了した」

《クロスファイア》ではない

「来たっ」

「bambooは、カード《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》をドロークした」

「bambooは、手札の《デモンズ・ライト》をマナへ置いた（マナ10）」

「bambooは、マナの5枚をタップした」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》をバトルゾーンに出した」

「bambooは、バトルゾーンの《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》を墓地へ置いた」

「張り替えて……！」

「bambooは、マナの《超次元リバイヴ・ホール》をタップした」  
「bambooは、《復讐のバイス・カイザーZ》を召喚した」  
「bambooは、バトルゾーンの《FORBIDDEN STAR  
〜世界最後の日〜》の右上の封印《マインド・リセット》を墓地へ  
置いた」

「bambooは、《復讐のバイス・カイザーZ》の効果を解決」  
「bamboo： 失礼します」

「bambooは、相手の手札《暴走龍 5000GT》を見た」  
「bambooは、相手の手札《暴走龍 5000GT》を元の向き  
に戻した」

これで封印は残り1枚。そして耐久はまだ出来る。

「bambooは、《Dの博才 サイバードァイス・ベガス》の効果を  
解決」

「bambooは、カード《Dの博才 サイバードァイス・ベガス》を  
ドロ―した」

「bambooは、ターン終了した」

「グルコサ民は、カードをドロ―した」

「グルコサ民は、手札の《ほめほめ老ノホメホメ老句》をマナへ置い  
た（マナ5）」

「グルコサ民は、マナの1枚をタップした」

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》を召喚した」

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》の効果を解決」

「bambooは、バトルゾーンの《勝利のリユウセイ・カイザー》  
を超次元ゾーンへ置いた」

「さあ、攻撃してくるんだろ……！早く攻撃して来いよ……！  
！」

竹宮は場の《勝利のリユウセイ・カイザー》を超次元ゾーンに起き  
つつ、まだかまだかと《ダイスベガス》のカードの上にカーソルを重  
ねる。

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》でプレイヤーを攻撃」

「bambooは、《Dの博才 サイバードァイス・ベガス》の効果を

解決」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》のDスイッチを発動」

「bambooは、《英雄奥義 スパイラル・ハリケーン》を唱えた」

「bambooは、《英雄奥義 スパイラル・ハリケーン》の効果を解決」

「グルコサ民は、バトルゾーンの《暴走龍 5000GT》を手札へ戻した」

これで再び手札に《5000GT》が2枚。どうしたってハンデス結果は《5000GT》になることだろう。

「bambooは、相手のバトルゾーンの《英雄奥義 スパイラル・ハリケーン》を墓地へ置いた」

「アタッククリーチャーがいなくなったので、攻撃処理を終了しました」

「グルコサ民は、ターン終了した」

「よおし、俺のターンだ……」

この時、竹宮は気付いていなかった。自分があの時に——彼の居た頃に戻りつつあるということに。

デュエマを心の底から、楽しめているという事に。

「bambooは、カード《ブレイン・タッチ》をドローした」

「bambooは、手札の《デモンズ・ライト》をマナへ置いた（マナー）」

「bambooは、マナの5枚をタップした」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》をバトルゾーンに出した」

「bambooは、バトルゾーンの《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》を墓地へ置いた」

「張り替えてからもういっちょ……!」

「bambooは、マナの3枚をタップした」

「bambooは、《ブレイン・タッチ》を唱えた」

「bambooは、《ブレイン・タッチ》の効果を解決」

ランダムなんて関係無い。落とすカードはただ1つ。

「bambooは、相手の手札からランダムに《暴走龍 5000GT》を墓地へ捨てた」

「bambooは、カード《復讐のバイス・カイザーZ》をドローした」

「よし、これで……!」

「bambooは、バトルゾーンの《ブレイン・タッチ》を墓地へ置いた」

「bambooは、《復讐のバイス・カイザーZ》でプレイヤーを攻撃」

「《復讐のバイス・カイザーZ》は、相手のシールドを2枚ブレイク」  
(3, 4)

「bambooは、相手のシールドゾーンの2枚を手札へ加えた」

「bambooは、《Dの博才 サイバードイス・ベガス》の効果を解決」

「bambooは、カード《テック団の波壊Go!》をドローした」  
「bambooは、ターン終了した」

相手のシールドは残り2枚。その内1枚は《クロスファイア》。そして此方は封印残り1枚。

——このまま、駆け抜けるっ

「グルコサ民は、カードをドローした」

「グルコサ民は、手札の《爆撃男》をマナへ置いた (マナ6)」

「グルコサ民は、マナの1枚をタップした」

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》を召喚した」

「グルコサ民は、《百万超邪 クロスファイア》を召喚した」

「危なっ!」

唐突に現れる《クロスファイア》に驚く竹宮だが、冷静に《ダイスベガス》のDスイッチを使用する。

「グルコサ民は、《百万超邪 クロスファイア》でプレイヤーを攻撃」

「bambooは、《Dの博才 サイバードイス・ベガス》の効果を解決」

「bambooは、《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》のDスイツチを発動」

「bambooは、《テック団の波壊Go!》を唱えた」

「bambooは、《テック団の波壊Go!》の効果を解決」

「bambooは、相手のバトルゾーンの《百万超邪 クロスファイア》をア》を対象として宣言」

「グルコサ民は、バトルゾーンの《百万超邪 クロスファイア》を墓地へ置いた」

「アタッククリチャーがいなくなったので、攻撃処理を終了しました」

続く第2撃は不可視の領域から防ぐ。

「グルコサ民は、相手のバトルゾーンの《テック団の波壊Go!》を墓地へ置いた」

「グルコサ民は、《暴走龍 5000GT》でプレイヤーを攻撃」

「bambooは、《怒流牙 サイズウミスト》を召喚した」

「bambooは、《怒流牙 サイズウミスト》の効果を解決」

「bambooは、墓地のカード18枚を山札の上へ置いた」

「bambooは、山札をシャッフルした」

《5000GT》の攻撃に対し、パワーが5000より大きい《サイズウミスト》が、何とかトドメの一撃から竹宮を守り通す。

「bambooは、山札の上のカードをシールド1へ置いた」

「《暴走龍 5000GT》は、相手のシールドを1枚ブレイク」(1)

「bambooはシールドゾーンのシールド1の1《デモンズ・ライト》を手札へ加えた」

「グルコサ民は、ターン終了した」

「bambooは、《怒流牙 サイズウミスト》を山札の下に置いた」  
「これで・・・俺の勝ちだ」

「bambooは、手札《ZEROの侵略 ブラックアウト》を見せた」

「bambooは、《ZEROの侵略 ブラックアウト》の効果を決」

「bambooは、《ZEROの侵略 ブラックアウト》を召喚した」  
「bambooは、バトルゾーンの《FORBIDDEN STAR  
〜世界最後の日〜》の右下の封印《超次元ガード・ホール》を墓地  
へ置いた」

4枚あった封印が、遂に0になる。

終焉を齎す禁断の星が、盤上に存在する敵を全て処する。

「bambooは、《FORBIDDEN STAR 世界最後の  
日〜中央》を禁断爆発させ、《終焉の禁断 ドルマゲドンX》にした」  
「bambooは、《終焉の禁断 ドルマゲドンX》の効果を解決」  
「bambooは、相手のバトルゾーンの『暴走龍 5000GT』  
に封印を1つ置いた。(計1)」

《ドルマゲドンX》が居る限り、相手は封印を外せない。《5000GT》  
が封印から放たれる事は無い。

そして、アタッカーを揃えた竹宮のターンが回って来る。もうドル  
マゲドンを止める方法は、墓地ソには存在しない筈だ。

つまり、

「ファイナルターンだ……」

「bambooは、カード《テック団の波壊Go!》をドロウした」  
「bambooは、《復讐のバイス・カイザーZ》でプレイヤーを攻  
撃」

「《復讐のバイス・カイザーZ》は、相手のシールドを2枚ブレイク  
(5, 6)」

「bambooは、相手のシールドゾーンの2枚を手札へ加えた」  
トリガーは、無い。そして、それが指すのは――  
竹宮の勝ちだ。

「bambooは、《終焉の禁断 ドルマゲドンX》でプレイヤーを  
攻撃」

「bambooの直接攻撃」

「bambooの勝利でゲームは終了しました」

## 六奇怪の二　　↳連続癌死亡事件↳

「レポートなんて、○ねば良い……………」

PCを使って久々のデュエマを楽しんでから数日が経った。GRゾーンやGRクリーチャー、オレガ・オーラなどの新ゾーンや新しい種類のカードが増えていたことなどを知り、つつい時間忘れて暫くPCの前でデッキを練っては対戦、を繰り返した結果、明日提出の大学の課題をやっていないということに気付いて今に至る。

『テータテテテテ』

そして鳴り響く着信音。シユタゲの『Village』を設定していたことで、ゲームプレイヤーにとつてのトラウマbgmが部屋中に鳴り響く。

だが、そんなトラウマbgmも今はどうも思えない竹宮。どうせRAINでもなく電話を掛けて来るとなれば、決まって誰からかも、その用件も分かってしまうのだ。

そして今はレポートを急いで書いている最中だ。とても今からやり続けなければ、夜は大して眠れないだろう。

『テータテテテ……………』

電話が切れた。よし、後はレポートに専念するだk

『Prrrrrr』

「家電と来たかー、そーかー」

先輩め、こういう時に鋭い。俺がいつ何時もスマホを肌身離さず持っているのを知って家の子機に掛けて来るとは……………。

「次は直接来るのかなあ……………?仕方がない……………」

座っていた状態から立ち上がり、子機のある場所まで移動する。

「もしもし?」

子機を手に取り耳に当てる。雨音がするのは会社からではなく外から掛けているからだろう。

『あ、出た』

「先輩、何ですか今回は?そのお、正直レポートで忙しいんですけど……………」

『あつマジで？そりやスマン』

相変わらず軽いなこの人。そこが良いところでもあるんだが。

『そのさ、迷ってる暇はないかもって話でさ』

「……大森さんに協力するかの話ですか。それで、その暇がないって言うのは？」

『……近々、大森さんがうちにまた来るんだけど、聞いた話だと、そろそろ協力出来るTCGプレイヤーを募集するって話。その前に協力するって言うておかないと、折角の出世コースが潰えちゃうかなあーと』

心配してくれてたのか……。先輩はお人好しの部類に当てはまるのかもしれないな。

「なるほど……。分かりました。次に大森さんが来るのはいつ頃ですか？」

『10日後の朝の10時』

「分かりました。その日は大学を欠席してそちらに向かいます。返事はその時にさせてもらいます」

『そうか。じゃあ、連絡は以上だ』

「ありがとうございます。では……」

通話を切り、子機を元の位置に戻す。少しの間を空けて机の位置に戻り、再びレポートを書き始める。

にしても、最近は何かと異変というか、変化が周りで次々と起きていく気がする。

大森さんからの勧誘やデュエマの復帰、続けて最近は『連続誘拐事件』が起きたりと。何だったかな？ 犯行は前からあったらしいけど、発覚したのは最近ってことで話題になったんだっけ。

未だに犯人は捕まっておらず、誘拐された人達も見つかっていないらしい。しかも個人の犯行ではないらしい。最近の世の中は恐ろしいことだ。

「あー、でも良いニュースもあったな」

何でも、現在最高の演算処理速度を持つスーパーコンピューターを超える人工知能が開発されているらしい。完成次第、人工知能には今

後、人の持つ感情の完全再現を出来るかの実験が予定されているらしい。正に子供の頃描いた夢物語だ。だが、今はまだ、願望に期待しているだけに過ぎない。まだ夢だから、綺麗で美しく思えるのだ。現実になってみれば、どれだけ落胆することになるかは計り知れない。

「んー……駄目だ」

ふと、レポートを書く手が止まる。手詰まりだ。どうにもこれから先に書くことが思いつかない。

「面倒だけど、アイツに相談でもするか……」

頭が化け物並みに滅茶苦茶良いんだが、少し弱味を見せるとすぐ人を小馬鹿にしてくる俺の幼なじみに電話を掛ける。生憎と、俺はそいつのRAINを持っていない。そいつとRAINの交換を一度でもした奴は決まってスタバグの被害にあっている。通知が壊されるのも定期的に馬鹿にされるのもイラツと来るので、今時珍しく連絡の取り合いは電話でしている。

「あ、もしもし？ ショウ今大丈夫か？」

『ん？ タケ？ どした？』

「いや、大学のレポートで行き詰まったからアドバイス頼もうかと」

『お前それくらい自分で考えろよ？ わざわざ俺に掛けるとか何？ 一人も大学でコミュニケーション取れる奴居ないの？ コミュ障なの？』

「うっせ。頭の出来だけは良いお前ならと思つて電話掛けたんだよ」

事実だ。正直、頭が良くなかったら電話など掛けるか。

『仕方ないなあ、頭の良い俺が教えてやるよ。で？ レポートの課題内容は？』

「VRの応用例とそのメリット」

『医療関連で ググレカス g g r k s。今なら十分レポート書ける位には ウィキ w i k i の項目やら演説の映像資料やら残ってるだろ。例えばホラ、あー、あれだ、鬱病。鬱病とかになつた人をVRで精神ケア、とか。説明面倒だからこれで良いだろ？』

成る程、相変わらず口は悪いし所々馬鹿にしてる感あるが役には立つ。本当に何でこんな人を馬鹿にするような子になつてしまったのか……親御さんが可哀想だなあ

「ありがと、にしてもお前の口は本当に毒で汚染されてるよな」

『あらやだ口臭かしらー？ 恥ずかしー』

「キモイ、○ね」

『お前がな』

通話終了。最後のやり取りは、せつない。

まあ、言われた通りにする。医療という分野は全く思いつかなかつたが、確かにレポートを埋めるには十分な題材だ。既に人の役に立っているものに対して補助の役割のオプションが追加されるような感覚だ。必ずメリットが生まれる筈。

そうと決まれば話は早い。後はひたすら調べて書くのみだ。簡単簡単。

「PC立ち上げて……………」

『用件は？』

「医療 VR……………」

スペースを入れて検索。おお、大量だ……………。取り敢えずまとめサイトでも見て所々調べて書いてれば終わるな……………。

【TCG掲示板 Part. 23】

655：名無しの神人類 ID：Vdf4Lj8ub

カードゲーム会社最近怪しくない？

656：名無しの神人類 ID：jYEUJ7uso

>>655

わかる

657 : 名無しの神人類 ID : gaiY5kH2j

>>655

それ

てか、キシロの社長も死んだんでしょ？

658 : 名無しの神人類 ID : Guk6R3Hip

>>657

らしいな。他の死亡事件も公表されるのはもうちよい経ってかららしいけど

659 : 名無しの神人類 ID : Yji68eYjl

>>657

ソースは？

660 : 名無しの神人類 ID : gaiY5kH2j

>>659

これ←

<http://deadmans.com/google-sitelinks>

661 : 名無しの神人類 ID : Yji68eYjl

>>660

サンガツ

てか、マジで死んだんだな。これいつものdreamerのハッキングだろ？もうdreamerが犯人なんじゃね？w

662 : 名無しの神人類 ID : gaiY5kH2j

てかさ、dreamerって何もんなの？AIか何かかってレベルでハッキングして情報かつさらってはここに載つけてくるよな

663 : 名無しの神人類 ID : jYEUJ7uso

しかも偶に出てくるよな。ここに。多分中身はあるんだろうけど、だとしたら余計に人辞めるとしか思えんわ

664 : 名無しの神人類 ID : Guk6R3Hip

結局、dreamerが調べた結果は癌なんだって？

665 : 名無しの神人類 ID : gaiY5kH2j

>>664

そそ。後は呼吸器と消化器に病気を持っていたとか。

666：名無しの神人類 ID：Vdf4Lj8ub

他殺じゃなくて病死なのかね？

667：名無しの神人類 ID：jYEUJ7uso

>>666

ここまで来たら無いだろ。だってこれで今年TCGやってる所の社長が死んだの5件目だぞ？それが全部癌とか普通じゃねえよ

668：名無しの神人類 ID：Yji68eYjl

デスノートでも誰か持つてるんじゃない？

669：名無しの神人類 ID：gaiY5kH2j

>>668

もうそうとしか思えんのじゃが

670：名無しの神人類 ID：jYEUJ7uso

>>668

同意

671：名無しの神人類 ID：Vdf4Lj8ub

>>668

??? 「計画通り」

672：名無しの神人類 ID：Yji68eYjl

>>671

??? 「あなたがキラです」

673：名無しの神人類 ID：Guk6R3Hip

>>668

正直、マジで似てるよな。あつちは心臓麻痺でこっちは癌。どっちも体の中に死因があるし。

674：名無しの神人類 ID：Vdf4Lj8ub

次は誰だろ？まだ殺されてないTCGやってる所の社長は？

675：名無しの神人類 ID：gaiY5kH2j

>>674

バトスピのVANDAIとデュエマのDAKARATOMY、後は遊戯王のCONAMIにMTGだな。

676:dreamer ID:syiqnak71  
http://deadmans.com/google-sit  
e-links

677:名無しの神人類 ID:Guk6R3Hip  
>>676

678:名無しの神人類 ID:Vdf4Lj8ub

>>676

ファッ!?

679:名無しの神人類 ID:jYEUJ7uso

>>676

おいおいマジかよ

680:名無しの神人類 ID:gaiY5kH2j

VANDAIの社長死亡!死因は癌!

681:名無しの神人類 ID:Yji68eYjl

ええ・・・もうマジで怖いんだが

682:名無しの神人類 ID:Vdf4Lj8ub

dreamer、これ病死?他殺?

683:dreamer ID:syiqnak71

>>682

癌死亡の時点で病死。ただ、これは意図的なものだな。

684:名無しの神人類 ID:Guk6R3Hip

dreamerは犯人とかわかんのか?

685:dreamer ID:syiqnak71

>>684

分かってたらもう上げてる。それくらい考えろ馬鹿。忙しいから  
勝手に考察してろ。少しはお前らも役に立て。

686:名無しの神人類 ID:Guk6R3Hip

>>685

サーセン

687:名無しの神人類 ID:Yji68eYjl

「ふう．．．．．出来たあ」

レポート完成。現在23時56分。夕食食い損ねたがもう食事なんてどうでも良い。今日はもう動けない。

『もう行くのね。お休みなさい』

「お休みー．．．．．っと」

PCを切り、サポートのAIキャラからお休みの一言。ついつい返答しながらPCの電源が切れるのを待ってしまうのは完全に俺の癖だ。他人には見せられないな。

「もう今日は寝る．．．．．歯も磨いたし風呂も入ったし」

PCの電源が切れ、画面が一面黒になる。それを確認して部屋の電源を消す。真っ暗だ。

「．．．．．グウ」

竹宮 深。ベッドインから2秒で撃沈。明日はきつと、疲労で寝不足気味だろう。

## デス・メンドクーサ

レポートを仕上げしてから10日が経った。悩んだ末に、俺は大森さんのプロジェクトに参加する事を決意した。

というのも、悩んでいる間にも先輩が一度電話を掛けて来て、「悩んでいるのなら、やって見ると良い」と俺のことを応援してくれたからである。

流石に此処まで言われては、俺としても断り辛いし、何よりやって見るか。という思いが強くなる。

「よし。財布と携帯もあるし、先輩や会社の人達への菓子折りもある。一応、身分証明書と高校までの成績表も持っている……あ、テレビとエアコン消し忘れた」

慌てて玄関前からリビングに戻り、エアコンとテレビの電源を切る。テレビではまたも『連続誘拐事件』のニュースが報道されていた。どうやら誘拐された人間の一部は他国へと流されていたらしい。奴隷商売というものだろうか？何にせよ悲しい事件だ。

「さて、行って来るか……」

扉を開け、一歩前が出る。俺にとっての新たな人生への最初の一步を。

「おお、やってくれるのか！君！」

「あ、ああまあ、そうです」

「いやあ！有り難い！そう言ってくれど助かるよ！」

何か、すんなり通りました。

いや、その、もう少し苦戦するというかこう、緊張感があると思っ

てたんだが……。

あんまりこの人、そういうの無いな。

「えつとその、じゃあ僕は何に協力すれば……」

「デュエマのルールとVRの演出でのアイデアを出してくれると助かる！基本優秀な部下ばかりだから、自分で物作りすることは無い。そこは安心して良いよ」

「え、じゃあ、それだけですか……？他には？」

「あー、部下の息抜きでデュエマの対戦とかしてくれるかな？新しく入って来た子が居てね？その子もデュエマをしているって話だから」

要するに、社員との交友を深める為に頑張っただけ。ということだろうか？まあ、それは構わないのだが、正直それでも仕事という感覚がまるでしない。

——これはもしや、雪が言っていた趣味が仕事になって嫌いになるパターンを回避出来るのでは……？

「じゃあこれ、この場所に今度——23日くらいに来てくれるかな？そこで今作ってるからさ」

「ああ、はい。じゃあ、4日後ですね。承りました。デツキも持って行きます」

とまあ、予想よりもかなり上手く行った。正直、今すぐにガッツポーズでも取って両親に自慢したいくらいだ。

——アイツにも自慢したかったなあ……

「それじゃあ、私は失礼するよ。最近は少し、物騒だからね」

「ああ、あの連続誘拐事件ですか？まだ解決してないっていう」

「ああいや、それもそうなんだけど、ちよつとね……秘密だよ？これ、本当はまだ言っちゃ駄目なんだけど」

そう言っただ森さんは僕の耳元に周りに聞こえないように小さな声で秘密を明かした。

——……

「……連続癌死亡事件って……それも社長ばかりが死んでるなんて、可笑しい話ですね」

「だろう？私も少々応えていてね……折角友好的な関係を築けた

と思つたら、その相手が癌で死体になっていた。なんて報告もあったし」

腹立たしいことだよ。と、大森さんは少し怒気の混ざつたように口にする。どうやら事件のことは秘密にしているようにとTCG関係社の中で話し合いがあったという。警察の方も調査が上手く行っていないらしい。最近、未解決事件として処理することが多くなつてきたことで信用の無い警察は、今回の事件は未解決事件として残さないように、事件解決が見えてくるまでは情報を流さないという話のようだ。

——警察が調査に苦勞するなんて、よっぽどだな……

別れの挨拶を済まし、大森さんがオフィスから出て行くのを確認し、俺は分かりやすく、溜まっていたほんの僅かな緊張感を含んだ息を吐いた。

「お疲れ様、で?どうだったよ?」

「どうにかかなりそうです……大森さんがラフな人で良かったあ……」

「竹宮君だっけ?あの子これから胃薬必要になりそうだよね」

「分かる。あの年で薬の御世話になつちやうかもって考えると少し可哀想」

「疲れているところで優しくしてあげれば、何かコロツと行つちまいそうだなアイツ」

「止めてさし上げろ。うちの社に何人の男性駆逐未履修のベテラン調査兵団が居ると思つてんだ。見ろ、竹宮君を見るアイツらの顔を。恐らく今年でアラフォーを迎えた人達だ。面構えが違う」

先輩と話をしている最中に酷い会話が聞こえて来たが、まあ会社のオフィスの風景はこんなものもある、という一つの経験として記憶しておこう。最後の会話は忘れておきたいところだが。

「あー、そういえば先輩。上手く行つてるんですか?夢木 奈々さんとは」

「あー、まあ、うん」

「あ、はい。大体分かりました」

絶対進歩無いままだなと確信し、それだけ聞いて俺はしばらく社内を見て回った。

働いている訳ではないが、何度か此処を訪れたことはあった。最近では大森さんとの会合やらでだが、それより前はアルバイトの配達仕事で度々。

俺の顔は知っている人、名前も知っている人、まるつきり知らない人、色々な人が居る。

「あれ？竹宮君？どうかしたの？」

「あ、夢木さん。こんばんは。会社、お邪魔してます。大森さんと話が終わって、ついでに社内を見て回ろうかな、と」

この人とは大森さんと会うまでは、そこまで面識は無かった気がする。実際に会うまでは、先輩の好きな人つてことで名前だけは覚えていた。

——こうして見ると、美人だな。先輩が好きになるのも頷ける。綺麗な黒髪黒目だけど、こう、銀髪に金の瞳とかも似合いそうだ。

「そうなんだ。あ、じゃあ案内しようか？」

「いやいや大丈夫ですよ。何度か此処に来たことはあるんで。それに、もうそろそろ帰ろうかと思っていた所なので……」

そう言って帰ろうとしたところで、夢木さんは先輩と同じように、大森さんのところで働くことになった俺を応援してくれた。そろそろむず痒くなってくる。

そうして俺は、頭を掻きながら会社から出て行った。

それから4日後。指定された場所に何とか着いた俺は、そこで働く大森さんと従業員の人達を目にしていた。

汚れ一つ無い真っ白な清潔感もある広い場所で、PCを前に何人もの人達が座って作業をしている。

「やあ竹宮君、待ってたよ」

「こんばんは……あの、今は何をしていますんですか？」

奥の方から現れた大森さんに挨拶をし、今行われている作業が何な

のかを質問する。

きつとVRに関することだとは思うのだが。

「ああ、今はVRスキナーで出現するワールドデータを作成しているんだ」

「あー、つまりゲームのワールドマップみたいなものを作ってるってことですか」

そういうことだ、と大森さんは言い、その間も俺は彼方此方の様子を見ていた。

「もしかして、そのデータは『遊戯王』や『ポケモンカード』、『バトスピ』のような、フィールドになりそうなカードが存在するカードゲームがあるから作ったんですか？」

「それもあるが、何よりも私はその先の可能性も考えていてね」

着いて来て、と言われ、俺は大森さんの後ろに着いて行く。大きな背中だ。色んな意味で。

そんなことを考えている内に、先程の広い空間とは違って、小さな、そして色々な紙が散らかっている御世辞にも綺麗とは言えない汚部屋に着いた。

そこには一人のスーツの上に白衣を来た女の人が居た。

「紹介しよう。伊原 いはらみこと 命さんだ」

「こんばんは、伊原 命です。ここではVRの研究をしています」

「こんばんは、竹宮 深です」

PCの前で現在進行形で仕事をしている茶髪に黒目の落ち着いた女性だった。見た目はとても若々しく、自分とほぼ同じか、それより少し上くらいの歳に見えた。

「暫くは此処で竹宮君には協力してもらおうから、少し話でもして親睦を深めたら良い。それでは此処で私は失礼しよう」

「あ、はい」

「はい、了解です……」

大森さんが居なくなり、部屋には俺と命さんの二人だけになってしまった。

「……………」

「・・・・・・・・」

無言。命さんはPCを前に片手で作業、片手で健康に良い知的飲料というキャッチコピーで売られている『毒取るペッパー』をガブ飲みしている。此方と話そうという感じはまるでない。

——気まずい・・・・・・・・どうにか話さないと

「あの——」

「トイレは向こうのプリンターのある部屋を右に曲がった所」

「いやっ、そうじゃなくて・・・・・・・・何をしているのかなー、と」

「ああ、今はVRによってどれだけ脳が誤認を起こすのかという論文を読んでいるところ」

VRによる脳の誤認・・・・・・・・そういえば、レポートの題材としてVRの医学への貢献を調べて書いていたんだった。その時にネット上に脳の錯覚についてのサイトも幾つかあったっけ？

「それは何に使う予定とかあるんですか？」

「今はまだ作成すら終わっていないけど、いつかは今作っているVRシステムを参考に、医学へ貢献出来るようなモノ作ろうと思っているかな」

「・・・・・・・・もしかして、脳の治療とか、鬱病とかに効くようなモノだったりしますか？」

そう言うのと命さんは少し驚いたように、初めてPCの画面ではなく此方を見る。そんなに意外だったのだろうか？

「当たり前、良く分かったね」

「まあ、最近レポートの課題で調べてた時に目にしまして・・・・・・・・」

「へえ・・・・・・・・大学生か・・・・・・・・今何歳？」

「21です」

「じゃあ3年生か。成る程、お酒も飲める歳か・・・・・・・・私の1つ下か」

命さんは22歳なのか。若いな・・・・・・・・正直、流石にそこまで若い歳で此処に務めているとは思わなかった。そんなことを言ったら、俺も協力とはいえ大学生、かなり若いか。

「よし、大体分かった。息抜きするけど、着いて来る？助手」

「え、あー、はい」

助手、と言われるのは慣れないが、もう少し親睦を深めたい。それに、暫くはここで何度も顔を合わせることになるのだろう。協力者である以上、助手と呼ばれても仕方がない。

「んじや、外出だ。ネカフエでも行くかー」

「此処らにネカフエがあるんですか？」

「まあね、ダイダロスって所。カードゲームも取り扱ってるらしいから、助手の君はそこで遊んでると良いんじゃない？」

初耳だ。此処にそんなネカフエがあるとは……。ああ、カードゲームを扱っているのは此処の影響か？まあ良い。

「じゃあ、僕はそうさせて貰いますね。命さんはどうするんですか？

まさか休憩もPCとか……」

「PC？いやいや、ネカフエにそんなものは無いよ」

——？？？どういうことだ？

「ネカフエってネットカフェのことですよ？」

「あ、ごめん。猫カフェね。……そうか、略したら混ざるか」

「猫カフェをネカフエって略すの、流石に面倒臭がり過ぎでは？」

おっと、思わず本音が出てしまった。何かこう、命さんは大森さんとはまた違った感じで親しみ易いかもしれない。女友達のような感じが既に少しする。

「良く言われる。面倒臭がりを極めし者、とか何とか」

「部屋も掃除してませんしね」

「大丈夫、どこに何があるか全部把握してるから」

昔の自分を思い出す。母親にカードを片付けろと言われてたり、プリントを整理しろと言われていたが、全部把握してるから大丈夫、と言っていたことを。

歳上の人を見て過去の自分を思い出すなど、それで良いのだろうか。

などと思いながらも部屋を出る。外出の時くらい白衣を脱ぐかと思っていたのだが、どうやら脱がないらしい。御陰様で白衣にスーツを着ている変な人、という目でジロジロと周りの通行人から見られて

いる。勿論、横を歩く俺もだ。

「あの、命さん。何で白衣着てるんですか」

「偶に白衣が必要になるから、常に着てるんだよ」

「外出の時くらい脱いで下さい。せめて流石の僕でもセンスを疑うその格好は勘弁して下さい」

まだ囚人服の方がマシだ。コスプレとして、そういうもの、として見られるならまだ良い。

「ええー、君は私の保護者か何かじゃないでしょ？別に良いじゃんこれくらい……」

「駄目です。流石に問題でしかないですし、白衣も偶には洗濯しないと臭いますよ？」

「ああ！だから猫が寄って来ては去って行く訳だ」

「じゃあ洗濯して下さい。どうかしなさい」

そうこうしている内に目的の場所に着いた。綺麗なプラスチックの看板には、しっかりとダイダロスと書かれている。2階建てのようだ。

小さな金のベルが着いた木製の扉を押し、店の中へと入る。猫だらけ、という訳では無いが、あらゆる場所に様々な毛並みの猫が居座っている。

——流石は猫カフェ、猫も人慣れしてるな。

「1階がネカ——猫カフェ、2階にカードゲームが揃ってる。私は此処に居るから、1時間は上でゆっくりしていると良いよ」

「ありがとうございます。それじゃあ一旦ここで……」

俺は久し振りのカードショップに、内心ワクワクしながら2階へのエレベーターに乗った。

開幕デリート小説

『11で、オールデリート』

「ああー．．．やっぱり妨害もうちよい入れようかなあー．．．」

2018年7月26日。俺はSkypeを使い、近くのカードショップで知り合ってから長い付き合いの竹宮さんとデュエマをしていた。オールデリートによって封印が全てデッキに戻った禁断の攻撃で敗北した俺は自分のデッキの調整を考える。

『まあ、パクリオとかで十分じゃない？普通にデリートとかミラクルスターとか盾送りにしちゃえば勝ち目あるし。エメラルーダとか出されなければ』

「やっぱエメラルーダ強いんだよなあ．．．アイツ出ると普通に盾送りにしたの回収されるし。ミラクルスターにもなれるし盾仕込めるしで色々可笑しい。かといって解体だとミラクルスター、他のデッキ相手の時にマッドネス系統とかでなあ．．．」

『解る』

と、デュエマの雑談を日付が変わるまでした。そろそろ終わりにしますか？と俺が提案すると竹宮さんも、だね。と了承し、明日の大会で会おうと言ってSkypeを切ってパソコンの電源を切る。

ベッドに入り部屋の電気を消し、目を瞑る。ビマナデッキでどこまで勝てるか。もしくはネタデッキで場を盛り上げるか。非公認の大会でどのデッキを使おうか考えている間に、徐々に眠気が襲ってくる。

「まあ、どれでも良いか」

楽しめれば良いか。と結論を出し、眠りにつく。

どこかの校舎。制服を着た長い黒髪の女性と茶髪の男性が夕日で紅くなつた廊下を歩きながら話をしている。

「確かに4cとか5cのデツキ使える人って凄いよね〜．．．あ、そういえば、彼も5c使つてたような．．．．．」

「ん？彼つて誰すか？5cなんて使えんのが知り合いに居るつて会長マジすか．．．．．？」

「入院しててね。もう2年近く昏睡状態でね．．．．．」

「あぁー．．．、事故つすか？」

「そう．．．だね。うん、事故だった。夢原翔真のZプロジェクトつてあつたでしょう？」

会長、と呼ばれた彼女は少し暗い雰囲気で茶髪の男に話し始める。

「あぁ、Zプロジェクトの被害者つすか．．．．．。でもそれがどう昏睡と関係するんすか？確か俺の記憶だと被害者の誰一人としてそんな症状が出たとは報道されてなかつたような．．．．．」

「うん、彼はね——」

変な夢を見た。目を覚ました俺はガバツと体を起こし臆気に記憶に残つている夢を思い出して一人で顔を覆う。

「はぁ．．．中二病みたいで恥ずかしい．．．」

若干あの続きが気になるのが更に恥ずかしい。駄目だ、考えるなど意識すると余計意識して考えてしまう．．．。

「ヒヤツ!？」

「うわぁぁぁあつ!?!？」

聞き覚えのない声が聞こえ心臓が止まる勢いで驚いた俺は思わず大声を出してしまう。驚いて大声を出したお陰か眠気は全て吹っ飛んだ。

「え？え？．．．？え？え？」

「っ!」

病室のように見える部屋に自分が居ることに気付き自分が何でこ

んな場所に居るのか。浚われたのか寝てる間に誰かに刺されたのかと色々考えるが記憶にない。まるで現状が理解出来ない。混乱する俺を差し置いて看護婦の人は急いでどこかへ行ってしまう。

「ちよ、一人にしないでっ!？」

慌てて声を掛けるが既に女性の姿は無い。仕方なくしばらく自分に対して落ち着け、落ち着け、と暗示を掛ける。

「落ち着け俺、K O O Lになれ・・・最っ高にK O O Lになるんだ・・・」

もう手遅れとか、言わないで・・・

「目を覚ましたんですか!？」

ガタツと勢いよく席を立ち、電話の相手に確認を取る。近くで一緒に文化祭の企画書類のチェックをしていた茶髪の男はあまりの大声に驚いてペンを落とす。

「ちよ、会長。耳元でいきなり大声出さないで下さいよ」

「あ、ごめん!今から向かいます。はい、分かりました・・・失礼します」

「え、会長何言って——」

「ごめんこれ任せた!先生に伝えといて!」

「会長っ!ちよ、多過ぎだろ!」

書類を茶髪の男に渡し、急いで彼の居る病院に向かう。

2年だ。2年もこの日が来るのを待っていたのだ。彼が目覚ます日を。

「え!?!行方不明って、マジ・・・?」

『はい、俺も今日アイツの母親から電話があつて・・・』

「え、何で?何で消えたの?」

『誰も分かってないみたいで……。竹宮さんも何か知りませんか？』  
「知らん。何も聞いてないしそんな様子も

なかったと思う」

『そうですか……。あ、警察が竹宮さんの方にも行くかもしれません。  
最後に会話していたのは竹宮さんなので』

「ああ、うん。分かった」

電話を切る。アイツの友人からの電話の内容はアイツが行方不明  
になったということだった。カードゲーム仲間というだけで学校も  
家もどこか知らないが、それでも心配だ。

「早く見つかれよな……」

「深刻な脳へのダメージで2年も寝てたのか……。って、どうい  
うことだ？ ドツキリかコレは？ どこかでカメラを通してモニター越  
しに誰か俺を驚かせようとしてるのか？ そもそもこれが夢の可能性  
も……。いや、どうしてさっきまで居た日常の世界が現実だと言え  
る……。？？」

俺は部屋から出ていった看護婦さんが連れて来た医師に自分の現  
状を告げられ、それでも信じられなかった俺は次第に疑心暗鬼に陥つ  
ていく。

「どっちが……。止めよう。これ以上考えたら壊れそう……」

俺は自分が段々可笑しくなっていくような気がして考えるのを止  
めた。ベッド付近の窓から見える外の景色を眺める。綺麗な蝶々が  
飛んでいる。黒い羽の蝶々だ。しばらく見ていると少しだけ気持ち  
が落ち着いたような気がした。

……。こんな訳の分からない世界でも、蝶は飛ぶし、空は青  
いし、人が居る。そう考えたら、少し安心、かな……

いかん、中二病みたいだなコレ。

一人そんな事を考えていると、部屋の扉が開きどう考えても病院の  
関係者じゃなさそうな制服の女性が入って来る。

「あ、えっと、ゆつきー？久し振り……って覚えてないかな……」  
「あ、はい……すみません」

ゆつきーというのが渾名なのはこの世界でもそうらしい。最も、最近は幼なじみとその友人くらいからしか聞いていなかったような気もする。

俺が知らないと言うと女の人は少し動揺するが少しして自己紹介を始めた。

「えっと、柴崎しばさき 凧なぎです。一応ゆつきーが記憶喪失になる前は幼なじみだったんだ……」

「あ、そうなんですか……。すみません、本当に記憶が無くて……」  
全くもって記憶にない名前と容姿をしている彼女、柴崎 凧に少し申し訳無さを感じる。いきなり幼なじみだったと言われても全く以て実感が湧かないのだ。それにこんなに綺麗な人が幼なじみだったなんて正直、夢しか思えない。やはりこの世界は夢なのだろうか。  
「あ、気にしないで。これ、プレゼント。今は夏休みだけど、いつか学校に来てみてね。私も憐も……あ、憐っていうのは私の友達。  
伊原 憐いはら れんって言うんだ。その憐ももう結構学校でデュエマ強くなっ  
たから……あ」

「デュエマ？」

そこまで話して柴崎さんは暗い表情を浮かべながら恐る恐る聞いてきた。その、俺としては物凄く気になる。というか聞き覚えのあるフレーズが、単語が聞こえてきた気がするのですが気のせいか？気のせいなのか？

「……ごめん、喋り過ぎちゃったね。じゃあ私はこれで、じゃあね、また今度」

「え、あ……」

部屋から出て行く柴崎さんを止められず呆然とする。美人を呼び止めるのはチェリーボーイの俺には少しハードルが高すぎる為、仕方が無い。

にしても気になる。『デュエマ』と彼女は言った。それはもうハッキリと。もしあれで聞き間違いだったのなら俺の聴力は既に死んで

いる。価値としてはパンの耳のほうがよっぽど役に経つだろう。

気になって仕方がない。というのは俺がデュエマ好きだからだろう。きつと竹宮さんが俺と同じ境遇に居たら同じくデュエマ発言について気になることだろう。

「そういえば、俺の家ってどうなってるんだろ・・・竹宮さんも母さんや父さんも・・・」

新たに不安が生まれるが、今考えていても仕方がない。なるようになれ、という位の気概でいなければどうにかなってしまいたいそうなのだ。

「そういえば、プレゼント貰ったんだっけ」

俺は柴崎さんから貰ったプレゼントを思い出し、丁寧にラッピングされたプレゼントを開けると、中から木箱が出て来た。何が入っているのだろうか・・・？

「開けてみるか・・・ん？これって」

中から出て来たのは、2枚の写真。

俺と柴崎さんが写っているのと柴崎さんと茶髪の男性や何人かの同じ制服の男女。何かのグループだろうか？

多分これが伊原さんか・・・見た目はチャラそうだが優しそうな顔をしている。人気者なんだろうな。と勝手に想像する。こんなにイケメンならばきつと柴崎さんと付き合っているのだろうか？もしそうなら幼なじみが幸せそうで少し嬉しい。

「夏休みか・・・色々見て回ってみるか」

医師には何かあつたら呼べと言われている為、リハビリついでに少し部屋の外に出て新聞を読んでみる。

新聞を読むのは恥ずかしながら久し振りだ。ネットニュースなどを見るがあまり新聞に目を通したことは無い。新聞を見たら高確率で天声人語を読めと親に言われるからだ。

新聞を開き、一番大きい見出しに目を通す。最初は写真からして最近の映画かドラマだろうか？と思ったが、違った。

「何・・・これ・・・」

『ボルメテウス・ホワイト・ドラゴン撃沈。』

日本、中国に全敗。「バナラだと侮っていた。』

その日、俺は一番の衝撃を受けた。記事の内容を熱心に読む。どうやらデュエマの世界大会があったようだ。日本はチーム戦において全員がボルコンデッキを使ったようだ。対戦相手の中国は3人ともバナラで応戦。普通にバナラによる速攻で勝ったり、ギウジン丸召喚から形勢逆転したり、バナラを大量展開し超新星マーキュリー・ギガブリザードを使い呪文を封殺、そのまま数で押し切り勝利という中国の勝った時の状況が書かれていた。丁寧にターン毎に何をしたのか全て書かれている。

……信じられなかった。

写真はどう見ても立体映像、デュエマのアニメの主人公の一人、切札ジョーがクリーチャー世界でデュエマする時の世界が一番似ているだろうか？それにしてもデュエマの世界大会が新聞に大きく取り上げられていることが驚きだった。

よく見ればまだ続きがある。

超新星マーキュリー・ギガブリザードを世界大会で使ったのは世界でも中国が初、とのことだ。このことから日本は大きく中国にデュエマで差を付けられてしまったと言えるだろう……。困みにマーキュリーの値段は……。ほほう……。……

「……中国が優勝に加えて話題性まで持っていた訳か……。確かに完敗だな」

気付けば冷静に考察をしていた。さっきまで混乱していたというのにデュエマのこととなるとすぐコレだ。我ながらデュエマ馬鹿だな。と思う。

「これ、悔しいけど中国のプレイングが日本とは段違いだ。中国は日本のボルコンの除去札を警戒して動いている。墳墓を警戒して場やマナになるべく同名を置かないようにしている上に打点が減る分確実性を高めるマーキュリーを出すことで呪文が多く採用されている日本のボルコンのトリガーを封じて勝負に出たんだ……」

日本のプレイヤーの「バナラだと侮っていた」というのはきつと世界大会でも使われていなかった為、単純に知識が足りなかったのだら

う。

「この世界の中国はデュエマも強いのかあ・・・あ、アメリカはイギリスとやって1ー2で負けたのか。全員違うデッキか・・・あ、バロムvsアルカディアス。成る程見たい、この試合凄いい見たい」

気になる試合が幾つかあるが、俺は新聞から目を離し結論を出す。この世界は、きつとカードゲームがスポーツとして栄えた世界なのだ、と。

・・・結論を出しておいて後から疑わしくなってくる。しかし見れば新聞の番組表からデュエマがスポーツと書かれているのだ。デュエマだけが栄えた、というのは流石に可笑しいのできつとカードゲームというカテゴリーがスポーツとして認定された。または最初からスポーツだったのだろうと考えた。

この結論に至った時、最初は勿論「それはひよつとしてギャグで言っているのか!？」と思ったが、事実は事実。これが現実なのだ。

「おいおい、何だよそれ。遊戯王のアニメじゃないんだから・・・」嬉しい。確かに嬉しいことなのだ。しかし、大きな問題が出てくるのだ。

じゃあ、学校でもデュエマなどが授業としてあるの？

という疑問だ。と言ってもほほほほ答えは出ている。

柴崎さんが、柴崎さんや伊原さんが学校でデュエマ上手くなったよ。という発言から学校でもきつとあるのだろう。無くてもきつと部活があるレベルだろう。カードゲーム部、もしくはデュエマ部とか。

「・・・俺、まだ自分のデッキ見てないんだけどね・・・」

OHブツダよ寝ているのですか？このままでは俺はこのマーキユリー1枚に25万掛かるような世界で1からデッキを組まなくてはいけないのですが。

名も無き主人公の召喚時効果で名称付けますね〜

『アルカディアスDによって呪文のロックを受けているアメリカ。ブルッカーを出して耐えています、これは厳しいですねえ〜』

『そうですね、バロムは強力なcipを持っていますが出せなければそこまで脅威ではありません。イギリスもここは徹底して、クリーチャーを除去していきます』

生徒会室の中から聞こえて来る実況の声。扉を開けるとスマホを持ってその映像を無言で真剣な顔付きで見続ける青年の姿を目にする。

「あ、会長帰って来たんすか？いきなり書類渡されて1年の生徒会メンバー驚いてましたよ〜」

「あ〜、ごめんね、憐。ちよつと慌てちゃってたから………何見てるの?」

憐の持つスマホを覗き込むと、テレビで見慣れた空間でデュエマをする二人の外国人が映っていた。

「アメリカとイギリスの試合つすよ。バロムvsアルカディアス。因みに会長はどっち派つすか？俺はバロムつすね」

「うーん、アルカディアスかなあ〜?」

「会長はアルカディアスつすか………」

丁度実況が大きな声になり始める。どうやら戦局に大きな変化があったようだ。

『おつとアメリカ……?マナゾーンのカードを進化元にして……バロムクエイクを召喚したあ!これは形勢逆転か!』

『ヘブンズ・ゲートによる踏み倒しもこれで出来なくなりましたね。これはイギリス、かなり厳しくなりましたね〜』

「おおお〜、やっぱバロム強いっすわ、これはアメリカに流れが来たっすね」

「でもイギリスが勝ったんだよね?この試合?」

「違ったかな?と憐に聞くと、そつすね。と頷きながら試合の結果を知っていることを証す。

「結果が分かってもこう……何て言うか、実際に試合をしている人達によって作られるこの駆け引きから生まれる緊張感のある空間に引き込まれちゃうすよね」

「そうだね、確かに。私も好きだね、こう、相手の手を考えてお互い自分の思い描いた先の展開への1手を打ち合う感じ」

「そうそうーそれっすよーいやあーこれ見てたらデュエマしちやいたくなってきたっすねえ」

そう言いながら、憐は手元に置いてあったバッグから綺麗な状態のデュエマのカードを取り出した。よく見るとバッグの奥には銀色に光るゴミが少し入っている。

「あ、もしかしてパック買ったの？」

「お、当たり前っす。今回の成果は……ジャジャーン！」

憐は手に持っていたカードの束を生徒会室のデスクの上に滑ったのカードが見えるように広げる。何枚かレアカードはあるが、他はアノコモンやコモンで光っているカードは1枚も無かった。

「やっぱり駄目っすね〜パック。全然ベリレーア以上出ないっすもん」

「あ、ヘブンズ・ゲートだ。交換出来たりする？」

「ん？いっすよ。じゃあ……確か会長ってインフェルノ・サイン持ってたっすよね？あれもし使わないなら交換して貰っても良いっすか？」

勿論良いよ〜と言いながら、バッグに入れてあったカードファイルを開き、インフェルノ・サインを取り出す。闇文明を少々扱い切れないと感じていた凧からしたら嬉しい内容だったのだろう。自然と顔が綻ぶ。

そんな顔の凧を見て、憐は両手を合わせる

「眼福眼福。美人の笑顔も見れたし、これで今日も一日生きていくっ……！」

「大袈裟だなあ……。あ、そうだ、夏休み明けたら憐のクラスに新入生来るから、もし困ってたりしたらよろしく頼むね」

「え!?マジすか!?女の子っすか!？」

デュエマの試合映像や交換に気を取られていたがこれを伝えなければ、と凧は憐に生徒会として新入生に色々教えてあげよう言うが、憐はそれよりも女子かどうかが問題のようだ。無言で試合を見ていた時の真剣な表情の青年は一体どこへ行ってしまったのだろうか。

「残念！男子でした〜！」

「何だ男子すか……」

あからさまに残念がっている憐に凧は一つ憐が驚きそうな情報を提供する。

「実はね、その子は4c以上も扱えるデュエマプレイヤーだったんだ。まあ、今は多分デュエマしたいと思っただけかもしれないけど……」  
「……4c以上ってマジすか？てか本当にデュエマプレイヤー多過ぎやしないっすかねうちの高校……」

驚きのあまり聞き返す憐だが、それよりもデュエマプレイヤーが増えるということに対して少し呆れたような顔と口調で凧に意見する。憐と凧の居るこの高校は他校と比べてもデュエマプレイヤーが多い。実際にカードゲーム部のデュエマ部門においてはうちの高校はトップクラスの強さを誇っている。そこに居る凧も自分もデュエマの大会ではかなり良い成績を残すことが出来ている。

凧はそうだね、とデュエマプレイヤーが多い事に同意を示しながら、何故自分達の高校はデュエマプレイヤーが多いのか説明を始める。

「私達の高校は元々Zプロジェクトの被害者のカードゲームへのトラウマの解決や、まだカードゲームをスポーツとして認識していなかった当時の世間にそのイメージを定着させる為に創られたものだからね。というか、学校のサイトとか新入生への校長先生の話でもあったと思うんだけど……寝・て・な・い・よ・ね？」

「イヤダナー、ネタタワケナイジヤナイデスカー！アハハハハ」

「Guilty<sup>有罪</sup>だね、分かるとも……でもその子は記憶喪失だから多分自分がデュエマプレイヤーだったこと、覚えてないかもしれないんだ。それにZプロジェクトの被害者だった訳だから、もうデュエマを嫌っているかもしれない……」

トラウマの解決の為に少しずつカードと触れ合わせる。という試みだったのだが、勿論失敗例も存在する。教師側が体育でカードゲームの授業に参加しろと被害者に強制し、自殺したという事件も過去にはあった。スポーツとして認識されたことにより、体育会系のノリで生徒や教師がちよつとやってみないか？と無理矢理やらせたり、被害者を集団で虐め、自殺に追い込んだなどがあり、完璧に安心出来る環境とは残念ながら言えない。

凧は彼がデュエマプレイヤーとして戻って来て欲しい反面、そういった目に逢わないか心配なのだ。だからこそ、出来ればデュエマにもう触れないで欲しいと思ってしまう自分が居る。

段々と暗い表情になっていく凧を見て憐はまた暗い顔してますよ会長？と声を掛ける。この後ろ向きな思考へどんどん凄い速さで陥って行くのはこの人の悪い癖だ。何とかして治してやりたいものだ。

「デュエマを嫌いになってるかなんてまだ分かんないっすよ。記憶喪失ならそれこそ嫌いになった要因を忘れてるかもしれませんし？」

「それは……確かにそうかもしれないけど……」

「なら良いじゃないっすか。最初から諦めないで下さい。それとも会長はその子にデュエマを嫌いになって欲しいんすか？」

我ながら意地悪な返したと思う。ただ最初から少し諦め掛けている様子の会長にはこれくらいしなければ効果は無い。

「別につ、そういう訳じゃないけど……」

「じゃあもう大丈夫っすね！俺、早くその人のデュエマ見たいっすわ〜」

「あー、もう！」

憐の質問に悩んでいた自分が馬鹿らしく思えてきた凧は少しだけムツとして、意地悪な質問をしてきた憐の頭を握り拳でグリグリと両サイドから攻撃する。

「意地悪なこと考える頭はこれかなあ!?よおーし！ちよつと壊しちゃうぞおー！」

「イ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、タ、カ、

クッ、タッ、ケッ、ルッ、ウッ、ウッ、ウッ！」

さつきまでの暗い表情は消え、いつも通りのこの人に戻ったことに憐は安堵した。

しばらくして1年生が生徒会室に戻った時には既に風はいつも通りデスクで作業をしており、そのデスクの前にあるソファには頭を抱えて動かなくなった憐の姿があったという。

白い壁、白い床、白いカーテンのある部屋で、夏の景色を確認出来る窓が見える場所にあるベッドで俺は自分の退院までのスケジュール表を確認していた。

「退院まで早いもんなんだなあ。入院とか初めてだから知らなかった」

本来はもつと掛かるのだが、彼には入院などしたことが無い為、どれくらい長いのかは分からない。

ペラペラとスケジュールの書かれた紙を捲る。見ればリハビリの文字の下には7月26日から2週間と書かれている。実際、自分の体とは思えない程に重く感じはするが、そこまで筋肉が落ちていような気はしない。結構な時間寝てたというのに不思議過ぎる。

「・・・リハビリも良いけどデュエマしたいなあ・・・」。柴崎さんには悪いけど、リハビリって大変だし、このままベッドの上でデュエマのデッキ考えてたい・・・」

この夏の暑い中で、冷房が効いていたとしてもリハビリに励める気がしないのだ。そもそも両親がまだ来てないのもあり、少しこれから先が心配になった為、いつそのこと病院でゆっくりリハビリしてその間自分の生活をどうしていくか考えていたい。

「新聞読んでも自分自身が分からないし・・・」  
世間は知れても自分自身が分からない。

ただ予想以上に新聞から得られた情報は多かった。親が新聞を読めと言って来たりした理由だけあって最近の出来事はある程度把握

していた。

「ああ〜・・・動きたいけど動きたくないい・・・」  
「何言ってるんですか〜？リハビリ、頑張りましょうね？」

支離滅裂な発言をしていた俺に対して、目が覚めた時に居た看護婦さんがリハビリを促す。考え事のし過ぎで全く存在に気付かなかつた・・・

「冷房が効いているんですから、そこまで暑くないでしょう？怠ける理由作ってないで、ちゃんと退院出来るよう頑張ってください」

「はい・・・」

自分の看護をしてもらっていた分、失礼なことを言っただけではないような気がして反抗出来ない。嫌がっていてもリハビリの時間は来るのだ。逃げていても仕方ないか、と渋々結論づける。

「よし、たかが2週間だ。やってやる」

「されど2週間ですからね。リハビリ大変ですから、2週間コースはキツイですよ？」

2週間コースとは何だろうか？今まで聞いたことのない単語だ。意味合い的にはリハビリ期間をコース選択するようなものなのだろうが、生憎俺はそんなものを決めていない。

俺は誰が2週間コースと決めたのか看護婦さんに聞く。

「先日いらつしやった柴崎さんですよ。貴方の意識もハッキリしてますから問題はありませんし、何よりも柴崎さんの御両親は貴方の後見人ですから」

「え」

その時俺に衝撃が走る。まるで雷に打たれたかのようにだった。

柴崎さんの御両親が後見人だったという衝撃の真実と、そこから導き出される自分の親が死んだのか子を捨てて行方を眩ませたのかということ。

「あ、リハビリの御時間ですね。行きましょう」

「え、あ、はい・・・」

リハビリの時間が来たことを告げられ、人生初のリハビリに緊張し始める。医療ドラマなどでリハビリする人を見ていたりしたが、実際

にリハビリしている人はあまり見たことがない。

看護婦さんに付き添われて自分の部屋を出る。

「この下の階にリハビリ用の施設がありますので、そこで2週間コースをすることになります」

「因みに何ですが、2週間コースとは？」

「説明していませんでしたか、すみません」

俺はエレベーターまで点滴棒を片手で持ちながらさつきまで疑問に思っていたことを質問する。看護婦さんは説明していなかったかを俺に確認するとすぐさま説明を始める。

「ここではリハビリにはコースが幾つかあり、その中から選択するようシステムが来ています。その中の2週間コース、1ヶ月コース、3ヶ月コース、6ヶ月コースの2週間コースを柴崎さんの御両親は選択しました。これは先程上げた4コースの中で一番過酷と言われているものです」

「一番過酷……」

いきなりやりたく無くなつて来た。すぐに病室に戻りたくなる。そもそも寝たきりに近かった俺に2週間コースとは如何なものか。どれだけ早く退院して欲しいのだろうか。

俺は柴崎さんの御両親に嫌われているのか考えているとエレベーターの扉が開き、中に入る。

「安心して下さい。柴崎さんの御両親は貴方を嫌ってはいませんよ。貴方が入院した時なんて酷く落ち込んでいましたから」

「そうですか……。単純に早く会いたいからなのかな？」  
『1階です』

俺の不安を和らげようとしてくれた看護婦さんの言葉に単純に早く会いたいから早くリハビリが終わるコースを選んだのだろうか？と考えているとエレベーターが目的の階に着いたことを報告し、目の前の扉が開く。

看護婦さんの案内に従って移動していると、しばらくして体育館のような場所に出る。

「辛くなったり苦しくなったりしたら無理せず近くの人に声を掛け

て下さい。大変でしょうが、リハビリ頑張ってください」

「何から何まで、ありがとうございます」

今までの看護や案内までしてくれた看護婦さんに感謝すると、看護婦さんは仕事ですからと言い、リハビリの担当に変わる。容姿は男性で長身、少し筋肉質という所だろうか？

「君の名前を確認するけど良いかな？」

「はい」

白衣を着た男性は看護婦さんと話し終わると此方へ顔を向け、情報確認をし始める。

「2週間コース選択の白菊しらぎく 雪君ゆきで合っているかな？」

「はい」

「よし、それじゃあ早速リハビリを始めよう。僕の名前は吾妻あづま 駿ゆん。これから2週間の間、君のリハビリを監督することになりました！大変だろうけど、一緒にリハビリ頑張ろうね」

俺は差し出された手を握り、握手をする。何度も病院内で大変と言われ、これから先のリハビリが心配になったが、この優しい先生となら2週間で退院出来そうだ。

「よろしくお願いします」

## リハビリ・プログラム

俺がリハビリを始めてから2週間が経った。吾妻さんは会った時のイメージ通り優しい人で、偶に話し相手にもなってくれた。腕の筋肉がある程度回復するのに時間が掛かったけれど、今では世界が変わる前の俺の体の状態に近い。正直、リハビリというものを舐めていたと強く実感した。何だこれ？こんなのを病人がやるものなのか？と思ったりもした。まあ、俺の場合は2週間コースという一番ハードなものだった為、当たり前だったのかもしれない。

俺は迎えの車を用意してくれると言う柴崎さんの御両親を待ちながら吾妻さんに感謝の言葉を口にする。残念ながら看護婦さんは他の人の所に行っており忙しいのだという。

「今まで御世話になりました。吾妻さん」

「うん、完治おめでとう。君が寝ていた2年という莫大な時間と記憶喪失という大きな障害はこれからも君の足枷になつてしまふと思う。それでも、どうか強く生きて欲しい。諦めないでいてほしい」

「はい、あんなに大変だったリハビリをしておいて人生諦めるとか、絶対したくないですね。吾妻さんも医者として頑張つて下さい」

俺が吾妻さんと話していると後ろの入り口の自動ドアが開き、女の人がキョロキョロと誰かを探し始めた。

「さあ、迎えが来たみたいだ。自分の人生、楽しんでおいで」

「あれが……。はい、吾妻さんも」

吾妻さんに頭を下げ、入り口の方へ向かう。すると俺の存在に気付いた女の人は手を大きく振り、近づいた俺をそっと抱きしめる。

いきなり抱きしめられて困惑していたが、俺は取り敢えず言っておかなくてはならないと思い、この体のことを心配してくれていたことに感謝の言葉を伝えようとする。

「柴崎 風さんのお母さんですよ。その、ありがとうございます——ガッ」

「雪君だああ、雪君が居るううう」

話している途中で物凄い力で抱きしめ、いや、拘束される。知らない

い人に耳元で泣かれ大変怖い思いをしているのだが、残念ながら柴崎母はそれに気付かない。目が覚めずに居た人物が目を覚まし、2年振りに再会したのだから涙脆い年の人にはそんな余裕は無いのだろう。……少し失礼なことを考えてしまった気がする。

「ごめんねええ！仕事が忙しくてすぐに来れなくてええ!!」

「ああ、はい、大丈夫ですよ、全然。気にしてないですって。本当に」  
「うわああああ雪君優しいよおお」

静かにして欲しい……………」

急いで病院の外に出なければ吾妻さんや病院に居る人達に迷惑を掛けてしまう。

「えっと、ここ病院ですから一旦外に出ましょう!?皆見えます……………」

「ああーう、うん、ごめんね。つい嬉しくて……………」

俺の提案を受け入れ、柴崎さんの母親は迷惑を掛けてしまったと吾妻さんに御辞儀をしてから病院の外に出る。

「えっと、落ち着きましたか……………」

「うん、うん。ごめんね、あんなに騒いじゃって……………あ、名前、教えてなかったね。風の母の柴崎しばさき舞まいっていうんだ」

「いえ、僕の方こそ御世話になりました。先程は言いそびれましたが、改めて、ありがとうございます。いつ目が覚めるかも分からない僕なんかを心配してくれて」

2年も目覚めない人間をあんなに泣く位に心配してくれていたのは正直少し驚いた。あ、大丈夫?とか、もう平気?位だと思っていたのだが、俺の予想は外れたようだ。

感謝を伝え、御辞儀をしてから話すと、やっと収まって来ていた柴崎さんのお母さんの涙腺は少しずつまた崩壊を始める。

「当たり前だよ、だって雪君は風の大切な幼なじみだし、カードゲームでいつも風の面倒見てくれて……………感謝してもしきれないよ。雪君の御両親からも、後を任せられたんだもの」

「後をつて、もしかして……………」

入院中、親が来なかったことから何となく予想はしていたが、この世界での俺の両親は既に……………」

「心配そうな顔してたよ、でも、私が見てくれるって分かっただら安心したって笑顔でね……。最後まで雪君のこと話してたよ」

「そう、ですか」

自分の知らない親が死んでいた。その親は死の直前まで自分の事を話していた。

この2つの事実は少し胸に来るものがあった。自分は何も知らないはずなのに、今まで大切だったものが突如として無くなってしまったかのような悲しい気持ちになるという初めての感覚に襲われる。

この世界の俺の、記憶を失う前の自分の心がそうさせているのだろうか。

話しをしながら歩いていると黒いプリウスの前に辿り着く。どうやらこれが迎えの車らしい。

「乗って、先に学校の方に寄って風の所に行くから」

「分かりました」

そう言う俺が席に着いたのを確認し、舞さんは柴崎さんの居る学校へと向かう。

座席に座っていると、車の窓付近に吊されているアルカディアスのストラップがあることに気付く。二頭身で可愛らしい。その横には何かの鍵が吊されている。家の鍵だろうか？それにしても少し特殊な形状をしている気がする。

「その吊されている鍵って、家の鍵ですか？なかなか特殊な形状ですね……。」「

「ん？ああ、そうだった！雪君のデツキ渡すんだった。つい忘れてた……。」「

赤信号で車が止まると同時に白菊は質問をする。

舞は少し考えるような素振りを見せてからすぐに思い出した、と吊られていた鍵を手にし、白菊に渡す。

「学校に着いたらそれで後ろに仕舞ってある箱を開けて。前に使ったデュエマのデツキが入ってるから」

「デュエマ……。はい。」「

やっと、自分の知っているものが自分の手元に戻って来る。

思わぬ自分のデッキとの再開の可能性に胸が躍る。ワクワクしながら学校に早く着かないかと待ち遠しい気持ちで一杯になる。

車は信号が青になると直線に進み始め、窓から大きな建物が見えるようになる。近未来感が少しするが、前まで居た自分の世界にありそうな雰囲気はある。

そして、待ち望んでいたその時がとうとうやってくる。

「着いたよ〜」

「出ます。後ろ開けますね」

「いいよ〜」

許可を貰い、車から出て後ろのスペースに収納されていた大きめの木箱を鍵で開ける。

「おお、おおおお〜……」

「良かった。記憶喪失もそこまで酷く無さそうだね。前の雪君と変わらずカードを見たら嬉しそうな顔してる」

この世界の記憶は最近の出来事から少し学んだこと位しか知らない為、記憶喪失と何ら変わりはないが、デュエマや前の世界で学んだことは別だ。ちゃんと記憶している。

箱を覗くと前の世界で使っていたデッキがそのまま入っている。ビマナ、ネタ、速攻……何一つ欠けているデッキは無い。

「良かったああ……無くなつてなかったああ……」

「凄い心配だったんだね。前の雪君より表情豊かでお母さん嬉しいな〜」

そう言われると恥ずかしくなってくる。

「じゃあ折角だからここでデュエマでもしてきたら？良いリハビリになるんじゃない？部活で生徒も居ることだし……あ、デュエマのルール憶えてる？」

「憶えてはいますけど……え、良いんですか？そんな勝手に入っちゃっても……」

部活動がある為、生徒は当然学校に居る。こういうのは事前に色々な確認などを学校側に通すのが普通ではないだろうか？と思っていたのだが、どうやら舞さんの話によるとここの校長は舞さんが腕の立

つデュエマプレイヤーとして活動していた頃のライバルだったらしい。その為か、デュエマプレイヤーで舞さんの御墨付き&授業や部活動の妨害、生徒への危害などが無ければ問題なく学校に入れるらしい。

「……少し規則が緩過ぎる気がするのだが、大丈夫なのだろうか。」

「一応は驛だんに……校長に一言位は入れておくから、先に生徒会に行つてきなよ。すぐそこだからさ。電話し終わったらすぐ私も行くよ」

「ありがとうございます。じゃあ、そうさせてもらいます」

失礼します……と小声で学校に入る。スリッパを受け付けで貸してもらい、すぐ近くにあった生徒会室へと足を運ぶ。時計を見ると丁度昼頃。学生は昼食を取っているだろう時間だ。

「ふう……はあ……ふう……よし」

生徒会室に着き、深呼吸をしてから扉を叩く。きつちり4回ノックする。4回で正しかったか心配になってきたが、そんなことよりも本当に自分が学校に居て良いのかやはり心配になる。心配し過ぎて胃が痛いくらいに。

扉をノックすると「はい」と声が聞こえ、目の前の扉が開く。

「……え、あ、な……え？」

「あ、えつと、久し振りです。柴崎さん。あー、リハビリも終わって今日退院しました」

出てきたのはこの世界で初めて目が覚めた時に真っ先に見舞いに来てくれた柴崎さんだった。見るからに混乱している。まあ、夏休み中に病院に居るか家に居るかと思われていた人物がそこに居るのだから仕方ないだろう。

「取り敢えず、入ろう」

「あ、はい」

腕を掴まれ、やや強引に生徒会室に入る。内装を軽く見てみるが、あんまり元居た世界と変わらないどこにでもありそうな雰囲気安心して心する。

部屋をキョロキョロと見回していると制服姿の自分より年下らし

き生徒を確認する。見るからに警戒されていて少し苦しい。

「驚いたよ、いきなり来るなんて……」

「すみません、柴崎さんのお母さんにリハビリに生徒会でデュエマして来たら、と言われて……」

「え」

柴崎さんは物凄く驚いたのか、目を丸くして開いた口を隠すかのよう  
うに手を口元に持っていく。何かあったのだろうか。

「……デュエマを、知ったの？」

「え？ああ、はい」

「……デュエマを、するの？これからも」

「まあ、そうですね」

「……んんんんんー、そっかー、うーん、そっ  
かー……やるのかあ……」

「えっと、駄目でしたか？」

凧は駄目じゃないけどやっぱり実際にそうになると心配になる。と  
雪からしたら何のことかさっぱり分からない返答をすると、生徒会室  
に居た1年生を手招きする。

「何ですか先輩？」

「彼とデュエマして。ARは要らないから卓で普通に」

「了解です。あ、今は外道デッキしか無いんですけど良いですか？」

「何でも良いよ」

「じゃあこれで、とデッキを持ち出す1年。凧を見ると迷っても仕  
方がない、これで良い……と何度も口になっている。自己暗示  
か何かだろうか？」

「あ、ゆっきーお母さんからデッキ預かってるよね？」

「あ、大丈夫ですよ。預かってます」

「ルールは？」

「全く問題ないです」

返事をしながら木箱の中からデッキを一つ選ぶ。この世界での最  
初のデュエル。自分の一番使っているデッキを使おう。

雪は部屋の真ん中にあるソファに座り、机を挟んで1年生の子と対

面する。

お互いのデッキをカット&シャッフル。超次元ゾーンの開示も忘れない。

「超次元です」

「了解です」

山札を置き、シールドを5枚展開。手札を5枚用意してサイコロをお互いに1回振る。

5と3。白菊の先行で決定する。

「宜しく願います」

「宜しく願います」

小さく御辞儀をし、すぐに自分の手札へと目を向ける。少し手札が悪いが、こんな事は日常茶飯事だ。この程度で負けた、等とは微塵も考えられない。

「俺のターン。プチョヘンザをマナへ、ターンエンド」(1マナ)

「僕のターン、ドロ。焦土と開拓の天変をマナへ、ターンエンド」(1マナ)

「焦土・・・ゴクガ軸のランデスカ・・・？」

ランデスカ相手となるとこのデッキはもしかしたら相手にとって少し面倒な相手かも知れない。相手には悪いが、この勝負、勝たせて貰う。

「俺のターン、ドロ。テック団をマナへ、ターンエンド」(2マナ)

「4c・・・僕のターン、ドロ。ダイスベガスをマナへ、アナリスを召喚し、破壊。焦土と開拓の天変をマナチャージしてターンエンド」(3マナ)

テック団をマナに置いた時点で驚いたような表情を見せる1年に自分が何か可笑しなプレイングをしたのかと不安になる。

「何か変なプレイングしましたか・・・？」

「あ、いえ、このデッキと同じ4c以上の使い手だとは思わなくて・・・」

「え？4c以上は珍しいんですか？」

「はい、4c以上は扱いが難しく、並みのプレイヤーには難し過ぎて上

手く使えないんです。生徒会のメンバーは一応は使えますが、あまり好んで使いはしません。4c未満のデッキに負けることが多いので。僕も今回は偶然このデッキしか持って来ていなかったの……」

「成る程……柴崎さんも?」

「私も使えなくは無いですけど、ゆつきーみたいに手足の様には扱えないかな」

この世界では4c以上は上手く扱える人が少ないらしい。自分でも4c以上は少し難しいと思うが、まさかそこまで上手く使える人が少ないとは驚きだ。

「まあ、俺もそんな上手く使えてるか自信無いんですけどね」

「それはこれからのデュエルの展開で分かりますよ。さあ、デュエルの続きをしましょう?」

「そうですね、失礼しました。それでは、俺のターン、ドロー。テック団をマナへ、ターンエンド」(3マナ)

お互いに少しずつ先の展開への一手を打つ。手札が少々事故を起こしている雪に対し、生徒会1年はマナを伸ばし、ほんの少し差を付ける。

しかしまだ序盤。この程度どうということはない。と思っていた雪に1年は笑みを零す。

「僕のターン、ドロー。ハヤブサマルをマナへ、3マナ、爆鏡 ヒビキを召喚。ターンエンド」(マナ4)

「げっ、ヒビキ……」

少しずつ少しずつ、場は雪に不利な状況を作り始めていた。

アィム・ユツキー・キル・ユー！

生徒会室では今正に、目覚めてから初めての雪のデュエルが行われていた。

「ヒビキ・・・面倒な・・・ドロロー、プチヨヘンザをマナへ、ターンエンド」(マナ4)

「ドロロー、シヤコガイルをマナへ、2マナでアナリス召喚、破壊、マナをチャージ、3マナでもう一体ヒビキを召喚、ターンエンド」(マナ6)  
「これはキツいなあ・・・」

凧は盤面に並ぶ2体のヒビキを見て雪が動き辛いのだろうと推測した。

爆鏡ヒビキ、その効果は相手が呪文を唱えた時に相手のマナゾーンからカードを1枚墓地へと送るランデスクリーチャー。対して雪が扱うのは最初の動きやマナゾーンにプチヨヘンザが見えることから高コストデツキだと考えられる。つまりはフェアリー・ライフといったマナ加速を序盤に行い、肥えたマナで大型を出すのが理想の動きなのだろう。しかしフェアリー・ライフを打った所でヒビキの能力でマナは増えない。寧ろ減るのである。雪が苦い顔をするのは仕方がない。

「ヒビキ2体・・・ドロロー、ゼンメツ・スクラッパーをマナへ、5マナでカーネルを召喚。効果でヒビキは次の自分のターンまで攻撃、ブロックが出来ない。ターンエンド」(マナ5)

「ドロロー、マナを・・・いや、ここは・・・チャージせずターンエンド」(マナ6)

チャージしない・・・コスト7のカードか？だとしたら多分サイクリカか英知と追撃の宝剣。ランデスで嫌という程苦しめられたから何となく分かる。

「ドロロー、う、駄目か・・・ホワイト・グリーンをマナへ、ターンエンド」(マナ6)

「ドロロー。あ・・・英知と追撃の宝剣をマナへ、ターンエンド」(マナ7)

多色事故か……？これは大きな。ここらでどうにかしたいが……  
「ドロー。……っ！モアイをマナへ、手札のG・W・DのB・A・D 2の効果で2コス軽減、4マナでG・W・Dを召喚。効果によりG・W・Dとヒビキをバトル。G・W・Dがバトルに勝ったことで1枚ドロー、更にG・W・DはSスピードアタッカー A、G・W・Dでシールドを攻撃、攻撃時もう一度効果発動、もう一体のヒビキとバトル。バトルに勝ったことで1枚ドロー」(マナ7)

「除去しつつドローまで……受けます。トリガー無しです」(シールド4)

「ターンエンド、G・W・DはB・A・D 2の効果で破壊されます」  
自壊するG・W・D感謝しつつ、雪は次の一手を考える。幸いカーネルが居る為、万が一にマナロックが出てきても返しの動きはそれなりに出来る可能性がある。しかしやはりマナに触られるのはかなりキツイ。

「ドローします。アナリスをマナへ、5マナで焦土を打ちます。マナをチャージしてマナのゼンメツ・スクラツパーを墓地へ送ります。ターンエンド」(マナ9)

「ドロー、やっとか……。修羅VANをマナへ、カーネルでシールドへ攻撃、その時——」(マナ7)

雪はカーネルで攻撃宣言をした直後、そのカーネルを手札へ戻す。一見すれば何をしているのかさっぱり分からない行為。そして、カーネルの代わりにドローしたカードをバトルゾーンへと送り出す。

「革命チェンジ、プチョヘンザをバトルゾーンへ。プチョのファイナル革命の効果でこのクリーチャーのパワー未満のクリーチャーを全てマナゾーンへ送りますが、クリーチャーが居ない為不発。プチョヘンザはT・ブレイカー、よってシールドを3枚ブレイクします」

「受けます。シールドチェック……S・トリガー、テック団の波壊GO！を発動します。コスト6以上のクリーチャーを破壊。対象はプチョヘンザで。更にフェアリー・シャワー、ドンドン吸い込むナウを発動します。シャワーの効果で山札の上から2枚を見て、1枚を手札に、1枚をマナへ、ドドスコの効果で山札の上から5枚を見て1枚を

手札に加える。サイクリカを手札に」(マナ10)

「処理されたかあ・・・しかもマナに置いたのがそれってことは・・・ちよつと不味いかもなあ・・・。ターンエンド」

場にはクリーチャーが存在せず、シャワー、ドドスコと優秀なS・トリガーを踏んでしまう。本来ならタツプイン効果と高パワーを持つプチョヘンザで優位に立つ予定であった雪だが、流石に3枚もS・トリガーを引いてしまうのは予想外であった。おまけに手札補充とマナ加速。サイクリカが手札にあるのも確定している。そして何よりも雪が恐れているのが、先程のシャワーでマナに置かれたカードである。

『Dの博才 サイバーダイス・ベガス』水のコスト5のD2フィールドで自分のターン終了時に発動する置きドロ能力に相手のクリーチャーが自分を攻撃する時に発動できる能力がある。

それが、水のコスト7以下の呪文をノーコストで手札から使えることである。

雪は既にマナが肥えている生徒会1年がアドの塊のようなダイス・ベガスをマナに置くとは考えられず、マナに置いたということから、既に手札に握っていると推測した。

——ゆつきーが攻撃しても、シャワーやドドスコ、ダイス・ベガスで手札が肥えている状態だとカウンターを受ける可能性が高い・・・でも、サイクリカでランダス呪文を何度も打たれてしまえば、ゆつきーは更に思うように動けなくなる・・・。。これは、ゆつきーが押されてる・・・？

傍観している風は声には出さずに今の状況から雪が劣勢であると判断する。そしてそれは、実際にプレイしている雪が感じ取っているものでもあった。

「ドローします。アナリスをマナへ、7マナでサイクリカを召喚。効果で墓地の焦土を唱えます。マナをチャージしてテック団を墓地へ、唱えた焦土を手札へ戻し、ターンエンド」(マナ12)

「優先するのは妨害だよなあ・・・ドロ、あ、これは・・・良いかもな。修羅VANをマナへ、5マナでフェアリー・ホールを唱える。効

果でマナをチャージし、超次元ゾーンから時空の喧嘩屋キルを2体バトルゾーンへ。ターンエンド」(マナ8)

「あつ、そっか。キルなら・・・」

「キルですか。プレイングが上手いんですね」

「ん？ああ、ありがとね」

時空の喧嘩屋キルは火のコスト2のサイキック・クリーチャー。パワーは1000と低いものの、相手ターンにバウンスされない耐性を持つ。生徒会1年のデッキには除去札としてドドスコとテック団が入っているが、どちらもバウンスカード。テック団には破壊効果もあるが、キルはコスト6以上ではない為、破壊出来ない。そしてキルは覚醒すると自然のコスト7のサイキック・クリーチャー、巨人の覚醒者セツダンとなり、サイキック・クリーチャー全てにバウンスへの耐性を普及する。つまり、ダイス・ベガスによってバウンスカードが発動されたとしても、サイキック・クリーチャーは除去されない。セツダン2体だけでも今の様な状態ならブロッカーやシノビが無ければダイレクト・アタックまで持つていける。

「ドロー、シャワーをマナへ、7マナでサイクリカを召喚。墓地のドンドン吸い込むナウを発動、山札の上から5枚を見ます。シャワーを手札に加え、今出したサイクリカを手札へ戻し、ドンドン吸い込むナウを手札へ戻します。そして5マナでサイバードイス・ベガスを展開。ターンエンド時、カードを1枚ドロー」(マナ13)

「出てきたかベガス・・・ドロー、2マナでフェアリー・ライフ。マナをチャージ、6マナでバイケンを召喚。ターンエンド」(マナ9)

キルの覚醒条件はパワー6000以上のクリーチャーが自分のバトルゾーンに居ること。このままでは2体のキルは覚醒してしまう。雪も本来ならバイケンを召喚などしないのだが、強引にでも覚醒をさせようと動く。

—— 本当の目的を隠しながら。

「ドローします。シャワーをマナへ、6マナで呪文、ガロウズ・ホールを唱えます。対象はバイケン、超次元ゾーンから勝利のプリンプリンをバトルゾーンへ。プリンプリンの効果でキルは次の僕のターンま

で攻撃、ブロックが出来ません。更に7マナでサイクリカを召喚。効果で墓地のガロウズホールをもう一度唱えます。効果でサイクリカを手札に戻し、超次元ゾーンから勝利のガイアール・カイザーをバトルゾーンへ。その後、ガロウズホールを手札へ戻します。」

何度も出現するサイクリカ、実際にクリーチャーが実体を持っているとしたら今は疲労しきっているだろう。

「勝利のガイアール・カイザーは出たターンアンタップしているクリーチャーを攻撃出来ず。ガイアール・カイザーでキルを攻撃」

「受けます。覚醒は許されず、キルも1体除去されたか・・・」

「ターンエンド、ダイス・ベガスの効果で1枚ドロ」

「ドロ、バイケンをマナへ、10マナ・・・やっと出せる、古代楽園モアイランドを召喚」(マナ10)

「あつー」

雪の出したクリーチャーに生徒会1年は思わず、しまった!と声を出す。それもそのはず、何を隠そうこのモアイランドというクリーチャーの効果は――

「モアイランドの効果により、相手は呪文の発動とD2フィールドの展開が出来なくなります。ターンエンド」

そう、呪文禁止である。ランデスは勿論除去も呪文に頼りがちな生徒会1年のデッキからしたら天敵である。おまけに相手のバトルゾーンには覚醒したくとうずうずしているキルの姿がある。

「ドロ・・・焦土をマナへ、ターンエンド時にダイス・ベガスの効果で1枚ドロします・・・」(マナ15)

「ターン開始時、モアイランドのパワーは18000。よってキルの覚醒条件を達成、覚醒しセツダンになります。ドロ、カーネルをマナへ、5マナで呪文、フェアリー・ホールを唱えます。効果でマナをチャージ。超次元ゾーンから勝利のガイアール・カイザーをバトルゾーンへ、行きます、モアイランドでシールドをブレイク」(マナ12)

「受けます。シールドチェック・・・無いです」

「ガイアール・カイザーでダイレクトアタック」

「ニンジャ・ストライク7でサイゾウミストをバトルゾーンへ。効果

で自分の墓地のカードを全て山札に加え、シャッフルし、山札の上から1枚を新しいシールドとして置きます。攻撃をシールドで受けま  
す・・・無いです」

「セツダンで・・・ダイレクトアタック」

「・・・受けます。ありがとうございます」

「ありがとうございますました・・・ふう・・・」

緊張から解放され、雪はゲームが終わると同時に息を吐き出す。モ  
アイランドの攻撃が無事通り安心したからだろう。

あの時、雪には一つだけ心配があった。それはシノビである。幸い  
にも今回はサイゾウミストだけであったが、もし佐助の超人とバイケ  
ンもあつたら、モアイを戻されて負けていただろう。

「すみません、一つ質問良いですか？モアイはいつから握っていたん  
ですか・・・？」

「フェアリー・ホールでキルを2体出した時だったと思う。本当はプ  
チョヘンザの革命チェンジ用にとっておこうと思っていたんだけど、  
ドロローでモアイを引いてね。後はさっきの盤面を作れるようにとキ  
ルに注意が行くようにバイケンを出したりしたって所かな？」

「成る程、そこまで考えて・・・勉強になりました。ありがとうございます」

そう言う生徒会1年はデッキを片付け、バッグを持ってソファか  
ら立ち上がり、自分の教室へと戻って行った。

「ゆっきー、お疲れ様。・・・どうだった？デュエマは？」

「楽しかったですよ。それに、あの子強いんですね。ランダスがこの  
デッキの苦手に分類されるのもありますけど、プレイングが特に：。  
あれで4c以上は扱うのが苦手だなんて信じられないです」

「うん、私もそう思う。彼はこの学校の1年の中で1番強くて、この前  
の高校生大学生限定の世界大会出場を決める日本代表戦に選ばれた  
こともあるんだ。まあ、負けちゃったみたいだけどね・・・」  
「えっ、それ、本当ですか・・・？」

日本代表とはつまりそれだけ腕の立つプレイヤーだったというこ  
とだろう。雪はそんな人物を倒したことにとても驚くが、それ以上に

勝てたことに嬉しくなる。

「本当だよ。でも、良かった。デュエマが嫌いになったんじゃないか  
と思ってただけど・・・楽しそうで安心した」

「・・・？俺がデュエマを嫌いになんてならないと思いますよ？  
これからもずっと」

「そっか・・・そっかあゝ・・・うん、そうだね。心配な  
んかする必要なかったね」

凧は雪の言葉を聞き、心の底から安心した。デュエマを嫌いになっ  
ている、なるんじゃないかという不安は、今度こそ完全に消え去った。  
「・・・あ、もうそろそろで部活の休憩時間終わっちゃう。ごめ  
ん、もう行くね！」

「あ、はい。お疲れ様です」

「じゃあね、家でまた会おう！」

バイバイと手を振り、生徒会室から出て行く凧の姿を見届け、雪は  
無言でソファに座りながら某新世紀アニメの司令官のポーズを取る。

——そうだよな、あの人と同じ空間で生活するんだよな・・・  
俺・・・ヤバイヤバイヤバイヤバイ。どうしよう助けて竹宮  
さん。女の子と同居とかどうしたら良いかわからない！わからない  
よっ！

白菊 雪。ここにきて人生で一番のパニックとの戦いが始ま  
る・・・

## A D A M ってこんな気持ちだったのかな

部活動の休憩時間が終わり、雪のリハビリデュエマの舞台となった生徒会室は雪以外に誰も居なくなってしまった。対戦が終わり、雪は凧とのちよつとしたこれからの問題に頭を抱えていたが、考えるのを止める、いや、諦めることで一時的に落ち着きを取り戻した。

「そうだ、考えてみる。こんなこと、現実には起きることなんてそうそう無い。奇跡なんだから寧ろ喜ぶべきだ」

寧ろポジティブに考えてみれば綺麗な人と毎日同じ空間で生活し、身近に感じられるのだ。一生彼女が出来ない筈の身からしたら美味しい状況なのだ。ちよつと理性との戦いがちよくちよくあるかもしれないだろうが。

「いや、やはり精神力がやられるのは問題なのではないだろうか？正直、もしジューつと見つめられたりしたら保たないだろう。絶対に、理性が、保たないだろう。」

そうだ、よく考えてみる、同じ屋根の下で同い年の高校生の異性が生活しているんだぞ？圧倒的犯罪臭しかないじゃないか。それも同じ高校だ。必ずそんなことがバレたら噂される。主に中学生、高校生が好きそうなそういう方向性の噂が。

「恥ずかしい・・・恥ずかし過ぎる・・・というかそんなことになつたら凄く気まずいし柴崎さんに迷惑だろうし・・・」

柴崎さんには伊原君という彼氏がいる筈なのだ、確証はないが、彼氏持ちの筈だ。綺麗な人で二人で写真を撮っていたのだから間違いない・・・多分。

そこにもし、自分が柴崎さんと同居しています。などと知れたら・・・別れてしまうかもしれない。それは悲し過ぎる。罪悪感と責任感で俺の心がボロボロになってしまいそうだ。それはなんと少しでも避けなければならぬ。

「考えれば考える程に問題が出て来るな・・・もうこれは事前に柴崎さんに伊原君に良く説明して貰うしかないのでは・・・？でもそれで伊原君から俺だけでなく柴崎さんまでも嫌われた

ら……」

と、パニックに陥った思考をしていると生徒が誰も居ない生徒会室の扉がノックされる。今は部活の休憩時間が終わったばかりだが、誰だろうか？生徒会室でサボりなど大胆なことをする奴は流石に居ないだろうが……」

「ごめん、お待たせ。あ、デュエマ出来た？」

「あ、舞さんでしたか……はい、一応は出来ましたけど……」  
「そっか、それは良かった。そうだ、これから校長の所に行くんだけど、もし暇なら図書室とかに行ってみたら？」

「図書室？何故だろうか？」

「此処の図書室は色々な物についての資料が沢山置いてあるから、記憶喪失なんですよ？何か思い出せるかもしれないと思ってね」

「ああ、それは良いですね。実は病院でもそこまで沢山のことを調べられることが無かったので……」

病院で知ることが出来たのも最近の出来事くらいだ。大まかな世界の歴史やらについてはまだ殆ど知らない。

「そっか、じゃあ校長と話してるから何かあったら私の所に来て良いからね」

「分かりました。それではまた」

バイバイ、と手を振りながら雪から離れて行く舞に雪は手を振りながら見送ると、すぐに図書室へと向かおうと生徒会室の近くに貼ってあった校内地図を確認し、生徒会室を後にする。

「……びつくりしたあ……、今の聞かれてなかったかな……？」

独り言が聞かれていなかったかを心配しながら階段を上り、2階の廊下を少し歩くと目的地である図書室が目に入った。扉を開け、周りを見回してみたが、生徒は居ないらしい。

「失礼しまーす……。えー、何から調べてみようか……」

恐る恐る本棚を見に行き、何を調べるかを考える。今一番気になることは何だろうか……。？沢山あるが、どれもどこから調べて良いのか分からない。

「うーん、手当たり次第に読んでみるかな……?」

あまりに面倒なのでしたくはなかったのだが、ここで考えていても仕方がない。時間を無駄にするだけだ。

取り敢えず雪は目の前に置いてあったカードゲームの歴史という辞書のように分厚い本を手にとった。

表紙を捲ると、目次の下に多くの項目のページ数が書かれている。雪はその中の「2. カードゲームのスポーツ化」という項目に惹かれ、そのページを開く。

「『カードゲームがスポーツとして認定されるに至った理由の中で、最も貢献したのがAR、VR技術。次に、カードゲームを運営する会社の統合であるとされている』か……何か凄い世界だな」

纏めると、ARやVRといった技術が進歩し、それを使ったカードゲームの売上が、当時凄まじいものであったという。そして、カードゲームを運営する数々の会社が統合し、ARやVRの技術力はその頃のどの会社より優れていたという。そこで更に一部のカードゲームが売上ともっとも大きなTCGの試合という点においてギネス世界記録を更新した。これにより世界中でカードゲームが話題となり、一大ブームとなった。そこからはその絶大な人気とそれぞれのカードゲームが持つオリジナリティからテレビやニュースで様々なカードゲームの世界大会の様子などが報道され、カードゲームの扱いはARやVRを使う前とは大きく変わり、やがては世界中で新たにスポーツという枠組で登録されたという。

「でも良くスポーツに登録出来たな……こう、今まで居た世界を知っているとこっちの世界の現実がどれだけの理由があつても信じられないな……」

雪は次の項目へと移る為、次のページを捲る。タイトルは「3. カードゲームのスポーツ化による影響」。タイトルだけでも興味が湧いて来る。雪は少しワクワクしながらページに目を通した。

「『カードゲームがスポーツ化し、世界中の報道機関で大会についての報道がされた。中でも、『遊戯王』と『デュエル・マスターズ』は良くメディアに取り上げられていた。元から人気であったカードゲーム

でもあった為、このスポーツ化に伴い、カードゲームという全体を代表するカードゲームになっていた』・・・凄いなこの2タイトル。こっちでもこの2つが特に人気なのか」

静かな空間で、雪は次のページを捲る。最初は不思議な世界だと思っていたが、その認識は違ったのだと考えを改める。この世界はこの世界なりのちゃんとした歴史の元に成り立っているのだ、と。

「しかし、カードゲームがスポーツ化したことによる問題も発生した。本書ではその内の3つを書する。1つは一部のカードの需要が高まることで、カードの急激な高騰化が相次いで発生した。これは過去に登場したカードであればある程に発生しやすくなっており、生産を終了されたパックにしか入っていなかったカード、特にスーパーレアやベリーレアは非常に高額であることが殆どである』あ、もしかして《マーキュリー》の値段が半端なく高かったのってそういうことなのか・・・？生産終了されたんだっけあのパック？そこは知らないけど・・・」

《マーキュリー》はこの世界で25万円とかなりの価格であったが、どうやらこの問題によるものらしい。後で知ったことだが、この問題については再録という形で対処しているらしいが、未だに全てのカードを再録出来ている訳ではないという。

「・・・だとしたら俺が組んだ昔のカードでスーパーレアやベリーレアが入りまくったネタデッキはちよつと盗まれるの怖いし使えないな・・・。まあ、仕方ないか・・・」

他にもそんな昔の、生産終了されてそうなカード使ったデッキあったかな？と考えるが、割と再録されているものが多い。ビマナは特に問題無さそうでひとまず安心した。

雪は次の問題を確認する。

「2つ目の問題は、スポーツ化に伴うエンターテイメント性の要求である。カードゲームとは卓上であることを前提に考えられている為、他のスポーツと比べても動きが無く、近距離で試合をする為、大声を出しての対戦はしにくい。この対策として『バトルスピリッツ』を運営するVANDAIが画期的なVRを使った対戦を提案した。それ

は、盤面がお互いに見えない程離れた場所でのVRで立体化したカードのモンスターなどを使ったものである。この、プレイヤーが動けないのであればカードを動かせば良い。という考えは成功し、今も尚、カードゲームの対戦方法として愛用されている。尚、相手プレイヤーの盤面はカメラを使って確認することが出来るようになってきている』か……成る程、エンターテイメント性も無ければならない訳か」

次の問題を読む為、ページを捲る。ワクワクしながら本を読む雪の姿は、端から見れば完全に好きな玩具を手に喜んでいる子供そのものだった。

『3つ目、カードゲーム関連の犯罪。カードゲームがスポーツ化したことでカードを印刷し、実際の大会で使用するといった犯罪が多発した。これは未だに解決していない問題である。特に、Zプロジェクトのような大きな事件を引き起こした原因である。とカードゲームのスポーツ化を取り消そうとする運動もあった』……Zプロジェクトっていうのが何かは分からないけど、犯罪か……。他のスポーツでも麻薬を使ったとかで捕まった選手とか居たから、ある程度は予測してたけど……」

少し残念な話であるのに変わりはない。雪は少し溜め息をつく。自分には関係の無いことではあるが、馬鹿なことをする者が居るんだな。と呆れてしまう。

「でも確かに、ここまで大きくならなければカードゲームはもう少し平和だっただろうな……」

雪もそこには思う所があった。ただただ喜べることばかりではない。何であろうと代償というものは存在するのだ。

「カードゲームが悪い印象を持たれれば、その影響はスポーツ化した政府にさえ及ぶ。そうしたらどんな対処をされるか分かったもんじゃない。下手すれば、我が国はカードゲーム禁止です。なんてこともあるかもしれないなあ……。勘弁して欲しいよ」

雪は本を棚に戻し、他に何か興味が湧くような本が無いか探す。

【ゼニス大戦】【ファイオナの森の惨劇】【暗黒皇の多すぎる大罪】などな

ど、デュエマの背景ストーリーをモチーフにしたラノベや、「三邪神ちゃん生け贄ドロップ」【不足コスト確保】【飴色に炒めた玉葱はルーにコクを与える】などの別カードゲームの小説や料理本なども置いてある。

「読んでみたいけど、今は調べるのを優先しないとな．．．あ、これなんかどうだろ」

そういつて次に手に取った本のタイトルは「VR技術の可能性」。これも何かの役に立つかもしれない。雪はその本を読もうと表紙を開こうとした。が、それは聞き覚えのある声により妨害される。

「あ、雪君、そろそろ帰るんだけど、まだ本読む？」

「あ、舞さん。いえ、もう大丈夫です」

入り口で舞さんが声を掛け、それを聞いた雪は本を棚へ戻し、舞さんの元へ行こうと図書室を出る。また今度、学校に登校することになったら読むことにした。

「どうだった？何か手掛かりとかあった？」

「いえ．．．ですが、カードゲームの歴史をある程度学ぶことが出来、有意義な時間でした」

なら良かった。と舞さんは微笑むと、一つ質問しても良い？と聞いて来る。何だろうか？

「生徒会室で凧と憐君がどーだか言ってた気がするんだけど．．．」  
「!?あ、あー、それはアレですね。柴崎さんと伊原君、どっちがデュエマ強いんだろうなって．．．あはは」

焦った。心臓止まるかと思った。

完全に油断していた雪は、舞に生徒会室での独り言を聞かれていたのでは？と思っただが、どうやら断片的であつたらしい。助かった。

「あー、確かにね。凧は私の方が強いとか言ってたけど．．．でも、憐君も自分の方が強いとか言ってたような．．．」

「気になりますよねー．．．」

にしても、やはりそういう御関係なのか．．．舞さんに聞いてみるべきなのか．．．うーん．．．

「だよねー！私も気になるんだけど、仕事とかで憐君とは会わないし

「……実際に戦ったら、どっちが強いんだろーね？」

「気になりますよねー……」

いや、もしかしたら親には内緒にしているのかもしれない……：そうだった場合、俺がここで聞いてしまつては柴崎さんや伊原君が疑われ、苦勞するだけだ……やはり、舞さんに聞くのは止しておこう。

「あ、じゃあ今度風に言つて戦つてもらおうか！家に呼んでさーあ、そういうえば隣君つて何のデツキ使うんだろ？」

「気になりますよねー……え？」

「……ん？今、なんと……？」

「楽しみだなあ……じゃあ、今度隣君来る時は夜一緒にバーベキューとか良いかもー」

「えつと、舞さん？あの、何を……？」

「あ、お泊まり会とか良いかもー」

「はい!？」

いきなり、お泊まり会だと……!？」

待て待て落ち着け。そもそも俺は伊原君とはまだ面識が無いんだぞ？それなのにお泊まり会とか、

『あ、えつと、はじめまして……』

『あー、はい、こちらこそ……あはは……』

なんて気まずい空気になるに決まつている。というか、柴崎さんと伊原君が二人きりならまだ良いかもしれないが、俺はどう考えても要らないだろ!?!良い雰囲気にしてやってよ!?!こんなの、ギャルゲーで好きな子と2人で遊ぶはずが、気付いたらモブが何人かついて着てるようなもんだろ！俺邪魔過ぎるだろおおお！

「あ、雪君の紹介もしないとね。隣君きつと喜ぶよー！生徒会でも友人でも男子少ないつて言つてたらしいから」

「嘘……だろ。この陰キャの極みのような俺に彼女持ち（推定）で陽キャ（推定）でスクールルカースト上位（推定）であろう伊原君にコミュニケーションを取れと……？」

「あー、楽しみだなあー！」

「・・・そうですね・・・はは」

舞さん、俺が、一体何をしたというんだ・・・

## レッツ！焼肉パーティー

部活動が終わり外が暗くなり始めた頃、生徒が校内から立ち去る中、生徒会室にはまだ灯りが点いていた。

「え、何でつすか？」

「私も知らない……」

部活動が終わり、生徒会として見回りをし終わった風は、生徒会だけでなく部活仲間でもある隣にたった今送られて来た舞からのメッセージを頭を抱えながら伝える。

『バーベキューしようと思うから隣君誘って来て。隣君のお母さんには許可貰ってるから、お泊まり会でもしないか聞いて？』

バーベキューしようと思うから誘うのもどうかと思うが、バーベキューついでお泊まり会とはどういう要件だろうか？ 全く関連性が見えない。それに、雪も隣もお互い初対面の筈だ。それなのにいきなりお泊まり会を開こうなどと、我が親ながら阿呆なのでは無いだろうか？

「一応私から断つとくよ。お母さん何考えてんだろ？ もうこっちは高校生だって……」

「小学生ならまだしも高校生つすからねえ……。ま、俺は良いつすけどね」

「え、」

ちよつと何言ってるかわからない。今の流れは完全に高校生だから遠慮する流れだったよね……？

「えつと、理由は？」

「だって楽しそうじゃないすか、お泊まり会」

「うん？」

どうしよう、隣に着いて行けない。

「良いじゃないすかお泊まり会、俺だってそういうのしてみたいんつすよ。こう見えて俺、友人の家に泊まるとかしたこと無かったんで」

「隣……？ いや、あの、隣さん？」

「ん？ 何すか？」

まさか、まさかとは思うが

「それだけの理由で高校生にもなる女子の家に泊まるつもりなの……?」

「え、そうっすけど。駄目すか?」

「普通駄目でしょっ!? 何考えてんの!? 馬鹿じゃないの!」

憐には常識というものが無いのだろうか? 今まで生徒会だけでなく部活などでも話してきたが、ここまで自分の常識が通用しないとは思わなかった。憐は確かに少し元気な子供っぽい一面もある。だが、ここまでのものだとは思わなかった……。

「ええー。でも会長のお母さんはもう家の母親に連絡取って許可貰っちゃってるみたいだし、行かないとお互いに親から小言言われたりしないっすかね?」

「それは……あー、でもお母さんならなあ……。うーん、仕方ないかあ……」

凧から許可を貰い思わずガッツポーズを取る憐。先程まで渋々といった顔をしていた凧も、憐の子供のような仕草に顔が綻ぶ。

「あ、そうだ。お母さんが、後デュエマのデッキ持って来てー、だって。何でだろ? 何でデュエマ?」

「まあ遊び用に一応バッグに入れて持って行くつもりだったっすけど、何でっすかね?」

まあ、家で対戦するのに変わりはないか。とお互いにそれ以上は深く考えなかった。舞が言わずとも、凧と憐は対戦をしていたらしい。デュエマプレイヤーだからというより、カードゲームの性というものののだろうか。

「じゃあ今日の8時についてことで。家の場所、RAINで地図のやつ送っておいたから」

「あ、ありがとうございます。んじゃ7時っすね。了解っす」

お疲れ様でしたと、手を振りながら、憐は生徒会室から出て行く。凧の家と憐の家はまあまあ近い位置にある。時計を見れば針は6時を指していた。

「よし、私も帰るか」

凧は舞に、憐が泊まりに来ることをRAINで伝え、バッグを背負い、電気を消して部屋から出る。気付けばいつもは賑やかな学校も、人が居なくなりとても静かになっていた。

「いつも帰りは一人なんだよねえ……寂しいもんだなあ私の高校生活」

そう口にしながら校舎から出た。

「ただいまあゝ」

玄関の扉が開き、凧は暖かい室内、母親の居るであろう部屋へと移動する。

「おかえりー、バーベキューの準備は終わってるからね」

「はい。……お母さん凄いうきうきしてるなあ……」

扉を開け、中を覗くと、庭へ出ることに出来る部屋には案の定自分の母親である柴崎 舞の姿があった。

と、そこで凧はふと気付く。玄関のすぐ側にあるいつもは仕事で帰って来ない父の物置として使用されていた部屋に電気が点いていたような気がする。そういえば、今日から一人家族が増えたんだっ

た。  
コンコンコン、と軽く扉をノックする。少しして中から予想通りの人物が顔を覗かせる。

「あ、柴崎さん……えっと、御仕事お疲れ様です。その、迷惑をお掛けするとは思いますが、宜しく願います……」

「あー、うん……。宜しくね、ゆつきー」

雪のあまりに畏まった言葉使いに、凧は思わず苦笑いしてしまう。凧からしたら見知った存在である雪だが、雪からすれば凧は未だ良く知らない人という認識なのだから仕方がない。だが、凧からすれば幼なじみにこれからの生活ですつと敬語で畏まった様子で会話をされるのはどうにも歯痒い。凧はそれとなく雪に注意をすることにした。「そんなに畏まらなくて良いよ。私もあんまり堅苦しいの慣れてないから……」。試しに、柴崎さんじゃなくて、凧って呼んでみるとか……」

「……あのっ、凧さんじゃ駄目でしょうか……？ その、まだ呼び捨てにして話すのはどうにも抵抗があつて……」

「え!? あ、うん！ そうだよね!? ごめんね、無理言っちゃつて。じゃあ！」

即座に要望を取り消し、無理しないで好きに呼んで良いからねと言つて二階にある自分の部屋へと逃げるように階段を走つて行く。雪は物凄い勢いで目の前から消えていった凧に呆然とし、しばらくしてハツと我に返る。

「あ、柴s……凧さん……。行っちゃつた」

何か悪かつたかなと思ひながらも、雪は自分の新しい部屋の床に座り、カードを広げる。

凧が帰つて来る前、バーベキューの準備の手伝いをしようと思つていた雪は舞から一つの依頼を受けていた。

『楽しく盛り上がるような雰囲気になりそうなデュエマのデッキ組んでみて。どんなものでも良いから』

要はサプライズ。ネタデッキのようなゲームの勝ち負けでなく楽しむことを中心に考えられたデッキを組んで欲しいということだ。所持していたデッキの中には勿論要望に応えられそうなものがあったが、入っているカードがこの世界で高額なものばかりであった為、使用するのを控えた。その結果、新しく組まなくてはならなくなつた。

「困つたな……。ネタデッキとなるとちよつと難しいぞ……」

ネタデツキを組もうにも、ネタデツキに必要なカードを持っていなかったりすることがある。その点を踏まえるとしても組めるデツキやコンボのようなものが思い付かない。

「聞いてみるか……」

雪はデツキ工房となった自分の部屋から出て、舞の居る部屋へと足を運ぶ。

「あ、舞さん。スミマセン、余っているデュエマのカードとかがってありますか？」

「あー、あるよー。ちよつと待つてね……」

舞はそう言うとう天井にあるフックに先端が曲がっている長い鉄の棒を引っ掛け、下に引っ張る。すると切り込みが入っていた天井の一部が開き、屋根裏部屋に続く階段が現れる。

「どこだったかなあ……確かここら辺に……あつた。よいしよつ、と」

舞は屋根裏部屋へ入るとガサゴソとダンボールの山の中を探し、目当ての物を見つけるとそれを持って屋根裏部屋から階段を使い降りて来る。ドスン、と音を立てて床に置かれたダンボールからは、大量のカードが入っていることが伺える。

「ここに入っているのは私が前に使ってたカードだから好きに使って良いうよ。もうカードゲームすることなんて無いしね」

「ありがとうございます！早速使わせて貰います」

雪はカードの入ったダンボールごと自室へと持って行き、中のカードを床一面に広げる。そういえば、小さい頃はこうしてカードを床にバラ撒いて、片付けなさいと親に怒られていたな、と思い出す。

「さて、デツキを組むか」

約束の時間、ピンポンと人が来たことを伝える音が柴崎家に住む全員の耳に入る。

「お邪魔しまーす……」

「あ、憐君、来てくれてありがとね。バーベキュー、楽しんでって」  
言われなくとも楽しめますよー、と応え、憐は上から下りてきた風呂の誘導に沿って荷物を持ちながら庭へと向かう。

「そこに座ってて、隣のバーベキューコンロで焼いてるから、食べたかったら自分で取ってね」

「了解つす。何か手伝うことありますか？」

「憐は客なんだから手伝わなくて良いよ。それに準備も終わって、もう具材を焼くだけだからね」

そう言っている間に舞が庭に飲み物が入ったクーラーボックスを持ってくる。その後ろには氷水と赤ワインの入ったバケツを持った雪の姿があった。

「おまたせ。さ、食べよつか！」

「あれ？ 会長って弟居たんすか？」

「弟じゃないよ、今日から退院して此処に住むことになった同い年の白菊 雪君。ほら、前に話した4c以上使える知り合い」  
「？」

何の話をされていたのか分からない雪とは違い、ああー、と思い出したような反応の憐。

「君が雪君つすね、じゃあ……雪ちゃんと呼ぶか」

「スミマセン、僕男なんですけど。それじゃあ女みたいじゃないですか？」

「じゃあ白雪とか？」

「もつと駄目です」

勘違いされそうな仇名だと抗議するが、細かいことは気にしないっ！、と言われ押し負ける。それにしても中々に、というよりかなりフレンドリーだ。会う前はどう接触すれば良いものかと考えていたが、いつの間にか普通に話せている。これが陽キャの持つコミュニケーション力というものなのだろうか……。

まあ何にせよ、取り敢えずはこの御馳走を頂くとしよう。

「頂きまーす」

「そうだ、雪ちゃんはどんなデッキ使うんすか？」

「色々あるけど、主に多色デッキですかね。3cと5cが多い感じですよ」

「良く使う文明とカードは？」

「自然、《フェアリー・ライフ》です」

「好きなカードは？」

「《奇跡の覚醒者 ファイナル・ストームXX NEX》」

「嫌いなカードは？」

「《音感の精霊龍エメラルダー》。もしくは《時の秘術師ミラクルスター》」

隣の投げかける質問に淡々と答えながらも、雪はコンロから焼けた肉や野菜を皿に取る。因みに雪の皿に乗っている具材の割合は野菜が9割肉1割である。すぐ隣で何を取ろうかと悩んでいた風もこれには驚きである。

「成る程なあ…。ドラゴンとか好きだったりするんすか？ 《ファイナル・ストーム》が好きで5cも使うとなると、5c龍とか使ってたリ？」

「いや、使っていない。5c龍のパーツは何枚かあるけれど、組むにはまだ足り無いのが現状かな」

出会ってたったの数分しか経っていない。だが、不思議な感じがするのだ。カリスマのようでそうではない。もっと柔らかい、そう、小さな子供の頃、無邪気に誰とでも楽しく遊んでいた時のような、あの感じがするのだ。

「5c龍……いつか見てみたいっすね」

「憐はドラゴンに限らず花形種族が好きだもんね〜」

「へ〜、憐君はドラゴン好きなのね〜。凧はエンジェル・コマンドとかが好きだったよね?」

成る程、凧さんはエンジェル・コマンドが好きなのか……。「まあ、俺はデーモン・コマンドとか特に好きっすけどね。例えばバロム系とか」

「《バロム》は人気だよね〜。今年の正月にあったクリーチャー人気投票で確か《ドルバロム》が6位だったっけ?」

憐の好きなカードである《バロム》はこの世界でも人気らしい。雪も好きなカードの1枚である為、凧の言った人気投票で上位に食い込めていたというのは嬉しく感じた。

「あ、そっか。折角デュエマするなら《バロム》使うのも良いっすね!」

「あ、憐が《バロム》なら私は白騎士使おっかな〜」

「白騎士と《バロム》……見応えがありそうな組み合わせですね」

じゃあ、バーベキューが終わったら3人で大会開こつか!という凧の発言に雪と憐は賛成し、それぞれのデュエマ談議で盛り上がる。

「デュエマの絶望する瞬間って個人的にどれですか?」

「私はアレ、《団長》と《醤油》が並んだ時」

「俺は1ターン目に肉汁ブランドされた時ですかね」

「私の時代は何だったかな〜? あ、メルゲループ……だったかな?

あのずっとドロ〜して来るの嫌いだっただなあ〜」

「二あつたなあ〜メルゲループ」

それぞれが自分の体験や最近の話題などで会話を弾ませる。もしかしたら付き合っているのでは? 邪魔に思われるのでは? と思っていた雪も、いつの間にか凧以上に憐と仲良くなっている。

「俺はアレっすね、《ジョラゴン》。アレ出たら大抵そのターン中に終わるんすよね〜」

「大体出たら、攻撃、《マンハッタン》、《ガヨウ神》、《オツケーBro s.》、アンタツプ。の動きですからね〜」

「ホントそれっすよ。最近はJチェンジまで出て来て、どこまで強く

なるんだか……」

「頭可笑しいですからね。強すぎる」

憐の愚痴に共感していると、ジーっと凧が自分と憐を見ているのに気付く。

「どうかしたんすか会長？」

「ん？ いや、何か憐の方がゆっきーと仲良さそうだなーと思って」

此処まで雪が凧と話した回数は数える程なのに対して、今日1日、それも約1時間程で雪は憐と何回話したことだろうか。雪と改めて仲良くなるうとしていいる凧からすれば、一瞬で仲良くなってしまうた憐が羨ましく感じる。

憐はそんな羨ましがる凧を見て、面白そうだと思ひ少しからかう。

「あ、もしかして会長嫉妬つすか？ 俺に大切な雪ちゃんが盗られちゃうくみたいな」

「憐、そこに土下座に向いてそんなコンロがあるんだけど——」

「スミマセンでした」

セーフ。後少して憐が具材になる所であった。それにしてもこの会長、煽り耐性が少し低い。

「まだまだ肉はあるからね〜！ やっぱり夜は焼き肉つしょ！」

舞の置いた肉はコンロの上でジュウウウという音を立て、焼けた肉の臭いが雪や凧、憐の食欲をそそる。

「やっぱり皆で食べると美味しいっすね！」

「だね、あ、凧さん胡椒取って貰える？」

「はーい」

舞の企画したお泊まり会は、どうやら上手くいきそうだ。

## ネタデツキ・デスマツチ

夏の夜は涼しい。朝に感じる暑さと比べたら、冗談だろうか？と聞きたくなる程だ。庭からは虫の鳴き声が自分の居る部屋の中にまで聞こえて来る。

ふと、窓を見る。綺麗な月が雲の中から覗いているのが見えた。なんて美しいのだろうか……。自分の元居た世界と違う世界でも、この月の美しさはどうやら変わらないらしい。

「お〜い、ゆつきー？何で外見てるの〜？」

ああ、だがやはり元居た世界の夜はもつと綺麗なものだった気もする。美しい月や輝く星々があるのに変わりはないが、何故か偽物のような感覚がする。一種の懐古主義というものだろうか？新しい世界に居ても、前の世界の方が良かったという点を、そこまで自分の世界に愛着があった訳ではないが探してしまうのだ。

……。そういえば、こういつた懐古主義らしき意見を主張すれば、周りから老害老害と言われた人達が、ネット上やテレビ番組にもかなり居たんだっけ。

「ゆつきー？ゆつきーのターンだよ？お〜い」

「さて、何故このようなことになっていたかというと、時は少し遡る……。御馳走様でした」

「二」御馳走様でした「二」

具材もなくなり、バーベキューを終えた雪と凧、憐と舞はそれぞれ

の行動を取った。雪は作成したばかりのネタデッキの一人回し。風は風呂。憐はネットでカードの情報学習。舞は溜まっていた韓流ドラマを一気見するなど、見事にバラバラだった。

勿論デュエマの大会をしよう。と企画したことは忘れていない。現に雪はネタデッキを一人で回しているのだ。雪と憐がそれぞれ風呂から出た今、最後に風が風呂から上がった時こそ、開戦の狼煙がある。

雪がネタデッキを回している間に、憐はネット上から様々なデッキタイプとその動きの特徴を学習していた。過去のデッキタイプから現在のデッキタイプまで、幅広く調べていた。

突然だが、カードゲームの環境デッキというものはどうやって出来るのか考えたことは無いだろうか？憐はその研究をデュエマを題材に考えていた。結果、憐が出した答えはアドバンテージと封殺力、カード間のシナジーが組み合わさることによって出来るというものだ。

アドバンテージというものは、手札とマナなどが分かりやすい例として挙げられる。手札は可能性、マナは可能性の実現に必要なものがある。勿論、墓地などもあるが、これこそがデュエマの基本的なアドバンテージだ。それをどれだけ稼ぐかによって、自分のしたいことがスムーズに出来るかが変わってくる。対戦でスムーズに動くことが出来るというのは、勝敗に大きく関わってくるからだ。

次に封殺力。これは相手の妨害に当たる動きだ。自分がどれだけ順調な動きをしていたとしても、相手の妨害があれば思った通りには動き辛くなる。妨害をするということは、相手の動きを邪魔する他に、場をコントロールし、自分の妨害をされないようにする行為でもある。例えるならば、事前にハンデスをしておけば自分がハンデスをされにくくなるようなものだ。

そして最後にカード間のシナジー。これが案外難しい。実際にカードを見ているだけでは、どのカードとの相性が良いのか掴み辛いものもある。前回雪の使っていたデッキを使い、考えてみよう。

まず、《超次元 フェアリー・ホール》はマナ加速効果を持ちながら、マナを回収出来る《タイタンの大地 ジオ・ザ・マン》が出せる上に

アンタップキラーである《勝利のガイアール・カイザー》を出すことが出来る。

そしてマナの数によって大きな制圧力を発揮しつつ全体除去が出来る《百族の長 プチヨヘンザ》はスピードアタッカーのアンタップキラーであり革命チエンジ元となる《勝利のガイアール・カイザー》と相性が良い。ビマナデツキはマナを加速し大型クリーチャーを出すことで制圧するデツキだ。よって、マナは後半かなり溜まる。《百族の長 プチヨヘンザ》の制圧力はかなりのものになるだろう。

この時点で既に《超次元 フェアリー・ホール》はこのデツキにおいて1枚に出来る仕事の量が多いカードとなる。これがデュエマでいうカードを活かす行為である。

このようにカード1枚にどれだけの意味合いを持たせられるか、どれだけの活躍が期待出来るのか。そのカードを活かすことの出来るデツキとはどのようなデツキだ？そう考えてデツキを組む。環境や大きな大会の優勝デツキを見れば、その点についての学習はかなり進む。最初は見様見真似から。そのまま使って確認する。どのような動きが強いといえるのか分かったら、自分の考えで改造する。そして動かし、また改造する。これを繰り返すことにより、自分の手になじむ手足のように動かすことの出来るデツキが完成する。

「まあ、そう分かっているけど、組みにくいんですけどね……」  
時計を見れば、既に画面の前に座ってから1時間が経過していた。そろそろ風も上がっている頃だろうとPCの電源を切り、開催場所である風の部屋へと移動する。

使用するデツキは勿論《バロム》だ。バーベキューで事前にそう宣言したが、その情報を元に雪がどんなデツキを作るのかが問題である。

「会長はガチのデツキではなく白騎士デツキという情報があるけど、雪ちゃんは何もないっすからね……。速攻だけは勘弁して欲しいっすけど」

《バロム》は大型クリーチャー故にデツキがどうしてもスロースタートとなってしまふ。そこをどう解決するかが《バロム》デツキの問題

点だった。故に、マナを加速するタイプのデツキとなると速攻タイプのデツキに弱くなってしまふ。対策をしようにも、もうデツキにそれを割ける枠がない。

「まあ、祈った所でどうにもならないっすよね」

憐はそう呟きながら、自分のデツキを片手に風の部屋へと足を進める。憐は雪のデツキを心配しているが、1回戦目は雪と風の試合である為、両方のデツキの動きを見ることが出来る。そこで何に注意してプレイすべきか考えれば良いだろう。

「あ、会長も雪ちゃんももう準備出来てるみたいっすね」

「うん、呼ぼうと思ったんだけど憐も来たし、始めよっか」

「じゃあ、先に僕と風さんの試合ですね」

扉を開けると、風呂上がりでまだ少し髪が濡れている風とデツキを片手に持った雪の姿が見えた。もう大会の準備は出来ているらしい。

「よし、準備完了。これ超次元ね」

「あ、超次元です」

お互いの超次元を確認する。

風の超次元には《チャクラ》や《ギャラクシー》、《プリン》や《シユヴァル》などを始めとする光文明が多く入っていた。

対して、雪の超次元は勝利セットと《ラストストーム》

、《デビルディアボロスZ》に《パンツァー》といった有名なサイキック・クリーチャーが多く入っていた。

「そういうえば、ゆつきーからしたら私とのデュエマって始めてだよね？」

「ああ、そういうえばそうでしたね。まだ生徒会の1年の子としかしてませんし」

雪のプレイングを風は知っているが、風のプレイングを雪は知らない。記憶を失う前の雪というのがこの世界で目覚める前の自分と同じ癖があったかどうかを雪は知らないが、もしあったとしたら、風はこの対戦で雪よりも有利になれるかもしれない。

最も、風が何のデツキを使用するかバレているというのはそれ以上に大きなハンデのようなもののだが。

「じゃあ、始めよっか」

「サイコロは・・・っと・・・」

お互いにサイコロを振り、出目の大きい方が先行となる。今回は雪が先行となった。

「さて、じゃあ俺は試合を傍観させてもらおうつすね」

「俺のターン、《超次元ホワイト・グリーン・ホール》をマナへ。ターンエンド」(マナ1)

「私のターン、ドロロー、《フェアリー・シャワー》をマナへ。ターンエンド」(マナ1)

《超次元ホワイト・グリーン・ホール》を見て凧は雪の得意とするビマナ系のデツキと仮定する。それにしても超次元が前回のと大きく変わっているが、何か方向性が変わったのだろうか。

「俺のターン、ドロロー、《執拗なる鎧亜の牢獄》をマナへ。ターンエンド」(マナ2)

「うわ、懐かしい。私のターン、ドロロー、《白騎士の聖霊王 HEAVEN》をマナへ。2マナで《フェアリー・ライフ》。マナをチャージして、ターンエンド」(マナ3)

「《鎧亜の牢獄》・・・？グッドスタッフかな？」

「まあ、このデツキはさつき組んだばっかなんで結構問題点が多いんですけど、それに近いですよ」

凧の白騎士も十分懐かしいものなのだが、《執拗なる鎧亜の牢獄》と比べたらかなりメジャーである。持っている文明がなかなか無い組み合わせという点と除去とハンデス、シールド焼却が出来るという点でかなり強いのだが、《執拗なる鎧亜の牢獄》を使うデツキは最近ではあまりない。そもそも、ビマナに入るようなカードではない、更にグッドスタッフに近いという時点で、凧がこの段階で雪のデツキの正体を察知するのは困難ともいえる。勿論、使ったことがあればある程度察する者もいるのだが。

「俺のターン、ドロロー、《反撃のサイレント・スパーク》をマナへ、2マナで《フェアリー・ライフ》。マナをチャージして、ターンエンド」

(マナ4)

「私のターン、ドロウ、《霧隠蒼頭龍バイケン》をマナへ、3マナで《白米男爵》。マナをチャージしてターンエンド」(マナ5)

お互いにマナを加速する。傍観者としてこの場に居る憐には未だにどちらにも互角に見えた。

「俺のターン、ドロウ、《ドンドン吸い込むナウ》をマナへ、2マナで《コートニー》召喚。3マナで《フェアリー・ミラクル》。条件達成により2マナチャージ。ターンエンド」(マナ7)

「《コートニー》と《ミラクル》ってことは多色であることが重要なデッキか・・・正体が分かってきたかも。私のターン、ドロウ」

グッドスタツフのようなデッキではあるがグッドスタツフという訳ではない。多色であることを重要視したデッキ。この時点で凧と憐は雪のデッキがどのようなタイプのどんなデッキであるか、多少検討が付いていた。それを使っている雪もバレたなあと思いつながら凧の盤面を注意深く見ている。

「《白騎士の精霊 アステイノス》をマナへ、5マナで《白騎士の精霊 アステイノス》を召喚。その効果により山札の上から4枚を表向きにする」

凧のすぐにも折れてしまいそうな細い腕が山札の上を捲る。《アステイノス》は白騎士において起点ともなる重要なクリーチャー。この効果で捲れたカードの中に雪の恐れるクリーチャーは入っていた。[《白騎士の精霊 アステイノス》《フェアリー・ライフ》《サイズウミスト》《白騎士の無限龍 ウルフエリオス》。《ウルフエリオス》を手札に加え、その他をボトムに送る。ターンエンド」(マナ6)

「《ウルフエリオス》はマズいっすね。正直、白騎士の中でも《H E A V E N》と同等かそれ以上には」

「絶対入ってる気がするんだよなあ・・・俺なら入れると思うしなあ・・・《バイケン》も居るし」

憐は《ウルフエリオス》の効果、雪は《ウルフエリオス》の存在そのものから感じる他のカードを警戒していた。雪は白騎士デッキを組んだことが無い為、実際どうなのかは分からない。だが、白騎士

だからなどではなく、単純にそのカードが出たらお終いだから警戒していた。

「俺のターン、ドロロー、マナをチャージせず、4マナで《デモンズ・ライト》、2ドロローして《アステイノス》をパワー3000する。3マナで《フェアリー・ミラクル》、2マナチャージ。ターンエンド」(マナ9)

「私のターン、ドロロー、《白騎士の聖霊王 コバルト・ウルフエリオン》をマナへ、7マナで《白騎士の無限龍 ウルフエリオス》を《アステイノス》の上に進化」

頼む頼む頼む、と《ウルフエリオス》が出た瞬間に神頼みになる雪。ネタデツキは回らなくては何の意味もない。勝ち負けなどこの際どうでも良いから動かさせてくれれば良い、と。

「《白騎士の無限龍 ウルフエリオス》で攻撃時、メテオバーンと革命チェンジ。メテオバーンの処理を優先し、山札の上から2枚を表向きに」

捲けたのは《奇石 ミクセル／ジャミング・チャフ》と《白騎士の霊騎 ラジューナ》。捲けた白騎士は優しい方だが、そうではない方が恐ろしい。雪は革命チェンジするクリーチャーとその呪文の存在に絶望する他になかった。先程まで細く美しく見えた風の腕も、今では破壊神の腕にしか見えない。

「《ラジューナ》をバトルゾーンに出し、《ジャミング・チャフ》をボトムに送る。そして、待機していた革命チェンジを処理。《ウルフエリオス》を手札に戻し、《時の革命 ミラダンテxii》をバトルゾーンに。《xii》の効果で手札から《ジャミング・チャフ》を唱えるね。効果で次の私のターンの始めまで相手の呪文を封じて1ドロロー。そして、次の相手のターン終了時まで相手のコスト7以下のクリーチャーの召喚を封じるよ」

呪文禁止、7以下召喚禁止という制限に、雪のデツキは殆ど對抗策がなくなった。それどころか、動けなくなった。

サレンダーしたいが、それだと申し訳ない微妙な雰囲気になりそうな予感もする為続行はするが、待っているのはサンドバックとなる未

来だけである。

「《x i i》でシールドを3枚ブレイク」

「受けます。チェック・・・無いです」

「ターンエンド」(マナ7)

「これ、雪ちゃんの負けっすかね」

察しの良い隣は雪が負けると予想した。

隣の予想では、雪が使った今回のデッキは超越オーケストラ。その中の多色カードを少々使い勝手の良いカードにしたデッキだと考えていた。その予想は大当たりで、雪のデッキには沢山のコスト7以下のクリーチャーや呪文が入っている。その殆どが封じられてしまった。

「俺のターン、ドロロー、あつ、ん？どうにかなるか・・・？《コートニー》をマナへ、4マナで《メメント守神宮》を展開。ターンエンド」(マナ10)

「私のターン、ドロロー」

「その時」

風のターンに入ったその時、雪は自分の場のD2フィールドを逆さまにした。

「《メメント守神宮》のDスイッチの効果を発動します」

《Dの牢閣》メメント守神宮》、光のコスト4のD2フィールド。自分のクリーチャーをブロッカーにする効果を持ち、S・トリガーでもある防御に適したカード。しかし、D2フィールドの真の力はそんなものではない。

「効果で《x i i》と《ラジューナ》をタップ」

「んー、そう易々と倒させてはくれないかあ・・・」

相手のクリーチャーの全タップ。基本的に一枚につき一度しか使えないとされるD2フィールドの持つDスイッチという能力。この《メメント守神宮》が持つ能力は、プレイヤーのドロローに反応し、任意で使用出来る《スパー・スパーク》。クリーチャーのブロッカー化と合わせ、とても厄介な効果を持っている。

今の《メメント》の使用には攻めて来られないようにするのは別

の理由もあった。

《x i i》の革命チェンジを封じる為である。

雪が前に居た世界でも良くあったもので、《x i i》と《x i i》の革命チェンジをすることで永遠と相手の7以下のクリーチャーの召喚を封じるコンボである。

「まあ、いっか」

それを封じれば勝てる可能性がある、と考え始めた雪に対し、凧は自分のドローしたカードと手札を見て不適に笑った。

## アンラツキー・雪

雪の零した勝てるかも、という言葉は、確かに凧を刺激した。凧は5枚の手札とタップされた自分のクリーチャーを確認し、入念に雪の勝てる可能性を減らすべく思考する。

凧は負けず嫌いだった。幼い頃から変わらない性格ではあるが、どうにも凧にはその自覚がないらしい。今も傍観者として2人の試合を見ている凧は、勝ち目の薄い雪を更に追い詰めようとしている凧の今の姿を見て、負けず嫌いな凧らしい。と思っっていたりするのだが。

——雪ちゃんが勝つ方法があるとしたら……絞られてくるっすね。コスト7より大きく、多色との縁があるクリーチャー辺りっすか。雪ちゃんの使っているデッキが本当に超越オーケストラであるならば、超越男の早期召喚の為に《コダマダンス・チャージャー》が入っている可能性もある。もしあるならば、そのカードをこのデッキで活かせるカードは……。

凧の脳裏にまず一枚のカードが思い浮かんだ。そのカードの存在を認知すると、自然ともう一枚のカードの存在が浮かび上がった。

「《佐助の超人》をマナへ、6マナで《白騎士の光器 ナターリア》を召喚。ターンエンド」(マナ8)

「俺のターン、ドロー」

凧のターンが終わり、雪のターンが回ってくる。凧の手札は3枚、内1枚は《ウルフェリオス》で確定。相手の攻撃を警戒しての《ナターリア》だったのだろうか。未確定2枚はマナ加速やドローなどのアドを稼ぐカードか《x i i》、もしくはシノビと見た方が良さそうだ。何にせよ、常に警戒すべきだ。封殺する《x i i》に除去の《H E A V E N》もあるのだから、マナや場を蹂躪する《天使と悪魔の墳墓》を握っている可能性も完全にはないと言える訳ではない。常に警戒を怠らないように、と雪はそこまで考え、攻撃を受け増えた手札を見る。まずは……。

「……ふう……よし。マナをチャージせず、3マナで《コダマダンス・チャージャー》。効果でシールドを1枚手札に加え

る」

隣の読み通り、雪は《コダマダンス・チャージャ》をデッキに入れていた。そして、《xii》の効果が発動されていない今、雪のデッキの切り札が今、場に現れる。

雪は手札に加わるカードを手札ではなく墓地に送る。デュエマをそこまで知らない人には意味のわからない行為に見えてしまうだろうソレは、ミスではなく雪の明確な意志の元で行われた。

かつて、漫画版デュエル・マスターズの主人公の一人、切札勝負きりふだししょうぶが使ったコンボの要となった能力の一つ。今でこそ革命チェンジなどの能力や低コストドラゴンが多く存在するが、昔は強力なドラゴンは重いコストを持ったものが多かった。そんな中で、切札 勝負は4ターン目にしてある効果を持つ呪文を使い、そのターン中にコストの重いドラゴンを一気に3体も召喚して見せた。

ストライク「S・バック。シールドから手札に加わる多色カード、《愛の無限オーケストラ》を墓地へ送り、手札から《超越男》を召喚」

S・バック。カードを自分のシールドゾーンから手札に加える時、そのカードを捨てることで効果を発動する能力。クリーチャーならば召喚され、呪文ならば唱えられる能力。《デュアルショック・ドラゴン》が代表的なカードとして上げられる。

「《超越男》の効果、ロスト・プリズム。山札の上を表向きにし、多色ならば手札へ加える。《コダマダンス・チャージャ》は多色ではない為、そのまま山札の上に」

「……来るかな?」

雪が《超越男》を召喚したことで、風は次に来るであろうカードを予測する。ここまで持ち主を待たせたのだ。そろそろ来る頃であろう、と。

「5manaで《超越男》の上に《愛の無限 オーケストラ》を進化。《オーケストラ》で《xii》を攻撃。その時、下の《超越男》を墓地へ送り、メテオバーンの効果を発動」

雪の使うこのデッキを代償するクリーチャー、《愛の無限 オーケストラ》。コストが5ではあるが5色、そして全文明を使用しなければ

ばいけない超無限進化の制約から、扱いにくい部分があるクリーチャーだ。そこまでして、何故、超越オーケストラというデッキがあるのか。その答えはこのクリーチャーの持つメテオバーンの効果である。

「山札の上から3枚を表向きにし、多色のクリーチャー、呪文を好きな枚数使うことが出来る」

これが、雪の最後の希望。雪に勝ち目があるとすれば、このクリーチャーの能力で多色カードでどれだけアドを稼ぐかである。山札の一番上は《コダマダンス・チャージャー》であるのが確定してはいるが、残り2枚は不明。

そう、そして、この「ちよつとアドバンテージ稼ぎに行くか・・・」という思考から、雪はこの試合で多くの不幸を呼び寄せることになる。

雪の腕が山札の上へ伸び、指先で1枚ずつ捲る。

「1枚目、《コダマダンス・チャージャー》」

この場に居る全員が息を呑む。緊迫したこの瞬間に、全ての者の視線が釘付けとなっていた。

「2枚目、《メメント守神宮》・・・」

「最後っすね・・・」

「・・・・・・・・」

最後、山札を捲る雪の指は微かに震えている。恐る恐る、掴んだカードを表向きにする。

「3枚目・・・・・・・・・・《界王類邪龍目 ザレドッドブラツキオ》」

「あ」

終わった。雪は「お前え……お前え……」と《オーケストラ》を恨む。

多色デッキで3枚捲つて多色がないというその運のなさに、憐は「凄い」と口に出す。雪はそれに何の反応も示さず捲つた3枚を山札の下に置き、《xii》と《オーケストラ》とのバトルの後、静かにターンエンドを告げた。

「……………ターンエンド」(マナー1)

「私のターン、ドロウするね」

尚、そんな状況でも平然と自分のターンを行う風。《xii》を除去してきたことを凄いとは思っていても、雪の運の低さには全く関心が無いらしい。

「《白騎士の無限龍 ウルフエリオス》をマナへ。5マナで《超次元ドラヴィタ・ホール》。効果で《白米男爵》を回収。超次元ゾーンから《時空の不滅 ギャラクシー》をバトルゾーンに。3マナで《白米男爵》。1マナチャージしてマナゾーンから《白騎士の聖霊王 HEA VEN》を回収。ターンエンド」(マナ9)

やろうと思えばこのターン、《ウルフエリオス》を出すことも出来た。明かされていない風の手札には《xii》もあった。しかし、それをしなかった。

風は警戒していた。雪の《オーケストラ》のおかげで思い出せた多色デッキとの対戦での脅威、《ザレッド・ブラッキオ》を。

先程雪の使ったS・バックは、何年もの時を経て更なる進化を遂げていた。その名も、スーパーS・バック。

その能力を持つクリーチャーは、今現在《ザレッド・ブラッキオ》1体のみ。故に、カード全体で見てもその希少性からかなり有名なカードである。

では何故、風はそれに気づかなかったのか。

思い出して欲しいが、この世界では4c以上を扱う人間が少ないのだ。つまり、5cはかなり限られてくる。

そして、《ザレッド・ブラッキオ》の持つスーパーS・バックとい

う能力は、その能力を得るのに条件があるのだ。

それは、多色マナ武装と呼ばれるものである。

多色マナ武装を知るには、まずマナ武装について知らなければならぬ。

マナ武装とは、マナゾーンに指定の文明が指定の枚数以上あつて初めて使用することの出来る能力である。一概には言えないが、マナ武装5を持つ自然のクリーチャーならば、大体は自然のマナ5枚が条件となる。

そして、多色マナ武装。マナ武装の説明を理解した方は察した方も多いのではないだろうか？多色マナ武装とは、マナゾーンに多色のカードが指定の枚数揃い、初めて使用することの出来る能力である。そして、この多色マナ武装が《ザ・デッド・ブラツキオ》の存在を風が忘れてしまつていた原因ともなつていいるのだ。

《ザ・デッド・ブラツキオ》の持つ多色マナ武装の条件はこのカードが自分の手札にあり、自分のマナゾーンにカードが5枚以上あつて5文明がそろつていれば、このクリーチャーはスーパーS・バックを得る。というものである。

そう、このカードのみがも持つスーパーS・バックという能力は、マナに5cが無ければ使用出来ないのだ。

つまり、《ザ・デッド・ブラツキオ》は5cのデッキでその真価を發揮する。だが、この世界で5cは扱う者が少ない。よつて、《ザ・デッド・ブラツキオ》の知名度は高くとも、実際に使われることが少ない為忘れられやすいという現象が起こつたのだ。

因みにこの世界でも、多色とは何の関わりもないはずなのに《光器サーシャ》はあまり知られていない。悲しいなあ……。

「俺のターン、ドロー。マナはチャージせず、2マナで《薫風妖精コートニー》を召喚。ターンエンド」

雪もまだ、完全には諦めていない。もしかしたら、程度には勝てると思つている。そんな中出した2体目のコートニー。マナの全文明化はこのデッキの命である分大切なクリーチャーとなつている。ただ、この状態ではただの壁要員であり、次のターンに飛んで来るであ

ろう《HEAVEN》で少しでも盾を増やそうという目的もある。

残り9マナも使うことの出来る雪の手札の2枚は受けと返しのアである。これを見事風に食らわすことが出来れば、雪の勝ちで終わる可能性があるのだ。

故に、今は出さない。

「確定……かな。私のターン、ドロー。マナはチャージせず、《ラジュヌ》の効果でコスト軽減。7マナで、エンジェル・コマンドである《時空の不滅 ギャラクシー》の上に進化。《白騎士の聖霊王 HEAVEN》」

このデッキの風のエースクリーチャー。《HEAVEN》が遂に召喚される。

「《HEAVEN》の効果で、光文明以外の場のクリーチャーを全て持ち主のシールドに送るね。ゆっきーの《コートニー》2体をシールドへ。ターンエンド」(マナ9)

「俺のターン、ドロー」

お互いの場にはパワー15000のエースクリーチャー。場のクリーチャーの数では風が勝っているが、雪の《ザレデッド・ブラッキオ》を考えれば攻撃が出来ない。cipで《ナチュラル・トラップ》を持ちつつ、メメント守神宮でブロッカーを得てしまっているからだ。

しかし、雪の劣勢は変わらない。正直、《サイレント・スパーク》が盾にあればと、運に縋っているくらいに。まあ、その《サイレント・スパーク》も、《ジャミング・チャフ》を唱えられてしまえばそこまでなのだが。

そして、まだ耐えられる。と、全体除去を放つ白騎士の切り札である《HEAVEN》が召喚され、そう少し油断してしまったのだ。

「《フェアリー・ライフ》をマナへ、ターンエンド」(マナ12)

「私のターン、ドロー。あ、」

風の口から自然と零れた驚きに、雪は最大限の警戒をする。

「マナをチャージせず、コストを1軽減し、6マナで《白騎士の霊騎ラジュヌ》の上に、《白騎士の無限龍 ウルフエリオス》を進化」

ウルフエリオス、ここまでは良い。問題は何が捲られるかだ。

「《ウルフェリオス》で攻撃する時、革命チェンジとメテオバーン。メテオバーンの効果で2枚を表向きに……おおー！じゃあ《ナターリア》の上に進化するね！」

捲られたカードを見た凧は驚いた。何故なら、もう一枚の聖霊王、《白騎士の聖霊王　コバルト・ウルフェリオン》が捲られたからだ。

「《ウルフェリオス》と《xii》の革命チェンジ。《xii》の効果で1枚ドロ。シールドを3枚ブレイク！」

「攻撃を受け、手札に加わる《コートニー》を捨て、多色マナ武装5、スーパース・バックを発動。《ザレド・ブラッキオ》を召喚。効果で《HEAVEN》をマナゾーンへ」

「だよねえ……ターンエンド」(マナー)

聖霊王の踏み倒しなど理不尽の極みと言いたい所だが、生憎と雪は既に灰となっていた。それはそれは真っ白に。

凧が声を掛けるが返事がない。ただの屍のようだ。

屍はふと、空を見上げる。完全に現実逃避である。

「ゆつきー、おーい。ゆつきーのターンだよー？」

「……俺のターン、ドロ」

何故、凧はたった2枚からエースクリーチャーを捲れるのだろうか。と、自分と凧の運を比較する。此方は初手から《オーケストラ》を抱えるという事故をおかしたりと酷かった。それに比べて凧のデッキはクルクルと回転している。クツ、美人はクリーチャーに好かれるとでも言うのか……!?

「……いや、俺がこのデッキに嫌われている可能性も……うわあ。」

「マナはチャージせず、《ザレド・ブラッキオ》でシールドを攻撃、革命チェンジ。《プチョヘンザ》をバトルゾーンへ」

「《コバルト・ウルフェリオン》と《xii》をマナに置くね」(マナー4)

そして、とうとう凧のシールドがブレイクされる。3枚のシールドにはS・トリガーと書かれたカードはなかった。

「ターンエンド」

お互いにピンチといえる盤面。《プチヨヘンザ》の制圧力がある分、雪の方が優位に立っているだろうか。

しかし此処で、雪の《プチヨヘンザ》の能力が仇となる。

「私のターン、ドロロー。《バイケン》をマナへ。4マナで《超次元ホワイトグリーン・ホール》。効果で超次元ゾーンから《勝利のプリンプリン》をバトルゾーンへ。そして《ホワイトグリーン》の効果で手札を一枚新しいシールドとして裏向きにして置く。更に、マナゾーンから《白騎士の聖霊王 コバルト・ウルフェリオン》を手札に戻す。プリンプリンの効果対象はプチヨヘンザに。8マナで《黒豆男爵》を召喚して、ターンエンド」(マナ14)

凧の手札は現在5枚。シールドも仕込まれており、マナも十分。

しかしクリーチャーは全てタツプイン。《プチヨヘンザ》は攻撃出来ないが、《オーケストラ》は未だに顕在している。

「俺のターン、ドロロー」

対する雪は手札4枚。場には攻撃出来ない《プチヨヘンザ》とメテオバーン後の《オーケストラ》。シールドは無いがマナは十分。

しかし、相手の場には《黒豆男爵》が存在している。cip持ちクリーチャーはバトルゾーンに残らない。

「マナはチャージせず、2マナでコートニーを召喚。8マナで《ザレデッド・ブラツキオ》を召喚し、効果で《黒豆男爵》をマナゾーンに送る」

「《黒豆男爵》の効果で《ザレデッド・ブラツキオ》をマナゾーンに送るよ」

「《オーケストラ》で《ナターリア》を攻撃」

「その時、ニンジャストライク5で《怒流牙 佐助の超人》を召喚。効果で1ドロロー、手札の《バイケン》を墓地に送り、墓地の《超次元ホワイトグリーン・ホール》をマナゾーンへ置く。そして捨てられた《バイケン》の効果でバトルゾーンへ」(マナ15)

「あ」

あ、マズ、と思った頃にはもう遅い。雪の攻撃は《佐助の超人》を召喚させてしまい、《バイケン》の効果により《プチヨヘンザ》が手

札へと戻される。《オーケストラ》の攻撃は通ったが、雪にはアンタップしているクリーチャーが居ない。

「『プチョヘンザ』が除去されたなら、本当にお終いつすかねえ……」  
「……ターンエンド」(マナ12)

「私のターン、ドロー！7マナで《怒流牙 サイゾウミスト》を召喚。効果で墓地を山札に加えてシャッフル。あ、カットお願い」  
「了解です」

「ありがと。その後シールドを新たに1枚追加。バイケンでダイレクタアタック。革命チェンジ。《x i i》をバトルゾーンへ。効果でカードを1枚ドロ」

コスト7より大きいシノビはこのデッキには入っていない。アンタップしているクリーチャーも居ない。

雪の負けだ。

「何もないです。いやあー、疲れたあー……」

「やったあー！ゆつきーに勝てたああ……」

どちらも集中して疲れたのか、床に仰向けになる。床に敷かれたコルクが柔らかい。

「お疲れ様です。でも会長は次に俺と試合があるんで。楽しみつすねえ」

「ちよつと休ませてえ……」

疲れから嫌そうな顔をしている会長に「3分間待ってやるつす」と言い、雪と凧のデュエマは凧の勝利という形で幕を下ろした。

## タイムマンやろうぜ

雪と風のデュエマに決着が付いてから3分が経った。最初は疲れているように見えた風も、既に次のデュエマの準備を終えていた。対して傍観者となった雪は疲れからか少しウトウトしている。

「お待たせく。準備終わったよ」

「了解つす。じゃあカットお願いします」

風の準備が終わったのを確認すると、憐は床に置いてあったデッキを風の前に置く。憐の近くには超次元は置かれていないように見える。

「準備完了。それじゃあ、ダイスロオオオオル！」

「会長、それ違うゲームじゃないっすか？」

そう突っ込みながら風が振った後に憐もダイスを振る。出目は憐の方が大きい。よって先行は憐からとなった。

「じゃ、始めるっすよ。《ベル・ヘル・デ・スカル》をmanaゾーンに。ターンエンド」(mana1)

「ドロー。《佐助の超人》をmanaゾーンに。ターンエンド」(mana1)

お互いに自然文明が入ったデッキ。manaを伸ばしてから戦うデッキ同士であるのなら、序盤は静かな展開になるだろう。

「ドロー、《カナシミドミノ》をmanaゾーンへ。2manaで《ダーク・ライフ》。山札の上から2枚見て、1枚を墓地、1枚をmanaへ。ターンエンド」(mana3)

「ドロー、《白騎士の聖霊王 HEAVEN》をmanaへ。2manaで《白騎士の霊騎 ラジューヌ》を召喚。ターンエンド」(2mana)

manaと墓地を肥やす憐に対し、《ラジューヌ》を召喚した風の顔は険しい。manaを伸ばしたかったのだろうが、初手が悪かった。しかし、《ラジューヌ》が出せただけマシだったと考えるのも良いだろう。

「ドロー、《フェアリー・ライフ》をmanaへ。4manaで《社の死神 再誕の祈》を召喚。効果で墓地のカード2枚をmanaゾーンに。ターンエンド」(mana6)

「ドロー、《XII》をmanaへ。2manaで《フェアリー・ライフ》。1mana

ナチャージしてターンエンド」(マナ4)

「綺麗な動きだなあ……」

ダーク・ライフで墓地に送られたカードとダーク・ライフ自身を《再誕の祈》で即座にマナへと変える綺麗な動きに、眠そうにしていた雪は目を奪われる。2↓4↓6という綺麗なマナの伸び方と、闇文明の得意とする墓地肥やしを上手く利用した憐のプレイングは、凧や生徒会で戦った子よりも上手に感じた。

——しかも、死神と名の付くクリーチャーが場に居るというのも大きい。

恐らくだが、憐のデッキは死神デッキ。組み合わせとしては黒緑だろう。死神で黒緑、それも《バロム》のデッキとなれば、憐が使っているデッキがどんなデッキなのか大体分かる。先程見せた《ダーク・ライフ》からの《再誕の祈》の動きはまさしく雪の知っているデッキのソレだった。

「ドロー、《母なる聖域》をマナゾーンへ。4マナで《デスライオス》を召喚。効果で《再誕の祈》を破壊」

「《ラジューヌ》を破壊」

「ターンエンド」(マナ7)

「ドロー、《ラジューヌ》をマナへ。5マナで《アステイノス》を召喚。効果で山札の上から3枚を表向きにして、《白騎士の無限龍 ウルフエリオス》を手札に。ターンエンド」(マナ5)

漸くデッキが動き始めた凧に対して、憐は次の一手をどうするべきか思考する。次のターンにウルフェリオスが出てくることはない。初手の事故具合から、2枚目の《アステイノス》辺りが出てくる位だろうか。ただ、それをわざわざ許すわけにもいかない。

「ドロー、《デスライオス》をマナへ。7マナで《ダークマスターズ》を召喚」

「……」

公開ハントス3枚ドラゴンが場に現れる。その厭らしい効果で凧は自分の手札を洩々、ではなく即座に、見てみるとでも言いたげにこれでもかと思せつける。

え？ 渋々じゃなくて見せつける？ 可笑しくない？ と思った方も居るだろうが、理由はすぐに分かった。

「《バイケン》2枚……だと……!?」

「さあ！ 3枚ハンデスしたいならしてみなよ！ ほらほらどうしたー！」

あまりに予想外の手札に憐は驚く。だが、すぐさま冷静になり、《ウルフェリオス》のみを墓地へと送った。7マナで1枚ハンデスとはしよぼいものだが、仕方がない。

「因みに会長、何で《バイケン》2枚も握ってるんすか」

「だって憐のデッキならロストソウルある可能性大でしょ？ マナも7以上だったし警戒してただけどなあ」

任意効果ってそれズルくない？ と不満らしい風には、憐は《ロストソウル》を《ダークマスターズ》に変えた自分を賞賛していた。ナイス自分。ナイス判断。

「危なかった……。ターンエンド」(マナ8)

「ドロー、《バイケン》をマナへ。2マナで《フェアリー・ライフ》。1マナチャージしてターンエンド」(マナ7)

「ドロー、マナはチャージせず、3マナで《ボーン・おどりチャージャー》。効果で山札の上から2枚を墓地に。マナへ置いてターンエンド」(マナ9)

先程は上手くバイケンを躲すことに成功した憐だが、動き過ぎた為に手札が思うように動けない程に枯渇している。トップで良いカードを引けば状態を大きく変化させられるだろうが、それまでに風が仕掛けて来ないとも限らない。

「ドロー、《バイケン》をマナへ。4マナで《超次元 ホワイトグリーン・ホール》。《勝利のプリンプリン》をバトルゾーンに出して効果で《デスライオス》を指定。《ホワイトグリーン》の効果によりマナゾーンから《ウルフェリオス》を手札に戻し、ターンエンド」(マナ7)

「成る程、進化を想定して《デスライオス》か……」

《ダークマスターズ》がWブレイカーなのに対し、《デスライオス》は1枚。普通であれば《ダークマスターズ》では？ と思った雪だったが、

直ぐにその理由に気付く。白騎士と同じで、死神にも死神という名称を進化元にするクリーチャーが存在する。それを警戒してのことだろうと判断していた。

「ドロー、マナはチャージせず、《ダークマスターズ》の上に《死神明王ガブリエル・XENOM》を進化」

「出た、レアリティ詐欺カード」

「どこが天使だどこがー！」

隣の出した進化クリーチャーへの反応は違いこそあったが、コイツ頭可笑しい。という点に置いては雪と凧の考えは一致していた。

《死神明王ガブリエル・XENOM》。闇のコスト7の進化デーモン・コマンド。進化元の条件はエンジェル・コマンドまたはデーモン・コマンド1体という破格の緩さを誇る。その割りにはパワーは11000と十分にあり、尚且つ――

「《XENOM》でシールドを攻撃する時、効果発動。自分の山札の上から3枚を墓地に置いて、《勝利のプリンプリン》を破壊。更に墓地から《バロム・クエイク》を手札に戻します」

「ぜったいアンコモンじゃないよねソレ。もう私、レアリティの基準がわからないよ……」

「ワイトもそう思います」

3枚墓地肥やしに相手クリーチャーの破壊、エンジェル・コマンドかデーモン・コマンド1体の墓地回収を持つという、もうコイツ一人で良いんじゃないかな。とさえ思わせてしまう驚異のスペックを誇る。雪や凧は何故コイツをアンコモンで彫ったのか、一度会社に問いただしてみたい程だった。

「シールドをWブレイク」

「受けます。あ、S・トリガー《フェアリー・シャワー》。効果で山札の上から2枚見て1枚を手札に、1枚をマナに」(マナ8)(シールド3)

「ターンエンド」(マナ9)

《ウルフェリオス》を進化させる為の《勝利のプリンプリン》が破壊されてしまったが、凧の顔に焦りはない。《XENOM》への怒りは多少

あるが、この程度では負けない。

「ドロー、2 マナで《ラジューナ》を召喚。ラジューナの効果でコストを1 軽減し、6 マナで《ラジューナ》の上に《ウルフエリオス》を進化」

「げっ、《ウルフエリオス》出てくるか……」

進化でやられたなら進化でやり返す。奇しくも白騎士の進化クリチャーと死神の進化クリチャー。どちらも時代を代表するカテゴリーの対決だ。

「でもパワーでは負けないっすよ。《XENOM》は11000 つすからね」

「む、でもパワーで勝つ必要はないからね。《ウルフエリオス》でシールドを攻撃時、メテオバーン」

《ウルフエリオス》のパワーは9500。残念ながらパワー11000の《XENOM》を倒すことは出来ない。が、《ウルフエリオス》の真骨頂はメテオバーンによる大型白騎士の踏み倒し。雪との試合でも局面を大きく変化させたその能力は、パワー差など関係なく《XENOM》を葬ることの出来るクリチャーを呼ぶことが出来る。

「2 枚を表向きにして、よしっ、《HEAVEN》を《ウルフエリオス》の上に進化。《佐助の超人》はデツキの下に」

「バカー!?! どんだけ運良いんすか!」

《HEAVEN》の降臨は隣の場のクリチャーの全滅を意味する。

「風さん、やつぱり運良いよなあ……良いなあ……良いなあ……いなあ……」

雪、あまりの風の運の良さに自分の運の無さを悲観する。多色デッキで3 枚捲り多色が1 枚も無かったのがかなり堪えているようだ。おお神よ、何故こんなにも運に差があるのですか……? 美人だからか? 美人だからなのか!?

「《XENOM》と《デスライオス》をシールドに、シールドをT・ブレイク」

「受けます……S・トリガー《フェアリー・ライフ》。1 マナチャージ」(マナ10)(シールド5)

「ターンエンド」(マナ8)

「良い攻防戦ですね〜……………」

「ん？ああ、まあそうだね、白騎士対死神。それも《HEAVEN》まで出てるしお互いに攻撃もしてるしね」

「でも、それももう終わりかもしれないっすよ？」

雪がこの試合を見る限り、お互いにクリーチャーを展開し殴り合うという、正にデュエマといった感じの試合だった。中には「攻撃してるのが残念」などという人も居るが、雪からしたらこれこそがデュエマらしいと感じられたのだ。

凧もそれには同感で、共に背景ストーリーでも関係のあった白騎士と死神が対面している。それもエース級が出て殴り合っているのだから楽しいものだと感じていた。もしこれがAR、もしくはVRで出来ていれば、と思う程には。

そして、このデュエマで憐は自身の切り札を切る。もう公開はされているし雪や凧は勿論予想しているだろうが、この盤面で、ましてや《HEAVEN》など出されてしまつては、それに応えるしかない。

「ドロ、マナはチャージせず、10マナ」

「相変わらずバロムのコストは重いなあ……………」

「録画しとけば良かったかなあ……………」

好きなカードはバロム。好きな文明は闇。そんな憐の切り札は、初の多色である自然と闇のバロムの名を持つクリーチャー。大地の力を取り入れた、大地が産んだ悪魔神。

「マナゾーンの《スライオス》を進化元に、《悪魔神バロム・クエイク》をマナ進化！」

パワー13000。コスト10。自然と闇のバロム。その効果は、同族以外の殲滅。

「《バロム・クエイク》の効果でデーモン・コマンド以外のクリーチャーを全て破壊する。《HEAVEN》を破壊」

「強いなあ……………」

凧のこの『強い』というのは、この効果だけを指すのではなく、《バロム・クエイク》というクリーチャーの全てを指す。

まずマナ進化という場にクリーチャーを必要としない点。それまでのバロムは場にクリーチャーが居なければ進化出来ない事から、進化元を除去されてしまいがちだった。しかし、マナからならば話は別だ。雪が戦った生徒会1年のようなランデスタイプでもなければ早々進化元で困ることはない。

次にデーモン・コマンド以外の全体破壊効果。これについては詳しい説明は不要だろう。

そして最後に、《バロム・クエイク》のもつ他のバロムとの明確な違い。それは――

『《バロム・クエイク》の効果で、相手のクリーチャーがコストを支払わずにバトルゾーンに出る時、相手はそのクリーチャーをバトルゾーンに置くかわりに自身のマナゾーンに置くことになる』

踏み倒しメタ、と言われるものである。

通常、クリーチャーをバトルゾーンに出すにはマナを支払う必要がある。

が、例外というものは存在する。

例えば超次元と名の付く呪文でサイキック・クリーチャーが出る時、果たしてサイキック・クリーチャーのコストをプレイヤーは支払っているだろうか？

答えは否、だ。超次元呪文はサイキック・クリーチャーをバトルゾーンに出す呪文である為、カードの効果によりコストを支払わずにクリーチャーをバトルゾーンに出すことが出来る。S・トリガーによる召喚も、S・トリガーという能力のおかげでコストを支払わずに召喚がされている。プレイヤーはそれらの能力を活用することで、マナに必要な枚数のカードが無い状態でも、コストの大きいクリーチャーをバトルゾーンに出すことが出来る。

つまり、《バロム・クエイク》の持つ踏み倒しメタという能力は、それらの能力を丸ごと無意味なものに変えてしまう強力な効果となる。

「バロム・クエイクでシールドをT・ブレイク!」

「受けるよ。S・トリガーは・・・なし」(シールド0)

「ターンエンド」(マナ9)

《HEAVEN》も消え、《ウルフエリオス》のような踏み倒し、革命チエンジさえ封じられては、もう凧の手札にこの1ターンで戦況を変えることが出来るカードはない。

「ドロー、……《コバルト・ウルフエリオン》をマナへ。5マナで《アステイノス》を召喚。効果で3枚を表向きにして……白騎士は無い、か……ターンエンド」(マナ9)

「ドロー、《デスライオス》を召喚。《デスライオス》を破壊。効果は……分かってるっすね」

「《アステイノス》を破壊……あーあ、負けたかあ……」  
「今回は俺の勝ちっすね。《バロム・クエイク》でダイレクトアタック」

凧と隣の戦いはこれにて終わった。雪と凧の戦いよりも短かった筈の戦いは、その場に居た3人にとっては更に短く感じられた。

## 学校を破壊したい男

室内でも肌寒く感じる朝の8時、俺は外出したくないなあと思いがらも、寒さに負けない意志を固め、外出へ向けての準備を終了していた。

俺と凧さん、隣のお泊まり会から何事もなかったかのように丁度1週間が経った。お泊まり会後は凧さんとあまり会話をしていないような気がする。勝手かも知れないが、親しくなつたとは思っている。ただ、特別話すようなことが殆どなかったのだ。

しかし何故、こんな話をわざわざ話の冒頭でしたのか。

簡単な話だ。話すことが出来てしまったのだ。

「凧く、雪君にちゃんと高校までの道教えながら行ってねく」

「もう、分かっているからっ！よし、準備出来たらなら行く？」

「え………ああ、はい」

玄関前で靴を履いていた凧に台所に居る舞から忠告を受ける。少し反抗的に応えてしまったが、舞は特に気にしてはいなかった。

現在、2018年9月3日月曜日。雪の頭の中のカレンダーには2018年8月34日月曜日、終わらないぼくのなつやすみとあるが、現実には残酷だ。8月は死に、魔王が待ち構える9月が襲来して来たのだ。

因みに、生徒会はその1日前に始業式で使うパイプ椅子準備の為に学校へ行っている為、その日あった久しぶりの凧と雪の会話が「羨ましいよ、ゆつきー……私の夏休み、終わっちゃった」である。生徒会長でも働きたくないものは働きたくないのである。休日くらい働かせずに休ませろと愚痴ってもいた。雪はお疲れ様です、と合掌するしかなかった。

雪と凧は家を出て左に曲がり、そのまま真っ直ぐ歩く。

「ふう、ねえ寒くない？寒すぎて室内に居たくなっちゃうんだけど」

「ああ、確かに寒いですよね」

お腹も痛くなつてきましたね。胃が痛いのはきつと寒さのせいなのだろう。

「自己紹介は考えた？どうせ雑にやっても問題無さそうだけど」

「あーローロー」

嫌だ、雪、高校逝きたくない。お家帰る。

高校に行くことに凄まじく緊張する。高校で陽キャと陰キャ、どっちと連むか。どういったキャラで周知されるべきか。変に思われな  
いか。虐められないか等々、色々な不安が頭の中を駆け巡る。

「……………大丈夫だと……………思う、多分」

「うん、全然説得力無いね」

名前とこれからよろしく、とでも言っておけば良いと思っていたのだが、風さん曰わくそれだと誰も話し掛けて来ない可能性あるから何か他の紹介もしいた方が良いとのこと。他のことか……………

「デュエマやってます、とかどうですかね」

「うーん、うちの高校はカードゲームで有名だし、デュエマやってますはちよつと印象に残らないかも。それこそデュエマやってる人なら誰でも居る訳だし……………」

野球のプロを育成する学校で野球やってますと言うのと同じか。

「あ、ゆっきー5c使えるんだからそういうのを前面に出していくのもありかもね」

「あー、でもそこまで上手く使えてるとは思ってないし。前の超越オーケストラとか全然だったし」

言う程上手く使えていない。と主張するが、風さんは信じてくれな  
いようだ。「そんなことないよ、自分より扱うの上手いよ」の一点張り  
だ。

しばらく自己紹介について話していると、いつの間にか高校に着いていた。風さんは舞さんに説明すると言ってはいたものの、自己紹介  
の話をしているのを忘れていた様だ。

「あ、ごめん。忘れてた……………」

「ああ、大丈夫ですよ。帰りに確認しますから」

午前8時40分、ひんやりとした教室内は休み明けのテンションが抜けきっていない学生達により賑わっていた。

教室の教卓から一番遠い窓際の席に憐は座っていた。

「憐、何か良いことでもあったの?」

「え?何で?」

近くの席に座っていた友人からいつもの自分と少し違うと言われ、何故そう思ったのかを問う。

「何か凄いにやっつけてる。雰囲気か」

「口角とかじゃなくて雰囲気がつて、え、どゆこと?」

思わず口角が緩んでいたのかなと思っていたのだが、雰囲気はもうどうしようも無い。

まあ――

「新入生がね、凄い奴なんだよ」

「え、新入生知ってるの?」

声をデカくして驚いた友人に、周囲の人間が興味から寄って来る。

どんな奴なのか、男子か女子か、カードゲームは何やってるのか、イケメンか、可愛いか、ガチ勢かカジュアル勢か、何故知ってるのか等々、色んな質問が浴びせられた。その全ての質問への答えを憐は一言で済ませます。

「お楽しみに」

学校のチャイムが鳴り、始業式の為に体育館へと移動することになった憐のクラスメイト達は、転校生についての話が楽しみで仕方がないという様子だった。始業式終わったら自己紹介の場で質問しまくる、という者ばかりだ。

ただ、この時点で一つだけ、この教室に居る全員が勘違いしていたことがあった。

キンキンに冷えている体育館には、蟻の様に沢山の生徒達が群がり、それぞれがパイプ椅子に座っていた。始業式の始めから寝ている者や、起きているものなど様々だ。

「校長先生、ありがとうございます。えー、続いて、新入生の紹介です」

——！、ざわ・・・ざわ・・・

新入生発表の前が校長教師の話という生徒からしたらどう考えても時間のアドソンだったのか、早く終われよという雰囲気からの変わり様は驚く程に大きかった。

新入生が壇上に上がり、マイクを片手に前に出る。

「この度、東京都立国立絵札高等専門学校、2ーBに配属されることになりました、白菊 雪です。カードゲームはデュエル・マスターズをやっています。5cまでデッキは使用可能です。宜しく願いします」

——おおおおおおお!!

巻き起こる大歓声。壇上に立つ雪の足は既に限界を迎えようとしている。生まれたての小鹿どころかクラゲのようにふにやふにやと、していて力が入っていない。

因みに胃は既に死んでいる。どうせ教室で自己紹介だろ、と思っていたらまさかの全校生徒に壇上で自己紹介という公開処刑だったからだ。凧さんはその緊張で今にも死にそうな雪を見て、「生徒会長になつたばかりの頃の私だ・・・」と過去の自分を重ねて見ているらしい。

学校が爆発しないかな、という小学生並みの妄想をしながら、雪は教師からの次の指示を待つ。

——デュエマ勢か

——5cってマジ？

——いや、使えるだけで上手く扱える訳じゃないんだろ

——そういえばあの強い1年の子、新入生に負けたって言ってな

かった？

——はっ!?マジかよ嘘だろ？

「静かにして下さい!……えー、では2ーBのクラス委員長、前に出て来て下さい」

静かに、と言われた会場がまた生徒の声で賑わう。クラス委員長と呼ばれた男子は小走りでデュエマのデッキを持って壇上の前に立つ。雪も事前に言われていた通りに壇上から降り、クラス委員長と反対の方向に静かに移動する。

「これより、VR機能を使った新入生歓迎試合を行います。生徒及び職員は不正の無いよう、御観戦の方をお願い致します」

——ワアアアアアアアアア!!!

普通なら怒られるだろう大きさの歓声だが、教師からの注意は無い。先程まで無表情でいた教師達も、今はニヤニヤしている。

——頑張れ新入生!

——委員長負けたら何か奢れよー!

声援が飛ぶ。これが始業式だということを忘れてしまいそうだ。

VRにリンクする台座を教師がセッティングし、雪と委員長はその間にお互いデッキを交換し、カット&シャッフルをする。台座がセッティングされたのはお互いにシャッフルした場所から3m先。プレイの際には6mもの差がある。

雪は台座に書かれている通りに準備をする。一応事前に話はされていたが、何しろ初めてのことである為確認する。

まず、デッキを右上に。

次にシールドを5枚山札の横に重ならないように置く。

そしてカードを5枚引く。

最後に相手の盤面を確認するモニターが映るかどうかを確認し、問題なければ台座の横にある準備完了のボタンを押す。

おっと、委員長は《禁断》を使うのか……。

「両プレイヤーの準備が完了しました。これより、VRデュエルを開始します」

教師がそう言うと、自分達の居る体育館が緑生い茂る森へと姿を変

える。後で分かったことだが、ファイオナの森らしい。

「初めて下さい」

「お願いします」

超次元は自動的に開示されている為確認は不要。手札やシールドも映像化されており画面を見ずとも分かり易い。先攻後攻も機械が勝手に決めてくれるように楽に感じる。

先行は、委員長だ。

「《リュウセイ・ジ・アース》をマナへ置いてターンエンド」(マナ1)  
「ドロロー、《悠久を統べる者 フォーエバー・プリンセス》をマナへ置いてターンエンド」(マナ1)

お互いに赤と緑のマナをチャージする。オマケにどちらもドラゴンでもある。委員長の置いたカードを見て、雪は相手のデッキに見当が付き、自分がこのデッキを選んだことが正解だったということに頬が緩む。

しかし、まだ1ターン目。序盤も序盤だ。こんな所で気を緩めては呆気なく負けてしまう可能性があるのだ。気を引き締めて、試合へ意識を向ける。

「ドロロー、《無双竜鬼ミツルギブースト》をマナへ置いてターンエンド」(マナ2)

「ドロロー、《威牙の幻ハンゾウ》をマナへ置いて2マナで《フェアリー・ライフ》。効果で1マナチャージしてターンエンド」(マナ3)

雪が《フェアリー・ライフ》を唱えると、森から《ジャスミン》を始めとしたスノーフェアリーが集まり、飛べるスノーフェアリーは空中で緑色に発光しながら元気に飛ぶ。

「《ハンゾウ》？また懐かしいっすね……………。《悠久》に《ハンゾウ》ってのは初めて見るっすけど……………」

《悠久》は主にデッキ回復に使用されるカードだ。悠久チェンジというデッキにおいては重要なカードとして扱われていた。しかし、悠久チェンジに《ハンゾウ》はほぼ入っていない事が多い。この段階では隣にも雪のデッキがどういった物なのか分からなかった。

「ドロロー、《メガ・マグマ・ドラゴン》をマナへ置いてターンエンド」(マ

ナ3)

「ドロー、《斬隠蒼頭龍バイケン》をマナへ置いて2マナで《フェアリー・ライフ》。1マナチャージしてターンエンド」(マナ5)

マナに落ちたカードを見て、この試合を見ていた何人かが、雪のデッキタイプに気がき始めた。そのカードを見ても、まさか、という疑心は捨て切れないが、もしそうならなかなかトリッキーな試合が見れるだろうと、好奇心が止まらなくなっていた。

「ドロー、《ボルシャック・ドラゴン》をマナへ置いて3マナで《スクランブル・チェンジ》。効果で5マナ軽減し、1マナで《メガ・マナロック・ドラゴン》を召喚」

——うわ、マナロック

——ヤメロー！トラウマを思い出させるなあー！

——委員長死すべし、慈悲はない

「お前ら黙ってるー！」

委員長の反応に館内が笑い声で賑やかになる。だが、《マナロック》という脅威は既に登場している。雪のマナゾーンには5文明が揃っていた。それが指すのは《マナロック》の最大限の力が引き出せるということ。

雪は思わず顔をしかめる。

「効果で相手のマナゾーンの5色揃っている5マナを指定。次のターンそのマナはアンタップしません。バトルゾーンの《禁断く封印されしXく》の封印を1枚剥がし、《スクチェン》の効果でスピードアタッカーになった《メガ・マナロック・ドラゴン》で攻撃。その時——」

早い。流石は《剣》だ、と雪は予想通りの相手の動きを冷静に分析する。既にその対処方法は手札に握っている分、かなり冷静だった。「革命チェンジ。《メガ・マナロック》を手札へ戻して《蒼き団長 ドギラゴン剣》をバトルゾーンに。バトルゾーンの《禁断く封印されしXく》の封印を1枚剥がします」

委員長の背後にあった石像の左右の腕から石の杭が解き放たれる。後4枚で禁断解放だが、このデッキからしたら寧ろ解放して欲しいクリーチャーだ。

「《剣》の効果で手札から《リュウセイ・ジ・アース》をバトルゾーンに。《リュウセイ・ジ・アース》の効果で山札の上から 1 枚を見て、そのカードをマナゾーンに。T・ブレイク」

《剣》の巨大な剣が、雪を斬ろうと襲い掛かる。が、3枚のシールドが雪を守ろうとその攻撃を阻む。

「受けます。S・チェック・・・S・トリガー、《フェアリー・シャワー》。効果で山札の上から 2 枚を見て1枚をマナに、1枚を手札に」(マナ6)

「《リュウセイ・ジ・アース》でW・ブレイク」

「受けます。S・チェック・・・トリガーなし」

「ターンエンド」(マナ5)

——いきなりシールド0つてのは危険なんじゃないか？

——確かに。マナロックでマナもアンタップ出来ない訳だし。終わったんじゃない？

——委員長がガチデツキ過ぎてまず何のデツキなのかもわからないしね

—— 5cだし負けても仕方ないんじゃない？そんな上手く扱えないって

館内の生徒は、期待はずれという認識を雪に抱き始める。5cが使える、と言っていたことからどんな人物かとワクワクしていたが、今の絶望的に見える状況では、何だその程度か。と思われても仕方がない。

誰がどう見ても詰みだった。使えるマナは次のターンには2マナ、それで何が出来ようか。

しかし、雪は笑顔でいる。それは呆れや諦めからの笑みではなく、挑戦的な、これからが勝負だと言いたげな笑みだった。

## 完全防御作戦

《メガマナロック》によりマナをチャージして使用出来るのがたったの2マナという危機的状况に追い込まれた雪。しかし焦りは一切見せず、淡々と作業を進める。

「ドロー、《超次元リバイヴ・ホール》をマナへ置いて2マナで《傀儡将ボルギーズ／ジェニコの知らない世界》を唱えます。効果で委員長の手札をランダムにハンデスします」

スノーフェアリーの次は《ジェニー》の集団が、その得物を持って委員長へと走り出す。やがて委員長の下に辿り着いた一体の《ジェニー》が、映像にある委員長の手札をカッターで切り刻み、手札の表記数が1減る。

「手札の《メガ・マナロック》を墓地へ」

これにより次のターンに雪は全マナを使用出来るようになる。が、それはターンが回って来たらの話だ。

「ターンエンド」(マナ7)

「ドロー、《革命の鉄拳》をマナへ置いて《リュウセイ・ジ・アース》で攻撃」(マナ6)

咆哮を上げて敵へとその鋭利な牙を向く《リュウセイ・ジ・アース》。雪のシールドは既に0だ。この攻撃が通ってしまえば、雪の敗北が決定する。

《リュウセイ・ジ・アース》が一度距離を取ってから雪へと物凄い速さで空中から接近する。正に絶体絶命の状況だ。

雪は手札の一枚を即座にバトルゾーンへと表向きにして出す。

「ニンジャ・ストライク5、《怒流牙 佐助の超人》を召喚。効果でドローして1枚捨てます」

風を纏いながら現れる緑のシノビ。《佐助の超人》は自分の主へと接近する獰猛な竜を目にするや否や、即座に手印を組む。

「その時、捨てた《バイケン》の効果で《バイケン》をバトルゾーンに」《佐助の超人》の背後で突如として巻き起こる激しい水の渦。その渦の中心から、自分と同種の存在を感知する《リュウセイ・ジ・アース》。

そしてその瞬間、《リュウセイ・ジ・アース》の足元から同じように渦が発生する。

「墓地のカードを1枚マナチャージして、《バイケン》の効果で《リュウセイ・ジ・アース》をバウンス」(マナ8)

「《剣》で攻撃」

《バイケン》により強制的に撤退させられた《リュウセイ・ジ・アース》に続き、仇を取らんとばかりに《剣》がその自慢の剣で雪の息の根を止めにかかる。

「ニンジャ・ストライク3、《ハヤブサマル》を召喚。《バイケン》の効果で1ドロロー。《ハヤブサマル》の効果は自身に。ブロッカーとなった《ハヤブサマル》でブロック」

しかしそれも雪には届かない。《剣》の攻撃は寸での所で神速の如き速さで主の下へと飛んで来た《ハヤブサマル》に防がれる。

「ターンエンド」

「ニンジャ・ストライクで召喚された《佐助の超人》を山札の下へ置きます」

——おお、耐えたぞ！

——受け強っ！

——汚い、流石ニンジャ汚い

雪と会長の白熱する試合に、会場も突然のシノビの登場に盛り上がっているようだ。

「ドロロー、《フェアリー・ライフ》をマナへ置いて、5マナで《雷鳴の守護者ミスト・リエス》を召喚。更に4マナで《解体人形ジェニー》を召喚」(マナ9)

赤いバイザーを付けた黄金色の機械と共に現れる《ジェニー》。ジェニーは1枚しかない委員長の手札を削り取る。

「《リュウセイ・ジ・アース》を墓地へ捨てる。効果で山札の上から1枚を見て手札に」

「《ミストリエス》の効果で1枚ドロロー。ターンエンド」

クリーチャーの効果でお互いに手札を増やす。しかし雪の潤っている手札に対して、委員長の手札は1枚と貧しい。盤面も雪の方がク

リーチャーが多く並んでおり、劣勢かと思われた雪がいつの間にか優勢になっていた。

「ドロー、《超戦龍覇 モルトNEXT》をマナへ置いて、7マナで《超戦龍覇 モルトNEXT》を召喚。《禁断く封印されしX》の封印を墓地へ」（封印4）（マナ7）

「《ミスト・リエス》の効果で1枚ドロー」

熱い魂を持った竜人が戦場へと駆けつける。委員長のデツキのエース、《モルトNEXT》は仁王立ちで主の指示を待つ。その瞳には勝利の2文字が浮かんでいた。

「《モルトNEXT》の効果で超次元ゾーンの《闘将銀河城 ハートバーン》をバトルゾーンへ」

《モルトNEXT》の背後に聳え立つ紅と蒼の2振りの巨大な剣が確認出来る今にも動き出しそうな城。《ハートバーン》の登場に雪は自分の手札を確認し、相手が攻撃してくることを予想し準備をする。

「《モルトNEXT》で攻撃」

「ニンジャ・ストライク7、《斬隠オロチ》を召喚。《ミスト・リエス》の効果で1枚ドロー、《バイケン》の効果で更に1枚ドロー」

《ミストリエス》と《バイケン》によるドロー加速は雪の手札を更に潤す。《オロチ》と呼ばれた青い蛇を従えるクリーチャーは、《佐助の超人》と同じように目の前で手印を組む。

「《オロチ》の効果で《モルトNEXT》を山札の1番下に置き、進化でないクリーチャーが出るまで捲って下さい。そうして出たクリーチャーをバトルゾーンに出し、残りは好きな順序で山札の1番下に置きます」

《オロチ》は自分の乗っていた蛇とはまた別の蛇を生み出す。良く見れば生きている蛇ではない。水を操って作られた物だろうか。先程水を上手く使って見せた《バイケン》と同じ斬隠の名を持つシノビなだけあり、水を扱うのは十八番のようだった。

「バトルゾーンの《モルトNEXT》を山札の一番下へ置き、《無双竜鬼ミツルギブースト》をバトルゾーンへ」

「《ミスト・リエス》の効果で1枚ドロー」

「《ハートバーン》の効果でスピード・アタッカーとなっている《ミツルギブースト》で攻撃」

右手に盾、左手に赤く燃える剣を持った竜が素早い動きで空中を移動する。翼に付いているブースターにより加速した《ミツルギブースト》の攻撃が雪の目前にまで迫る。

「ニンジャ・ストライク5、《佐助の超人》を召喚。《ミスト・リエス》の効果で1枚ドロウ、《バイケン》の効果で更に1枚ドロウ」

しかしその攻撃に反応しまたもや出現する《佐助の超人》。突如として現れた《佐助の超人》に驚いた《ミツルギブースト》は思わず減速する。その隙を逃さず、《佐助の超人》はこの試合で初めて現れた時と同じ手印を組み、斬隠の龍を呼ぶ。

「《佐助の超人》の効果で1枚ドロウし、《バイケン》を捨て、《バイケン》の効果で《バイケン》バトルゾーンに。その後、墓地の《フェアリー・ライフ》をマナへ。更に《バイケン》の効果で《ミツルギブースト》を手札へ戻す」(マナ10)

またもや手札へと強制的に戻される委員長の操る竜。仲間が目の前で同じ手でやられたことに、《剣》は怒り狂う。

「《剣》で攻撃」

「ニンジャ・ストライク7、《怒流牙 サイゾウミスト》を召喚。《ミスト・リエス》と《バイケン》2体の効果で計3枚ドロウし、《サイゾウミスト》の効果で墓地の3枚を山札に加え、シャツフル。その後、シールドを1枚追加。攻撃を受けます」

怒り狂う《剣》の雪への強烈な一撃は、新たに現れた盾に防がれる。仕留めきれなかったことに《剣》も委員長も苦い顔をする。

「トリガーは無しです」

「マズいな………ターンエンド」

「《オロチ》《佐助の超人》《サイゾウミスト》を山札の1番下にする」

——…

気付けば騒がしかった会場が静まり返っている。ふと気になった雪は横目で会場の生徒を見る。

誰もが、この試合を瞬きもせずに見ていた。

たったの1ターンで、何体ものクリーチャーが現れては消えてを繰り返し、鮮やかに強力なクリーチャーの攻撃を防ぐプレイヤー。

会場に集まった生徒達の心は、完全にこの試合の虜になっていた。雪は視線を大量の手札へと戻し、勝利のビジョンへと手を進める。この勝負に勝つというその一心で。

「ドロー、《フェアリー・ライフ》をマナへ置いて、5マナで《超次元リバイヴ・ホール》。効果で超次元ゾーンから《時空の凶兵ブラック・ガンヴィート》をバトルゾーンに出します」

雪の頭上の空間が裂け、そこから骸骨の馬に乗った貴族の様なクリーチャーがバトルゾーンを駆け抜ける。

《ガンヴィート》は青い炎を纏った2本の剣を持ち、自分の持っている剣より巨大な剣を啜えている《剣》へと勝負を挑む。

《剣》が『力』の剣ならば、《ガンヴィート》は『技』の剣である。地面が割れる程の力で剣を叩きつける《剣》の攻撃を的確に避け、《ガンヴィート》は《剣》の懐へと自慢の剣を2本とも突き刺す。

「《ガンヴィート》の効果によりタップされている《剣》を破壊します」  
体中が青い炎に焼ける《剣》を確認し、撤退する《ガンヴィート》。《剣》の最期の咆哮が静寂の支配する会場に大きく響く。

「更に4マナで《解体人形ジェニー》を召喚。効果で委員長の手札の《ミツルギブースト》を墓地へ捨て、ターンエンド」(マナー1)

手札0、バトルゾーン0。最初は誰がどう見ても勝利目前であった委員長は、シノビの奇襲により今や完全に劣勢となってしまう。

このドローに賭けるしかない、と慎重に山札へと手を伸ばし、一番上のカードを指先で掴む。

「.....ドロー、.....ターンエンド」

アニメや漫画の主人公なら、引けていたかもしれない。

だが、現実是非情だ。

委員長はこのターンで盤面をひっくり返せるようなカードを、引くことは出来なかった。

「ドロー、《フェアリー・ライフ》をマナに、4マナで《フェアリー・シャワー》、効果で山札の上から 2 枚を見て1枚を手札に、1枚を

マナに。2マナで《傀儡将ボルギーズ／ジェニコの知らない世界》、効果でランダムにハンデス」(マナ13)

しかし雪は徹底して委員長の逆転の可能性を潰す。もしあの手札のカードが万が一にも《ボルシヤック・ドギラゴン》や《革命の鉄拳》であった場合、押し切られてしまう可能性がある。それならば油断は禁物、確実に勝ちに行く。

「手札の《メンデルスゾーン》を墓地へ」

「5マナで《超次元ドラヴィタ・ホール》、効果で墓地の《傀儡将ボルギーズ／ジェニコの知らない世界》を手札へ加え、超次元ゾーンから《時空の不滅ギャラクシー》をバトルゾーンへ」

《ガンヴィート》の様に空間の裂け目から出現する《ギャラクシー》。機械で出来た天使は主を守護するように雪の目の前に降り立った。

「ターンエンド」

「……ドロー……、ターンエンド」

カウンターカードが引けない。攻撃出来るクリーチャーを出した所でシノビに防がれる。委員長はただただ、カウンターカードがハンデスされないよう、引いたカードを雪にハンデスさせるのが精一杯だった。

「ドロー、《超次元フェアリー・ホール》をマナへ、2マナで《傀儡将ボルギーズ／ジェニコの知らない世界》、効果でランダムにハンデス」  
「《剣》を墓地へ」

「更に4マナで《Dの牢閣 メメント守神宮》をバトルゾーンに、ターンエンド」(マナ14)

雪が《メメント守神宮》を展開したことにより、風景のフィオナの森が黄金に輝く《メメント守神宮》へと切り替わる。念には念をと展開した《メメント守神宮》はシノビや超次元獣といった雪のクリーチャーに防衛の力を与える。

「ドロー……、ターンエンド」

委員長の顔付きが変わる。遂にカウンターカードを引いたのだ。委員長は手札の《ボルシヤック・ドギラゴン》がハンデスされない様に祈る。

しかし、それはすぐに無駄なことだったと理解するはめになる。

「ドロー、《ミスト・リエス》をマナへ、7マナで《テック団の波壊G O!》を唱えます。効果はコスト5以下のカードを指定します」

「……5以下?」

——バトルゾーンにそもそもクリーチャーが居ないのに何で……?

——んん……?

「そうか、雪ちゃんの狙いはそれだったのか……!」

委員長や会場に居る憐のような観察眼に長けたデュエマプレイヤー以外の生徒は疑問に思った。

バトルゾーンにあるコスト5以下のクリーチャーなど、委員長のバトルゾーンに存在しないからだ。

そして、雪は具体的に何を対象にしているのかを声に出す。

「委員長さんの《禁断》に付いている封印を全て、手札へとバウンスします」

「……あつ!」

《禁断》に付いている封印はルール上全てコスト1のカードとして扱う。その裁定を雪は利用した。初めから、全てこの為の時間稼ぎだった。

相手が《禁断》を解放してくれば良かったのだが、それまでにドラゴンの猛攻を完璧に凌げるとは思っていなかった。

だからこそ、雪はシノビやハンデスを使い、委員長の打てる手を次々と消去していった。《禁断》が除去出来る環境が揃うまで。

《禁断》が解放され、委員長の背後にあった石像の石の杭が全て外れる。石像も茶色から色を取り戻し、緋色の槍を持った赤い悪魔の様な姿をした《ドキンダムX》へと覚醒する。

力を見せつけるかのように《ドキンダムX》が天へと咆哮すると、雪の場の全クリーチャーへと持っている槍と同じ形状の槍が降る。

「バトルゾーンの7体のクリーチャーに封印を付けます」

——山札残り1枚……!」

——ギリギリだぞオイ……!」

山札残り1枚となった雪は、この試合を自身の勝利で終わらせる必殺の1枚を使用する。

「そして残りの7マナを使用し、《超次元ガード・ホール》を唱えます」  
《超次元ガード・ホール》。その効果は光か闇の種族にコマンドを持つコスト10以下のサイキック・クリーチャーを出すというモノなのだが、今回の雪の狙いはそっちではない。

「その効果で、《ドキンダムX》をシールドへ送ります」

天から《ドキンダムX》へ向けて青白い極光が降り注ぐ。光はバトルゾーンだけでなく、プレイヤーと観客を巻き込んで、会場内を白く染め上げる。

やがて光は収まり、雪は閉じていた目をうつすらと開ける。

目の前には地面に突き刺さっている《ドキンダムX》の持っていた槍と宙に浮いている『WINNER YUKI』の表記。

「勝者、白菊 雪！」

審判を勤めていた教師の発言と共に、それまで静かだった会場内から歓声が上がった。

## 特別編【U A 1 0 0 0突破記念】メリークルシメマス

12月25日

寒い季節だ。今年もまたクリスマスがやって来た。クリスマスのは今日は雪が降っており、俗に言うホワイトクリスマスに該当するらしい。ロマンチックな若者達は、自分の恋人と都会では滅多にないその現象に感動し、影でコソコソと熱い口付けをしている。何とも目出度いものだ、何故自分はこんなものを見ているのだろうか。大きなクリスマスツリーのある広場のベンチでイルミネーションと街灯を灯りに独り本を——失礼、紙の本をこんな状況で読んでいるのだと勘違いさせてしまいそうなので詳しく説明するが、スマホで電子書籍を読んでいた。雪の降る夜に、わざわざ寒い風が吹いている外で、だ。

とても愚かな行いに思えるし、そんな状況の説明を聞かされた所で、読者諸君君達は満足しないだろう。

そこで、僕の暇潰しに少し付き合っって貰いたい。本を読むのも飽きてしまっってね。僕の昔にあった話さ。

……ん？ただの昔話の為にここまで話を引っ張ったのか……：だっって？ああ、それは申し訳ないことをした。こうでもしないと、話の入り方というものが思い付かなくてね。特別編、というものなのだから、多少のメタフィクションや強引さは許して欲しい。

許して貰えるというのなら、僕の昔話をお聴かせしよう。駄目なら今すぐブラウザバックするべきだ。あまりの酷さに目が眩み、こんなとっつつけた様な話のせいで体調を崩してしまうかもしれないからね。

……ここまで読んだのなら、もう話しても良いだろうか？  
……良し、それではしがない独りの男が体験した昔話を語るでしょう。

——さて、今から話すのは、かつてあったとあるクリスマスの日、僕が住んでいた家での出来事から始まった……

『クリスマスが暇なんだけど食べに行かない?』

僕はこの日、あまりの退屈さに痺れを切らして、RAINで友人に外食の誘いを入れたんだ。サンタのくれるクリスマスプレゼントを楽しみにしていた少年は、青年になってからというものは、サンタがプレゼント出来ないものばかりを欲する様になっていたんだ。単位が欲しい、彼女が欲しい、コミュ力に知識、時間が欲しいってね。

『無理！生徒会で食べる予定がある（人wく、；）』

そして返って来たのがコレだ。絵文字を使って感情表現をする辺りが如何にも彼らしい。

だが、本当に困ってしまった。生徒会で食べるということは、もう一人居る友人も予定が空いてないということだ。

そしてこの時の僕は、とうとう家を出て近くのカードショップに行っただ。退屈は毒と同じだと考えていた僕には、どうにかしてこの退屈を解決する様な物が欲しかったのだ。

カードショップはクリスマスの装飾が施されており、『デュエマクリスマスオリパ1回500円!』と書かれたポスターが掛かっていたのを覚えている。僕はオリパというものは滅多なことがない限り買わないのだが、今回はクリスマスだ。試しに一つ買ってみるのも悪くない、と買う理由を付けて一つ購入した。

少々混んでいる対戦ブースの空いているスペースに座り、オリパを剥く。合計5枚入っている様で、ベリーレア以上が1枚確定らしい。

僕はドキドキしながらクリスマスの退屈を吹き飛ばそうとパックに入っているカードを見た。

まあ、所詮はオリパ。希少性の高いカードは、そんなに都合よく出て来てはくれなかった。

はあ……、と深い溜め息をつき、再び退屈になってしまった僕は天を仰ぐ。

そんな時、奇跡が起きた。対戦ブースの壁際に、クリスマスのデュエマ大会の予定が書かれていた。

僕はこれ幸いと、エントリーシートに名前を書きに行く。デッキは

最近構築した新デッキを持って来ていた為、それで出ることにした。ワクワクしながら大会の時刻を待っている僕は、遠目からはクリスマスプレゼントを楽しみにしている小学生のように見えたかもしれない。今考えると少し恥ずかしいな……。

デッキをチラチラ見ているシャツフルは、またチラチラと見てはシャツフルをする。この繰り返しだ。手癖が悪いにも程がある。もう少し態度に出さないよう出来なかったのだろうか？

こんなことをしている内に時間が来て、店員が指揮を取り、大会が開催された。昔のことだから、今思い出すこともどのようないデッキが使われていたのか、あまり思い出すことは出来ない。ただ、クリスマスというお祭りのような日であったからか、ただ好きに楽しむことを目的とした人達が多く、楽しみながら勝つことを目的とした環境デッキなどを見なかったことは覚えている。僕もその一人で、1回戦、2回戦と勝ち進んで行ったんだ。

そして迎えた決勝戦。負けた人達と店員さんが囲む卓の中で、それは行われた。

「えー、クリスマス大会決勝戦を行います。『惨タム』さんと『肝つ玉メリー』さんは準備が終わったら始めて下さい……はい、それじゃ始めます」

「お願いします」

『惨タム』と呼ばれた俺は先行、手札を見て一波乱起こりそうな手札だな、と思った。悪い訳では無いのだが、良すぎるのだ。

向こうの『メリー』さんも俺の超次元を見て置き次元かと疑っている様子だった。まあ、俺も初見だったらそう思う。というより、今の反応であちらが俺のデッキの動きを見ていなかったことが判明した。情報アドとしては重要だろう。

「《プチョハンザ》をマナへ、ターンエンド」(マナー)

「成長かなあ……？ドローします。《終の怒流牙 ドルゲユキムラ》をマナに置いて、ターンエンド」(マナー)

安心しろ、成長ではない。というかアナタもインセクト型のユキムラデツキじゃないですよね？そこが怖いんですが……。

「ドローします、《テック団》をマナへ、ターンエンド」(マナ2)

「あれビmanaか……？ドローします。《水上第九院 シャコガイル》をマナに置いて、2マナで《デスマッチ・ビートル》を召喚してターンエンド」(マナ2)

「うーんデスマッチイイイ……」

一番面倒なのが出て来てしまった。コイツを殺さないと本格的にマズいぞ。

「ドローします……、《フェアリー・ライフ》をマナへ、3マナで《黒豆だんしゃく／白米男しゃく》を唱えます。効果で1マナチャージしてターンエンド」(マナ4)

「……これはビmanaかな。ドローします、《超電磁マクスウェルZ》をマナに置いて、ターンエンド」(マナ3)

「《マクスウェル》が立たない内に……いや、立つても問題ないか……？」

呪文を封じられるのは痛いですが、俺はこのデツキの動きを考えるとそこまで問題は無いと判断した。正直、《マクスウェル》より《デスマッチ》の方がキツイ。

ただ相手が4マナになるのなら、きつとジャイアントデツキにほぼ入っている奴が出て来る筈だ。その時を待つ。

「ドローします、《リバイヴ・ホール》をマナへ、4マナで《フェアリー・シャワー》を唱えます。効果で山札の上からカードを2枚確認し、1枚を手札、1枚をマナに。ターンエンド」(マナ6)

手札に加えたのはこのデツキのキーパーツにして切り札。大分前にもしこんなカードがあったら、と考えていたのだが、公式がそれを出してくれたことと偶然見つけたとあるツインプクトカードで完成したのがこのデツキだ。正直、事故率は低めに感じている。構成の骨組みが長く使っていたビmanaだったからかも知れない。

「ドローします、《ソエルボ・クロウラー》をマナに置いて4マナで《西南の超人》を召喚します。ターンエンド」(マナ4)

見慣れたクリーチャーだ。使っていたこともあって痛い程このクリーチャーがジャイアントのデツキで活躍するのか良く理解している。次のターン、きつとこの人はドルゲを出す筈。その前にプランを崩すしかない。

「ドローします、《プチョヘンザ》をマナへ、6マナで《ドルツヴァイ・アステリオ》を召喚。マツハファイターの効果でアンタップしている《西南の超人》を攻撃します。何かありますか?」

「あぁー……いや、無いです」

相手が《ドルツヴァイ》入ってんのかぁ……ヤバイヤバイと小声で焦りを口に出しているのが聞こえる。予想外の一手だったのだろう。

「《ドルツヴァイ》の効果でバトルに勝ったことで山札からマナを2倍にします。ターンエンド」(マナ14)

「ドローします、《仁王の超人》をマナに置き、4マナで《怒流牙 佐助の超人》を召喚します。効果で1枚ドロー、1枚捨て、墓地から1マナチャージ。ターンエンド」(マナ6)

14マナもあれば本来このデツキは1ターンで決めに掛かれるのだが、《テスマッチ》があまりにも邪魔過ぎる。

山札も残り16枚だ。悠長なことはあまりしてられないだろう。

「ドローします、《ドルツヴァイ》をマナへ、11マナで——」

このデツキの切り札は、何やかんやであまり使われない11という重いコストではビマナではまずライバルが多すぎるクリーチャー、その正体は——

「《最高学府 インテリエイル》を召喚します」

「え、《インテリエイル》?え、何か嫌な予感してきた」

面白そうな効果だけどその重すぎるコストから「デリートでおk」とか言われたりする可哀想な子《インテリエイル》。ただ、コイツでしか出来ない面白いコンボを閃いた。偶然にもそれは割と実現しやすい癖にロマンがあった。

そして、閃いたのならば組むしかない!それがデツキビルダーの衝動というモノだ。

「ターンエンド」(マナ15)

「ドローします……いやでも《デスマッチ》居るからまだ大丈夫かな……? うーん……《ルナ・コスモビュー》をマナへ、まあ一応出しとくか。《デスマッチ》をもう一体召喚し、ジャイアントが3体、アース・イーターが1体居るので、合計4つコストを軽減し、4マナで《剛撃戦攻ドルゲザー》を召喚します。効果で合計6枚ドローします。ターンエンド」(マナ7)

やっぱり凄いな《ドルゲ》。アド獲得力が段違いだ。環境にまでのし上がったという記憶はないが、中堅デッキとしてもその強さは結果からも読み取れていた。が、いざ相手すると面倒だな。このデッキも次からはもつと手軽にパワーの高い低コストクリーチャーを除去出来るようにしなければ。

「ドローします。マナはチャージせず、7マナで《テック団》を唱えます。効果は5以下を対象にします」

「あ、マズい!」

ふへへへへ、さあ手札へ戻れ《デスマッチ》と《サルトビ》よ。お前達は手札でこの長つたらしいコンボを見させられるのだからな!

などとヒールめいた台詞を胸中で話していた僕は、遂にコンボのスタートを宣言する。

「更に5マナで《リバイヴ・ホール》を唱えます。効果で《黒豆だんしやく／白米男》を回収。超次元ゾーンから《勝利のリユウセイ・カイザー》をバトルゾーンに」

ループが、始まる。

「《インテリエイル》の効果で手札に加えた《黒豆だんしやく／白米男しやく》を唱えます。効果で1マナチャージし、マナから《奇石 アンコバ／ブツブツ・レイン》を回収します。そして《インテリエイル》の効果で《奇石 アンコバ／ブツブツ・レイン》を唱えます。効果で墓地から《リバイヴ・ホール》を回収。再び《インテリエイル》の効果が発動し、《リバイヴ・ホール》を唱えます。効果で《奇石 アンコバ／ブツブツ・レイン》を回収します」

「……あれ?」

お、初見でお気付きになられるとは。良い目をしてらっしやる。周囲の人達も気付いたかな。

「効果で《勝利のプリンプリン》をバトルゾーンに。そして《インテリエイル》の効果で《奇石 アンコバノブツブツ・レイン》を唱え、墓地から《リバイヴ・ホール》を回収します。これを繰り返し、超次元ゾーンから勝利セットを2つと《ガンヴァイト》を1体バトルゾーンに出します」

さて、勝利セットが揃ったのなら、やることは一つだ。

「《生姜》と《醤油》と《勝利プリン》でV覚醒リンクし、《唯我独尊ガイアール・オレドラゴン》を2体形成します」

——おお・・・

観客から漏れ出る声に気分を良くした俺は、更に《インテリエイル》を酷使する。

「そして手札に戻る《奇石 アンコバノブツブツ・レイン》を再び《インテリエイル》の効果で唱え、今度は墓地から《テック団》を回収し、《インテリエイル》の効果で唱えます。対象は《ドルゲ》で」

「あー、死んだか・・・?」

よし、行こうか。

「《オレドラゴン》でワールド・ブレイクします」

「受けます・・・トリガー無いです」

「じゃあ・・・《ドルツヴァイ》で攻撃します」

「ニンジャストライク5で《佐助の超人》を召喚し、効果で1ドローして《バイケン》を捨て、墓地から1マナチャージ。《バイケン》効果で《ドルツヴァイ》を戻します」

「じゃあ《インテリエイル》で攻撃します」

「ニンジャストライク5で《佐助の超人》を召喚し、《バイケン》の効果で1ドロー、自身の効果で1ドローし《バイケン》を出します。《バイケン》効果で《インテリエイル》を手札に戻します」

む、意外と耐えるな。少しマズいかな？

「《オレドラゴン》で《バイケン》を攻撃します」

「無いです」

「バトルに勝ったので効果でアンタップ。もう一体の《バイケン》に攻撃します」

「無いです」

「効果でアンタップ。《オレドラゴン》で攻撃します」

「んー……無いです。ありがとうございます」  
「危なかった。《オレドラゴン》2体に少し油断してしまったのが原因かな。」

「何か《インテリエイル》で超次元の穴ガバガバだったんですけど」  
「きつとサイキックがトランザムしてたんですよ」(適当)

さて、優勝者には景品が貰えるらしい。何だか気になるな……  
店員さんがチケットのようなものを持っているような……  
？商品券だろうか？

「はい、本日の優勝者は『惨タム』さんです！本日の1位の景品は『スタミナ次郎』さんの食事券です！」

あー、カード関連じゃないのか。まあ、嬉しいものだし、何よりも試合がかなり楽しめた。退屈も感じないからこれで満足かな。

こうして大会を終えた僕は、確か……ああ、そうだ、RAINでアイツに優勝したことを報告したんだっけ。その時に食事券の話をしたんだけど――

『あ、そこで食べてる』

なんて返信が来たときにはビックリしたよ……ホントにね。  
その後、僕は『スタミナ次郎』に行ってみたんだ。そうしたら、アイツの言った通り、その時の生徒会のメンバーが居てね。勿論アイツや彼女も居たな。手招きされた僕はホイホイとそこに座り、楽しい楽しいクリスマスを過ごしましたとき。

え？もつと詳しく？そうだな……ああ、僕が大会で何して来たのか聞かれたから、答えてやったな。そしたら何故か、「オレドラゴン2体とかお前クリスマスに殺意高過ぎだろ」とか全員にドン引きされたな。うん。今考えてもアレは酷いと思うな、僕は。

さて、話すことは話したけれど、正直読んでいる君が満足出来ているか心配だ。こんな思い出話なんかを聞かされて、イライラさえして

いそうだ。

でも、安心してくれ。もうこれ以上はイライラするような昔話を追加でしなくて済みそうだ。

「遅くないですか？」

「ごめんね」

さて、クリスマスを満喫しますかね。

## うぐいめく物語

秋特有の乾いた風が吹く住宅街のとある一軒。

学生達が夏休みを終え、学校へ行っている中、子供が居なくなり暇が出来た母親はTVのニュースを見ながら気怠げな表情で床に寝転がっていた。

『次のニュースです。Zプロジェクト事件の主犯とされていた夢原翔真ゆめはら死刑因が今朝、東京拘置所への搬送中に逃亡したことが判明しました——』

「なあ、どこ出身!?!」

「何か好きなカードとかあるの!?!」

「デュエマ以外に何かやってる!?!」

「えーっと」

どうも白菊 雪です。現在進行形で困ってます。

前回、委員長とのデュエマを全校生徒の前でVR機能を使用しプレイしたのだが、試合が終わった後、生徒は教師の指示に従いそれぞれの教室へと移動。俺も移動することになり、2ーBの教室へと移動したのだ。

そして、俺が教室に入ると一斉に人が押し寄せて来たのだ。物珍しさから来る行動なのは理解出来るが、それをされている側からすれば面倒なことこの上ない。

俺が慣れない今の状況にどうすべきか困惑していると、見知った顔の生徒が助け出してくれた。

「ほら、めっちゃ困惑してんじゃん。はい解散解散」

「えっ、憐……」

「久し振りっすね雪ちゃん」

憐が解散と言うと、集まっていた生徒がワラワラと散っていく。流石に迷惑だな、と思いい行動したようだ。

お前ここのクラスだったのか……

「久しぶり。で、俺はこの後どうしたら良いかな？」

「先生の指示を待つしか無いんじゃないっすかね？」

先生が来るまでか。それまでどうするべきか……

「あ、」

そういえば、今まで自然過ぎて気にならなかったが、俺の今居るこの高校はどういった高校なのだろうか？カード専門らしく聞こえたのだが。

詳しい説明を隣に要求すると、隣は頭を掻きながら自信無さ気に話し始める。

「えーっと、絵札専高、良く使われる略称はF専なんだけど、カードゲームを専門とした高校っすね。確か高校が掲げているのは、世界に通ずるカードゲーマーの育成、だったっすかね？多分」

「専門なんて場所に試験も無しで入れるものなのか？普通」

「それは雪ちゃんか……あー、良いのかな……？」

「……？どうした隣？」

いきなり口ごもる隣を不思議に思っていると、教室の扉が開き、この教室の担任と思わしき男性が入って来た。黒髪黒目に黒のスーツ。黒のネクタイに黒い靴と、至る所が黒だった。

「はい、着席して下さい。えー、この後の予定なのですが、予定を変更し、下校となりました」

——おおー！

——何でだろ？

「え？何でだろ？まあ良いや、続きは後で」

唐突な発表にざわめくクラス。隣が着席したのを確認し、何故なのか理由を話さない担任は淡々と生徒に報告を続ける。

「二応、要望があれば白菊への質問などはするが、簡潔にし、質問は1人1つにすること。良いな？」

——はーい！

担任が質問のある者は挙手、と言うと、見た目からパリピと感じられる男女が何人か手を挙げていた。陽キヤならまだしもパリピは苦

手な雪は勘弁して欲しいと思いつつも、質問に答えていった。

——好きな人居る？

「居……ないかな」

——どこ中？

「記憶喪失だから分からないですね。すみません」

——記憶喪失って何で？

「理由は僕も知らないですね」

——隣とはいっ知り合ったの？

「夏休みにな……道に迷ってる時に」

嘘もあるが、誤解は生みたくないで仕方なし。凧さんの家とか言った日にはまともな男子の友達が出来なくなりそうな上に女子ネットワークで最悪死ぬしな。

——というか前提としてそういう話は隣に迷惑を掛ける可能性がある。あまり迷惑は掛けたくない。

「他居ないか……じゃあ終わりにするぞ」

「きりーつ、礼」

——この後遊ばない？

——ダイダロス行こうぜ？

「あー、言い忘れてたが今日は外出を禁止します。先生達が見回りしてるからしてるのバレるからな？」

——はあ!?

——ふざけんなよ……

ん？外出禁止なのか……残念、カードショップに寄ってみようかと思っただけだ。

俺は落胆を表情に出さずに何気なく窓を見る。

空を覆う灰色の雲は、どこか不穏な気配を感じさせていた。

「さっ、雪ちゃん帰るっすよー」

「ん。凧さんは待たないの？」

「ああ、RAINで『ちよつと用事あるから今日は待たなくて良い

よ』って会長からメッセージが」

下駄箱から外靴を取り出した雪はスマホを片手に雪を待っている隣に風を待たないのか質問するが、どうやら風は何か用事があるから一緒には帰れないらしい。

「まあ、気にする程の事でも無いでしょうし、俺も会長と帰り同じなのはすぐその信号前までつすからね」

「あ、そうなんだ」

じゃあ隣からしたら帰りは待たなくてもそこまで問題ないのか。にしても困ったな……

「隣、ここから風さんの家までの道、説明出来る？」

「え？まあ、そりゃ一応」

助かった……。

「なあ、別に送ってとは言っていないんだけど」

「良いじゃないすか。俺、家帰っても正直退屈なんで。こうして雪ちゃんに会長の家まで案内するという大義名分があれば、もし先生にバレても怒られることは無いっすしね」

「お、おう」

隣が本当にそう思っているのなら良いのだが、やはり何処か悪い気がしてしまう。心の中で謝っておこう。

そうして住宅街が並ぶ帰り道を歩いていると、隣は何かを思い出したかの様に話し掛けて来た。

「そういえば、雪ちゃんはどこまで記憶喪失なんすか？」

「この世界が新世界に感じる位には記憶が無いかな」

「重症っすねえ……。じゃあ、会長についてとかは？」

「全く。生徒会会長でF専に通う俺と同じ高2の命の恩人、みたいな認識」

赤の他人、という訳では無いのだが、どこかまだ同じ家に住んでいる人、という認識が持ちにくいのは確かだ。全然知らないことの方が多い。

「成る程な……」

「憐は風さんについて何か他に知ってることない？」

彼氏に彼女について聞くのが一番だろう。雪は憐と風さんが付き合っているという憶測でそんな質問を試してみた。結果として、憐は雪の知らない風についての説明を幾つかした。

「まず会長はF専の優等生に位置付けられてるっすね。成績が優秀なんすよ。だからF専の2年ではそれなりに有名っすかね」

「へえ……やっぱり頭良いんだ」

「でも完璧って訳じゃないんす。会長は成績優秀とは言っただけで、それは評価全体で見えた場合なんすよ」

ん？それってつまり……？

「テストで1位とかそういう訳ではないってこと？」

「そうっす。授業態度やノート評価などは凄まじいんすけど、テストは周囲と同じで並みなんすよ。俺と同じ位っすね」

そうか、そういう意味で成績優秀なのか……

俺は憐の説明を聞いて心の底から安心した。

「ふう……良かった」

「ん？何がっすか？」

「風さんが完璧過ぎて自分と同じ人間かっ!?!って思う所だったんだけど、ちゃんと欠点があって安心した」

「そうっすね。今の雪ちゃんと同じことを、クラスの皆は思ってたんすよ。あー、そうと知らなかった頃が懐かしいなあ……」

もし風さんが完璧超人だったのなら、孤立していたのだろう。だが、風さんの欠点が、クラスの人に安心感を齎したのだろう。自分と同じ所が、あの人にもあるんだ、と。

雪はそう結論付け、気になっていたことを憐に聞く。

「そういえばさ、あの時なんて言おうとしたの？あの、言っただけのっすよ」

「あー、実は雪ちゃんに言うとかマズいんじゃないかなあって話題なんすよ、ソレ。会長の心配していた姿を見た俺が言うのは流石にどうかなって」

「あー、理解した。ゴメン」

何か言えない事なのだろう。とても気になるが、いつか聞けることだと思い、我慢するしかない。

「いや、秘密にしているこっちが悪いっすから。謝るのは雪ちゃんじゃなくて俺と会長っす」

「……そっか」

そうこう話している内に、柴崎家に到着した。家までの道は覚えたので、これでもう隣に案内させてしまうことは無いだろう。

「じゃあ」

「んじゃ、また明日っす」

お互いに手を振って別れを済ます。さて、家に入るか、と家の方を向き、1歩歩き出そうとした。

その時だった――

「……」

寒気がする。

ナニか変な感じだ。

汗ガ止マラナイ。

苦シイ。

――どこだ……

声 g a 聞 コ エ r u 。 聞 キ 覚 エ n o ナ i ハ z u ノ 声 。

ダガ、何カ g a 訴 エ t e i r u 。

奴 d a 。 奴 g a 来 タ n o ダ 。

逃 ゲ ナ ケ レ バ

逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ

口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ

口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ口逃 ゲ

——そこか………！  
「——ッ!？」

「どうしたの雪君………？」  
「え、あ、嫌、立ち眩みがしただけです」

「?そう?・凧と一緒にじゃないのね」

何だ今の感覚……普通じゃない。

心の底から感じた恐怖の様な感覚。本能が警告を鳴らしていたかの様に感じた。

今のは絶対に気のせいなんかじゃない。

今まで生きて来た中で、初めて感じた感覚だった。思い出しただけで、手が僅かに震える。

「ねえ、本当に大丈夫?」

買い物から帰って家の鍵を開ける舞さんの心配を気にもせず、雪はブーツと立ち竦む。

考え込む雪とは対照的に、雪の体は既に汗が引いて、苦しさも無くなっていた。何だったと言うのだろうか……

「そういえば、早いわね。帰るの」

「あ、ああ、急に先生が帰る様に言って……」

「ふーん……。本当はエスケープしたんじゃないのお?」

「してませんよっ!?!」

本当かなー、と言いながら、舞は雪と家に入る。

……

その姿を誰かに見られているということには気付かずに。

「あの、先生、話って何ですか?」

生徒達が帰り始めた頃、教員室にて女生徒と男性教師が向かい合っていた。女生徒は何故呼ばれたのか理解出来ておらず、何かやらかしたのかと心配そうにしている。そんな女生徒の姿を見て、男性教師はゆっくりと話し始めた。



「……分りました」

「ありがとう。本当に感謝するよ。私達教員も、警察も、必ず白菊君を助ける」

確証の無い言葉を口にする教師だが、凧はそれでも、その言葉を信じたかった。

「ふう……柴崎さん帰ったか」

「にしても、嫌な話だねー」

「ねー？凧ちゃん可哀想だったよね」

「そういうえば、Zプロジェクト事件ってどんな被害出たんすか？俺、その頃海外に居たんで詳しく知らないんすよ」

「あー、僕ももう覚えて無いんすよねー」

「うわー、二人ともそれは無いですよ」

「Zプロジェクト事件ってのは、当時天才だと言われていた夢原翔真を代表として実行した国の企画、Zプロジェクトで起きた事件なんだよ」

「Zプロジェクトとは、スポーツとなったカードゲームで負け続きの日本を強豪国にする為の選手育成プロジェクトだったんだ」

「そして、そこで事件は起きた」

「Zプロジェクトは企画段階の内容では大きく纏めるとただプレイヤーが限られたカードでデッキを組み、対戦をするという内容だったんだ。だが、夢原がしたのは全くの別物だった」

「あ、そこからは俺も覚えてますよ。確か、大量自殺に追い込んだんですっけ？」

「まあ、それは結果で。そうなった理由は、企画の途中で夢原が急遽内容をより良くすると言ってプランを変更したことにある。しかも国には言わず、独断だった」

「その内容は、限られたカードでデッキを組み、対戦。そこで勝った者が敗者に対し、夢原の提示する3つの条件の内どれかを飲ませることだった」

「その3つって何なんですか？」

「1つ目は勝者へのカードの提供、2つ目は夢原の研究への協力、3つ目が——自殺だった」

『明けおめ〜』

『明けおめつす』

「明けおめ……つと」

AM0:00をスマホが表記する中、凧と憐からのRAINに雪も同じように返す。

新年を迎え、新たに1月1日がやってくる。新年の迎え方は人それぞれだが、雪は年明けの瞬間に完全勝利UCを、凧はRAINの女子のグループで会話しながら、憐は部屋の床中にバロムを敷いて合掌することで新年を迎えた。おいお前ら凧さん見習えよ。

『あ、明日ダイダロスで正月大会あるけど逝く?』

『ミス、行く?』

『憐さん、逝くんですか?w』

『www』

上から憐、雪、凧である。

ダイダロスとは、雪達F専が通う事の多いカードショップの名前である。カードをファイル形式で管理しており、全てのカードがファイルにある為、欲しいカードがあれば直ぐに手に入ることから粘度の高い客が多いことで有名だ。

それに加え、ダイダロスは珍しくVRデュエルが可能な場所でもある。通信販売が進化して行く中、こうしたカードショップは如何に通信販売では味わえない魅力を作って行くかが店の存続に掛かっていた。ダイダロスはVRデュエルが正にそれだったのだ。

『今回はオールカップじゃなくてホワイトカップらしい』

『白か』

『さあ！行きますよ！伊原さん、白菊さん!!』

瞬時に脳内に流れる某紫色の宇宙人ボイス。それにしてもこの會長、ノリノリである。

『じゃあ明日の13:00なんで忘れずに』

『了解』

『了解〜』

2019年1月1日、ホワイトカップ開催。

ダイダロスの中は既に沢山のカードゲーマーで賑わっている。中でもこの時間はデュエマプレイヤーが多い。

「あ、凧さん。隣居ました〜」

「あ、居た居た」

「ん、ああ、来たっすね。じゃあその席にでも座りますか」

ホワイトカップと呼ばれる光文明をデッキに15枚以上必要とされるこの大会では、そのルールから自然とプレイヤーは光文明をメインにしたデッキが多くなる。中には光はS・トリガーのみという者も居るが、そういった違いを楽しむ為の大会でもある。

過去にダイダロスのホワイトカップで多く見られた優勝デッキタイプは赤白轟轟轟とサツヴァークの2種類。方や速攻なのに対し、もう片方は耐久型と、同じ光文明でこうも正反対になるのもこの文明大会の魅力でもある。

「エントリーシート書いたっすか？俺は普通に『バロムの尖兵A』っすけど」

「書いたよ〜。『復活の惨タム』って」

「私は変わらず『会長』って書いて来た」

エントリーシートの名前は自由だが、ふざけ過ぎでは無いだろうか？何だ『復活の惨タム』って、通常の3倍の速度出せるようになってから出直して来い。というかクリスマスは終わった。

「憐、大会っていつからだっけ？」

「もう始まるかと」

「んじや準備するか」

「そうだね〜」

お互い、デッキを見せないように使うデッキをバッグから取り出す。それと同時に店員が大会の対戦表を発表し、その指示を受けた雪と凧、憐はそれぞれ違う卓で対戦相手とゲームをする。全4卓で一番最初に終わったのが凧であったのは、流石昨日あれだけテンションが高かった人だと雪と憐は思わされた。

雪の相手は赤白轟轟轟、S・トリガーでカウンターを決めた雪は危なげに1試合目を突破。憐は青白サザンに追い詰められるも、無事に勝利することが出来た。

速攻とか糞だわー、と愚痴る雪と憐。尚、速攻からすれば耐久とか糞だわー、という感想である。速攻と耐久は相容れることの無い宿命なのかもしれない。

雪と憐、凧が感想戦をしている内に、大会は着々と進行して行く。VRの迫力あるクリーチャー達が暴れ回る映像があちこちで見受けられる。広い店だからこそ、クリーチャーもここまで迫力があるのだろう。クリーチャーが映像化している分、何のデッキか遠目からでも分かってしまうという難点もあるが。

「えー、それでは第2試合を開始します。呼ばれた方から準備が出来次第、ゲームを始めて下さい。『バロムの尖兵A』さんと、『復活の惨タム』さん——」

遂に始まる第2回戦。定員MAXの16人集まったホワイトカッブも、現在8人しか生き残りは居ない。しかし店内の客は減る所か増える一方。冬だというのに暑く感じるくらいだった。

「呼ばれたな」

「行くっすか」

「『逝く』の間違いじゃないか?」

「さあ！逝きますよ！復活の惨タムさん!!」

道連れとか聞いてない。憐の発言を耳にし、周囲の観客は雪と憐を

面白がり、その試合を間近で見ようと群がる。昨日の事件をネタにしてきた雪への憐の些細な仕返しだった。

——通常の三倍の速度を誇り、自分をサンタと自称する奴と何故か光文明に特攻仕掛けて来たバロムの尖兵って濃すぎない？

——正月だしな

観客も既に二人のエントリーシートの名前だけで盛り上がりつついる。もしここにエンタメカードゲーマーのような人物が居れば、かなり高評価されていたかもしれない。

「おい憐お前ふざげんなめっちゃ見られてんじやん」

「デュエルで………笑顔を………」

よし決めた。今日ここでコイツを殺す。

雪はゲームの準備を終えると、そう胸に誓った。

二人の準備が終わり、VRフィールドが展開される。二人の目の前に先行後攻の表記が現れる。

「俺のターン、《音階の精霊龍 コルティオール》をマナへ、ターンエンド」(マナ1)

「ドロー、《フェニックス・ライフ》をマナへ、ターンエンド」(マナ1)

初見なら、《コルティオール》なら連ドラか？と思うかもしれない。だが生憎と、憐は雪のデッキが何なのか、1回戦の試合を確認している為知っている。そして雪もまた、バロムの尖兵と名乗っておきながらエンジェル・コマンドを使う憐のデッキを把握している。

つまり、情報はほぼ開示されている状態でのデュエル。試されるのは単純な先読みとプレイング、デッキ構築の腕。

「ドロー、《深海の伝道師 アトランティス》をマナへ、ターンエンド」(マナ2)

「ドロー、《閃光の守護者ホーリー》をマナへ、ターンエンド」(マナ2)  
「動きは無し……っと。ドロー、《アトランティス》をマナへ、ターンエンド」(マナ3)

動きが無いあまりにも静かなゲームに、観客も釣られて静かになる。マナのコストが高いということから、ビマナのようなタイプかと思っていたようだが、フェアリー・ライフを確認出来ない為、そ

の予測も正しいものなのか怪しくなってきた。

「ドロー、《緑銅の鎧》をマナへ、2マナで《フェアリー・ライフ》を唱え、1マナチャージ。ターンエンド」(マナ4)

遂に憐が動いた。マナが1増え、そろそろ動いて来る頃合いと雪は判断する。

「ドロー、《ホーリー》をマナへ、2マナで《奇石 ミクセル／ジャミング・チャフ》を召喚。ターンエンド」(マナ4)

浮遊する円盤のような石。その様に例えられる造形をしたクリヤー、《ミクセル》は目に見える妨害電波を垂れ流し、バトルゾーンに居座る。

「……ドロー、《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》をマナへ、5マナで《スターゲイズ・ゲート》を唱え、手札から《新・天命王 ネオエンド》をバトルゾーンに」

「《ミクセル》の効果で山札の下へ」

「《新・天命王 ネオエンド》の効果でかわりにシールドを2枚手札に加え、ターンエンド」(マナ5) (シールド3)

神々しき姿をした光の龍、《ネオエンド》が《ミクセル》の妨害電波をもろともせず降り立つ。

強引に《ミクセル》の効果を撥ね除けて見せた憐。シールドは減ったが、かわりに減少した手札を増やし、万全の状態と言った所だろうか。

しかし、雪もそれは想定内。《ミクセル》が居る状態で打開されるとするならば真・エスケープやPパーフェクト・ギャラクシーGギャラクシーのような能力を持ったクリヤーくらいしか憐のデッキタイプにはそう居ないはず。そう考えていた。

憐のデッキはプロツカーを主軸とした天門デッキと酷似している。超次元が無いことや、踏み倒すのに必要では無い《フェアリー・ライフ》や《母なる星域》と組み合わせさせて使われることの多い《緑銅の鎧》などが入っているのは不明だが。前の試合で意図的に憐が情報を隠しながらプレイしたのだろう。

まだまだ憐のデッキの真の正体は分かっていない。が、雪の計画は

既に実行されている。《ミクセル》で出来るだけ《シールド》を減らす。これだけだった。

「ドロー、《エイエイオー》をマナへ、ターンエンド」(マナ5)

「ドロー、《龍幻のトラップ・スパーク》をマナへ、ターンエンド」(マナ6)

着々とターンだけが過ぎて行く。あまりにも、静か過ぎる。

既に10ターンが経過している。普通は呪文やクリヤーチャーが盛んに登場する筈のターン数だ。観客もあまりの静けさとプレイヤーの無表情さに異質なものを感じ取る。

「ドロー、《南国別荘 クジハウス》をマナへ、ターンエンド」(マナ6)

「ドロー、《ネオエンド》をマナへ、4マナで《フェニックス・ライフ》を唱え、効果で山札の上から2枚を見る。そして1枚をシールドに、1枚をマナへ。ターンエンド」(マナ8)(シールド4)

手札は3枚、マナは8、大型をこれから憐は出して来るだろう。……いや、出す。確実に。憐は雪のデッキを知っているが故に攻撃出来ない。カウンターを受ければ、今のままでは負けてしまうから。雪の操る見えない軍勢に、蹂躪されるしか無いから。

「ドロー、《プチョヘンザ》をマナへ。5マナで《奇石 ミクセル/ジャミング・チャフ》を唱える。効果で1ドロー。ターンエンド」(マナ7)

「《チャフ》か……。ドロー、《ヘブンス・ゲート》をマナへ、8マナで《天門の精霊 ヘブンス》を召喚。効果で手札から《ネオエンド》をバトルゾーンに」

「っ、《ミクセル》効果」

「《ネオエンド》の効果で除去を回避、シールドを2枚手札に加える」(シールド2)

上手い。ミクセルの効果を回避しながら、手札を途切れさせない憐の手腕に、雪は感服する。そして雪に取って、これはかなりピンチである。

雪の予定では、シールドを5、3、1と追い込み、除去耐性を使えない状況を作り出すことが目的だった。しかし、憐の《フェニックス・ライフ》が状況を変えた。《ネオエンド》の耐性ストックが1つ増えて

しまったのだ。それだけではない、2体目のネオエンドとなると、少々骨が折れる。1体目も2体目も、除去耐性のストックはシールドに依存する為変わらないが、それは耐久面での評価。問題は1つ目の効果、自分のドラゴンが攻撃する時、相手のクリーチャーを1体選びリリースする効果。つまり《ネオエンド》が2体居れば、1体のドラゴンの攻撃で2体のクリーチャーがリリースされてしまうのだ。

攻撃は、まだ良いだろう。問題はブロックが出来なくなる点だ。

「ターンエンド」(マナ9)

「う、ドロー。マナはチャージせず、4マナで《メメント》を展開。ターンエンド」(マナ7)

「ドロー・・・よし」

隣の隠されていた真のエースカードが、遂にその姿を現す。

「《ネオエンド》に気を取られ過ぎたつすね、雪ちゃん。俺の本当のエースはそいつじゃない」

「《ネオエンド》じゃ、ない・・・？」

そんな、馬鹿な。

《ネオエンド》は強力なカードだ。コストも大きい上に種族もパワーも優秀だ。これ程のカードがエースじゃない。

仮に隣の言う通りだとすれば、俺は何を忘れている・・・どこかにヒントがあつたはずだ・・・どこか・・・

——ドロー、《緑銅の鎧》をマナへ・・・

《緑銅の鎧》・・・？

「まさか・・・」

「流石は雪ちゃん、今から出すんでその答え、聞かせて貰えるつすか？」

これは推測が、何故、隣が《ネオエンド》と《緑銅の鎧》を使っているか。これが問題を解くカギだ。

《ネオエンド》は固い耐性を持っているクリーチャーだ。攻めにも守りにも強い。しかし、コストが重い。踏み倒す手段が必要だ。

そう考えれば、《ヘブンス》や《ヘブンス・ゲート》を入れるのは、納得の出来ることだ。

そして次に《緑銅の鎧》。コイツは進化、ダーウィンと呼ばれるデッキタイプに入るカードだ。生きた《神秘の宝箱》と呼んで相違無いだろう。

そして、《緑銅の鎧》は《母なる星域》と相性が良い。《ネオエンド》が隣のエースで無いのなら、真のエースは進化クリチャー、それもエンジェル・コマンド、もしくは光文明を進化元とするのでは無いだろうか？

そしてコレは、あくまでも可能性の話なのだが、ダイダロスの大会で過去に多く見られたらデッキタイプを隣は知っている。赤白轟轟轟とサツヴアーク、どちらも光の呪文を扱う。天門という受けの強いデッキならば速攻を警戒せずともそれなりには戦えるだろう。しかし、サツヴアークだった場合、裁きの紋章で除去される可能性はかなり高い。つまり隣のエースが光以外を封じる《アルファディオス》である必要性は、ほんの少しだが、低くなる。赤白轟轟轟なら、盤面に並んだ低コストクリチャーの除去が出来なければ負けに繋がってしまう可能性が無い訳でも無い。なら、盤面を除去出来なければいけない。

この時点で2枚のカードが思い浮かぶ。そして、この盤面を出すカードならば、どちらか予想がつく。

「《偽りの悪魔神王 デス・マリッジ》………違う？」

「流石、当たりつす。《ヘブンス・ゲート》をマナへ、《緑銅の鎧》を召喚、効果で山札から《デス・マリッジ》をマナへ、3マナで《母なる星域》を唱えるつす。《緑銅の鎧》をマナへ送り、マナゾーンから《デス・マリッジ》を《ヘブンス》の上に進化」

《デス・マリッジ》、遂に降臨。歪な神、偽りの神が戦場に躍り出る。

戦場に鳴り響く不協和音の祝福の音。恐怖を撒き散らすその姿に、雪は焦燥感を露わにする。

「バトルゾーンに出た時の効果で《ミクセル》を破壊、更にお互いのマナゾーンから呪文を手札へ戻す。ターンエンド」(マナ6)

「う………了解」(マナ6)

隣の手札へ戻って行く《フェニックス・ライフ》に苦い顔になる雪。

これで隣のシールドは回復され、《ネオエンド》の耐性を突破することが出来なくなる。

「ドロー・・・2マナで《奇石 ミクセル／ジャミング・チャフ》を召喚、ターンエンド」

「ドロー」

「メメント効果使います」

「了解、《フェアリー・ライフ》をマナへ、4マナで《フェニックス・ライフ》を唱え、1枚シールド追加、1マナチャージ」(マナ8)(シールド3)

「うへえ」

減らしても減らしても増やされるシールド。並び立つ重コストクリチャー。受けに特化した雪のデッキでも、流石にマズイ。

このターンに《奇石 ミクセル／ジャミング・チャフ》が除去される可能性は減ったが、雪のデッキでは殴ることに向いていない為、このままもし相手が《奇石 ミクセル／ジャミング・チャフ》を出して来た場合、即座に負ける予感がする。

「ターンエンドっす」

勝ち誇る隣、次のターン辺りで決めに来ても可笑しくはない。というよりも、動きの無い雪のデッキに痺れを切らしたのかもしれない。

「ドロー、・・・《プチョ》をマナへ、ターンエンド」(マナ7)

「ドロー、《ヘブンス・ゲート》をマナへ、《テス・マリッジ》でシールドをブレイク」(マナ9)

「来たか・・・受ける」

全てを破壊する偽神の一撃は、シールドを一気に3枚纏めて破壊する。しかし、雪のデッキが動くのはここからだ。受け特化の雪のデッキは、相手のターンにその真価を発揮する。

「S・トリガー、《罨の超人》《ホーリー》《クジハウス》。《罨の超人》の効果で《ネオエンド》をマナへ、《ホーリー》の効果で全てタップ、《クジハウス》の効果で《メメント》を手札へ戻す」(シールド2)

「うー、了解っす。《ネオエンド》の効果は使用せずマナに送るっす」(マナ10)

迎撃隊の怒涛の攻撃を受け怯む憐のクリーチャー達。《ネオエンド》を一体大地へと還した《罨の超人》の姿は何故か格段に恐ろしく見えた。

しかし憐としてもこれは予想外だった。まさか《メモメント》を手札に戻してくるとは思わなかったからだ。しかもそれが《ホーリー》と被ってしまった。ブロッカーの《ネオエンド》もタップ状態ではどうすることも出来ない。

雪の反撃が、憐を襲う。

「ドロー、《アトランティス》をマナへ、4マナで《メモメント》を展開、《ホーリー》でシールドをブレイク」（マナ8）

「受けるっす」

放たれる一筋の閃光。その眩き一撃は音を置き去りにし、憐のシールドを粉砕する。

「っ、S・トリガー、《龍幻のトラップ・スパーク》。ドラゴンが居ることにより効果で《奇石／ミクセル》をマナへ、更に全タップするっす」（シールド2）

「ふざけんなあああ!」（マナ9）

まさか仕込まれていないシールドからピンポイントでトリガーを引くとは思っていなかった雪。新年の運勢は凶といった所だろうか。

美しい緑と黄色の稲妻は螺旋状となって雪のクリーチャー全てに襲いかかる。美しい光景だが、《奇石 ミクセル／ジャミング・チャフ》を除去されつつ全タップされた雪にはそんな風には捉えることが出来ない。

「いやあ今年は運が良いっすね。多分大吉っすわ」

完全に浮かれる憐。しかし残念かな、雪はそれに対しやり返すことが出来ない。何せ受け特化デッキなのだから。

「ドロー」

「メモメント効果」

「了解、マナはチャージせず、9マナで《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》を召喚するっす」

「また面倒なのが……」

「ターンエンド、その時に効果でもう1体《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》をバトルゾーンに」（mana10）

モノアイに戦艦のような姿をした機械の体を持つ天使が2体現れ、隣の場は攻守を更に強化する。増援効果の《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》が2体に耐性持ちの攻守において強力な《ネオエンド》、そして呪文禁止の《テス・マリツジ》。

詰んだのでは？と普通なら思うが、普通じゃない雪のデッキならばまだ可能性がある。

「ドロロー、2体居るんだよな……いやでもやつぱり……よし」

意志を固め、雪は特攻を決意する。隣のデッキ残り13枚が切れるのを待つのは難しいと判断したからだ。

「manaチャージ無し、9manaで《エイエイオー》を召喚。連鎖は……失敗。《罨の超人》でシールドをブレイク」

「《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》でブロック」  
「《クジハウス》でシールドをブレイク」

「《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》でブロック」  
「《ホーリー》でシールドをブレイク」

「受けるっす……トリガーは無し」（シールド1）

2体のクリーチャーの犠牲によりホーリーの攻撃が隣のシールドをブレイクすることに成功する。これで次のターン、隣が《フェニックス・ライフ》を唱えなければ、《ネオエンド》は2枚のシールドを手札に加えることが出来なくなり、完璧な耐性を失う。

しかしこれは脆刃の剣。かわりに雪のブロッカーは《エイエイオー》1体、シールドも2枚とピンチ。《ネオエンド》によって《エイエイオー》はブロック出来ないであろうことは、雪も理解していた。

だからこそ、ピンチだからこそ、掛ける価値があった。  
「ターン、エンド」（mana9）

「ドロロー、ここは……manaチャージせず、《ネオエンド》でシールドをブレイク。攻撃時効果で《エイエイオー》をフリーズ」  
「受ける。S・トリガー……っ、《クジハウス》、《アトランティ

ス》。まず《アトランティス》の効果で相手は自分のクリーチャーを1体選び、それ以外を手札に。その後《クジハウス》を出し、効果は強制、よって《メメント》を手札に。」(シールド0)

「ならこつちは《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》を残し、残りを手札に戻すつす、《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》で攻撃っ！」

決まったな、《クジハウス》を出さなければ勝っていたかも、などと思いつながら周りに居た観客は散って行く。

だが、この瞬間を誰よりも、今正に攻撃している憐よりも望んでいた雪は、この勝負に決着を付けるべくこのデッキのエースカードを場に出す。

「革命0トリガー、《ミラクル・ミラダンテ》を3枚オープン」「な、」

雪の本当の運試しはここからだ。雪のデッキに残る光文明のクリーチャーは残り4枚。しかし、雪のデッキにはまだ18枚のカードがある。この18枚から4枚ある光文明のクリーチャーを1枚引き当てる確率は約22%。

「最後の最後に運試しってことすか……」

「正月だからね……っ」

山札に、手を乗せる。ゆっくりと祈るように、そのカードを捲る。「来てくれっ、」

捲られたカードに、去ろうとしていた観客達も目が釘付けになる。

コスト8、パワー12500。このデッキでは珍しくS・トリガーではないクリーチャー。そして、雪の数多のデッキにおいて、活躍してくれたエースカード。

「お前が来てくれたか……《プチョヘンザ》は光文明のクリーチャー。よって《ミラクル・ミラダンテ》をバトルゾーンに。残りの2枚の内1枚をオープン。光では無いのでデッキトップ固定。効果により次の自分のターンのはじめまでこのクリーチャーに「ブロッカー」を与え、相手のコマンドは攻撃できない。《ミラクル・ミラダンテ》で《星門の精霊アケルナル／スターゲイズ・ゲート》をブロック」

敗北の未来を書き換え、《ミラクル・ミラダント》が颯爽とバトルゾーンに現れる。

黄金の鬣に強靱な足。宝石のように美しい瞳を持つ白き龍は、機械の天使の攻撃をもろともせず、口から放たれた光線により木つ端微塵にする。

「……………ターンエンドっす」(マナ10)

「ドロー、《メモメント》を展開し、《アトランティス》で最後のシールドをブレイク」

「トリガーは……………あ……………無いっすねえ」(シールド0)

「《ミラクル・ミラダント》で、トドメ」

「……………ありがとうございました」

およそ30分に渡る戦いは、劣勢かと思われていた雪の勝利で終わった。

疲労困憊、二人とも終わった後には精神的にクタクタだったと言

この後、雪は準決勝にて敗北し、3位決定戦でも負けてしまったが、凧が決勝で準決勝の雪の相手を完封。堂々の1位となった。

「来年もまた1位になるぞおー!」

「わからないっすよー?会長は来年になって死んでたりして?」

「次回、凧さん死す。デュエルスタンバイ!」

「酷くないっ!?!」

帰りに笑う3人の笑顔は、夕陽に照らされ、美しいものであったという。

## 未知の考え方との遭遇

豪雨の朝、それはいつか見た光景。

誰かの強い後悔の記憶。

『受験勉強、頑張れよ。俺も頑張るからさ』

『うん、絶対受かる。——もちろんと強くなるんだよ〜?』

『……わかっただ、お前も弱くなるなよ』

『帰って来た時には余裕で——のこと越してるから安心して』

『そう、それは楽しみだ』

あの時、もしも彼を引き止めることができなければ。時折、そう思ってしまうことがある。

その度に、あの時の自分に一体何が出来たというのか、と、自分の無力さを自覚させられる。

だから、彼が帰って来た時は——いや、彼を迎えに行った時には、もう私の精神はボロボロだったんだと思う。

涙が出なかった。一粒の涙すら、嗚咽さえ無かった。

きっと、その時の私は、現実を受け入れられなかったのだ。今と変わらない弱い自分には、事態を受け入れる度量など全くもって存在しなかったのだ。

『じゃあな』

別れというものは、突然やってくる。本当の“別れ”など、もう二度としたくないと思う程に残酷なものだ。

もう、会うことは出来ない。私の知る彼は逝ってしまったから。

『帰って来たら、その時はまたデュエマしよう!』

『そうだな』

約束はもう、果たすことは出来ない。

自室の窓から黒い空を見上げ、雪はこの世界で起きた出来事や状況を整理していた。

何故そんなことをしているのか。

家の前で感じた凄まじき恐怖から、雪は早急に元の世界に帰らなけ

ればいけない、と、生命の危機を本能的に感じていたからだ。自分の本来居なかつた世界で死ぬ、何者かに殺されるということを、雪は何よりも恐れていた。

いつからか、雪の目的は変わってしまった。

最初はどうにか帰る方法を考えようとしていた。だが、この世界で生きていくしかない、と、どこか諦めて、この世界を楽しむなどと、現実から逃げていたのだ。

だからこそ、もう一度この世界と向き合いたい。今はこの世界に纏わる情報を整理していくしかない。

まず、この世界にやって来た時。

確か、デュエマがスポーツに該当すると知ったのも、病院で目が覚めた時だった気がする。そして、俺は吾妻さんと共にリハビリをし、退院。その後は学校に顔を出して生徒会を訪れたな……。

そして生徒会の子とデュエマをした後、図書室に寄って何か調べていたな……。確か……。カードゲームの歴史とVR技術について、だったかな？

「そういえば、医療に関する本、結局読んでなかったな……。」  
雪が学校の図書室を訪れた時、VRを活用した医療の本があったのだが、結局読めず終いだっただ。あれも読んでおいた方が何か役に立つかもしれない。

「その後は……。お泊まり会か。憐と実際に会ったのはあれが初……。あ、そういえば、凧さんは俺の幼なじみって病院で言ってたな……。」

顎に手を添えて考える。幼なじみということはこの世界での過去の俺を知っているということだ。病院でわざわざ挨拶に来てくれるような人なら、何か有用なことを知っているかもしれない。

「そうだな……。それと俺が高校に自動的に入れた理由も自然な感じで聞いておくか……。」

話したくないだろう凧さんには悪いが、これも重要なことなのだ。もしかしたら自分はこの世界に来たと錯覚しているだけで、本当に記憶を失ってしまっただけなのかもしれないのだから。

「寧ろ、本当に記憶喪失だったなら、どんなに楽なことだか」

希望的観測なのは分かっている。もし記憶喪失なら、竹宮さんのことなど忘れているだろうし、何よりも部分的には覚えているとは何とも信じ難い。

きつと、記憶喪失になった過去の俺と今の俺は全くの別人だ。舞さんが前より感情が表情に出やすくなったとか言っていたのを思い出す。

過去居た世界とこの世界が違うように、今の俺とこの世界の過去の俺は明らかに違う部分がある。その違いの中に、きつと俺が元居た世界へ帰る方法がある筈だ。全ての謎には答えがある。その答えを、俺は導き出さなくてはならない。

「この世界はカードゲームがスポーツ化している。eスポーツではなく普通のスポーツとして……何かそこに意味があるのか？」  
人々の間で流行し、それが巨大な物となったことで、カードゲームはスポーツ化した。というのがこの世界の歴史だった。そしてスポーツ化に伴い、国の創った専門学校まで存在する。

「……全国にメジャーな存在として普及しなければいけない理由があった……とか？」

eスポーツは正直まだあまり世間一般に知られていないことが多いすぎるのが今の現状だ。その状況を良く思わなかった国は普通のスポーツという枠組みにカードゲームを入れた、と考えることも出来る。

「そこまでしてカードゲームをスポーツにした理由が気になる。eスポーツも時間を掛ければ世間一般に知られていくことも十分に考えられた筈だ。寧ろ、そこまで人気のあったカードゲームなら、eスポーツに導入すればeスポーツ全体への世間の認識が変わるチャンスだと思うんだが……」

まだ分からないことが多過ぎる。

雪は考え疲れ、床に寝そべる。冷たい床が、熱くなった頭から熱を奪って行く。

「はあ……でもまあ、不自然な点は幾つか出て来たな。何故カー

ドゲームはeスポーツではなくスポーツなのか。この世界での俺は何故、記憶喪失になったのか。この2つは特に謎が多い。必ず俺がこの世界に来たことと、帰る方法に繋がっている……気がする」  
この世界に来た方法があるのなら、帰る方法もまたある筈。そう信じる他に雪には無かった。

「まずは『白菊 雪』というこの世界の俺について、風さんからもつと教えてもらおうかしないとな……そういえば、風さん遅いな」  
思考に更けていた雪は、ふと、まだ風が家に帰って来ていないのを思い出す。外出禁止と言われていた為、風さんが一度家に帰って来てそのまま遊びに行っているとは考え辛い。まだ学校に居るか帰る途中といった所だろうか。

「雨、降りそうな感じだけど大丈夫かな」  
空を覆う黒い雲は、見る者の不安を煽るように感じられた。

「はあ……」

公園のベンチに座り、風は教師から言われたことを思い出していた。

「ゆつきーに言った方が良さいんだろけど、多分それは駄目なんだよね」

雪にもし、狙われているかもしれない。と伝えれば、雪は普段よりも周囲に警戒することだろう。相手が犯罪者ならば尚更だ。だが、それでは囷としては機能しない可能性がある。此方は夢原を捕まえるのが目的だが、夢原は少なくともただタイムリミットまで逃げ切れれば良いのだ。追う者と追われる者としては、後者の方が有利と言える。

そんな不利な状況下で雪が警戒心から普段よりも不審な行動を取るようになったでしょう。まず夢原は疑問を持つ筈だ。そうして夢

原が何もせずに逃げに徹した場合、夢原が逃げ切ってしまう可能性がある。あるのだ。だからこそ、雪にはこの情報を伝えることが出来ない。

雪に被害が出る可能性を知っていながら、伝えることが出来ない。

「何が良いことで、悪いことなのか。もう分からないな……」

雪を今後2度と夢原の魔の手に脅えさせずに済むには、雪にこのまま伝えないことが一番なのだ。それは分かっている。

だが、それは今の雪を『裏切る行為』なのでは無いか、とも思ってしまうのだ。

哲学者であつたニーチエの『善悪の彼岸』において、善悪に境界線は無い。客観的に正義と言われるものは定義することが出来ない、と書かれていたが、凧は今、その境界線を誰よりも欲していた。

「絵札専門高校の子かな？」

「え？あ、はい」

迷う凧の横から声が掛けられる。見たことのない20代の男の人だ、黒いスーツと黒い靴から、仕事帰りのサラリーマンだと伺える。

「こんな時間に学校行かなくて良いの？まだ時間的にやっているとと思うんだけど」

「いえ、今日は早帰りだったもので……」

「へえ……それじゃあ僕と同じだね。隣、良い？疲れちゃって」

「あ、どうぞ」

ありがとう、と言い、男は凧の隣に座る。少し間にスペースを開けて座った男の鞆には『時空工兵タイムチェンジャー』のキーホルダーが付いていた。

「あの、それって『タイムチェンジャー』ですよ？デユエマの」

「ん？ああ、そうだけど……デユエマやってるんだ」

「はい……」

会話が途切れる。本来は話す必要など凧には無いのだが、気分を変えたい凧は、どうにか会話を続けようと話題を考える。

それを察してか、男は鞆からケースを取り出し、近くの市民体育館を指差す。

「外だと風で飛んじやうかもしれないし、もし良かったら体育館で

デユエマでもしない？」

「え、あ、はい」

スタスタと体育館へ足を進める男に置いていかれないように付いて行く凧。端から見れば不審者に付いていく年頃の女の子という構図だが、筋肉の全く無い体とふにやつとした表情から、そういうことはしてこない人だと凧は感じていた。

「その机で良いかな」

「えっと、はい」

緊張する凧の姿に思わず苦笑いする男。自分の行動のせいでこうなっているのは明らかかな為、どうにか緊張を解してやりたいと考えていた。

超次元と禁断を置いた男は、凧のデッキをシャッフルし終え、先攻後攻を決めるジャンケンをする。

「最初はグー」

「ジャンケン、」

ポン。グーの凧に対してパーの男。先行は男からとなり、準備されたデッキを動かす。

《支配のオラクルジュエル》をマナに、ターンエンド」(マナ1)

「ドロー、《怒流牙 サイゾウミスト》をマナへ、ターンエンド」(マナ1)

「そういうえば、さっき何か迷ってるように見えただけど、何か学校で嫌なことでもあった？」

「あ、いや、……まあ、少し」

対戦しながら、男は凧に何かあったのかを聞く。その間にもプレイの腕は一切止めない。

「何か相談とかあれば乗るよ。ドロー、《唸る鉄腕 ギリガザミ》をマナに、ターンエンド」(マナ2)

「ドロー……実は、友人に大事なことを教えてあげるべきか迷ってて。《時の法皇 ミラダンテXII》をマナへ、ターンエンド」(マナ2)

成る程な、と男は納得し、デッキからカードをドローする。他の人

には詳しくは言えないような大切なことなのだろうことを察した上で、男は慎重に言葉を選んで質問を続ける。

「それは言ったら問題が発生するから迷っているのかな？ 《アポカリプス・デイ》をマナに、3マナで《サイバー・チューン》を唱え、効果で3ドロロー2捨て。ターンエンド」(マナ3)

「そうですね。言えば長い間、言わなければ今とても、友人を危険に晒してしまう感じです。ドロロー、《白騎士の無限龍ウルフェリオス》をマナへ、3マナで《黒豆だんしゃく／白米男しゃく》を唱え、1マナチャージ。ターンエンド」(マナ4)

「ドロロー、それはかなり珍しい状況だね。言えば長い間危険か……それはまあ、言わない方が良いかもと思うね。《墮呪 ザファイヴオ》をマナに、4マナで《ザファイヴオ》を唱え、2ドロローして《墮呪 バレツドウ》を唱える。効果で2ドロロー1捨て。ターンエンド」(マナ4)

「ですよねっ、やっぱり言わない方が良いですよね……ドロロー、《白騎士の光器ナターリア》をマナへ、5マナで《超次元ドラヴィタ・ホール》を唱え、効果で墓地から《黒豆だんしゃく／白米男しゃく》を回収、超次元ゾーンから《時空の雷龍チャクラ》をバトルゾーンに。ターンエンド」(マナ5)

他者の見解を聞き、自分の取るべき行動を決めようとする風は、男はでも、と更なる意見を口にする。

「君は友人が危険に晒されるのを嫌っているみたいだけど、どうにも避けることが出来ないみたいだね。ならば、考えるべき所は言うか言わないかじゃなくて、アフターケアをどうするべきか、じゃないかな？」

「アフターケア、ですか？」

まあ、違うかもしれないけどね。と苦笑いしながら言う男。

風は自分の考えには無かった考えに耳を傾ける。

「要するに、どう足掻いても危険な状況に陥るのなら、危険な状況下で自分には何が出来るか、どこまで出来るかを考えてから、言うか言わないか選択すれば良いんじゃないかな、って」

「自分には、何が出来るか……」

それは、その答えは、既に出ている。

「私には、何も出来ませんね……」

「ドロー、そんなことは無い筈だ。状況っていうのは変わり行くものだ。《天使と悪魔の墳墓》をマナへ、3マナで《サイバー・チューン》を唱え、3ドロー2捨て、更に1マナで《ラッキー・ダーツ》を唱え、効果で1枚シールドを選んで？」

「じゃあ、これで」

「シールドチェック……呪文だから《超次元ロマノフ・ホール》を唱える。効果で《チャクラ》を破壊してもらって、超次元ゾーンから《時空の邪眼ロマノフZ》をバトルゾーンに。ターンエンド」(マナ5)

《チャクラ》という風の強力なクリーチャーが除去され、代わりに男の《ロマノフZ》が出現し、風の優勢という状況は覆される。

「君は少しネガティブに考え過ぎだ。それはまあ、物事を過信せず真摯にリスクと向き合えるとも著せるけど、重要なのは、もしもは仮定の話だということだ。それに足を引っ張られて何も出来なかったと後で後悔するのは、滑稽だと言う他にないと思うよ」

「滑稽ってっ」

自分のことを滑稽だと言われた風は、思わず少し声を荒げてしまう。

しかし、これは紛れもなく事実なのだから、風は反論することが出来ない。否、反論する気すら無かった。

自分の直すべき点がネガティブだというのは、憐から励まされている自分を客観的に捉えた時に、理解していた。だが、認めることは出来ても、捨てることは出来なかった。

「もし自分がこうしたら、ああなるかもしれない。そういう思考が君は負の観点に振り切ってしまったって感じかな。いわば0かマインスしかない、プラスが存在しないんだ。そんな状態で、正常な予測は出来ないよ」

「ドロー、《斬隠蒼頭龍バイケン》をマナへ、4マナで《フェアリー・シヤワー》を唱え、山札の上から1枚を手札、1枚をマナへ、ターン

エンド。そうですね……確かに、その通りだと思えます。でも、心配で心配で仕方がないんです。絶望的観測が、どうしても頭から捨てられないんです」(マナ7)

自分の弱さから俯く凧。男はここに来てやっと、この『柴崎 凧』という人物の勘違いしているモノに気付いた。

「そうか、君はそれを勘違いしていたのか」

「えっ、」

「いやね、何でもここまで暗く考えているのか、話してて疑問に思ってたんだけど——」

「君は、自分の持つネガティブさを捨てなければならない、と思っただ訳だ」

凧の頭は？で一杯だった。先程ネガティブ過ぎると非難したのは貴方自身ではないか、と。

「ターンの始めに、『ロマノフZ』の効果で山札の上から1枚を墓地に、そして墓地に呪文が10枚以上ある為、覚醒、『邪神の覚醒者ロマノフ・Z・ウィザード』に。ネガティブさを確かに僕は非難したよ。でも、捨てるとは全くもって言っていない。寧ろ、大切にすべきだ」「へ？大切に？」

「そうそう、ネガティブ過ぎる自分を変えるには、ネガティブを捨てるのではなくて、それと同等のポジティブな自分を作る必要がある。均衡を丁度保てる程のね」

それは、考えたことも無かった。ネガティブな考え方を廃止すれば、自ずとポジティブになると、そう解釈していた自分が居た。

「ネガティブを捨てず、ポジティブな見方を覚えろ……そういうことですね」

「そういうこと。そうすれば、幾分かマシンな選択や行動が取れると思うよ。君は物分かりも良いみたいだし、利口だと見える。なら、正しい選択を取ることが出来る筈だ。ドロー、『スーパードデーモン・ハンド』をマナに、『Z・ウィザード』で攻撃する時、Z・ウィザードの効果で山札の上から2枚を墓地に、その後、墓地から闇の呪文である『オールテリート』を唱える」(マナ6)

「禁断の攻撃で負けですね……。ありがとうございます。その、相談に乗ってくれてありがとうございます」

「良いつて良いつて、こっちも暇だったし？誰かとデュエマをする暇も、あんまり無いからね」

大人になると、子供の頃のように遊ぶことは難しくなっちゃうからね、と言いつて、男は入って来た入り口から出て行こうとする。

凧はここまで真摯に話を聞いてくれた男の名前が気になり、慌てて呼び止めた。

「すみません、失礼ですが御名前を聞いても宜しいですか？」

「ああ、僕の？聞いてどうするのさ？まさか……。通報か!？」

「しませんよっ!？」

冗談だ。と男は笑いながら名乗る。

「竹宮 深、しがないサラリーマンだよ」

## 恐怖の影

「ただいまー」

雨が降り止んだ静かな夜。自宅へ帰って来た凧に気付き、雪はデッキリ調整を止めて玄関へと向かう。

「あ、凧さん。遅かったですね」

「ごめん、ちよつと話し込んでしまったね」

先生とこの時間まで話していたのだろうか？

雪は不思議に思いながらも、ひとまず凧に夕御飯が出来ていることを伝える。

「あ、遅いねえ〜？何してたの〜？あ、もしかして、」

「ん〜？特に何も無いですよー？」

疑う母、察知して最後まで言わせない娘。日常的な光景だ。

——アフターケアが大切だ

「……よし」

「ん？どうしたのー？」

「えっ？あ、何でもない」

凧は台所付近から離れ、雪の居る食卓へと足を運ぶ。凧が近付いて来ることに気付いた雪は顔をそちらに向ける。

「あの、雪君に後で話さないといけないことがあって……食べた後、時間空いてる？」

「？はい、特には……あ、僕も少し聞きたいことがあるんで良いですか？」

勿論良いよ、と凧が返事をすると同時に、台所で作業を終えた舞が夕御飯を食卓へ乗せる。

食欲を刺激する匂いを発するホイルに包まれた料理、舞が鮭を買って来ていたことから鮭のホイル焼きだろう。と雪は推測する。

「あ、鮭のホイル焼きですか？」

「お、雪君正解です。後、煮物と味噌汁、ご飯ね」

「お腹減ったなあ、早く食べよう」

——いただきます！

「美味しかった……さて、洗い物をつと……」

「良いよ良いよ雪君、こつちでやつとくから」

「え、あー……じゃあ、お願いします」

はーい、と舞は再び台所に立ち、汚れた皿を洗い始める。本当は手伝う気でいたのだが、相手の好意を無碍にするのは悪いと思い、礼を言つて失礼する。歯を磨いたらお泊まり会以降入っていない風の部屋へ向かう。

コンコンコン、とノックを3回。はーい、と彼女の母親と同じ返事の仕方が入つて来るように伝える。

「お邪魔します」

「あ、雪君。そこ座つて」

風は空いているベッドの上を指差し、雪はそこに座る。自分の机に乗っているPCから目を離し、風は椅子に座つたまま雪と対面する。

——…

沈黙。お互いに話す内容の重さ、重要さから、なかなか先に質問して良いものか、と謙遜してしまつたが故に発生してしまつた事故であつた。

先にこの沈黙を破つたのは沈黙に耐えかねた風であつた。

「あー、あのね、雪君。実はちよつと大切な話があつて……聞きたいんだけど、記憶喪失になつてから、過去の記憶は全くもつて無いんだつたよね……?」

「はい、申し訳ないですが、欠片も覚えてないのが現状です。思い出したことも、全然……」

「……そっか」

軽い確認をした風は、雪が答える間に覚悟を決めた。今から話すこ

とは、1つの決断であり、〃白菊 雪〃が忘れていたトラウマや嫌な記憶を思い出させてしまい兼ねないことでもある。

しかし、怯えたままでは、永遠に成長することなど出来ない。現状を、変えることも出来ない。

「今から、雪君の過去について話そうと思うんだけど、雪君は自分の過去について、知りたいと思ってる……?」

「……その、僕が今回風さんに聞こうと思っていたのは、そのことについてなんです。何故、僕は高校に受験も無しに入れたのか、何故、記憶を失ったのか……」

雪も元の世界に戻る手段が分からない現状で、せめて多くの情報を得なければと必死になっていた。

「ん、分かった。……じゃあ、まずは雪君が記憶を何故失ったのか、から説明するね」

風が真剣な顔付きに変わり、雪は自然と気が引き締まるのを感じた。

「雪君はZプロジェクトの被験者に選ばれたカードゲームだった」

「そういえば、Zプロジェクトって何ですか?」

『Zプロジェクト』という言葉は図書室で本を読んだ時に目にしたが、結局意味を知ることが無かった雪は、そのプロジェクトがどういったものなのかを知らない。意図的に風や憐が伏せていたのだから、当然とも言える。

「Zプロジェクトというのはスポーツとなったカードゲームにおいて敗戦続きだった日本が実行したカードゲーム強化プロジェクトのこと。夢原翔真がプロジェクトを実行したんだけど、そのプロジェクトは途中で狂っていったんだ」

風の表情が苦しくなる。そんな風を心配そうに見る雪の顔を見て、風は大丈夫、と一言告げて続きをその口で語る。

「勝者が敗者に自殺、カードの献上、夢原翔真の研究に協力する、の3つから1つを選ばせる。そんな非人道的なプロジェクトに変わってしまった。そして、多くの未来ある命を、夢原翔真は奪っていった」  
「そんなの、カードゲームじゃないですよ……ただのデスゲー

ムだ」

「そうだね、と風は雪の意見を肯定する。全くもって理解出来ない。いや、理解してはいけないのかもしれない。夢原翔真という化け物の考えなど、きつと普通の人間には到底理解出来ないものなのだろう。「…………でも、選ぶのは敗者なんですよ。なら、カードをずっと献上すれば…………」

「そう、そうしてカードが無くなった人は、強制的に夢原翔真の研究に協力することになった」

甘い考えなど、化け物の前には通用しない。カードを献上するという延命行為は、やがて行った分だけツケを払わされる。

「夢原翔真の研究というのは、人の能力を極限まで高めること、潜在能力の強制発露だった。…………脳を弄くって、例えば完全記憶能力や瞬間記憶能力、高速演算とかを付与しようってね。けど、どれも人為的なもので、実験を受けた被験者は突然の脳の変化に精神をやられて、次々と死んでいった」

脳を弄くられ、死んで行く。それがどれだけ恐ろしく、死に行くまでにどれだけの痛みを感じさせられたのかなど、実際にされたことのない者には想像も付かない。

だが一つ分かるのは、ただ死ぬよりも酷いものであった、ということだけだ。

「夢原翔真は、何でそんな研究を？」

「憶測だけど、夢原翔真は狂っていても、カードゲーマーを強化する、という方針は変えようとはしていなかったと言われている。だから多分、異能を付与することで、日本のカードゲーマーを強化しようとしたんだと思う」

今度こそ、雪は啞然としてしまった。自分の考える強くなる方法とはかけ離れているからだ。

普通、カードゲームで強くなろうと考えたなら、対戦や考察を何度も夢中になってするものであり、その結果、プレイヤーは強くなるものだ。しかし、夢原翔真の強くなる方法というのは、人間の根本的な部分を改造してしまうという遊戯からはかけ離れた考え。あまりに

も異常だ。

「逃げ出そうとする人も居たらしいけど、夢原翔真によって封鎖された強化場は、完全に逃走不可能の実験施設へと変貌していた。そして、連絡手段を持たない彼らは死んで行く人達を見て精神的に追い詰められ狂って行き、次々と自殺を選択していった。そして勝者もまた、何人かが自殺へ追いやった責任感に押し潰され、自殺していった」  
「……僕は、その生き残りなんですか」

雪は凧の説明から自身がZプロジェクトの生存者なのでは？と推測した。到底理解出来ないような重い話を雪は必死になって聞き、自分なりに自身の過去についても考えていた。

凧は首を縦に振る。

「雪君は奇跡的に脳を弄くられる途中で救出された被験者だった。記憶喪失の原因になった脳の損傷はその時のものなんだ……」  
「脳を……弄かれた……?」

雪は途端に恐ろしく感じ、自分の頭に触れる。

ここを、化け物に改造されかけた。その事実が雪の心臓の動きを活性化させる。

「次に、何故雪君がF専に試験無しで入れたのか——」

それは、凧が意志を固める少し前。住宅街にて雨の降りそうな空模様の下で、憐は遭遇した。

パーツの一切無い真っ黒な顔。人と同じ造形をした真っ黒な十二カ。

一見、何か宗教的なもので肌を隠しているのだろうか?と思った。が、全身が黒一色、更には光の反射やしわ等も見受けられないのはあ

まりにも不自然過ぎた。

隣は興味を持ち、話し掛けて見ることにした。一体何をしているのか聞いてみようかと近付くが、目の前の黒い人型は反応を見せず、その場で身動きせず静止していた。

「――」

「何だ……コレ」

不気味、ただただ不気味だった。

言葉を発さず、ただそこに立っているナニカ。落ち葉がナニカに触れるその瞬間、落ち葉はナニカを通過していった。最初からそこに何も無かったかのように。

隣は目の前で起きた現象に驚き、思わずそれまで忘れていた瞬きをする。見間違えではないか、と。

しかし、再び目を開けた瞬間、隣の目前に映ったのは、住宅街に佇むナニカではなく――

「……は？」

黒い空間、闇そのもの。辛うじてナニカが目前に健在なのが分かる。が、住宅街は完全に消えていた。

どこまでも続いているように感じられる謎の空間。音も無く、風も無く、無が支配する空間。

どう考えても、異常事態だった。

「――」

「……っ、何で、VR台が突然……」

音も無く出現するVR台。気付けばデュエマのデッキも準備されている。

デュエマを行う環境が出来ている。しかし隣はする気など更々無い。しかし、出口の見当たらないこの空間でナニカの機嫌を損ねるのは恐ろしく感じ、大人しくデュエマの相手をする。

相手に感情というものがあるのかどうかも怪しいが。

「先行表記は俺からか……このデッキ、家に置いてきた気が……？まあ、良い、《ガリユザーク》をマナへ、ターンエンド」(マナー)

ターンエンドの宣言をした隣だが、対する相手はVRが勝手に全て

の行動を行なう。

「empty—humanは、手札の《偽りの王 ヴィルヘルム》を  
マナへ置いた」(マナ1)

映像に映っている山札からドロウし、《ヴィルヘルム》をマナに置  
く。ターン標記が自分に移る。ふと右を見るとそこには今まで存在  
しなかったはずのVRチャットが出現していた。

VRチャットとは、声を出すことの出来ない障がいを持つ人の為に  
作られた立体映像に文章を出力する機能である。カードゲームがス  
ポーツとして扱われるようになってからはこうした対戦でも度々使  
われることがある。

VRチャットを使用し一言も喋らない、まるで人形のように動かな  
いナニカ。かわりに全ての動作を機械が勝手にに行っているのは、まる  
でゲームのCPUと対戦しているような気分だった。

「empty—humanは、ターン終了した」

「・・・ドロウ、《ダークマスターズ》をマナへ、ターンエンド」(マナ  
2)

「empty—humanは、カードをドロウした」

「empty—humanは、手札の《偽りの王 モーツアルト》を  
マナへ置いた」(マナ2)

「empty—humanは、ターン終了した」

「ドロウ、《ダイス・ベガス》をマナへ、ターンエンド」(マナ3)

隣は相手のマナに置かれた《ヴィルヘルム》と《モーツアルト》を  
見て記憶の中から相手のデッキタイプを推測する。

ブライゼシユートか5c龍のどちらかだと考え、隣は中盤以降ゲー  
ムエンド級のクリーチャーが出てくるのに変わりはない、と少々焦り  
ながらも自分の手札で出来ることを考える。

「empty—humanは、カードをドロウした」

「empty—humanは、手札の《怒流牙 サイズウミスト》を  
マナへ置いた」(マナ3)

「empty—humanは、ターン終了した」

まだ、デッキタイプは完全には分からない。が、相手のマナには全

文明が揃っている。5cを扱える者が少ない今の世の中では、5cと対戦するのはあまりにも稀有な状況だ。憐は目を細め警戒する。

勝って元の世界に戻るのか、それは分からない。が、負けてしまうよりは可能性がある、と希望的観測をする憐は闇の空間で怖気づかずにカードをドロウする。

「ドロウ、《リバイヴ・ホール》をマナへ、4マナで《墮魔 ヴォガイガ》を召喚。効果で山札の上から4枚を墓地へ」(マナ4)

山札の上から捲られては墓地へ送られる憐のカード。《ガロウズ・ホール》《墮魔 ドウポイズ》《ダイス・ベガス》《卍 デ・スザーク卍》と、主要カードが公開される。そうして墓地へ送られたカードの中から、憐は一枚のカードを回収する。

「そして、墓地の《ドウポイズ》を手札へ加え、ターンエンド」

真つ黒人間—— empty—humanのターン。相手が動いて来たことへ何の興味も持たず、映像は勝手に動き始める。

「empty—humanは、カードをドロウした」

「empty—humanは、手札の《霸道》の頂 シュラ・ベーターベン》をマナへ置いた」(マナ4)

「empty—humanは、ターン終了した。」

「ドロウ、《ドウポイズ》をマナへ、2マナで《墮魔 グリペイジ》を召喚」(マナ5)

本来は召喚に3マナ必要である《グリペイジ》は、バトルゾーンに存在する《ヴォガイガ》の効果によりコストを1軽減されバトルゾーンへと送り出される。表紙にグロテスクな目玉が付いた魔導書は、登場と同時に相手の手札からカードを1枚削る。

「《グリペイジ》の効果で相手の手札からランダムに1枚ハンデス」

相手の手札から《修羅》の頂 VAN・ベーターベン》が墓地へ捨てられる。まだマナが溜まっていない上に憐のデッキのドラゴン、コマンドはほぼ居ないに等しい為、そこまでの脅威ではないが、エターナル・Ωを持つクリーチャーを事前に除去出来たのは良い仕事をしたと言える。

憐は更に流れを掴むために積極的にクリーチャーをバトルゾーン

へ出して行く。

「更に3マナで《墮魔 ヴォーミラ》を召喚。効果で山札の上から3枚を墓地へ、ターンエンド」

ヴォガイガによりコストを軽減されたヴォーミラが出現する。ヴォーミラは隣の山札から《ヴォーミラ》《テック団》《墮魔 ドウスン》の3枚を墓地へ送る。墓地に溜まったカードは悪くない。次のターン辺りで隣は自分のエースクリチャーを出せるだろうと判断する。

「empty—humanは、カードをドロウした」

「empty—humanは、手札の《黒神龍ブライゼナーガ》をマナへ置いた」(マナ5)

「ブライゼシユートか…厄介だな」

ブライゼシユートとは、本来逆転の為に使用するS・トリガーを自発的に使用し、その圧倒的制圧力とパワーで相手を叩きのめすデッキタイプである。

本来、S・トリガーというものはシールドが割られればノーコストで使用できるという特性上、コストはその分増え、強過ぎないように調整されたものが一般的だ。だが、デュエマは進化の過程においてスーパー・S・トリガーというものを生み出した。

スーパー・S・トリガーとは、S・トリガーでありながら、ブレイクされた時にそれが最後のシールドであればボーナス効果を発動するというものである。効果は様々だが、その条件からボーナスの効果は強力なものが多い。デュエマの裁定が変更され、シールドが複数枚ブレイクされた時、シールドは一度にブレイクされたものとして扱われ、好きな順序でS・トリガーを発動できるというルールを利用したのがブライゼシユートというデッキタイプである。

「empty—humanは、5マナをタップし、《ミステリー・キューブ》を唱えた」

「empty—humanは、山札をシャッフルした」

「empty—humanは、山札の上から 1枚を表向きにした」

「《フェニックス・ライフ》」

「ふうー……」

もしこれで大型クリーチャーが出ていたならば、憐はかなりピンチに陥っていただろう。クリーチャー限定の《ホーガン・ブラスタ》はギャンブル効果故に心臓に悪い。

「empty humanは、表向きの《フェニックス・ライフ》をマナへ置いた」(マナ6)

「empty humanは、ターン終了した」

周ってくる憐のターン。正直、次の自分のターンは来るのか？と不安でもあったが、何とか周ってきてくれたことに感謝する。

準備は既に出てきている。あまり効果があるかは分からないが、それでも牽制程度にはなるだろう。

「ドロー、《ヴォーミラ》をマナへ、4マナで《墮魔 ヴァイシング》を召喚」(マナ6)

現れるベッドの姿をしたクリーチャー。憐は続けて《ヴァイシング》の効果を使用する。

「《ヴァイシング》の効果。墓地から《ヴォーミラ》をバトルゾーンへ。そして、種族に魔導具とあるクリーチャーがバトルゾーンに出たことにより、墓地の《デ・スザーク》の効果を発動する」

憐が墓地のあるカードの効果を発動宣言すると同時に、バトルゾーンに黒い旋風が巻き起こる。VRによる映像化された強風が吹き荒れる中、憐は蘇った《ヴォーミラ》の効果を解決する。

「《ヴォーミラ》の効果を解決。山札の上から3枚を墓地へ」

強風が憐の山札の上から《ドウポイズ》《ヴォガイガ》《ルソー・モンテス／法と契約の秤》の3枚を墓地へと落とす。

黒き強風はやがて両者の目の前で一つの形へと変容して行く。

東の青龍、南の朱雀、西の白虎、北の玄武。四神と呼ばれる伝説の神獣、その一つである太陽を象徴する大いなるモノが、その姿を顕す。

「無月の門、墓地の《ヴォガイガ》と《ドウポイズ》、バトルゾーンの《ヴァイシング》《ヴォーミラ》の上に、墓地から《デ・スザーク》を召喚」

く。黒き太陽が昇る。憐の操る漆黒の朱雀が、空の人間へと牙を向

## 漆黒の亡者

「《ヴォーミラ》の効果により、墓地から2マナで《ドウスン》をバトルゾーンへ、ターンエンド」(マナ6)

黒の世界に黒き太陽が昇る。見る者を魅了するその美しき姿からは、まるで本当にそこに実物があるかのような錯覚を覚える。

「empty—humanは、カードをドロウした」

憐がターンの終了を告げると、即座にempty—humanはプレイを開始する。

先程から迷いのないプレイを見せるempty—humanを見ていた憐は、empty—humanの正体がAIなのではないか？ と思い始めた。

デュエマを何年もして来たプレイヤーでさえ、迷いという動作を捨てることなどまず出来ない。何故なら、プレイヤーが人間であるからだ。人間である以上、思考せずには居られない。速攻デッキであったとしても、何をマナに置くか、どの順で攻撃するか、くらいは考えるものだ。しかし、アレは完全にそんな人間の行動を見せていない。異常だと言えるだろう。

更に、アレは声を出さない。チャット機能を駆使してデュエマをしている。声を出せない障がいを持っているのかも、という予想は元から憐の考えにはない。人らしい迷いが一切ないプレイに言葉を発さず、更に自分でカードを動かす動作を見せない。勝手にCPUが動かしているのだ。

疑わしい点を挙げればきりが無い。が、憐の結論はある程度固まっている。

きつと、アレはCPUそのもの。デュエマのVRシステムのバグにより生じたデータなのでは無いだろうか？

憐の推測はあくまでも予想の域を出ない。結論を出すには少々情報足りないのだ。

「empty—humanは、マナの6枚をタップした」(マナ6)

「empty—humanは、《黒神龍ブライゼナーガ》を召喚した」

「う、《ブライゼ》……来るか」

empty—humanは感情を見せない。しかし、そのデュエルからは、確かに相手を倒すという意志を感じる。

勝利、きつとそれが、empty—humanの存在理由なのではないだろうか、と憐は考えた。

「empty—humanは、《黒神龍ブライゼナーガ》の効果を解決」

骸骨の竜が、暗闇の世界で咆哮を上げる。その音波による攻撃を受けたempty—humanのシールドは粉々に砕け、遂にブライゼシュートの力が発揮される。

「empty—humanは、シールドゾーンの5枚を見た」

「empty—humanは、シールドゾーンの3枚を表向きにした」

《ブライゼナーガ》というクリーチャーを一言に纏めるとすれば、それは『危険』だろう。危険を冒すからこそ、反側級の力をあのデッキは持っている。

「empty—humanは、シールドゾーンの 《ハイエイタス・

デパーチャ》をバトルゾーンへ出した」

「empty—humanは、山札上の《龍仙ロマネスク》をマナへ置いた」(マナ7)

「empty—humanは、相手のバトルゾーンの4枚をマナへ置いた(マナ10)。《墮魔 グリペイジ》《墮魔 ヴオガイガ》《墮魔 ヴオーミラ》《墮魔 ドウスン》」

一瞬にして《デ・スザーク》1体となる憐のバトルゾーン。あらかじめこうなるだろうと思っただけはいた憐だが、焦りは隠しきれない。

憐はデュエル・マスターズというものについての知識は豊富だ。だからこそ、ブライゼシュートというデッキが一度動けば、相手が逆転する可能性は低いということも、高確率で入っているカードも、全て把握している。

もう既に、《デ・スザーク》による牽制は、何の意味も持たないというこも。

「・・・キツイ、な」

「empty―humanは、バトルゾーンの《ハイエイタス・デパーチャ》を墓地へ置いた」

「empty―humanは、シールドゾーンの《コクーン・シャナバガン》をバトルゾーンへ出した」

「empty―humanは、山札の上の《コクーン・シャナバガン》をマナへ置いた」(マナ8)

「empty―humanは、山札の上の《偽りの王 ヴィルヘルム》をマナへ置いた」(マナ9)

「empty―humanは、マナの《怒流牙 サイズウミスト》を手札へ加えた」

「empty―humanは、バトルゾーンの《コクーン・シャナバガン》を墓地へ置いた」

第一陣では、墮魔が全滅。続く第二陣はマナ加速と回収により体制を整え、更に――

「empty―humanは、マナの《偽りの王 ヴィルヘルム》をバトルゾーンへ出した」

「empty―humanは、マナの《龍仙ロマネスク》をバトルゾーンへ出した」

大地から、2体のドラゴンが現れる。多色のドラゴンの中でもかなりの強さを誇る凶悪な効果を持つ2体の龍の前に、憐は笑っていた。

5cでここまで強く動くプレイヤーは、今まで目にしたことが無かった。雪も5cを扱えると言うが、正直、これよりとは思えない。

自分には、今の自分のデッキでは、腕では、コイツには、勝つことが出来ない。憐の浮かべた笑顔はそういった諦めの表れであった。

「empty―humanは、《爆殺!! 覇悪怒楽苦》の効果を解決」

「empty―humanは、シールドゾーンの《爆殺!! 覇悪怒楽苦》をバトルゾーンへ出した」

「empty―humanは、相手のバトルゾーンの5枚を墓地へ置いた。《卍 デ・スザーク 卍》《墮魔 ヴァイシング》の進化元《墮魔 ドウポイズ》《墮魔 ヴァイシング》の進化元《墮魔 ヴォガイガ》

《墮魔 ヴァイシング》の進化元《墮魔 ヴォーミラ》《墮魔 ヴァイシング》

黒き太陽が、沈む。巨大なスクラップ・マシンに掛けられた黒き朱雀の姿は、見るも無残な形へと変容していた。

「empty—humanは、山札の上から 5 枚をみた」

「empty—humanは、バトルゾーンの《爆殺!! 覇悪怒楽 苦》を墓地へ置いた」

「empty—humanは、見ている《偽りの王 モーツァルト》をバトルゾーンへ出した」

「empty—humanは、見ている4枚を山札の下へ置いた」  
龍以外の戦場に立つ者を殺す竜を統べる偽りの王。身体に纏った鎧は色とりどりに輝き、深い闇の空間にわずかな光を齎す。

しかし、その光が憐れを救う訳でも無い。寧ろ、巨獣の軍団は、憐れにとっての絶望でしかない。

「empty—humanは、《龍仙ロマネスク》の効果を解決」

「empty—humanは、山札の上の4枚をマナへ置いた。《偽りの王 ヴィルヘルム》《ハイエイタス・デパーチャ》《ハイエイタス・デパーチャ》《ハイエイタス・デパーチャ》(マナ10)」

仙界に佇む龍は、空の人間へ恵みを与える。過剰な恵みは土地を傷ませ、マナは徐々に減るだろうが、そんなものは些細なことではない。

「empty—humanは、《偽りの王 ヴィルヘルム》の効果を解決」

「empty—humanは、相手のマナの《Dの博才 サイバーダイス・ベガス》を墓地へ置いた」

「empty—humanは、《偽りの王 ヴィルヘルム》の効果を解決」

「empty—humanは、山札の上の《ボルバルザーク・エクス》をマナへ置いた」(マナ1)

《ヴィルヘルム》により、憐れのマナが削られる。一方は恵みを、一方は災害を。流星は高コスト多色ドラゴンと言った所だろうか。

「マナの《フェニックス・ライフ》を墓地へ置いた」(マナ10)

「empty humanは、ターン終了した」

「ドロー」

隣のターン。山札からカードを引く。何が来ても勝てる気がしない。殆ど諦めてはいる。しかし、隣はサレンダーを、絶対に、100%勝てないという場面以外ではしたくなかった。

だから今、この場に立ち続ける。

「8マナ、《デ・スザーク》を召喚っ」

暗黒の朱雀が再び飛翔する。が、今の《デ・スザーク》には本領発揮に必要な魔導具が存在していない。cipで単体除去出来る程度のクリーチャー。

「《デ・スザーク》の召喚時効果で、《モーツァルト》を破壊」

「empty humanは、《偽りの王 モーツァルト》を墓地へ送った」

これが、隣の精一杯の足掻きだった。あの場面で最後に《デ・スザーク》を引いたのは、もしかしたら、クリーチャーが応えてくれたのかもしれないなど、現実味の無いことを隣は考えていた。

もし、もしも相手が呪文を封じて来なければ、次のターンを凌げる可能性が無い訳でもない。

が、あまりにも確率的に有り得ないことである。自分のシールドが全てトリガーであったとしても、猛攻を防ぐのがやっとといった所だろうか？

或いは、このデッキに2枚入っている《ガリユザーク》、1枚はマナにあるが後1枚がシールドに入っていれば……もしかしたら。「ターン、エンド」

だが隣は冷静に自分の敗北を分析する。次に相手は高コストのクリーチャーを出して来たとして、何を出されたら確実に敗北するか。

《龍世界 ドラゴ大王》、《光神龍スペル・デル・フィン》……この2枚がまず真っ先に思い付く。呪文とクリーチャーを封じられれば完全敗北だ。特にキツイのは《スペル・デル・フィン》だろう。

「empty—humanは、カードをドロウした」

「empty—humanは、手札の《コクーン・マニユーバ》をマナへ置いた」(マナ1)

「empty—humanは、マナの10枚をタップした」

「empty—humanは、《勝利宣言 鬼丸「覇」》を召喚した」  
「……ああ、」

すっかり忘れていた。スピードアタッカーでT・ブレイカーでEXターンを得ることの出来る違法レベルのカードが入っていることを。

「empty—humanは、《勝利宣言 鬼丸「覇」》でプレイヤーを攻撃」

「empty—humanは、《勝利宣言 鬼丸「覇」》の攻撃するときの能力を発動」

《勝利宣言 鬼丸「覇」》のEXターン獲得方法は簡単だ。山札をお互いに捲って、自分のカードのコストが相手より高ければ良いだけ。あのデッキならば常に8以上でなければ勝てないと思った方が良い。

「empty—humanは、山札の上から 1枚を表向きにした。《霸道》の頂 シュラ・ベートーベン》」

「ガチンコ・ジャッジ……《テ・スザーク》」

「empty—humanは、表向きの《霸道》の頂 シュラ・ベートーベン》を山札の下へ置いた」

憐は、表向きにされた《卍 デ・スザーク 卍》を山札の下へ置く。これで相手はEXターンを獲得。これで本当に《ガリュザーク》1枚頼みだ。

「(ガチンコ・ジャッジ結果)(10) empty—human 《霸道》の頂 シュラ・ベートーベン》vs(8) 俺《卍 デ・スザーク 卍》」

「empty—humanは、《勝利宣言 鬼丸「覇」》の効果を解決」  
「《勝利宣言 鬼丸「覇」》は、相手のシールドを3枚ブレイク」

竜の上から放たれた太刀による斬撃が、憐のシールドを襲う。

トリガーは……ある。あるのだが——

「S・トリガー《テック団の波壊Go!》。効果で「覇」を破壊」(シ

ルド2)

「empty—humanは、バトルゾーンの《勝利宣言 鬼丸「覇」》を墓地へ置いた」

もう、そんなものでは止まらない。憐の敗北を書き換える程の力を持っている訳ではない。

「empty—humanは、《偽りの王 ヴィルヘルム》でプレイヤーを攻撃」

「《偽りの王 ヴィルヘルム》は、相手のシールドを2枚ブレイク  
来て欲しい。そう願ひ、シールドを見る。」

「何も………無いです」(シールド0)

無慈悲にも骸の竜が憐の下へ、この決闘の終止符を打ちに進行する。

嘗ての生命力を失いつつも、骸骨の竜は主人の命令を実行する。空の人間に脱け殻の竜。どちらも空となった器同士。お互いにお互いが失った者であることを理解して主従でいるような、ただのカードゲームだというのに不思議とそんな気がした。

「empty—humanは、《黒神龍ブライゼナーガ》でプレイヤーを攻撃」

憐の目の前に広がる風景が、インクが零れたかのように黒く染まる。

全ては審判の日の為に――

「……………あ、れ」

気付けば、帰り道の途中で憐は立っていた。

雨は徐々に止んでいるようで、傘へと落ちる雨音は先程よりも静かだった。

何か、忘れているような気がする。ここで何かがあったような……………

「考えごとをしていたんだっけ……………?」

ボーっとしていたのは、考えごとに集中し過ぎていたからだろう。きつと。そう思うことにして憐は前へと歩き始める。

「何でこんな安心してんだろ、俺」

胸に抱いた恐怖の理由を、深く考えようともせず。

## 過去からのプレリユード

「次に、何故雪君がF専に試験無しで入れたのか」  
「……待って、下さい……」

真実は、世界を渡った旅人に対し苦痛を齎す。

月光が静かに夜を照らす。街灯に集る虫は徐々に数を増し、風の伝える寒さも酷くなる一方だ。

「脳を弄くられたというのは、つまり、『夢原の傀儡』にされたという可能性があるんじゃないんですか……?」

「確かに、夢原に脳を完全にでは無いにしても、弄くられてしまっただけいるから、その可能性はある。でも、その可能性を開花させない為に、雪君はF専に入学させられた」

雪は察した。もし、国のミスで生じた事件の犯人の傀儡が夢原と同じ思想の元に行動を始めたら……。波紋はやがては大きくなり、他の波紋と干渉し、波を起こす。その波が起こす災害を事前に止められた立場の人間は、力がある故に罵声を浴びせられ、悪として吊される。

「F専の本来の姿はね、未来の犯罪者に対する牢獄であり、更正する為の施設なの」

未来の犯罪者。それは、国が見ている実験の被害者である俺達の姿。自分達の将来を揺るがし兼ねない危険な爆発物扱いという訳だ。

そして、そんな未来犯罪者を野放しにして放置するのは危険過ぎる。

だからこそ、F専なのだ。

ここまで来ればある程度の真相にまで辿り着ける。F専は、夢原翔真の実験の被害者を監視する意味合いで作られたのであろう。そして、そこでの目的は未来に夢原の思想を、危険因子を残さないように摘むこと。

……。だが、脳を弄くられたことが分かっているのなら、俺達は後から手術でもされて解決しているものなのでは無いのだろうか？だとすれば、国がここまでする必要は……。

——．．．．．僕は、その生き残りなんですか

「そうか．．．．．」

最悪の if を考慮した結果。それが俺達被害者が F 専に通つてい  
る理由になる。

少し考えて見れば分かる。国がここまでする必要があったのはそ  
れだけこの案件が厄ネタだからということだ。扱いを間違えれば爆  
発する。そんな物に対して神経質になるのは当たり前のことなのだ。

例えば、自分が死に直結する病気を患っていたとする。そこで医者  
に「これを飲めば治る」と薬を渡された所で、病気への心配は消えな  
い。実際に目に見える変化が無ければ、人は心から安心出来ない。寧  
ろ、本当に治るのかと疑問を抱き、より、恐怖を抱き、視界が狭くな  
る。それと同じだ。

暗闇の中を彷徨う人々にとって、闇に射し込まれた一筋の光はその  
人達にとっての希望でもあるが、同時に、闇を意識させ、それまで闇  
の中で見えていた物が見えなくなるという脅威でもある。

可能性は、人を殺せる程に恐ろしいものなのだから。

「この事はあの学校に居る人達は知っているんですか？」

「いや、殆どの人が知らないよ。知っているのは先生方と私のような  
被害者の関係者、後は本人達くらい」

俺以外の生存者は知っていた訳だ．．．．．向こうは俺を知って  
いたかもしれない。何か有益な情報を聞き出せるかもしれないな。

「俺以外に誰が被害者か、知っていたりしますか？」

「いや、知らないかな．．．．．でも、生存者の人数なら耳にしたこ  
とがある。雪君の他に確か3人」

3人．．．．．それだけしか．．．．．

「隣なら何か知ってるかもしれないけど．．．．．」

「明日聞いてみますか．．．．．それにしても．．．．．」

得る物が多かった。特に、今の自分の扱いがどのような物か分かっ  
たのは大きい。国からしてもこれ程厄介な代物は数少ないのでは無  
いだろうか。

だが、やはり元の世界に戻る方法は明確には分かっていない。いつ

そこの世界に巨大隕石でも落ちて地球が滅亡すれば戻るのかな？と思ったりもしたが、そんなことは早々に起きないし、夢原より凶悪な考えであるから忘れよう。

「あ、凧さんは、どうして今日話そうと？」

「え？ああ、今日、夢原が逃走したってニュースになったんだ。だから、本格的に注意しなきゃならなくなったから」

「夢原が逃走……そうか、このタイミングでとなると、狙いはハッキリしてますね……」

夢原の狙いは俺だろう。俺が目覚めたという情報をどう入手したかは知らないが、このタイミングで脱走したのならそれ以外に今は思いつかない。今日の学校の早帰りもそれが原因だろう。

「それを話そうか迷ってた所をサラリーマンの人に励まされてね。それで今日話そうかなあ、と。あははは……」

シリアスな空気が抜けて行き、急に今まで雪と真剣に話していたのを思い出し、どこか恥ずかしくなる凧。笑って自分を誤魔化そうとしているが、どこかぎこちなくなってしまう。

「そうそう、そういうえばデュエマもやったんだけど負けちゃったんだよねえ、《ロマノフZ》でやられちゃってさ」

「？《ロマノフZ》ですか？珍しいですね。扱うの難しいだろうに……何デッキだったんですか？相手」

「《デリート》だったよ」

《デリート》……そうだ、俺が元の世界で最後にデュエルしたデッキタイプは《オール・デリート》だった。凧さんは、この世界に居るのだろうか……

「《デリート》には凧さんのデッキなら《チャクラ》なんかが強いと思いますよ。相手、攻めませんから」

「そうしたんだけど、負けちゃったんだよね……強かったなあ凧さん」

「そうd——え、今何て？」

凧さんは、彼女は今何て言った？強かったなあ『凧さん』……？

「今何て言いましたっ……?」

「え、強かったなあ竹宮さん、って……」

《テリート》を使う竹宮。そして何よりも……わざわざ使いにくい《ロマノフZ》を、『Z』を使った。それは、偶然なのか?そんなことが有り得るのか?この世界でも竹宮さんは居る?それとも……

俺と、同じで……?」

「連絡は、取れませんよね……」

「う、うん。でも、どうしたの?知り合い?」

「ええ、まあ……」

だが、説明するにも事情を知らない人に話したところでまた病院戻りになるだけだ。これは、俺だけで解決しなくてはならない。協力は申し込めない。

「何か言ってますでしたか?不思議な事とか」

「不思議なこと?うーん……アフターケアが大切だとか、仕事が忙しいとか、子供の頃のように遊ぶことは難しくなっちゃったとか、不思議なことでは無いけどそれくらいだったかな?」

仕事……あ、そういえば、竹宮さんは大学生だったな……仕事に就いているということは、竹宮さんと俺との間には、1年程の時間のズレが生じているということか……?

取り敢えず、何をするか明確な目標が決まった。竹宮さんに会うこと。もし、竹宮さんが同じ境遇ならば尚更だ。

「……あ、もう10時だ。雪君お風呂入った?」

「先良いですよ?」

雪がそう言うど風は、じゃあそうさせて貰うね、と言ってPCの方に体を向ける。雪は何をしているのか気になりつつも、部屋を出ることに決めた。良く考えてみれば、同い年の異性の部屋に夜中に居るのはあまりよろしく無い。

「今日はありがとうございました。失礼します」

「うん、あ、明日はデュエマの授業あるからデツキ、忘れないでね」「分かりました。それじゃあ」

こうして、新たな隠された真実を知った雪は明日を迎える。その胸に、確かに定まった目標を掲げて。

「あー、じゃあ、A Bで2人組を組んでくれ」

翌日、2時間目。委員長と試合をした体育館で雪達B組とA組C組のデュエマ勢の合同授業が始まった。先生の指示を聞き、A組とB組でペアを作るべく行動する雪。

なのだが……

——あ、白木白木、相手居るー？

——加藤相手居ない？じゃあやろうぜー

——美香やろー

ペアが、組めない。凧も友人と既にペアを組んでいるし、憐は同じクラスだから組めない。

こうなったら仕方ない。アレをやるしか無いらしい。

「……」

ただ待つのみ。人数が減ってウロウロしてる人に声でも掛ければ任務は終了だ。いや最高ですねこの作戦。

雪の阿呆な考えは残念ながら上手く行き、目論見通りに組めないで困っていきそうな人が見つかる。「計画通り」と内心ゲス顔をしている雪は目の前で困っている黒髪ポニーテールの女子に話し掛ける。

「相手居なかったりします？」

「あ、はい」

「あの、僕も居ないんで良かったら……」

非常に申し訳ないという表情で言う雪だが、騙されてはいけない。全く申し訳ない等思っていない。

「あ、じゃあお願いします」

「はい、じゃあそこで……」

VR機能を使ったデュエルをもつとしてみたかった雪は、VRで見たいクリーチャーのデッキを選択して今日は来ている。

VR台でデッキをカット&シャッフルしながら対戦相手の名前を確認する。対戦者名は……恵那さんか。

「宜しくお願いします、恵那 由里です」

「宜しくお願いします、白菊 雪です」

お互いに挨拶と相手デッキのカットを済ませると、恵那さんの頭上で青いサイコロがクルクルと回転する。良く見れば《サイバーダイス・ベガス》であることが分かる。もしやと思い自分の頭上を確認すると、見慣れた赤と白のサイコロが……いや、見慣れたサイコロではない、《サイコロプス》だ。

「先行後攻判定つて変わったんですか……?」

「え、あ、いや、私の方で先行後攻の演出をONにしてるからだと思います。すみません……」

演出のON/OFFがあるのか、今まで気が付かなかったがどこにあるのだろうか?

「因みにどこで変えられるんですか?」

「起動ボタンの上の方の、台の裏にあるボタンです」

台の裏に手で触れると、感触でボタンがあることが分かる。これか……成程な。

「ありがとうございます。それじゃあ始めよっか」

「いえ、そうですね、はい」

ダイスの目は恵那さんが5、俺が2だった。つまり恵那さんが先行となる。

「私は《暴走 ザバイク／ブンブン・バースト》をマナへ、ターンエンド」(マナー)

「げ、バイクか?速攻はマズいな……」

「ドロー、手札の《怒流牙 佐助の超人》をマナへ、ターンエンド」(マナ1)

「ドロー、《SMAPON》をマナへ、ターンエンド」(マナ2)

《SMAPON》が入っているのか。少し慎重になって攻撃しないと痛い目を見そうだ。

「ドロー、《聖隷王ガガ・アルカディアス》をマナへ、2マナで《フェアリー・ライフ》。1マナチャージしてターンエンド」(マナ3)

マナにあるカードでどんなデッキか大体相手は分かっただろう。

雪の使っている今回のデッキはダーウインと呼ばれるデッキタイプだ。ダーウインとはカードの効果等で様々な進化クリーチャーへと繋げるデッキに付く名称で、進化論を唱えた偉人ダーウインが由来となっている。

「ドロー、《暴走 ザバイク／ブンブン・バースト》をマナへ、」(マナ3)

そういえば、何故《禁断》が無いのだろうか？バイクなら付けても問題ないはずだ。いや、付けないという選択もあるが大体バイクに《禁断》は付く。

雪のそんな疑問は、1枚のカードによって解決される。

「3マナで《龍覇 アイラ・フィズ》を召喚」

「ああ、そういうことか」

可愛らしい赤い服の女性が現れ、虚空から飛んできた1本の剣を片手に持つ。可愛いのにカッコイイ。一部の男子から根強い人気のあるクリーチャーだ。

アイラを使った速攻デッキか。確かにそれなら《禁断》の必要もないか。後で確認すれば良いと超次元ゾーンをチェックしなかったから気付かなかった……これは俺のミスだな。

だが、まだ始まったばかりだ。《アイラ》と知った所で今まで通りにするだけだ。

「《アイラ》の効果で超次元ゾーンから《無敵剣 プロト・ギガハート》を《アイラ》に装備。ターンエンド」

「ドロー、《無垢の宝剣》をマナへ、4マナで《ドンドン吸い込むナウ》」

(マナ4)

雪は考えた。このデツキにあるどんなS・トリガーでも《プロト・ギガハート》ごと除去することは出来ない。ならば、耐性持ちには早々にその耐性を撤去させて貰わなければ困る。

雪は山札の上から5枚を見た。この中で今のマナならこっちなだ。

「僕は《怒流牙 佐助の超人》を手札に加え、残りを山札の下に。更に《ドドスコ》の効果で《アイラ》をバウンスする」

「《無敵剣 プロト・ギガハート》の効果発動」

巻き起こる人工的な台風は、1本の剣に眠る力を呼び起こす。

剣は持ち主の危機に反応し、封じられていた姿を現す。

青い肌に大きな剣。宙の色を吸い込んだかのような最強と始まりの名を持つ龍は、風を断ち切り《アイラ》を守る。

「龍解、《最強龍 オウギンガ・ゼロ》」

「ターンエンド」

始まりの紅蓮の龍が、雪を見下ろす。

## 逆転の決闘

恵那のターン、場には龍解した《オウギンガ・ゼロ》とプレイヤーと同じ身長《アイラ・フィズ》。対する雪の場にクリーチャーの姿は無い。マナの枚数もまだ不十分な状況だった。

「ドロー、3マナで《アイラ・フィズ》をもう一体召喚」

「二体目か……この速度で二体目は、流石に厄介だな……」

雪は《アイラ・フィズ》と《オウギンガ・ゼロ》、+αでスピアター一体程度なら盾のトリガーでも十分対応出来ると考えていた。

が、二体目の《アイラ・フィズ》が登場し、余裕は無くなる。例えこのターンを辛うじて耐えても、耐性持ちが一体居るだけで敗北のヴィジョンが鮮明となってしまう。

「《アイラ・フィズ》の効果で《プロト・ギガハート》を装備、《オウギンガ・ゼロ》でシールドをW・ブレイク」

体育館の木の床が、《オウギンガ・ゼロ》が力任せに放った斬撃によつて破壊されて行く。その直線上には雪の姿があった。

「そのまま受ける」（シールド3）

半透明の二枚の盾が、凡そ人間が耐えることなど到底出来ない攻撃から主を守る。シールドから手札へと加わったカードは、こどちらもデッキの重要なパーツであった。

しかし、S・トリガーで無いのは少々痛い。ここで何かマナブースト出来れば、それだけでもかなり変わっていただろう。

「《アイラ・フィズ》で攻撃。その時、手札の《龍装者 バルチュリス》の効果が発動します」

「マツズっ……」

《バルチュリス》はスピアター、つまりこのままでは更なる追撃を受け、雪を守るシールドは残り1枚となってしまう。

何とかその攻撃は防がなければ。

「そのまま受ける。S・トリガー、《ドドスコ》。効果で山札の上から5枚見て、《プチョ》を手札に加える」

「バウンスですね、何を戻しますか？」

「《オウギンガ・ゼロ》をバウンスします」

二度巻き起こる大竜巻。一度は無効化されてしまったが、今回はその絶大なる風の力で最強の龍を撃退することに成功する。

しかし――

「《バルチュリス》をバトルゾーンへ、《バルチュリス》でシールドをブレイク」

「受ける」（シールド）

恵那の手札から烈火の炎を身に纏い、導火線に点いた火の如く雪のシールドに一直線に衝突する。

S・トリガーは、無い。

「ターンエンド」

場の数では圧倒的に負けている。このままでは敗北は避けられない。カードを掴んだ指に少し力が籠もる。

「ドロー、《ラ・ズーネヨマ・パンツァー／逆転のオーロラ》をマナに、5マナで《音感の精霊龍 エメラルダ》を召喚」（マナ5）

《エメラル》の名を冠するエメラルドの瞳を持つ龍が音を奏で、天より降臨する。

《エメラルダ》の奏でる旋律は、雪のシールドに反響し、雪にのみその正体を表す。

「《エメラルダ》の効果でシールドを見る……手札に加え、新たに手札からシールドを追加。ターンエンド」

雪のターンは終了する。《エメラルダ》によりシールドに小細工を掛けたように見える。が、恵那には――恵那のクリーチャー達には関係の無いことだ。

例えブロッカーが出ようとも、何が待ち受けていたとしても、攻撃し続けることは止めない。

それが、恵那の操るこのデッキ。

「ドロー、《オニチャツカリ 爆ゾウ》をマナへ、4マナで《暴走 ザバイク／ブンブン・バースト》を召喚」（マナ4）

――来るっ

「《アイラ・フィズ》でシールドをブレイク」

何も手に持っていない《アイラ・フィズ》は、勢い良く振った右足で雪のシールドをブレイクする。

雪の《エメラルダ》はこの《アイラ・フィズ》を止める為のものでは無い。もう一体の——《プロト・ギガハート》を携えている《アイラ・フィズ》を止める為のもの。故に、その時まで《エメラルダ》はブロック出来ない。

雪が仕込んだシールドが粉碎され、その正体が、恵那の目に映る。

——何が来る？ダーウインならクリーチャーが多い筈。なら、呪文はそんなに入っている訳では無い。《ホーリー》か《カーネル》が濃厚……

脳内に仕込まれていそうなカードを上げ、警戒する恵那だったが、雪が使ったカードに脳内が真っ白に漂白される。

それ程までに衝撃的なカードの正体、それは——

「S・トリガー、《フェアリー・ライフ》1マナチャージ」（シールド0）（マナ6）

ただの、《フェアリー・ライフ》。

——勝ったっ

「《ザ・バイク》で攻撃します」

主人の命令を聞き、猛スピードで突進する紅のバイク。

雪の仕込んだシールドが《フェアリー・ライフ》であったことから、勝ったと確信し、恵那は攻撃命令を下した。

しかし、雪にとってその攻撃は狙い通りのものでしか無く、全ての準備が整ったことを、彼女は知り得なかった。

「ニンジャ・ストライク5、《佐助の超人》を召喚。効果でドローして1枚を捨て、墓地の《ドドスコ》をマナチャージ」（マナ7）

そして、この動きに見覚えのある彼女は、雪が何をしてくるのか分かかってしまった。

甘かった。委員長との試合で彼はシノビデッキを使って見せた。その時もギリギリの所で彼は耐えきった。そして、決め切れなかった対戦相手に待っていたのは……

反撃

「そして捨てられた《バイケン》の効果で《バイケン》をバトルゾーンへ、効果で《ザ・バイク》を手札に戻す」

風の次は渦潮が恵那のクリーチャーを襲う。《バイケン》の繰り出した渦潮はまるで生きているかのように逃げる《ザ・バイク》を執拗に追いかけ、飲み込む。

恵那は攻撃を止めない。否、攻撃を止められない。ここで相手の息の根を止められなければ、待っているのは自分の敗北。

「《バルチュリス》で攻撃します」

「ニンジャ・ストライク5、《佐助》召喚。《バイケン》効果で1ドロー、更に効果で1ドロー捨て、墓地の《ドドスコ》をマナに、そして、捨てられた《バイケン》をバトルゾーンに」(マナ8)

一度目の攻撃を一体目の《バイケン》で防ぎ、更なる攻撃を二体目の《バイケン》が防ぐ。ハンデスにも強い《バイケン》を使った次の攻撃への準備を兼ね備えた鉄壁の守り。

「《バイケン》効果で《バルチュリス》を手札に戻す」

「……ターンエンド」

「《佐助》を山札の下に送る」

ここで、もし《エメラルダ》が——ブロッカーが居なければ、或いは恵那が勝っていたかもしれない。

恵那は勝利の為に冷静に雪の行動を分析する。ダーウィンでハンデスをするのなら、《パクリオ》くらいしか候補が殆ど存在しないはず。《解体人形ジェニー》が入っている可能性は無いとは言い切れないが、あのデツキの色は青緑白のトリーヴァだろう。故に、ハンデスは得意では無い。

しかし、彼は奇襲出来るスピアタの《ザ・バイク》を手札に戻した。これは、シールドの無い丸腰の彼からすれば恐ろしい行為の筈だ。場に残し、バイケンで殴り返しておけば次のターンにスピアタで殺される可能性は小さくなる。

しかし、それをしなかった。彼は最初に攻撃した装備無し《アイラ・フィズ》を戻さず、死のリスクが高い《ザ・バイク》を戻した。プレミか……?と思っただが、すぐさまその可能性を否定す

る。いくら何でもここでプレミをするような人が、あの大勢の前での試合で山札残り1枚のギリギリの勝利を演じきれぬ筈が無い。

「ドロー、《龍覇 イメンブルーゴ》をマナへ、5マナで二体目の《エメラルダ》を召喚。効果で手札から1枚をシールドへ」(シールド1)(マナ9)

新たな《エメラルダ》が登場する。が、この《エメラルダ》の召喚が何の為のものなのか、何かの布石なのか、この場で分かるのは雪ただ一人。

「更に4マナで《パクリオ》召喚。効果で恵那さんの手札を見る」

「やっぱり《パクリオ》はあるか……」

「《バルチュリス》をシールドに」

「了解です」(シールド6)

予想通りのクリーチャーの姿に、特に困惑などせずに指名されたカードをシールドに送る。

しかし、これで相手の残り使用可能マナは0だ。確かに耐久戦へと持ち込めてはいるが、予想より無難なターンだと思った。

しかし、雪にも雪で考えがあった。ここで《パクリオ》を出したのは、何もスピアタを一体減らす為だけでは無い。相手の手札の確認が、雪の勝ちにどうしても必要だったからだ。

「バイケンで《アイラ・フィズ》を攻撃」

無防備な赤毛の少女にバイケンのプレス攻撃が襲い掛かる。古から続く龍の持つ圧倒的な力には、いくら武に精通した者であろうと簡単には太刀打ち出来ない。

「ターンエンド」

「ドロー、4マナで《龍覇 ストラス・アイラ》を召喚」

しかし、彼女のクリーチャーは諦めない。どれだけ強力なクリーチャーが、プレイヤーが立ち塞がるうと、決して、主人の勝利を疑わない。

「《龍覇 ストラス・アイラ》の効果で、超次元ゾーンから《革命槍 ジャンヌ・ミゼル》を装備。ターンエンド」

このターンでは倒し切れない。しかし、次のターンにでも、その次のターンになっても、必ず倒す。

恵那の目に浮かぶのは純粹な勝利への願望。試合前のオドオドした性格からは考えられない今の彼女に相對する雪の目も、何の曇りも無い、目の前の勝利へと手を伸ばす決闘者の目をしていた。

「ドロー、」

このデツキ、この現状で今打てる最善手を、雪は既に手にしている。ならば後は、そのカードを使うのみ。

「8マナで、《プチョヘンザ》を召喚する」

黄金の獅子に乗りし煌びやかに輝く弓携えし狩人が、熾烈極める戦場に召喚される。そして、この熱戦において、その能力は圧倒的な力を誇る。

「ターンエンド」

雪はターンを終了する。その発言はどこか強さを誇示するような、力強さを感じた。

「ドロー、《バルチュリス》をマナへ、ターンエンド」(マナ5)

《革命槍 ジャンヌ・ミゼル》の効果は、装備クリーチャーの攻撃時に相手のクリーチャーを一体タップすることの出来る速攻デツキにおけるブロッカーへの対策を可能とする地味ながら強力な効果。

この効果を使い、攻撃時に一体《エメラルダ》をタップ出来れば、仕込んだシールドにも依るが、残りの《アイラ・フィズ》と手札の《バルチュリス》でジャストキルまでは行けた。

しかし、それを許す雪では無い。そんなことは雪でも理解している。だからこそ、クリーチャーのタップイン能力を持つ《プチョヘンザ》を召喚したのだ。

先程述べたジャストキルプランには、決定的な弱点が存在する。それは、ジャストであるが故に一体でも攻撃出来なければ相手を倒せないのだ。例え《アイラ・フィズ》と《ストラス・アイラ》の攻撃があったとしても、二体目のクリーチャーの攻撃により出てくる《バルチュリス》は、《プチョヘンザ》の能力によりタップされて出てくるのだ。バトルゾーンで圧倒的な存在感を放つ《プチョヘンザ》は、雪の数々

のデッキで活躍して来たエースクリーチャーであり、勝利へと導いて来た強力なカード。

この試合においても、主人を確かな勝利へと導く。

「ドロロー、2マナで《フェアリー・ライフ》。1マナチャージ。ターンエンド」(マナ10)

しかし、雪も余裕がある訳では無い。《SMAPON》の存在が、どうしても邪魔なのだ。

《SMAPON》はスーパードリガーを持つクリーチャー。そのボーナス効果は、そのターンゲームに負けないというもの。

いくら雪が《プチョヘンザ》で睨みを聞かせた所で、量で押し切られてはキツイ。総攻撃して、もし《SMAPON》が召喚され、更に此方のクリーチャーが相手の残りクリーチャーを殲滅出来る数居なければ、此方の負けだ。オマケにあちらには未だに龍解していない《プロト・ギガハート》もある。《プチョヘンザ》の革命チェンジで消し去ることは出来ない。

まだ、何があるか分からない。ならば確実に勝つ為に今は待つ。待つて完全なる勝利の布陣を築く。それが雪の狙いだった。

それが出来るクリーチャーが、このダーウインには存在する。

「ドロロー、4マナで《ストラス・アイラ》を召喚。効果で超次元ゾーンから《二丁龍銃 マルチプライ》を装備」

気付けば、バトルゾーンは《アイラ》だらけだ。それも、剣、槍、銃と武器も多彩。なかなか見れない光景だ。

しかし、雪は気付いた。目の前の敵が、此方を利用して来た事を。

「《プチョヘンザ》の効果で《ストラス・アイラ》はタップしてバトルゾーンに出します。そして、装備クリーチャーがタップしていることで、《マルチ・プライ》を龍解」

《アイラ》は宙に拳銃を2つとも投げる。そして、条件をクリアしたその拳銃は、光り輝き、一体の龍へと姿を変える。

「《龍素記号nb ライプニッツ》にし、ターンエンド」

雪にとってこの状況はかなりマズい。《ライプニッツ》の存在は、この状況で唯一打てる、恵那が勝利する未来への一手なのだから。

《ライプニッツ》は、同じサークルのドラグハート・クリーチャーの中でも特に強い部類に位置する。その能力は、攻撃もブロックもされないというステルス能力。

つまり、《ライプニッツ》は能力でしか倒せない。もし除去出来なければ、雪の負けは限り無く高い。

「ドロー、……っ！」

来た、この状況を、この試合を、確実に終わらせる為の布陣、その為に必要なカードが。

「4マナで《緑銅の鎧》を召喚。効果で自分の山札から《奇跡の革命ミラダンテf》をマナに。更に3マナで《幻緑の双月／母なる星域》を唱える」(マナー)

雪使っているこのデッキは「ダーウイン」だ。ならば、この試合を雪の勝利で終わらせられるとしたならば、それはきつと、進化クリーチャーに他無い。

「《バクリオ》をマナに置き、マナゾーンから《バイケン》の上に《ミラダンテf》を進化」

輝く毛並みに白き肌持つ光の龍。《ミラダンテf》が登場すると共に、恵那のクリーチャーの周囲の時間が止まる。

これが、雪の使いたかったクリーチャー。

「《ミラダンテf》の効果により、恵那さんのクリーチャーを全てフリーズする」

「マズい……っ！」

恵那の場のクリーチャーは全てタップしている。雪の攻撃が容赦なく《アイラ》を始めとする恵那のクリーチャーに襲い掛かる。

——ここで、叩くっ

「《エメラルダ》で《プロト・ギガハート》を装備した《アイラ・フィズ》を攻撃」

「《バイケン》で《ジャンヌ・ミゼル》を装備した《ストラス・アイラ》を攻撃」

「《ミラダンテf》で装備の無い《ストラス・アイラ》に攻撃」

「ターンエンド」

《アイラ》は全滅、そして、唯一残った《ライブニッツ》はフリーズ状態。出るクリーチャーはタップイン。

「ドロー、《SMAPON》マナへ、……ターンエンド」(マナ6)

奇跡は、何か手はないのか？

「ドロー、4マナで《ドドスコ》。効果で5枚見て、《ラ・ズーネヨマ・パンツァー／逆転のオーロラ》を手札に加える。そして、恵那さんの《ライブニッツ》をバウンス」

「う……」

恵那のバトルゾーンからクリーチャーが消え去る。しかし、雪は容赦しない。油断などしない。徹底的に、相手を叩きのめす。

「5マナで《ラ・ズーネヨマ・パンツァー／逆転のオーロラ》を唱える。効果で僕の仕込んだシールド、《龍覇 イメンブルーゴ》を1枚マナゾーンに送る」(マナ12)

ここで1つ、デュエマに存在するある能力について説明させてもらう。

デュエマはRevと言われるエピソードから、革命という能力を新たに作成した。

革命とは、自分のシールドの枚数によって発動出来る能力である。革命12ならシールド二枚以下の時、革命10ならシールド0枚の時、と言うように、シールドが指定された数字と同じかそれより少なければ発動する。

そして、革命というのは本来ピンチからの逆襲、抑圧からの反逆というコンセプトのほず、なのだが……

そんなもの、自分でピンチを演じれば良いだけだと思わないか？

「《ミラダンテf》の革命10の能力により、相手はクリーチャーを召喚出来ない」

召喚できない。つまり、恵那は正規の方法によってバトルゾーンにクリーチャーを出せない。

シールド0という実戦において調整の難しい条件をクリアしたことで、《ミラダンテf》は真の能力を——生存本能を発揮する。

「ターンエンド」

「……ドロー、ターンエンド」

何も出来ない。もし、クリーチャーを召喚では無い別の方法で出した所で、《ライプニッツ》を呼べる《アイラ》以外では、《プチョヘンザ》の能力により早急に対処されてしまう。

……流石に、負けか

後は雪が絶対勝利の布陣を完成するべく作業を進めるだけだった。

「ドロー、《バイケン》を召喚。ターンエンド」

「ドロー、《バルチュリス》をマナへ、ターンエンド」(マナ7)

「ドロー、5マナで《カーネル》召喚。ターンエンド」

「ドロー、《バルチュリス》をマナへ、ターンエンド」(マナ8)

「ドロー、《カーネル》召喚。ターンエンド」

「ドロー、《ザ・バイク》をマナへ、ターンエンド」(マナ9)

そして雪のターン、遂に目的のカードを引き当てる。

「ドロー、よし。3マナで《幻緑の双月／母なる星域》を唱える。効果で《カーネル》をマナへ、マナゾーンから《緑銅の鎧》の上に《聖隷王ガガ・アルカディアス》を進化。効果で相手は呪文を唱えられない」  
召喚と呪文の禁止、これで雪の勝利は確定する。

「《ミラダンテf》でシールドをT・ブレイク」

「受けます」(シールド2)

「《ガガ・アルカディアス》でシールドをT・ブレイク」

「……受けます」(シールド0)

こうして、

「《プチョヘンザ》で攻撃」

「……負けました」

勝敗は決した。

## 特別編【エイプリルフル記念】フル・ライフ

「ユキちゃん起きろよ。店の中だぞ？」

雑に肩を揺すられる感覚に不快感を抱き、ユキは深い眠りから目を覚ます。

「……何だよ」

「相変わらず感謝してもんが無いのかねユキちゃんは？ 気持ち良く寝てたのを起こしたから腹が立ってるのは分かるけど。もうちょい豊かな心を持ってないのかねえ？」

黒髪黒目のユキという少年は、目の前で木製のテーブルに頬杖をつきながら椅子に座る茶髪の少年の戯けた態度に半目で睨む。

俗に言うジト目は、ユキが取りがちな態度の一つだった。

「はは、まあまあ良いだろ。お陰で変な目で見られなくて済んだんだしや」

いやまあ、そうなんだけどさ……

「さて、デュエマするか。ユキちゃんは何使う？」

んー、そうだなあ……

「百十物語でも使うかね」

「了解、じゃあ俺は……デスザにするか」

そう言うとは彼はテーブルに置かれたポーチから、黒いデッキケースを取り出した。

「うわ、俺のデッキの動きを知った上でデスザ選びやがったな……性格悪っ」

「何のことだかワイトは知りませんか？ よおし、最初はグー、ジャンケン」

ぽん、とお互いに手を前に出す。

彼はグー、ユキはチョキ。彼の力強い握り拳が、ルールという圧倒的な力で貧弱、軟弱、虚弱と三弱付いたユキのか弱いチョキから先行をもち取る。

「じゃあ先行」

そう言って自分の手札からカードを一枚手に取ると、それを迷いな

くマナへ送る。

「《撃髓医 スパイナー》をマナへ、ターンエンド」(マナ1)

「ドロー、《サイゾウミスト》をマナへ、ターンエンド」(マナ1)

お互いに相手のマナに置かれたカードに興味を示さない。慣れているからだ。あのデッキなら《スパイナー》は受け以外使わない。あのデッキはトリリーヴァだから《サイゾウミスト》は色合わせ。次のマナ加速の為だ、と言った風に既に相手が何を思っただけでマナへカードを送ったのか分かっているのだ。

故に、小細工はそう易々と通用しない。お互いがお互いのデッキを良く知っているデュエル程、動きは早く、鋭く、プレイヤーの腕は洗練されて行く。

更なる高みへと、導いてくれる。

「ドロー、《スパイナー》をマナへ、2マナで《墮魔 ドウンブレ》を召喚。効果で自分のシールドゾーンからカード1枚を手札に。ターンエンド」(マナ2) (シールド4)

《コダマンマ》と同じように見えて僅かに違う効果を持つ《ドウンブレ》。城などのシールドに付けられたカードをシールドを割らずに手札に加えることが出来るこのカードは、単純に手札の補充としても扱える。

しかし、やはりシールドを手札に加えるのは本来は危険だ。それだけ攻撃から身を守る盾が無くなるのだから。

しかし、その心配は無い。

今、彼が対戦しているデッキは、相手を攻撃して勝つような利口なデッキでは無いのだから。

「ドロー、《バイケン》をマナへ、2マナで《電脳鎧冑アナリス》を召喚。効果で自壊し、1マナチャージ。ターンエンド」(マナ3)

《ジャスミン》と同じ効果でマナを加速する《アナリス》。何故わざわざ単色の《ジャスミン》ではないのか、その理由はこのデッキを見ればきつと気付ける筈だ。勿論、《ムウリヤン》と同じ自壊ドロウの効果もあるから便利というのもあるが、それ以上に重要な理由がある。

「ドロウ、《墮魔 ジグス★ガルビ》をマナへ、ターンエンド」(マナ3)

「ドロー、《カーネル》をマナへ、3マナで《神秘の宝箱》。効果で山札から《サイバー・J・イレブン》をマナへ、ターンエンド」(マナ5)  
「あー……置いちゃったか……」

「コイツが居ないと勝てないからな」

コスト11、名前もJとイレブン、パワーも11000と、どこまでも11に拘る水のサイバー・コマンド、《サイバー・J・イレブン》。このカードはその類い希なる強力な効果から、数あるアルファベットサイバーのグループの中でも有名な部類に当たる。

そして、ユキのこのデッキの切り札の1枚。

「ドロー、《ドウポイズ》をマナへ、4マナで《ヴォガイガ》召喚。効果で山札の上から4枚を墓地に送り、墓地から《ヴォーミラ》を回収。ターンエンド」(マナ4)

「ドロー、《アナリス》をマナへ、5マナで《飛散する斧 プロメテウス》を召喚。効果でタップして2マナチャージ、マナから《バイケン》を手札に加え、ターンエンド」(マナ6)

手札に加わる《バイケン》を面倒臭そうに眺める彼。それもその筈。《バイケン》がある状況でハンデスするのはそれなりのリスクを伴う。闇のデッキとしては、《バイケン》のようなマッドネスクリーチャーは面倒なことの上無い。

「ドロー、《ヴォーミラ》をマナへ、3マナで《ヴォガイガ》召喚。効果で山札の上から4枚を墓地に送り、《グリギャン》を手札に加え、そのまま1マナで召喚。効果で山札の上から3枚を墓地に送る」

墓地には彼のエースの姿が確認出来る。その効果を使用する為の魔導具の必要枚数も十分足りている。

まあ、来るだろうな。と、ユキは彼の行動を予知しつつタップされている多色のマナ3枚を他のタップしているマナから少し離す。

「ターンの終わりに『無月の門・絶』の効果で場の《グリギャン》、《ドウンブレ》、墓地の《ザンバリー》2枚と《グリナイブ》、《ドウシーザ》の6枚の魔導具を素材に墓地から《卍月 ガリユザーク／卍・獄・殺》を召喚。ターンエンド」(マナ5)

「マナの《サイズウミスト》、《プロメテウス》、《カーネル》をアンタツ

プし、ドロー、《サイバー・J・イレブン》をマナへ、ターンエンド」  
(マナ8)

ビmana殺しのmanaフリーズ。一昔前に存在した《ガイア・クラツシュ・クロウラー》のようなmanaをフリーズする効果を持つ《ガリユザーク》。《ガリユザーク》は相手にmanaを3枚しかターンの初めにアスタップ出来なくさせるという変わった能力を所持している。

更に驚くべきことに、条件さえ満たせば手札と墓地から何度でも蘇るといふ《グールジエネレイド》もびっくりな不死とも言える能力を持つている。真正銘、化け物と言って良いだろう。

「ドロー、2manaで《ヴォーミラ》召喚。更に1manaで《ドウシーザ》召喚。《ドウシーザ》の効果で《プロメテウス》をパワー2000で破壊。《ヴォーミラ》の効果で墓地から1manaで《グリナイブ》を召喚」  
んー……と少し考えてから、意を決したように《ガリユザーク》へと彼は手を伸ばし、カードを手首の力で横向きにし、攻撃宣言をはつきりとする。

「《ガリユザーク》でシールドをW・ブレイク」

しかしまあ、ユキも序盤に《ガリユザーク》を出されては困る。例え何度でも復活しようと、面倒なものは少しの間でも除去しておきたい。

まあ、どちらかと言えば《ガリユザーク》を死守する厄介なクリーチャーの除去が目的でもあったが。

「ニンジャ・ストライク5で《佐助の超人》を召喚。効果で1ドロー1捨て、捨てられた《バイケン》の効果で《バイケン》をバトルゾーンへ。墓地の《プロメテウス》をマナへ、《バイケン》の効果で《ガリユザーク》をバウンスする」(マナ9)

「《グリナイブ》のウルトラ・セイバー能力で自身を破壊しバウンスを無効にする」

ウルトラ・セイバー：マファイ・ギャングを持つ《グリナイブ》がバウンスによる《ガリユザーク》の除去を防ぐ。

「S・トリガー。《カーネル》を召喚し、効果で《ヴォガイガ》をフリーズ」(シールド3)

「ターンエンド。やっぱ佐助バイケンセットは強いな……」  
「当たり前だろ。バイケン無しでも《佐助の超人》はビmanaで鬼のような強さ誇るんだから……」《佐助の超人》を山札の下に送る」  
他愛も無い会話をしながらも、ユキは淡々と《佐助の超人》を山札の下に送る。隔離していた3manaのアンタツプも同時に行う。

「manaの《アナリス》、《佐助の超人》、《プロメテウス》をアンタツプし、ドロロー、《サイズウミスト》をmanaへ、《バイケン》で《ガリユザーク》を攻撃時、」

このままでは《バイケン》が破壊される。だが、自爆特攻では無いのは彼も重々承知している。あの佐助バイケンをした時から、これを実行するのは決めていたのだろう。

「革命チェンジ。《ミラダンテXII》をバトルゾーンに。登場時効果でドロロー。ファイナル革命の効果を使用する」

「《ガリユザーク》は破壊されます……」

パワー6000からパワー12000へと上昇した上に、次の彼のターンの終わりまで、彼はコスト7以下のクリーチャーの召喚を封じられる。manaを縛ってたのだからこの仕打ちは仕方が無い。インガオホー。

と、一見それだけに見えるが、《バイケン》が手札に戻っている。これでまた彼はハンデスをするのを考えさせられてしまう。此処まで来ると意地でもハンデスさせ無いというユキの強い意志が垣間見える。

「ターンエンド」

「エンド時に墓地の《ガリユザーク》の効果、『無月の門・絶』を発動する。墓地の《ザンバリー》2枚と《グリギャン》、《ダウンブレ》、《グリナイヴ》、《ドウシーザ》を素材に召喚」

しかし、何度でも蘇る洩といクリーチャー、それが《ガリユザーク》。その洩とさと墓地肥やしの際にゾロゾロと墓地で増えて行く様は、正に増殖するG<sup>ガリユザーク</sup>。普通はこんな厄介な効果を持つクリーチャーが相手となると、プレイヤーへと恐れずに飛翔するG<sup>ガリユザーク</sup>は恐怖的な存在に感じられる筈なのだが、何度でも除去してやるよ、と言いたげな殺意

高めのユキと応戦する<sup>ガリユザーク</sup>Gの方が、若干可哀想にも思えて来る。

そんな黒光りする<sup>ガリユザーク</sup>Gの登場に反応する1枚のカードを、彼は墓地からバトルゾーンへ出す。

「更に『無月の門』を使用したことで、墓地から《ジグス★ガルビ》をタップしてバトルゾーンに」

「あ、負けた方が勝った方に焼肉カルビ次郎を奢るのどう？」

「……ガルビだからね？まあ、10円くらいだし良いだろ」

彼の脳裏に友人の母親の姿が過る。

——やっぱり夜は焼き肉っしょー！

「……ドロー、《ジグス★ガルビ》をマナへ、《ドウシーザ》で《ミラダンテXII》に攻撃」（マナ6）

「どした今の間？何も無い」

自爆特攻。しかしまあ、今の状況では仕方が無い。

「《ドウシーザ》を破壊。更に《ジグス★ガルビ》で《ミラダンテXI I》を攻撃」

「何も無い」

「《ジグス★ガルビ》を破壊。《ガリユザーク》で《ミラダンテXII》を攻撃」

「何も無い」

《ミラダンテXII》に対峙する<sup>ガリユザーク</sup>Gであったが、パワー12000と11000では破壊は免れない。

怒涛の自爆特攻だが、彼は冷静さを失っている訳では無い。焼き肉というワードで思い出された人物によるマインド攻撃の影響なども無い。

「《ガリユザーク》を破壊。ターンの終わりに墓地の《ガリユザーク》の『無月の門・絶』発動。墓地の《ザンバリー》、《ドウシーザ》、《グリナイブ》を2枚ずつ素材にして召喚。無月の門を使ったので墓地から《ジグス★ガルビ》をタップしてバトルゾーンに」

此処まではあまり前と変わらない。しかし、《ジグス★ガルビ》が出たことで、新たなクリーチャーが出現する。

「更に、墓地の《デ・スザーク》の『無月の門』発動。場の《ジグス★

ガルビ』と『ヴォガイガ』、墓地の『グリギャン』と『ドウンブレ』を素材に『デ・スザーク』を召喚。登場時効果で『ミラダンテXII』を破壊。ターンエンド」

だが、『ガリユザーク』にも弱点がある。それは、素材となる魔導具が無ければ蘇生出来ないこと。そしてもう一つが、相手がマナをタップしなければ、意味が無いこと。

「マナの『サイバー・J・イレブン』、『パクリオ』、『サイゾウミスト』をアンタップし、ドロロー、『パクリオ』をマナへ、10マナで『キングダム・オウ禍武斗／轟破天九十九語』を唱える」(マナ11)

マナへと送られたユキのクリーチャー達が、全てバトルゾーンへと現れる。『デ・スザーク』の効果により全てタップしてバトルゾーンに出るが、そんなこと今は関係無い。

「効果でお互いのマナのクリーチャーを全て、登場時能力をトリガーさせずバトルゾーンに出す。俺はマナの『サイゾウミスト』2枚と『プロメテウス』2枚、『パクリオ』2枚に、『カーネル』、『アナリス』、『佐助の超人』、そして『サイバー・J・イレブン』をバトルゾーンに」(マナ0)

ガリユザーク  
バトルゾーンに大量に展開され、僅かにユキのカードと接触するG。本来はユキが効果処理を終えた段階で、次は彼がマナのクリーチャーを全てバトルゾーンに出すのだが、その処理は永遠に訪れない。

「この瞬間、水のクリーチャーが11体以上自分の場に存在するので『サイバー・J・イレブン』の効果が発動し、俺はゲームに勝つ」  
『サイバー・J・イレブン』、その効果は自分の場に水のクリーチャーが11体以上存在することでゲームに勝利することの出来る驚異的な能力。しかし、その条件を達成するのは難しい。チマチマと並べているだけでは、相手からの妨害などでなかなか勝てない。

そんな時、ユキは『轟破天九十九語』に目を付けた。一度にクリーチャーを大量に出せるのなら、デッキのクリーチャーを水を持つクリーチャーにしつつ、マナを加速出来るようにすれば楽に条件を達成出来るのでは無いか、と。

「負けたあ！いや、《デ・スザーク》もうちよい早く出しておけば良かったかもなあ……」

「かもな……はい、焼き肉次郎」

請求は忘れない。ユキは彼から10円を貰い満足する。人の金で食う食い物の味？聞くな、美味いに決まってんだろ。

「次は何ですか？」

「んー、そうだなあ……」

10円を財布にしまい込み、ユキは次のデッキを彼に尋ねる。

「じゃあ——これにしよう」

黒と緑、旧枠の進化クリーチャーを彼はユキに見せる。

「よし、じゃあやろう」

「じゃんけんぽん」

懐かしい誰かの記憶。忘却の彼方に消えてしまった、大切な思い出の欠片。思い出すべき人は、もう居ない。

されど、その日々は色褪せず、

この世界の夢の一つとなりて

いつまでも、いつまでも

永遠に

輝いて

## 失われし記憶の復元

体育の授業が終わり、その後二時間分の授業を経て、遂に学校は昼休みに突入する。

生徒達がそれぞれ仲の良いグループで食事と談話を楽しむ時間。勿論雪もその例に漏れず、今も隣の隣と共に楽しい時間を過ごしている。

……生徒会室で。

「ごめん雪ちゃん。昨日はちよつと体調悪くて、書類捌ききれてない無いんっすよねえ……」

「良いよ、別に。気にしてないから」

ソファに座って雪は弁当を食し、隣は数枚のプリントを横に、目の前のプリントの生徒会日誌と書かれた欄を必死に埋めている。

どうやら隣は昨日から体調を崩しているらしい。どうりで体育の授業中、VRで立体化されたバロム系を見なかった訳だ。最初から組めないからと確認していなかったが、そうか、保健室にいたのか……

今も少し寒そうだ、身体の震えを抑えようとしているのが分かる。これは、昨日の雨風に晒されて風邪をひいたな？

雪は横目で作業をし続ける体調の悪い友の姿を見ながら冷静に分析する。やがて、雪はいつまでも書き続ける隣へ顔を向ける。

「無理しない方が生徒会的には良いんじゃない？ 変に頑張って質とか下げられてやり直し喰らったら皆困るし、何より更に体調を崩されて休まれたら、しばらくは人手が減って大変困る。お前は皆に迷惑を掛けたいのか？」

「うわあ……雪ちゃん、有難いんですけど、それ少し心にグサツと来るっすね」

当たり前だ。強く言わないとお前休まないだろ。

本当は隣に聞きたいことがあったのだが、今は止めておこう。

「無理するお前が悪いんだろ。さ、風邪引いたのに無視して頑張る馬鹿は保健室にでも行った行った」

「えー」

しっしっ、と手を払って如何にも迷惑だとも言うように邪険に扱  
うが、憐はそれでも引き下がらない。早く行け！

「了解したつす．．．．．雪ちゃんつて実はツンデレ」

「誰が男のツンデレなんか得するんだよ。ふざけてないでさつさと逝  
け」

「何か最後だけニュアンス違わなかったつすか．．．．．？」

そこまで言うとは憐はやつと生徒会室から退散する。憐が出て行っ  
たのを確認し終えた雪は、憐の書き途中の書類を手に取り、どんなこ  
とを書いていたのかを確認する。

「えー、『生徒会日誌』制服の規定への女子の要求スカートの丈論争  
編』．．．．．？」

『最近、急にやってきた記憶喪失の転校生、生徒会長の誰にも言えない  
お悩み相談、あるクラスの〇石君の天照大神事件てんてるだいじんなど、色々と身の回  
りで学園物の恋愛アニメ時空かな？』という信じられない出来事が頻  
発している生徒会の伊原 憐です。

生徒会では皆さん御存知の通り、馬鹿みたいな事について真剣に討  
論することが多々あります。今日はかつてあったある討論とその結  
果についてを書くことでこの手紙の空欄埋めようかと思えます。そ  
の内容は、そう、割と生徒会に届く女子生徒からの御手紙の4割以上  
を占める制服への要求。(尚、他の御手紙の1〜2割は1年の御崎君  
への御手紙の模様。羨ましい．．．．．！) 女子のスカートの丈短  
くさせろ問題についての討論会の様子を――』

「埋めんで良いわ馬鹿」

雪はそう言つて手に持っていた用紙を机の上に戻し、そろそろ教室  
に戻ろうと食べ終えた弁当箱に蓋をする。

「はあ．．．．．」

何故スカートを短くしたいなどと女子は思うのか、男子の俺には微  
塵もわからない。寒くないのだろうか？

そんな疑問とこれを書いていた隣に呆れた雪は、深い溜め息をつきながら教室へ戻ろうと廊下へ出た。

「あれ？何してるの」

「あ、先生。いや、生徒会の仕事を伊原君がすると言ってたので一緒に付いて来たんですけど……」

男の名前は覚えていなかったが、ひよろつとした体型の現代文の先生と遭遇した雪は、隣が保健室で休んでいることを説明した。

「あ、分かった。じゃあ担任にはそう報告しておくね」

「すみません、お願いします」

代わりに伝えてくれると言う男にペこりと一礼し、今度こそ廊下の階段を2段飛ばしで上がり、教室へと向かう。

そろそろ昼休みの時間が終わりを告げる。3階の廊下を小走りしていると、廊下の奥の方にある女子トイレ付近でスマホを弄る見覚えのある女子校生の姿が目に入る。

間違いない、それは今日の体育の時間、雪をギリギリまで追い詰めた恵那 由里だった。

あの時のデュエマは本当に苦しかった。やはり、自分はコントロールよりもアグロに弱いな、と思いながらも自分の教室へと入る。

雪が教室に入ると同時に、校内中のスピーカーからチャイムが流れる。机とバッグに教材を入れていた為、自分の席に付いてから次の教科である数学Ⅱの準備をすることが出来た。そのため、数学担当の先生に早く席に着け、と怒られることもなかった。

「つぶねえ……」

「あれ？白菊、伊原どしたの？」

「保健室、風邪」

隣の友人である男子生徒に端的に説明し、数学Ⅱの授業に集中する。問1は……いや舐めてるだろコレ、見たら分かるだろ。

授業が終わるまで、雪は数学Ⅱの問題を真摯に解いていった。因みに、雪は数学以外は致命的に出来ないが、数学だけはかなり出来る。

授業中に出題された全ての問題を、一問30秒掛からずに正解して行く雪の姿は、どこか生き生きとしていた。

日の射す窓際の席、校舎一階の講義室で英語の授業を受けていた由里は、今日の体育の授業での出来事を思い出していた。

——《プチョヘンザ》、かあ……

黄金の鬘を持つエメラルドの瞳を持つ獅子と、神話に登場するケンタウロス、ケイローンを思わせる弓の名手のクリーチャー。

彼女は英語の授業に関心を持たず、ノートにそのクリーチャーを描いていた。

イラストレーターを目指している訳では無いが、それなりにクリーチャーや呪文などの絵は描くことがあった。物静かな彼女の秘めた趣味でもある。ノートを少し過去に遡れば、《バイス・カイザーZ》や《アイラ・フィズ》、《パラスキング》などの姿があった。

完成した絵ばかりがノートの中に確認出来る中、一枚の絵だけが、完成せずにいることに気付く。

——この絵に描かれているカードは、彼が再び使った時に、やっと一枚の絵として完成する。

懐かしむような、悲しむような表情で、彼女は未完成の絵に触れる。いつかの約束を確かめるように、目を閉じて心からの慈愛と敬愛を、彼女はかつての友人へと捧げた。

彼は、覚えているのだろうか。

「はあ……」

良い加減、板書しなければ。由里は目を開け、机の上に置かれたもう一冊のノートを開き、黒板に書かれた内容を残さず写して行く。

教師の説明に耳も貸さず、一心不乱にシャープペンシルを動かす姿は、端から見れば、独自に予習している勉学に励む優等生と言った所だろうか。現実には全く優等生では無いのだが、その勘違いのおかげで、教師からの由里の評価は高い。

「じゃあここに当てはまるのを……恵那さん」

「え、あ、はい」

故に、こうして時たま指される。これまた双方に勘違いが起きており、教師側は勤勉で優秀な生徒として由里を当てているのだが、当の由里はと言うと、授業中に勉強を全くしていない自分に、教師は嫌がらせで当てているのだ、と思っているのだ。

——えっと、何だ。空欄に何を？

まず、何を聞かれているのかもわからない。しかし、前後の問題と、前の問題の答えから、数秒で聞かれているものと答えを直感的に導く。

由里は教科書の文から答えを探し、慌てていた内心を隠すような落ち着いた表情で一文を読む。

「God doesn't play dice」

「Yes. そうですね、これは日本語に訳すと、『神はサイコロを振らない』もしくは『神は賽を振らない』という——」

危なかった……。全く、何が『神はサイコロを振らない』だ。変な名言を遺さないで欲しい。

「——有名なインシュタインの言葉ですね。ではnext……」  
……そういえば、今の言葉と似たようなことを言っていた人が彼の友人に居たな。無口な方じゃなくて、茶髪の方の……。

確か名前は——

「……誰だっけなあ……」

名前は思い出せないが、雰囲気は覚えている。見た目はチャラそうな、彼の、きつと一番仲が良かったであろう男。その彼は見た目に反して知的な側面があった。私達のメンバーの中では三番目に頭が良かったんだと思う。

しかしあの日だけは、そんな彼も含めて、二人の天災のせめぎ合いによって生かされた。死ぬ定めであった筈の私達の殆どは、多くの代償を払うことにはなったが、確かに今を生きている。

彼もまた、何か傷を残しているのだろうか。

例えば、そう

記憶喪失、とか。

授業開始の合図から既に40分が経過した。

5時間目の教室の一角で、真つ直ぐな姿勢を保ちながら自習に明け暮れる女子高生。彼女は同居人との接し方を少し考えながら、休んだ教師からの課題をこなしていた。

机に入れていた彼女のスマホが、淡い緑色の光の点滅を3度発している。それは、誰かからのメッセージが届いた証拠だった。

「RAINだ……」

授業中にRAIN、それも一応は生徒会長である自分へ向けられたものだと思うと、少々思う所もあるが、確認だけしようとスマホのロック外す。グループで誰かが話しているのに反応しただけかもしれない。

——雪君からだ……『伝えるの遅れました。憐が体調不良で生徒会欠席だそうです』ああ、成る程、了解……っと。

最後に適当にスタンプを送って、スマホを机の中にしまう。憐が休みだとすると、今日はプリントの生徒会が書く欄を埋めて解散するのがベストだろうか？流石にその後も一年に手伝わせるのは気が引ける。

凧は生徒会の今日の活動内容を決めると、自習を再開する。自習教科は自由ということで、凧は歴史を勉強していた。

とは言ったものの、勉強と言ってもとても偏っている。その内容とというのは、デュエマの歴史なのだから。

デュエマがスポーツとして広まり、時代を造り上げたカード達。その歴史は見ていられるだけでも楽しいものだ。闘魂編の『青黒緑リーフ』一強の時代など、どれほどカードパワーに差があったのか笑えてくる

程に面白い。

中でも、P S時代に環境に名を轟かせた『不滅オロチ』が凧は好きだった。《時空の不滅ギヤラクシー》に《斬隠オロチ》を使い、大型を踏み倒しつつ自軍をブロッカーにするというデツキだ。雪が使ったシノビデツキでも、似たようなことが再現出来る。

本来は1体を犠牲に新たにクリーチャーを呼ぶオロチだが、その犠牲対象を《時空の不滅ギヤラクシー》にすることで、本来はデメリツトとなる筈の退去効果をメリツトに変換する。攻撃に対して反応する《オロチ》に、全軍をブロッカーにする《撃滅の覚醒者キング・オブ・ギヤラクシー》。更に山札からただ同然で出て来るクリーチャーという無駄の無いコンボに、凧は感銘を打たれたのだ。

そして、凧の持つガチデツキには、この『不滅オロチ』のギミックが搭載されている。使いたいコンボである上に、凧が一番得意とする光文明であるのだから、当然と言えば当然である。

——そうだ、この『不滅オロチ』って、雪君から教わったんだっけ……

どうして自分がこのコンボを知っていたのかについて、凧は幼き日に雪から教わったのだと思ひ出す。守りを得意とする自分に、このコンボを紹介してくれたのは確かに彼だった。

余談だが、今の記憶を失った雪も『不滅オロチ』のように、《プチョヘンザ》を革命チエンジした際に、《時空の不滅ギヤラクシー》を覚醒させ、制圧と守備を強固なるものにするというプレイをすることが度々ある。記憶を失った所で、凧の知っている雪とデュエマの腕はそこまで変わらないのだろう。

最も、その記憶を失う前の雪というのが今の雪からすれば謎の存在なのだが。

「今日、帰ったら雪君とデュエマしよつかなー……」

一人小さな声呟く。虚空へと漏れたそれは、誰の耳にも届かず霧散する。そんなことをしている間に、かなりの時間が過ぎ去っていた。

キンコーンカーンコーン

「起立、礼」

授業が終わり、とうとう6時間目前。最後の授業を前に、寝ていたクラスメイトは次々に「やつと終わる、やつと終わるぞ」と歓喜する。まあ、それに関しては凧も賛成だ。早く帰って、雪とデユエマをしたくなっている、要するに、体は闘争を求めているのだから。

あ、生徒会あるじゃん……。と気づき、うなだれるまでにそこまで時間は掛からなかった。

## 虚構空間のチエイサー・ハンド

地球。それは、人の無意識が統治する歴史紡ぐ地の名前。

時間と空間、その2つから成り立つ、生命が育まれる箱庭の名前。しかし、もしその時間と空間の片方が失われたならば、人の住むこの楽園は、一体どのように姿を変えるのだろうか。

時間と空間をx軸y軸と仮定した場合、片方が失われれば軸に沿った直線、つまり、時間と空間のどちらかが変化のない世界が出来る。時間が失われたならば、成長も老化も存在しない、永久と呼んでも良い世界が。空間が失われたならば、現象というものが消え、物質という存在が存在することを許されない、意味も無く時のみが流れる閉じた世界が。

人や自然物が一つのもので構築出来ないように、人間には干渉することの出来ないこの宙のシステム、時間と空間の関係性でさえ、一つだけでは成り立たないようになっている。

いずれにせよ、どちらかの無い世界に人間には生きることが出来ない。人間は時間と空間があり、初めてこの星の下に生きているのだ。だが、もしもその二つの世界で人が観ることが出来るものがあるとしたら、それは間違いなく時間の流れない空間だけの世界だろう。私達は物質から出来ているのだから。

空間に属する物質から生成された私達は、純粹に物質の複合体であるから空間に干渉することが出来る。しかし、時に干渉することは出来ない。人間は純粹に時に属するものを内包している訳では無いからだ。

ならば、どうしたら人間は時に属する純粹なものを内包することが出来るのだろうか。

或いは、

人が肉体を捨てれば、

物質世界から自分を切り離すことが出来れば、

時に干渉することが、出来るのではないだろうか。

人が死に逝く直前に、走馬灯、というものを見るといふ話がある。あ

これは脳の中の今までに記録された情報が映像となって駆け抜けると  
いうものである。

つまり、人間が肉体を捨て、非科学的だが仮に魂、思念と呼ばれる存在が抽出された場合、強引ではあるが、それは過去、現在の記録のみを持つている可能性がある。物質では無いもので構築されているかもしれない。

ならば、人は死後、物質という属性を持っていないことになる。魂という目に見えない不確かな存在が、物質世界の人間には認識できないのにも納得がいく。後は純粋な時に属する何かを内包するだけだ。しかし、その何かがどうしても分からない。ならば、時間だけが流れる世界に、その魂を送ってしまえば良いだけの話だ。

前述した通り、人が時間だけの世界で生きていけないのは、自身が物質であるからであると私は考えている。ならば、既に物質を捨て去っているのなら問題は無いはずだ。

時を旅することも、いや、時の一部となることも、不可能ではないのかもしれない。

—Code;Lolo

ノックと共に、静かな保険室に失礼します、と女性の声が響く。ベッドの上で眠りについていた憐は、声を掛けることもなく、来訪者の行動に耳を澄ませていた。

「あれ？先生居ない……か……じゃあ置いとこ。失礼しました〜」

何かを置いて女子生徒は部屋を出て行った。大凡、自分には関係の無いことだと再びベッドの上で眠りにつこうとする。

目を閉じると、不思議な夢を見る。誰かが何かと暗い空間に居る夢だ。顔も分からない上に、何をしているのかも全く分からない。

何かを彼は失った。いや、奪われた、ような気がする。

それが何なのかが不思議と引掛かって仕方がない。ただの夢だと言うのに。

夢を見る自分の脳にノイズが走る。モノクロの映像から確認出来るこれは……デユエマの盤面か……？

これは……本当にゲームの盤面なのか……？それにしては少し、普通じゃないような……

——運 わない

—— た 目……のか

ノイズが酷くなる。まるでテレビ画面に映る砂嵐のように。シーンがぷつりぷつりと飛んで行き、やがて一つのコマで映像が止まる。

——悠久の時を越えて、いつか……

蝶のように、飛んで——

空へ手を伸ばし、何かを渴望する男の声が事切れるその瞬間、意識は暗転した。

「っ！」

高所から落ちるような感覚に襲われ、目を覚ます。そこまで時間は経過していないが、身体の怠さは完治していた。

頭は完全にクリアな状況で、脳が急激に冴えていく感覚を全身に感じる。

全ての思考回路を夢の内容に巡らす。

「あの、最後に喋っていたのは……もしかしたら……」  
「あれ、伊原君起きてたの？」

シャーツとカーテンを捲り、自分を覗き込む保健室の先生。もう、オバサン、と言われてしまう年齢なのは、見える皺からも十分分かる。「体調が良くなったんで教室に戻りたいんですけど……」  
「HRはもう終わっちゃってるけど、そう？じゃあこの紙を担当の先生に渡して」

熟年の女教師から青い紙を手渡される。内容は保健室に居たことを証明するものだった。

「失礼しました」

「はい」

ガラガラ、と音を立てて扉が閉まる。現在の時間は午後4時、もう既に殆どの生徒が校舎を出ている頃合いだ。

憐は急いで階段を駆け上がり、自分の教室の扉を勢い良く開ける。

「おお、伊原。風邪大丈夫か？」

「はい、あ、これを……」

そう言っただけで担任に青い紙を渡す。それが何か知っている担任は、特に確認もせず閉じていた名簿のページに挟む。

ふと生徒がまだ何人か残っている教室を見回すが、雪の姿は確認出来ない。既に下校したということだろうか。

「体調管理気を付けろよー？」

「あはは、そうですね……」

憐は担任との会話を終わらせ、廊下まで出た所でRAINを開く。上から2番目のトークアイコンの項目をタップし、手早く要件を伝える。

『風邪治った。学校居るなら今どこ？』

「それで生徒会室に呼ばれたと」

「うん、1年の子達が休憩がてらデュエマしてるだろうから、挑戦されたら受けてあげて。私こっちでまだ仕事あるから」

憐が目覚める前、HRを終えた雪は凧に生徒会室に来るように言われ、特に断る理由も無かった為に言われるがままに生徒会室を訪れた。

何故自分が呼ばれたのかを凧に聞いた所、憐が休んだことで少し忙しくなるらしく、各自にノルマとして課された仕事を終えた後の1年のデュエマの相手をして上げて欲しいとのことだった。今までは仕事が終わった者同士でデュエマをして解散まで時間を潰していたのだが、凧や他の2年が憐の仕事を肩代わりしたことで、2年に挑戦してくる1年は挑戦相手を失ってしまう羽目になった。

そこで凧は雪を呼んだ。日本代表戦に選ばれた1年生、御崎 透を倒したと噂にもなっている雪ならば、相手に不足は無いと判断してのことだった。

「了解しました．．．．．頑張ってくださいね？」

「あ、うん、ありがとー」

失礼します、と扉を開け、凧の後ろに付いて行くようにして部屋の中へと入って行く。さて、と雪は部屋の片隅にある椅子に座り、挑戦に備えてデッキを取り出す。体育ではイメンダーウインを使ったが、今回はどうしようか．．．．．

「また使うか、それとも．．．．．」

バッグの中にはもう一つだけデッキがある。ただ、そのデッキはあまり相手が楽しいと思わないデッキだと考えている雪は、少しそのデッキを使おうか迷う。

本来、相手のことを考えて相手にとって嫌なプレイをしないようにする対戦ゲームなど、真面目に勝とうとせずによっていないのと同じ、相手へのある種の侮辱だと言うのが雪の考えなのだ。

どんな方法を使っても勝つ。相手から対戦後に後ろ指を立てられようと、俺の知ったことでは無い。

だが、だからと言って、相手が楽しいと感じない、と自分でさえ思うようなデッキを使う必要は無いのだ。

そういった諸々の理由で、このデッキを使うのは——いや、このデッキのエースを使うのはあまり気が乗らないのだ。

しかし、組んで使わないのも可哀想だと思ふ気持ちもある。だから迷っているのだ。

「……………聞いてからどちらかのデッキを使う、か？」

情報アドを事前に与えてしまうことにはなるが、相手の了承を得られればこちらとしては問題ない。つまらない試合になったとしても、確認はしているから文句など受付けない予定だ。

最も、相手が話掛けてくればの話なのだが。

「あの、すみません……………」

「ん？」

感じからして1年の男子だろうか。小さな声で申し訳無さそうに聞いて来るその姿は、初対面の人にカードゲームの対戦を申し込むソレだった。

「あの、デュエマの相手って今出来ますか……………」

「あ、良いよ〜」

そこまで広い部屋では無い為、自然と風や他の生徒会のメンバーからも見える位置で試合は行われる。

小さな折り畳み式の机を展開し、その上にお互いデッキを置く。雪は更にもう一つのデッキを取り出し、1年の子に選択肢を提示する。

「EXwinと攻撃して勝つデッキ、どっちが良い？」

「ん……………攻……………いや……………EXwinでお願いします」

悩んだ末に選ばれたのはEXwinのデッキだった。この世界に来てから初めて殿堂リストを見た時に思い付いたデッキでもある。

お互いにデッキをカット&シャッフル。友人は信用せよ、ただしデッキはシャッフルせよ。遊戯王にてパンドラという敵キャラクターの残した名言である。如何にフリー対戦であったとしても、その言葉を胸にゲームをするのが、カードゲーマーというものだ。

「じゃあダイスで決めようか。それで良い？」

「はい」

ダイスの結果は4と5、僅か1の差で雪は後攻となる。まずは相手のデッキを判別するとしよう、と頭の中で相手を調理する工程を組み立てて行く。

「先行貫います」

「あ、待って、一応名前聞いておいても良い？」

「あ、すみません。卯月です。卯月うづき 順平じゆんぺいって言います」

卯月 順平……よし、これでデュエマでもすれば名前と顔が一致するくらいには覚えられるだろ。

雪は初手を眺めながら内心でそう思う。どうにも雪は他人の名前を覚えるのが苦手なのだ。不思議とこの世界に来てから前よりも覚え易くなっている気がしなくも無いが、苦手なのに変わりは無い。取り敢えずは何か一緒に楽しいことでもすれば名前も印象に残るだろうと雪は考えている。

「そっか、あ、白菊 雪です。宜しくね」

「あ、はい。宜しくお願いします」

会話で何かと、あ、と付くのが緊張から来ているものであるのは明白だ。かく言う俺も付いているが。

……そういえば、竹宮さんや凧さんと出会ったばかりの頃の俺もこんな感じだったなあ……

「じゃあ、僕のターンから。《特攻人形ジェニー》をマナに、ターンエンド(マナ1)

「ドロ、《アストラル・スーパーリーフ》をマナへ、1マナで《マリオン・フラワー》を召喚。ターンエンド(マナ1)

《特攻人形ジェニー》、定番の闇のハンデスクリーチャー。超次元ゾーンにカードが無いのが気になるが、《特攻》の入るデッキなら青黒ハンデス、もしくはドロマーハンデスと見た。

雪が相手のたった1枚のカードからデッキタイプを予想しているのに対し、対戦相手である順平もまた自分の敵のデッキタイプを予想していた。

——《アストララル・スーパー・リーフ》に《マリン・フラワー》……サイバー・ウイルスの種族デツキか？

「ドロー、《凶鬼92号 デンカ／世紀末ハンド》をマナへ、2マナで《ゲオルグ・バーボシユタイン／ゴースト・タッチ》を唱え、1枚ハンデスします。……それで」（マナ2）

恐る恐る雪の手札から1枚のカードを選び取る。いくらサイバー・ウイルスのデツキだとしても、《バイケン》が入っている可能性だって普通にあり得るのだ。

雪は選ばれたカードを素直に墓地へと送る。

「《ハリケーン・クロウラー／ブレイン・チャージャー》を墓地へ」

「ターンエンド」

「ドロー、《Dの花道 ズンドコ晴れ舞台》をマナへ、2マナで《マリン・フラワー》を《アストララル・リーフ》に進化」（マナ2）

嘗てデュエマが出来た最初期から殿堂リストに入っていた水文明の違法薬物こと《アストララル・リーフ》が場へと現れる。今の時代に殿堂リストという檻から釈放された《アストララル・リーフ》は、そのコストに見合わぬ凶悪な能力発動する。

「バトルゾーンに出た時効果で3枚ドロー。ターンエンド」

減った筈の手札がすぐさま回復する。ハンデスデツキの特徴は相手の手札を細かに削って行き、自分のペースに勝負の流れを持って行くという非常に敵にしてくれない厄介なタイプのだが、相手が手札を即座に回復するようなデツキタイプならば、そのコントロール力は発揮され辛い。《ヴォルグ・サンダー》が超次元ゾーンに居ればわからないが、確実に無いと分かっている雪は山札を高速で削り、手札を増やすことを惜しまない。

——次のターンにまた《アストララル・リーフ》を出されたら堪ったもんじやない。ここで落とさないと……！！

「ドロー、《魔刻の斬将オルゼキア／訪れる魔の時刻》をマナへ、2マナで《傀儡将ボルギーズ／ジエニコの知らない世界》を唱えます」（3マナ）

「ぶっぞわ」

「失礼します」

冷静に、雪の目を見ながら落とすカードを選ぶ。

心臓がいつもよりも鼓動を早めている。間違いない、これは緊張と、高揚だ。

「.....これで」

順平がカードを1枚選び取り、そのカードを雪が指先で手札から墓地へと送られる。

落とされたカードは、今公開領域へと落ちその姿を露わにする。

そのカードの名は――

「《エボリユーション・エッグ》を墓地へ送ります.....」

「ターンエンド」

外れだ。

――マズいっ！

「ドロー、《アストラル・スーパードライブ》をマナへ、2マナで《アストラル・ライフ》の上に《アストラル・ライフ》を再進化。cip効果で3枚ドロー。1マナで《マリン・フラワー》を召喚。ターンエンド」(マナ3)

雪の手札が更に増える。アグロにハンデスは弱いと考え、攻めて来ないと言う雪のデッキを選んだが、とんだ誤算だった。

このデッキには、チマチマとハンデスした所で意味が無い。かと言って今すぐに手札を0に出来る訳でもない。

「ドロー、《残虐霸王デスカール/ロスト・ソウル》をマナへ、4マナで《フェルナンド・ソシユール/プライマル・スクリーム》を唱えます。効果で山札の上から4枚を墓地に送り、墓地からクリーチャーである《傀儡将ボルギーズ/ジエニコの知らない世界》を1枚回収します。ターンエンド」(マナ4)

今は時間を稼ぐ。ああ言ったデッキタイプのフィニッシャーは分かり易い。あの貝を出されて即死しないようにするにも、今の内から相手の墓地を肥やすしかない。

「ドロー、《母なる星域》をマナへ」(マナ4)

――《母なる星域》.....ツインパクトじゃないってことは、

4枚の《幻緑の双月／母なる星域》は確実に入っていると見て間違いない。かと言って8枚も《母なる星域》が必要そうなデッキでも無い。6枚辺りが妥当だろう。

既存のカードがツインパクト化したことにより、本来入れられない筈の5枚目以降のカードをデッキに入れられるようになったのは、デッキを組む者達、デッキビルダーには朗報以外の何ものでもなかった。この世界に来てからまさかツインパクト化してるとは露も知らずに居た雪は、早速5枚目以降の《母なる星域》を使い、デッキを組んでいた。

それがこのデッキである。

因みに、雪が買った訳ではない。と言うのも、凧と同じ家に住んでいることで、カードの共有化が起きたのだ。偶然、凧が買っていたBOXから、雪の使ってみようと思うカードが出て来たのである。

凧が買ったパックやBOXから出た使う予定の無いカード、余ったカードを雪が使う。凧がデッキを組む時は要求されれば必ず協力する。そういった関係が出来ている。

「4マナで《ハリケーン・クロウラー／ブレイン・チャージャー》を唱える。効果で1ドロシーし、《ハリケーン・クロウラー／ブレイン・チャージャー》をマナへ。ターンエンド」(マナ5)

まだまだ時間は経っていない。これからが本番だ。

## リソースフエミドロ

「ドロー」

膨大な知識と、それを奪わんとする者の衝突は、目に見える場では無く、可能性——手札において引き起こされていた。

「《悪魔神バロム》をマナへ、2マナで《ジェニコの知らない世界》を唱えます」(マナ5)

ツインパクトとなり、マナを消し飛ばす強力な呪文、《バロム砲》を持つ《バロム》が順平のマナへと置かれる。きっとあの《バロム》こそ、あのデツキの切り札なのだろう。雪はそう確信していた。

そんな雪へと再びその増えた手札を刈り取ろうとツインパクトカードである《ボルギース》の呪文面、即ち《ジェニコの知らない世界》が唱えられる。

しかし、雪はその程度のハンデスでは痛くも痒くも無い。余裕のある表情を浮かべる雪は持っていた手札を裏面のまま相手に1枚選ばれる。

「それで」

「《終末の時計 ザ・クロック》を墓地へ」

バイケンよりはマシだが大ハズレは大ハズレだ。思うように良いカードを落とすことが出来ず、順平は顔をしかめる。

「ターンエンド」

「ドロー、《幻緑の双月》をマナに、5マナで《Dの花道 ズンドコ晴れ舞台》を展開」(マナ6)

《母なる星域》を持つ《幻緑の双月》をマナに置いた雪は、遂にデツキの潤滑油である自然のD2フィールド、《ズンドコ晴れ舞台》を場に展開する。

雪は顔には出さないものの、その内心では次のターンが楽しみで仕方なかった。

次の雪のターンになった瞬間、雪のデツキはその真価を発揮する。勝利へと迫る為の連鎖が。

「ターンエンド」

しかし、そんなことは対戦相手である順平にも分かっている。使われているサイバー・ウィルスは大体が低コスト、そしてクリーチャーが出ることで反応し、マナを増やす《ズンドコ晴れ舞台》。

奴が、奴がこの戦いに終焉を齎そうと現れるであろうと。その準備が、もう完全なものになろうとしていることも。

——ここで何か引かないと、もう間に合わないかもしれない……  
「ドロー」

慎重に、カードを引く。引いたカードはドローソースとしての性質を持つツインパクトカード。

しかし、それを使うことは出来ない。等価交換の材料が順平の場には無いのだから。

「《凶鬼12号 ジャーゴン》をマナへ、ターン……エンド」(マナ6)

《凶鬼12号 ジャーゴン》、《邪魂創世》を持って生まれたツインパクトカード。肝心な《邪魂創世》は、自身のクリーチャーを破壊しなければその強欲なドロー効果を発揮することが出来ない。此処に来て闇文明の癖のある効果が順平の足を引っ張る。

「ドロー」

そして、雪のターン。此処からは、水文明のドロー力と自然文明のマナブースト力による共同作業だ。

「《水上第九院 シャコガイル》をマナへ、3マナで《母なる星域》を唱える」(マナ7)

今回の雪のデッキの切り札は、低コストクリーチャーの多い中一際巨大なコストを持つ水文明のクリーチャー、《シャコガイル》であった。その名から分かる通り、シャコ貝がモチーフなのだが、その効果はデュエル・マスターズ屈指の凶悪な効果であり、本当はバカ貝なのでは無いか。そんな気持ちを雪は抱きながらも使っている。

「場の《マリン・フラワー》をマナに置き、マナから《アストラル・スパーリーフ》を《アストラル・リーフ》の上に進化」

《アストラル・スパーリーフ》が出現したことにより、雪の手札は急速に増加することになる。そして、場にクリーチャーが出たことによ

り、当然《ズンドコ晴れ舞台》も効果を発動する。

「《アストラル・スーパーリーフ》の効果で3枚ドロロー。《ズンドコ晴れ舞台》の効果で1マナチャージ」(マナ8)

《アストラル・スーパーリーフ》は《アストラル・リーフ》と同じ3ドロロー能力を持つ。そして、「スーパー」になったことにより、その効果は更に進化したものへとなっている。

「5マナで《ハリケーン・クロウラー》を召喚」

「あー……」

ツインパクトカードとなった《ハリケーン・クロウラー》の登場は、まさしくこの状況では順平にとって最悪の部類だった。相手の手札は4枚。そして場には《ズンドコ晴れ舞台》。

ノーコストのマナ回収に等しい。

「《ズンドコ晴れ舞台》の効果で1マナチャージ。《ハリケーン・クロウラー》のcip効果で手札の4枚をマナに、マナから《ハリケーン・クロウラー》《アストラル・リーフ》《マリリン・フラワー》《T・アナーゴ》を回収」(マナ9)

まだまだ、雪のターンは終わらない。

「1マナで《マリリン・フラワー》を召喚。《ズンドコ晴れ舞台》の効果で1マナチャージ」(マナ10)

そして――

「《アストラル・スーパーリーフ》の効果で自分のサイバー・ウィルスが場に出たことで3枚ドロロー」

手札が、増える。

コスト1のサイバー・ウィルスは、その全てが《アストラル・リーフ》と同じ効果を得る。

「2マナで《マリリン・フラワー》を《アストラル・リーフ》に進化。《ズンドコ晴れ舞台》で1マナチャージ、cip効果で3枚ドロロー」(マナ11)

しかし、雪も警戒はしている。《ロストソウル》を使われれば、かなり厳しいことは確かだ。《シャコガイル》で確実に勝てる盤面までは、欲を出し過ぎてはいけない。

「《スーパーリーフ》の効果は使用せず、3マナで《母なる星域》を唱える」

再び、ツインパクトの《母なる星域》が唱えられる。既に今の雪の対戦相手である順平は半ば諦めかけている。それ程までにこのデッキは——《シャコガイル》をエースとして作られたこのデッキは独り善がりなのだ。

「場の《ハリケーン・クロウラー》をマナに置き、マナから《スーパーリーフ》を《アストラル・リーフ》の上に進化。ターンエンド」

山札は残り4枚。このターンだけで計14枚ものカードが山札から削られて行った。もし《シャコガイル》が場に居れば、山札は間違いないく0になっていたことだろう。

そして、このままでは雪は確実に次のターンに勝つ。つまりはこれが順平に残されたラストターンになる可能性がある。運命を分ける最後のターンだ。

「ドロー……」

ハンデスも、ドロー力も、何もかもが悪かったこの試合。最後までいい、応えてくれと山札の上からカード取る。

「——よし」

どんな奴が相手であろうと、その拳は未だ握られている。どれだけ逆境であろうと、完全に諦めていないのなら、デッキは、その声に応えてくれる。

「《ゲオルグ・バーボシユタイン》をマナへ、7マナで《ロストソウル》を唱えます」(マナ7)

《ゴースト・タッチ》のツインパクトカード、《ゲオルグ》をマナへと置き、手札を根刮ぎ消滅させるハンデスの代表的カード、《ロストソウル》が炸裂する。

《残虐霸王デスカル》とツインパクトになった《ロストソウル》は、雪の手札7枚を全て墓地へと叩き落とす。

「ターンエンド」

これで次のターン、雪が勝つことは若干難しくなる。しかし、未だに雪が優勢であることに変わりはない。

「ターンの始めに《ズンドコ晴れ舞台》のDスイッチを使用。効果でマナから《水上第九院 シャコガイル》をバトルゾーンに。《ズンドコ晴れ舞台》の効果で1マナチャージし、《シャコガイル》のcip効果で自分の墓地のカードを全て山札に戻し、シャツフル」

山札が16枚へと回復する。そして次のドロローによっては、雪の勝ちで終わる。

「ドロロー、《幻緑の双月》をマナへ、ターンエンド」(マナ12)

此処に来て、雪が減速する。

——来たつ、僕のターンだ！

順平は思わずニヤリとする。来る可能性は少なかった筈だ。しかし、まだ生きている。対処出来るカードがこのデッキにはある。

これでそのカードを引ければ……

「《シャコガイル》の効果で5枚ドロロー、3枚を墓地へ」

「ドロロー」

雪が大量にドロローし、勝利の為に山札を削るが、構わない。必要なカードは引けたのだから。

「6マナで《デーモン・ハンド》を唱え、《シャコガイル》を破壊します」

《マッド・デーモン閣下》というクリーチャーとのツインパクトになった《デーモン・ハンド》が次のターンに勝つつもりで居た《シャコガイル》を粉碎する。これでまた雪は《シャコガイル》を出さなくてはならない。

しかし、順平のやっていることは所詮は負けを回避する為の行動。勝つ為の行動ではない。雪が自爆する可能性に賭けているに過ぎない。

「ターンエンド」

「ドロロー、5マナで《ハリケーン・クロウラー》を召喚。《ズンドコ晴れ舞台》の効果で1マナチャージ。cip効果で手札の2枚をマナへ、マナから《T・アナゴ》と《シャコガイル》を回収」(マナ12)

回収されるコスト1のサイバー・ウイルス。場には《ズンドコ晴れ舞台》に《スーパリーフ》。

「1マナで《T・アナーゴ》を召喚。《ズンドコ晴れ舞台》の効果で1マナチャージ。《スーパーリーフ》の効果で3枚ドロー」(マナ13)  
漲る手札、減らないマナ。無尽蔵にも思える手札とマナで、雪は更にドローしたカードを使用する。

「5マナで《ハリケーン・クロウラー》を召喚。《ズンドコ晴れ舞台》の効果で1マナチャージ。cip効果で手札3枚をマナへ、《シャコガイル》《ズンドコ晴れ舞台》《ハリケーン・クロウラー》を回収する」(マナ14)

残りのマナでは《シャコガイル》は出せない。故に、雪は確実に勝つカードを場に投げる。

「5マナで《ズンドコ晴れ舞台》を再展開。ターンエンド」  
「流石に、無理かな・・・・・・ドロー」

順平は負けた。諦める、とは、勝てる可能性があるのにも関わらず、そのビジョンを否定し、信じないことだ。

これは決して、諦めではないのだ。順平のデッキに、D2フィールドを除去するカードも、コスト7以下でマナを消し飛ばすカードも、相手の山札を超回復するカードも存在しない。

今からたった1枚で勝つことの出来るカードは、無い。

「《ジャーゴン》をマナへ、ターンエンド」(マナ8)  
「《ズンドコ晴れ舞台》のDスイッチ効果。マナから《シャコガイル》をバトルゾーンに。《ズンドコ晴れ舞台》の効果で1マナチャージ。《シャコガイル》の効果で墓地のカードを全て山札に加えてシャツフル。そして、ドロー」(マナ15)

山札の枚数はこれで、5枚。雪の勝ちだ。

「ターンエンド。そして、君のターンの始めに《シャコガイル》の効果で5枚ドロー」

「山札が0で《シャコガイル》の効果によりEXwin、ですね。ありがとうございます」

そう、《シャコガイル》の能力は、自分の山札を引ききいたら負けるかわりに勝つ、というルールを改変する効果。その為、このカードを使用するデッキは山札を多く削るデッキとなる。順平が初見でこの



## 不諦の遺志

曇り始めた空の下、少し賑やかな生徒会室にて、制服のズボンのポケットに入っていたスマホにRAINの通知が来ていることに気付く雪。後輩達とのデュエマが一段落付いた所で、新しいメッセージに目を通す。

「あ、凧さん。隣の体調不良治ったみたいですよ」

「そうなの？じゃあ風邪じゃなかったのかな？」

「まあ、何か僕のこと探してるみたいなんで今から会って来ます。辛そうだったら帰り付き添おうかと」

はくい、と力の無い声で返事をした凧にお先失礼します、と頭を下げ、後輩達に手を振りながら生徒会室を後にする。

『そつちに向かう。今どこ？』

『教室』

「教室にまで戻ったのか。……………あ、そういえば、またVRの医療についての本読み忘れたな……………また今度にするか……………」  
階段を上がりながら呟く雪は、どこか問題を先延ばしにし続ける駄目男の姿に似ていた。

「あれ？」

ふと聞いた事のある声が聞こえ、階段を登るのを止め、顔を上に向ける。

「あ、えーつと、恵那さん、だっけ？」

「あ、はい。恵那です……………その、何か仕事ですか？」

名前の確認を取る雪に、肯定しながら気まずそうにする恵那。どうやら、偶然雪と出会い、こんな時間に何をしているのか気になって声を掛けてしまったらしい。

「いや、手伝いしてただけですよ。今から友達の前に行くところ……………」

「ああ、そうだったんですね……………呼び止めちゃってすみません。それじゃあ……………」

引き留めたことを悪く思い、一礼をした後に少し足早で階段を下り

る恵那。すれ違いざま、良く見れば眼鏡を掛けていることに気付く。上階の窓から射す夕陽の輝きによって、フレームの薄い眼鏡に気付いていなかったのだ。

「さて、と。俺も隣の所に行かないと……」

恵那が去っていくのを見届け、雪は少しの階段を上り、隣の居る2階へと到達する。

もう誰も居ない廊下で、隣は立ったまま窓際に寄りかかりながら雪のことを待っていた。

「あ、隣。体調、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫。どうにも風邪じゃなかったみたいで」

それなら良いんだけど、と雪は隣の隣の壁に寄りかかる。隣は少し神妙な表情を浮かべたまま、雪の方に顔を向ける。

「……変な話んだけど」

「ん？」

いつもと違う、どこか暗い雰囲気の中に、雪は少し違和感を感じる。あの、いつも周りを明るくするような彼じゃない。自分や風さんに使う口調でもない。

何か可笑しいと、雪はその時、隣の様子を見て思った。

そしてその考えは、当たりだった。

「雪ちゃんは、本当に記憶喪失なの？」

「え？ああ、うん。そうらしいよ」

「らしい？雪ちゃんは喪ったということも少しも覚えてないってこと？」

ああ、と短く返す雪を見て、隣はどうやら本当にそうなのだろうという結論に至る。

自分でさえも、喪ったということは覚えている。いや、少し違うか、喪ったということも思い出せた。

しかし、雪ちゃんにはそういったものが一切無い。まるでそう、例えるならば、PCのログのデータさえ消えているようなものだ。何のファイルが消えたのか、それが分からないのはその記録を喪ったからだろう。

今より前の『白菊 雪』の記憶を喪った記録が無いのならば、何故消されたのか、いつそれを消すタイミングがあったか。

——あつたとしたら、多分……Z事件だ。Z事件の夢原翔真の実験で脳を弄られかけた時。つまり、雪ちゃんは以前、夢原翔真にとってZ事件において知られてはマズいことを知ってしまった？

憶測ではあるが、可能性としては十分に有り得る。だがこの場合、雪ちゃんが夢原 翔真に狙われる理由が無くなってしまふ。既に処置し終えた対象に、危険を冒してまで接触しようとするだろうか？それともまだ、完璧に処置出来ないのか？もしくは……実験途中、なのか？

いきなり質問して黙り込む自分に困惑している雪に、憐は更に問を投げ掛ける。

「雪ちゃんは、夢で変な夢を見たことない？例えば、とても苦しうにデュエマをしている夢とか、空に手を伸ばして息絶える夢とか……」

「無い、と思う。夢なんて覚えてないし」

夢は覚えていることの方が少ないだろう。しかし、とても印象的なものなら起きても記憶していると考えていた憐は、これも事実なのだろうと考える。

——それにしても、夢、か。もし雪ちゃんが少しでも思い出せたなら、夢にも影響が出るかもしれない。

夢は記憶の整理の際に出るノイズのようなものだ。本人が思い出し掛けていることを自覚せずとも、脳はその情報を整理しようと夢というノイズを吐き出す可能性がある。そして、その内容を夢で見た時、デジャヴによりその夢を忘れずに記憶出来るかもしれない。

……そういえば、何故自分の記憶にあんな記憶があつたのだろうか。あそこでデュエマをしていたのも、手を伸ばしていたのも、間違いなくあれは雪ちゃんだ、と思っていたのだが、良く考えてみれば、それでは可笑しい。

デュエマの盤面が正面から見えるのも、空へ手を伸ばして息絶える

のも、どちらも主観でなければ有り得ない。

しかし、現に憐はその視点で見た。夢だから多少ねじ曲がっているのかも少し考えたが、あそこまで鮮明な夢で少しでもねじ曲がっていたとはやはり思えない。

何故、自分が雪ちゃんの主観の夢を見たのか。

憐はその疑問に辿り着いた時、自分の全身に恐怖が纏わりつく感触を味わった。

「雪ちゃん、もしかしたら、事態はかなり深刻なのかもしれない。夢原翔真は必ず雪ちゃんに手を出して来ると思う。きつと、こうして話をしている間にも、雪ちゃんの個人情報から雪ちゃんのことをずっと監視しているかもしれない」

「……あ」

雪はそこで思い出す。少し前に凧の家の前で感じた悪寒を。あれは、監視だったのだろうか。そうだとすれば、いつ自分や凧、舞が危険に晒されても可笑しくは無い。

自分の居場所、自分の関係者が、自分を狙う犯罪者に知られている。それは、雪にとつてとても恐ろしいことだった。

「……憐、少し前に、俺は凧さんの家の前で視線を感じたんだ。もしかしたら……それって……それって……！」

「落ち着いて、雪ちゃん。確かにマズいけど、相手は嘗て天災と謳われた夢原翔真だ。バレるのは時間の問題だった。問題はバレた後、これからの行動だ」

過去に囚われれば、人は今を動けなくなる。動けなくなったら最後、抗うことは不可能だ。

「雪ちゃん、何でも良い。可笑しいと思える記憶があったら言ってくれ。雪ちゃんの記憶が無いのが夢原の仕業で、今も狙われているのなら、その目的はきつと完全な記憶、いや、記録の抹消だと思う。つまり、まだ雪ちゃんは何か覚えている、記録している筈なんだ」

そう言われ、雪は少し戸惑ってしまう。

病室で起きる前、自分の中にあつたのはこの世界ではない世界の記憶だ。流石に他者にその話をするのは信じられないだろう。そして、

信じてもらった所でどうしようも無い。

しかし、憐は続けて真剣な顔つきで雪に言うのだ。

『どんなことでも自分は信じる。だから、頼む』と。

少しの迷いを見せながら、遂に雪は今まで誰にも言っただけで来なかった話を、友である憐に打ち明ける。

「本当に、信じられる?」

「勿論」

「絶対に?」

「絶対に」

「じゃあ……言うぞ」

「……うん」

「俺は……ん?何か……声、聞こえない?」

「え?何が?」

雪が言うのを止め、身構えていた憐は少し力が抜ける。憐はすぐさま耳を済ましてみるが、雪のいう声は聞こえない。幻聴では無いのかと疑うが、雪は窓の外に耳を向け、音を拾おうと集中している。

「……これは、女子の……悲鳴か……?それも尋常じゃない……助けを呼んでる」

「雪ちゃん?」

「行こう、憐。嫌な予感がする。あの悲鳴は絶対に身の危険を訴えていた」

雪はそう言うとも一目散に階段を下り、校舎から出て行く。小さくはあったが、悲鳴が聞こえたということは、校舎から出て近くの筈だ。

「っ」

「いやっ、来ないでっ!」

「――」

学校付近の交差点で、階段ですれ違った恵那が、真つ黒いナニカに怯えていた。周りを見渡してみるが、人の気配はまるでしない。不気味な程に静かだった。

ふと、後ろを振り向く。憐は来ていない。途中まで一緒に来ていた

筈なのにも関わらず、雪は此処にたった一人で来ていた。

「恵那さんっ、大丈夫？」

「お願いっ、助けてっ！」

パニックになり、体に力が入っていない恵那は、雪の制服を弱々しく縋るように掴んで泣き叫ぶ。

心臓が煩い。冷や汗が止まらない。あの時と同じ感覚が、雪の中で蘇る。

雪は落ちていた恵那のトートバッグを腕に掛けて、恵那をお姫様抱っこで急いで高校まで運ぼうと一目散にナニカから逃げる。

「恵那さんっ、しっかりして、落ち着いて！」

「ハア……ハア……ハア……」

「過呼吸か……！」

徐々に苦しくなっているのだろう。雪の服を掴む恵那の手の力が更に少しずつ弱々しくなっている。後ろを振り返ると、黒いナニカは未だに此方を向いている。顔は無いのだから、本来は此方を見ているのかは分からないが。

追って来ている。雪は前に向き直し、高校へと向かう。しかし——  
「どういうことだよ……!!？」

前方に黒いナニカが回り込んでいる。後ろを向けばもう一人の黒いナニカ。

挟み打ちだ。

「クソっ」

隣へと電話を掛ける。が、通じない。続けて尻に電話を掛けるが、これも通じない。

恵那の呼吸が激しくなり、眼鏡が地面へと落ちる。焦っている雪は眼鏡を拾わず、そのまま電話を掛け続ける。

「何なんだよこれ……！」

突然の非常事態に精神が不安定になり掛ける雪。しかし、ここで自分が取り乱せば、恵那が危ないのは十分に理解している。故に、冷静さを失わないように自分へと言い聞かせる。

「……これも、夢原 翔真の仕業なのか……!!？」

隣との会話を思い出す。夢原が狙っているのは自分の記憶、記録の抹消の可能性があるということ。そして、天災の二文字を持つ者であることを。

「……ごめん、恵那さん。巻き込んだのは俺のせいなんだ。本当に、ごめん」

「ハア……ハア……ハア……」

もうすぐそこまで来ている。前後からジリジリと距離を詰めて来るナニカは、恐怖の化身とでも言った所だろうか。

雪は左の二の腕と右腕を使い恵那を支えることで、空いた左手で重さに従って垂れている恵那の手を握る。

冷たく、汗ばんでいる。こんな目に合った理由が自分にあるのだと思うと、とてつもない罪悪感を感じてしまう。

「大丈夫。落ち着いて、恵那さんは大丈夫だ。これは悪い夢だから。後もう少しで覚めるから」

突拍子も無いことを言い、恵那の手を強く握る。それは果たして恵那に向けて言った言葉なのか、恐怖している自分の為に言ったのか、それは雪にも分からなかった。

遂に、ナニカが雪の目の前にまで来た。雪は恵那を下ろし、持っていたトートバッグをぶつけようとするが、ナニカにぶつかると貫通してしまい効果が無い。遠心力に従い振られたトートバッグが、雪の近くに1冊のノートを落とす。ノートは地面に落ちた衝撃で開き、間に挟まっていた1枚のカードが風に乗って雪の足へと当たる。

それとほぼ同じタイミングで、雪と恵那の視界は闇で覆われた。

## 蘇る蒼の遺志

光の射さない暗闇、嘗て憐が経験した空間に雪達は居た。雪は倒れ伏していた状態から身を起こし、隣りで過呼吸を起こしながら倒れている恵那を仰向けに直す。

「此処は……一体……」

目の前には黒いナニカが1人だけ。目を凝らしても、周囲から2人目の姿は確認出来ない。

「貴方は、何が目的なんですか……?」

問に対する答えは無い。反応すら見せないのは、些か不気味でもあった。

しかし、空間に変化はあった。何も無かった筈の場所に如何にも最初からあったかのようにVR台が出現している。デツキも設置されていることから、今からするべきことが、何となく雪には分かった。

——デュエマをしろだなんて、却って不気味だな。一体、どんな恐ろしい秘密があるのやら……

闇のゲーム、真のデュエマ、そういった「架空のもの」が、この世界に無いとは言いきれない。だとすれば、今から始まるうとしているゲームも、似たものである可能性は否定出来ない。

寧ろ——

「逃がしては——」

「——くれないよな……」

淡い希望も叶うことなし。雪は大人しくVR台の上に乗ったデツキを手に取り、中身を確認する。

「……」

初めて握るデツキだ。しかし、妙な違和感を感じる。何処かで見たことがあるような、使ったことがあるような、そんな感じだ。

——まだ雪ちゃんは何か覚えている、記録している筈なんだ

隣の言葉を信じるならば、自分がこの世界で目覚める前、いや、今の自分がこの世界を認識する前の自分が居たのでは無いだろうか？  
それが、この既視感の発生原、記憶を失う前の白菊 雪という人物の正体なのではないだろうか？

そう思うと、色々と納得がいく。自分が転生して来たのか、憑依してしまっただのか曖昧な状態なものも、何故こうなってしまったのかという説明があったことすらも、忘れてしまったからかもしれない。

——証拠が足りない不完全な憶測は、今することじゃないな……：少し、現実逃避してしまった。目の前に広がる光景を受け入れられないからだろうか。

やりたくないが、やらないといけない。やらなければ、先は無いのだろう。

「奇跡が起こることを願うよ、全く……」

デッキのシャッフルを終え、VR台の前に立つ。超次元の確認もした。相手の盤面の様子は付属されているモニターからはつきり分かる。

VRのダイスが空中で振られ、出目を競う。5と4で先行は相手から。先行を奪われたことで心臓が一段と煩くなるが、気にしないように必死に冷製さを保つ。

「………お願いします」

「empty humanのターン」

「empty humanは、手札の《ニコル・ポラス》をマナへ置いた」(マナ1)

「empty humanは、ターンを終了した」

挨拶は無し。だが、そんなことを気にしている場合ではない。負けることの出来ないデュエルで、相手の礼節を一々気にすることが出来る程、雪に余裕は無い。

——考えろ。《ポラス》なら何だ？《ジャクポ》か？色が優秀だから5c龍もある。

候補はある。だが、相手が知っているカードだけで組んで来ているかどうかも怪しい。もしそうだとすればデッキタイプの先読みは困

難だ。しかもそれが一撃必殺、先手必勝のようなカードだとすれば、カードを見てからの対策などは期待出来ない。

——俺のデッキは初手でどういった感じかは分かる。それだけでも幾らか安心出来るのは確かだ。

《バイケン》、《ドンジャングル》、《サイゾウミスト》、《フェアリー・ライフ》、《ソーナンドス》。この5枚でトリーヴァ辺りだろうと考えるが、何よりも《ソーナンドス》と《ドンジャングル》がセットであるのは心強い。これを軸にプレイすればあるいは……。

「ドロー、《サイゾウミスト》をマナへ、ターンエンド」(マナ1)

「empty humanのターン」

「empty humanは、カードをドローした」

「empty humanは、手札の《怒流牙 サイゾウミスト》をマナへ置いた」(マナ2)

——っ！5cか！となると、多色マナ武装の呪文、特に《獅子王の遺跡》、それと《フェアリー・ミラクル》によるブーストデッキと見て間違い無い。だったら序盤はブーストに専念する筈。

「empty humanは、ターンを終了した」

「ドロー……?」

え? 何コイツ……? これ入ってるのか?

「《ドンジャングル》をマナへ、2マナで《フェアリー・ライフ》を唱え、1マナチャージ。ターンエンド」(マナ3)

マナに置かれたカードは《ミクセル》。大凡呪文面である《ジャミング・チャフ》を唱えることを想定して入っているのだろうが、今引いたカードと《ドンジャングル》の存在も考えると、一枚のカードが思い浮かぶ。

だが、自信は無い。本当にあるのだろうか。

「empty humanのターン」

「empty humanは、カードをドローした」

「empty humanは、手札の『偽りの王 ヴイルヘルム』をマナへ置いた」(マナ3)

「empty humanは、ターンを終了した」

——《フェアリー・ミラクル》を打たない、もしくは打てなかったか。なら《獅子王》が次のターン成功するかで変わってくるだろうが……まあ、成功するだろうな。

「ふう……ドロー、」

深く息を吐きながら、カードをドローする。緊張は解れる所か凝り固まる一方。楽しむ余裕も無く、精神が悲鳴を上げる程に辛く、厳しいデュエルだ。

「《バイケン》をマナへ、4マナで《佐助の超人》を召喚。効果で1ドロー1捨て、墓地から《フェアリー・ライフ》をマナへ。ターンエンド」(マナ5)

「empty humanのターン」

「empty humanは、カードをドローした」

「empty humanは、手札の《乱振》舞神 G・W・D》をマナへ置いた」(マナ4)

「empty humanは、マナの4枚をタップした」

「empty humanは、《獅子王の遺跡》を唱えた」

「……つ、遂にか……」

強力なマナブーストにより、相手のデッキは遂に本領発揮するのに十分なマナが貯まる。

「empty humanは、山札上の『偽りの王 ヴィルヘルム』をマナへ置いた」(マナ5)

「empty humanは、山札上の『ニコル・ポーラス』をマナへ置いた」(マナ6)

「empty humanは、山札上の『ニコル・ポーラス』をマナへ置いた」(マナ7)

「empty humanは、ターン終了した」

——マナには多色のヤバイ奴らがゴロゴロ居るな。蒼龍でも打たれれば一溜まりもない。出されて制圧される前に先手を打たないとマズいか。

「ドロー、」

……成る程。これはマナだな。だからさっきのカードが入っ

ているのか？

「《レ・龍覇 メタルアベンジャー R》をマナへ、4マナで《ドドスコ》を唱える」

雪は引いたカードをそのままマナゾーンに置く。せっかくのカードだが、マナに置くことでこのデッキはその強さを発揮すると判断した。

今はただ、自分のデッキを回転させ、キーとなるクリーチャーを探し出すことが先決だ。勝つ方法はそれ以外に無い。

雪は、山札の上から5枚を見る。その中から1枚のカードを選び、残りのカードを山札の下に置く。

「《黒豆だんしゃく》を手札に加え、自分の場の《佐助の超人》を手札に戻す。ターンエンド」

普段は竜巻を呼び起こす側であった《佐助の超人》は、人工的に発生された竜巻に吸い込まれて行く。シノビが手札に戻ったことで、手に攻撃を躊躇させることが出来れば良いのだが。

——問題はここであのクリーチャーが出てくることだな……………

「empty humanのターン」

「empty humanは、カードをドロウした」

「empty humanは、手札の『支配のオラクルジュエル』をマナへ置いた」(マナ8)

「empty humanは、マナの5枚をタップした」

「empty humanは、『ボーイズ・トウ・メン』を唱えた」

「ふう……………」

雪はまたも深く息を吐く。《ニコル・ボラス》が飛んで来ていたら本当に危なかった。このターンは相手は仕掛けて来ない。そう確信した雪はすぐさま次の動きをどうするか思考する。

「empty humanは、カードをドロウした」

「empty humanは、山札の上の『乱振』舞神 G・W・D」

をマナへ置いた」(マナ9)

「empty humanは、バトルゾーンの『ボーイズ・トウ・メン』を墓地へ置いた」

「empty humanは、ターンを終了した」

——次のターン、相手は単色を置いた場合コスト10のクリーチャーが出せるようになる。

このデッキが苦手とするあのデッキに入っているだろう恐ろしいカードは、呪文を禁止する《モアイ》、ターンを得る《鬼丸「覇」》、そして手札を壊滅させる《ボラス》の3種類だろう。あくまでも予想である為、入っているかは分からない。だが、その3枚は特にキツイ。そして、いつ出て来るか分からない状況で、自分の知らない筈のデッキをプレイしなければならぬ。

だけど、不思議だ。初めて使うし、初めて見る筈なのに——

自分の感じた違和感が、勝てると言っている気がする。

無数にある未来の中には、この勝負で自分が敗北する未来も、あつたのかもしれない。もしかしたら、勝つてもその後の結末は変えられないのかもしれない。

それでも、この勝負における勝ち負けの未来ぐらいは、自分の手で選び取ってみせたい。

いや、選び取ってみせる。望まぬ運命を変える。俺は、変えてみせる——

「ドロー」

『この宿命は、誰かが犠牲にならないと終わらない』

『君は俺の宿命を担うことになる。それでも——』

『それでも君は、俺の変わりになつてくれるのか?』

『そう、か………。だったら託す。不甲斐ないけど、ここでバトンタッチだ』

『………負けるなよ?俺は君のこと、尊敬してたんだからさ——』

記憶が湧き水のように雪の中を駆け巡る。カードを引いたその瞬間、雪の左目の奥底に、蒼い灯火が宿った。

それは、雪の中に眠っていたもの。運命を変える為に託された遺志。今この場に、自分が立つ理由。

「《佐助の超人》をマナへ、」（マナ7）

ずっと忘れていた。いや、今でも虫食いの記憶だ。全然、覚えていない。託された経緯も、託した者も。——託された宿命も。

でも、あの瞬間、*“ただの雪”*は殺されたんだ。俺が、自分の意志で殺したんだ。でも、どこか後悔していたんだと思う。本当は、気楽なままで居たかった。そんな未練を遺して死んだ。*“ただの雪”*が、最後に楽しい学生生活を送れたのは、本当に、奇跡のようなものだったと思う。

……もう、未練は無い。*“ただの雪”*は今この場で死ぬ。遺志を背負った者として、何かを*“託された者”*として、負けられない。何より——

「6マナで——」

何より——ここで負けたら、もしここで自分が消えたら、自分は次にこの宿命を誰かに託さなければならぬ。そんな気がするから。

「《龍装艦 チエンジザ》を召喚」

——俺は、宿命と戦う為に、この勝負に勝つ。

蒼に目覚めた白を、黒はただ呆然と眺めていた。

# Eyes of an ugly flame

「《龍装艦 チエンジザ》を召喚」

雪の目の前の黒い何も無い空間に、蒼い魔法陣が出現する。

魔法陣からは荒れ狂う水流が押し寄せ、バトルゾーンが一瞬にして海を彷彿とさせる程の蒼に支配される。

それまで黒一色の何も無かった空間に蒼いバトルゾーンが出来上がり、魔法陣から最後に一つの艦が現れる。

「《チエンジザ》の効果、2ドローし、手札から《ジャミング・チャフ》を捨て、効果発動。今捨てた《ジャミング・チャフ》を唱え、1枚ドロー」

今現在、このバトルゾーンを支配している《チエンジザ》の能力により、各ターンの最初に捨てられたコスト5以下の呪文はノーコストで唱えられる。雪は《チエンジザ》の召喚、攻撃時に発動する能力により次の自分のターンの始めまで相手が呪文を唱えることを禁じるツインパクトカード、《ジャミング・チャフ》を使用した。これにより、相手は次のターン《蒼龍の大地》を使用出来ない。雪の狙いはそこにあった。

「ターンエンド」

「empty humanのターン。」

「empty humanは、カードをドローした」

「empty humanは、手札の《フェアリー・ミラクル》をマナへ置いた」(マナ10)

「empty humanは、マナの8枚をタップした」

——《ポーラス》か？だがこっちには《チエンジザ》が居る。安心してハンドレスするには先に《チエンジザ》を退かすのが先決じゃないのか

「empty humanは、《煌メク聖壁 灰瞳》を召喚した」

「なっ」

「empty humanは、シールドゾーンの5枚を手札へ加えた」

「empty humanは、山札の上のカードをシールド1へ置く

た

「empty humanは、山札の上のカードをシールド2へ置いた」

「empty humanは、山札の上のカードをシールド3へ置いた」

「empty humanは、山札の上のカードをシールド4へ置いた」

「empty humanは、山札の上のカードをシールド5へ置いた」

「empty humanは、ターンを終了した」(盾5)

雪は自分が全くもって想像していなかったカードの登場に一瞬頭が真っ白になる。

《煌メク聖壁 灰瞳》。雪が元居た世界で雪の記憶する上で最後に出たパック、「デュエマクエスト・パック く伝説の最強戦略12」に入っていたカードだ。

登場した時のネットの反応は、纏めると『面白い奴が来たけど、使うデッキ少ないだろうな』だったが、まさか5cのデッキに入っているとは思わなかった。

手札の補充と盾の交換。良い動きをしている。

——その交換した盾に期待してるよ……

「ドロー、《メメント》をマナへ、8マナで《黒豆だんしゃく》を召喚」(マナ8)

相手の『このクリーチャーがバトルゾーンに出た時』で始まる能力を持つクリーチャーが出た時にマナに送る一種のcip持ちへの対策にもなるツインパクトのクリーチャーをバトルゾーンに出し牽制する。呪文面の《白米男しゃく》も強力なサポートカードとしての性質を持っている。一言で言うなら『強いカード』だ。相手が何を使ってくるか分からない今、このようなカードで対応出来るようにするか無い。

それに、もし今からする攻撃でS・トリガーのcip持ちの厄介なクリーチャーがあったらと考えればこうするしかない。それが除去

札なら尚更だ。

「《チェンジザ》でシールドを攻撃時、手札のこのカードの革命チェンジの宣言をし、《チェンジザ》の能力を解決」

伏せられていた手札のカード1枚が公開される。それはあの時雪が入っていることに驚いていたカード。そして、相手のデッキによってはフィニッシャーとなり得るカード。

「2ドローし、手札から再び《ジャミング・チャフ》を捨て、唱える。カードを1枚ドロー。そして——」

《チェンジザ》が手札に戻り、入れ代わるようにして場に現れる二足の白龍。

「革命チェンジ、《天革の騎皇士 ミラクルスター》をバトルゾーンへ」  
《天革の騎皇士 ミラクルスター》は雪が使っていた《ブチョヘンザ》のように登場した時に使えるファイナル革命のような派手な効果は無い。

しかし、その能力は強力であることに違いはない。

《天革の騎皇士 ミラクルスター》が `em p t y h u m a n` を守る2枚のシールドを、その右手に持つ青白く輝く槍で貫く。

当然、守られなかったシールドは粉々になる。しかし——

——粉々になった筈のシールドは、再び元のシールドとしての形へと戻る。まるで、時が巻き戻されたかのよう。

「《天革の騎皇士 ミラクルスター》の能力により、ブレイクしたシールドを見る。その中に呪文があった場合、自分がその呪文を使用することが出来る」

ブレイクされた2枚のシールドが公開される。《蒼龍の大地》が2枚。どちらも危険なカードだった。もし《天革の騎皇士 ミラクルスター》が居なくとも、《ジャミング・チャフ》で唱えられなかっただろうが、《ジャミング・チャフ》も無限に打てる訳ではない。いずれはあの2枚の《蒼龍の大地》は使われ、フィニッシャーを出されていただろう。

「1枚目の《蒼龍の大地》を唱える。効果でマナから《レ・龍覇 メタルアベンジャー R》をバトルゾーンに。 `c i p` で1ドロー、超次元

ゾーンから《龍魂教会 ホワイティ》をバトルゾーンに。《ホワイティ》の効果で《灰瞳》をタップ。次のターンの始めにアンタップ出来ない。唱えられた《蒼龍の大地》は墓地へ。更に2枚目の《蒼龍の大地》を唱え、マナから《佐助の超人》をバトルゾーンに。cipで1ドロー、1捨て、墓地の《ジャミング・チャフ》をマナへ。同じく《蒼龍の大地》は墓地へ」(マナ7)

相手の盾が呪文なら、《天革の騎皇士 ミラクルスター》はあの《ボルメテウス・ホワイト・ドラゴン》さえも上回る。こうしてブレイクされた呪文のシールドは墓地へと置かれ、empty humanの手札は増えず、雪の場のクリーチャーは増える。

——このまま攻めきる……!!

「ターンエンド」

「empty humanのターン」

「empty humanは、《煌メク聖壁 灰瞳》をアンタップできなかった」

「empty humanは、カードをドローした」

「empty humanは、マナの9枚をタップした」

「empty humanは、《ドキンダム・アポカリプス》を召喚した」

蒼いバトルゾーンへ空中から降臨する異星者の石像と、その背後から降って来る赤黒く禍々しい隕石の数々。その内の幾つかは、バトルゾーンのクリーチャー全てに衝突する。

——《灰瞳》の次は《ドキンダム・アポカリプス》か。成る程、守りを固くした5cのビマナデッキ。相手のターンに出せば猛攻を防げるようなクリーチャーがあるから、『蒼龍コン』ってどこか……？

雪はいつも通りの冷静な観察眼と考察で相手のデッキがどのようなものかを判断する。

「empty humanは、バトルゾーンの《煌メク聖壁 灰瞳》に封印を1つ置いた」(計1)

「empty humanは、バトルゾーンの《ドキンダム・アポカリ

プス』に封印を1つ置いた」(計1)

「『黒豆だんしやく』、『天革の騎皇士 ミラクルスター』、『v・龍覇 メタルアベンジャー R』、『佐助の超人』に封印を1つずつ置く」

「empty humanは、ターン終了した」(盾3)

だがこれでお互いに場が封印だらけだ。使えるクリーチャーも0。折角出した『チェンジザ』や『天革』も、これでは使用出来ない。

「ドロー、『フェアリー・ライフ』をマナへ、8マナで『黒豆だんしやく』を召喚。ターンエンド」(マナ8)

だが、それでも牽制出来るクリーチャーは出す。雪はまだ1ミリ足りとも諦めていない。寧ろ、未だに此方が優勢であると信じて疑わない。

勝てる、このデッキを使っている時にそう感じたことを、疑ってないから。

「empty humanのターン。

「empty humanは、カードをドローした」

「empty humanは、手札の『フェアリー・ミラクル』をマナへ置いた」(マナ1)

「empty humanは、マナの8枚をタップした」

「empty humanは、『蒼龍の大地』を唱えた」

「empty humanは、バトルゾーンの『蒼龍の大地』を墓地へ置いた。

「empty humanは、マナの『偽りの王 ヴィルヘルム』をバトルゾーンへ出した」

狙いは『黒豆』の除去、そして『アポカリプス』の封印の解除だろう。

「empty humanは、バトルゾーンの『ドキンダム・アポカリプス』(封印1)の封印『コクーン・シヤナバガン』を墓地へ置いた」

「empty humanは、『偽りの王 ヴィルヘルム』の効果を解決」

「empty humanは、相手のバトルゾーンの『黒豆だんしやく』

く》を対象として宣言」

「《黒豆》を墓地へ」

「empty humanは、相手のマナの《怒流牙 サイズウミスト》を対象として宣言」

「《サイズウミスト》を墓地へ」

「empty humanは、山札の上の《謎帥の艦隊》をマナへ置いた」(マナ11)

「empty humanは、山札の上の《獅子王の遺跡》をマナへ置いた」(マナ12)

「《黒豆》の効果でヴィルヘルムはマナへ」

「empty humanは、バトルゾーンの《偽りの王 ヴィルヘルム》をマナへ置いた」(マナ13)

結局雪の場は空になった。だが、《蒼龍の大地》を1枚使わせられたのは大きい。それだけ《黒豆》は厄介だったということだろうか。

「empty humanは、ターンを終了した」

「ドロー、」

雪のターン、ドローしたカードを確認した後、手札を確認し、このターンにすべきことを再確認する。

このデッキのイメージされた動きであると思われるプレイをする。ただ、それだけだ。

「《チェンジザ》をマナへ、6マナで《ソーナンデス》を召喚」(マナ8)

《チェンジザ》が封印されようとも、バトルゾーンは蒼一色。広大な大海原だ。その海面にイカダのような姿をした《ソーナンデス》が現れる。遭難しているかのようにバトルゾーンをユラユラと、海月のように流されるようにしている。

「《ソーナンデス》で《アポカリプス》を攻撃、その時——」

攻撃命令が下され、海に足を沈めたまま立っている巨大な異星者へと、ソーナンデスは特攻する。このままでは自爆、そんなことは雪にも分かっている。

だからこそ、救援を要請するのだ。

「Jチェンジ8を発動。《ソーナンデス》をマナゾーンに置き、マナ

ゾーンから《ドンジャングルS7》をバトルゾーンに」

《ソーナンドス》の顔にあるSOSの文字が強く輝き、《ソーナンドス》が緑色の光の粒となり、姿を消す。その後、水面を突き破るかの如く《アポカリプス》と同等の大きさを持つ《ドンジャングルS7》が姿を現す。

「《ドンジャングルS7》のcip効果、マナゾーンからパワー7000以下の《チェンジザ》をバトルゾーンに」

そして再び魔法陣から現れる龍の艦。《チェンジザ》の登場により一層バトルゾーンの波が荒れたような気がした。

「《チェンジザ》のcip効果、2ドロ―し手札から《チェンジザ》を捨て、その呪文面を唱える。《六奇怪の四　く土を割る逆瀧く》の効果で、次の自分のターンの始めまで、相手は各ターン1度しかクリ―チャーで攻撃、ブロックを行えない」

呪文が唱えられると同時に相手の場の海が割れ、相手のバトルゾーンに地から天へと勢い良く伸びる瀧が出来る。本来の瀧とは真逆の向き、極めてなにか物理法則に対する侮辱を感じるようなソレは、奇怪な現象と呼ぶに相応しい出来事だった。

「バトル開始、《ドンジャングル》は効果でバトル中パワー+6000され、パワー14000になる。よってパワー9999の《アポカリプス》は破壊される」

《ドンジャングル》が《アポカリプス》へと大きく拳を振りかざすと、《アポカリプス》の胸に亀裂が入り、破壊と同時に内部に溜まっていた高エネルギーがバトルゾーン全体を揺らす大爆発を起こす。

「empty humanは、バトルゾーンの《ドキンダム・アポカリプス》を墓地へ置いた」

「ターンエンド」

雪に一切の油断は無い。今までで一番集中している状態、スポーツで例えるならばゾーンに入っている状態だ。この勝負に勝つ為に、一切の思考回路が試合へと注がれている。蒼い炎を左の瞳の奥に宿し、ターンエンドの宣言をしながら相手から視線を離さない。

その姿は、獲物を狩ろうとする猛獣そのもの。

「empty humanのターン。

「empty humanは、カードをドローした」

「empty humanは、手札の《支配のオラクルジュエル》をマナへ置いた」(マナ14)

「empty humanは、マナの4枚をタップした」

「empty humanは、《超次元ホワイトグリーン・ホール》を唱えた」

——《勝利プリン》からの盾仕込み、そしてこっちの手を潰す為に《ボラス》の回収か……？

「empty humanは、バトルゾーンの《超次元ホワイトグリーン・ホール》を墓地へ置いた」

「empty humanは、超次元ゾーンの《勝利のプリンプリン》をバトルゾーンへ出した」

「empty humanは、手札のカードをシールド6へ置いた」(盾4)

「empty humanは、マナの《ニコル・ボラス》を手札へ加えた」(マナ13)

やっぱりか、と、雪は自分の予想通りの動きをする相手に目を細める。ここまでは良い。だが、ここから何をして来るかが問題だからだ。

「empty humanは、《勝利のプリンプリン》の効果を解決」

「empty humanは、相手のバトルゾーンの《龍装艦 チェンジザ》を対象として宣言」

「《チェンジザ》からの革命チェンジと《チャフ》を恐れたか……」  
《勝利のプリンプリン》の効果で、雪の《チェンジザ》は次のempty humanのターンまで攻撃、ブロックが出来なくなってしまう。これで攻撃時にドロウ効果を使い、手札から呪文を落として唱える、という戦法が取れなくなった。

だが、そんなことは些事だ。まだ次のターンでの動きはある。

「empty humanは、マナの3枚をタップした」

「empty humanは、《謎帥の艦隊》を唱えた」

——バウンスか……。差し詰めこの《ドンジヤングル》を永久的に除去出来る札を今現在持っていない為の処置だろう。このままではこっちのSAに走られて殺されてしまうかもしれないからな……。

「empty humanは、相手のバトルゾーンの《ドンジヤングルS7》を対象として宣言」

「empty humanは、相手のバトルゾーンの《龍装艦 チェンジザ》を対象として宣言」

「2枚を手札に戻す」

手札へと帰る2体のクリーチャー。フィールドには封印されたクリーチャー達だけが残り、割れた海も、天へと伸びる逆瀧も、既に大人しく消えている。

静かな空間で波の音だけが、その存在を主張している。

「ドロー」

恐らくは——いや、間違いなくフィニッシュャーとして入れられたカードを引き当てる。あまりあのデッキには効果が無いだろうが、打点がこれだけあるなら十分だ。

《ル・龍覇 メタルアベンジャー R》をmanaへ、8manaで《ドンジヤングル》を召喚。cip効果でmanaから今置いた《ル・龍覇 メタルアベンジャー R》をバトルゾーンに」

水のドラグナーにして自らも龍となった者が水上に現れる。しかしその姿は、未だに人が龍になりかけているようにも見える。

強さを求めたのか、更なる探求の為成ったのか。どちらにせよ、彼は自らの力で古に存在した種族と成ることに成功した偉大な者だ。その力は、この戦いの場においても重要な役割を果たす。

「水のコマンド出現により、バトルゾーンの《天革の騎皇士 ミラクルスター》（封印）の封印、《ドンジヤングルS7》を墓地へ。更にcip効果でドローはせず、超次元ゾーンから《龍魂城閣 レッドウル》をバトルゾーンへ」

封印から解かれた《天革》は疲労<sup>タツプ</sup>しており、このターンは攻撃出来ないだろう。

だが、その程度何の問題も無い。

「《レツドウル》の効果で《レ・龍覇 メタルアベンジャー R》をS Aにする。《レ・龍覇 メタルアベンジャー R》でシルドを攻撃、その時——」

彼女が使っていたあのカードを、今度は雪が使う番だ。

「革命チェンジ、《時の法皇 ミラダンテXII》をバトルゾーンに。水のコマンド出現によりバトルゾーンの《レ・龍覇 メタルアベンジャー R》(封印1)の封印《フェアリー・ライフ》を墓地へ。そしてcip効果でイドロー。ファイル革命を使用しT・ブレイク」

「empty humanは、シルドゾーンの3枚を手札へ加えた」  
(盾1)

アタッカーはまだ居る。だがここで攻撃してもトドメまで行けない上に、《ホワイトグリーン》で仕込まれたカウンターを受ける可能性がある。盾には攻撃しない。

「マツハファイターの《ドンジャングル》で《勝利プリン》を攻撃」

「empty humanは、バトルゾーンの《勝利のプリンプリン》を超次元ゾーンへ置いた」

「ターンエンド」

「empty humanのターン」

「empty humanは、カードをドローした」

「empty humanは、手札の《フェアリー・ミラクル》をマナへ置いた」(マナ14)

「empty humanは、マナの6枚をタップした」

「empty humanは、《コクーン・シヤナバガン》を唱えた」

——マナ回収……耐える為にか。だが、あっちのマナは十分にある。更に高コストのクリーチャーを出して来るのも考えられる。

「empty humanは、山札の上の《怒流牙 サイズウミスト》をマナへ置いた」(マナ15)

「empty humanは、山札の上の《スペリオル・シルキード》をマナへ置いた」(マナ16)

「empty humanは、マナの《怒流牙 サイゾウミスト》を手札へ加えた」

選ばれたのは《サイゾウミスト》。必死に耐える為にカードを集めているというのは当たりのようだ。

「empty humanは、バトルゾーンの『コクーン・シヤナバガン』を墓地へ置いた」

「empty humanは、マナの8枚をタップした」

——《蒼龍の大地》……は流石に無いと思いたい。もう墓地に3枚もあるんだ。いくら『蒼龍コン』でも4積みはどうだ……？

「empty humanは、『ニコル・ボラス』を召喚した」

「empty humanは、『ニコル・ボラス』の効果を解決」

「《ボラス》か……」

普段なら《ボラス》で安心などそう無いものだが、正直安心したのは事実だ。此方のデッキは残り3枚。もし《ドキンダム・アポカリプス》を出す何らかの方法があれば、俺は負けていた。

雪は手札を1枚残し、他を全て墓地へと捨てる。

「《ソーナンドス》《怒流牙 佐助の超人》《フェアリー・シャワー》《怒流牙 佐助の超人》《霞み妖精ジャスミン》《龍装艦 チエンジザ／六奇怪の四 く土を割る逆瀧》《レ・龍覇 メタルアベンジャー R》を捨てる」

「empty humanは、ターンを終了した」

「ドロー、《メメント》をマナへ、7マナで《サイゾウミスト》を召喚。cip効果で自分の墓地を全てデッキに戻し、シャッフル。そしてデッキの一番上を新しいシールドに。」(マナ8)

これでデッキは回復した。後は攻めるのみ。

「《天革》でシールドをブレイク。効果でそのシールドを見る。俺はその《獅子王の遺跡》を唱える。多色マナ武装は達成していない為、効果で1マナブレスト。唱えられた呪文は墓地へ」(マナ9)

再びシールドを貫いた白龍。今回の戦いにおいてブレイクしたシールドが全て呪文であったことで、一番フィニッシャーとして活躍

していた。

「《ドンジャングル》でプレイヤーを攻撃」

「emptyhumanは、『怒流牙 サイゾウミスト』を召喚した」

「emptyhumanは、墓地の11枚を山札の上へ置いた」

「emptyhumanは、山札をシャッフルした」

「emptyhumanは、山札の上のカードをシールド1へ置いた」

知っていたとも。この攻撃は必ず通らないと。

雪の攻撃宣言により、《ドンジャングル》は《サイゾウミスト》によって生み出された新しい1枚のシールドをブレイクする。このカードが除去札で、《サイゾウミスト》が耐えられる程他に無ければ……：……雪の勝ちだ。

「emptyhumanは、シールドゾーンのシールド1の1 《闇

鎧亜ジャック・アルカディアス》をバトルゾーンへ出した」(盾0)

——っ！

「《ミラダンテXII》でプレイヤーを攻撃っ」

——思い出せ、宿命を

「emptyhumanは投了した」

# イツツ・シヨーカーイ・タイム 【U A 3 0 0 0 突破記 念】

白菊 雪 (17)

性別：男性

職業：高校生

趣味：デツキ構築、昼寝

F 専に通う本作の主人公。年上の D M 仲間である竹宮と S k y p e でデュエマをしてから寝て、次に目が覚めたら異世界の病院に飛ばされていた系の黒髪黒目の地味な高校 2 年生。陽キヤか陰キヤかと聞かれたら陰キヤ的外見をしている。要はオシヤレに興味を持たない。あまり接点の無い人や尊敬している人と接する時の性格は非常に良く、そこだけ見れば陽キヤのそれである。しかし、慣れ親しんだ者には毒や愚痴を吐くこともある。逆に、毒や愚痴を吐かれれば、親しみを持たれている証である。

使用デツキは複数。特に 4 c 5 c を取り扱うことが特徴。青緑白のトリーヴァを軸に黒を入れていることが殆どであり、赤を使用することは比較的少ない。

数多くのデツキを使用する雪だが、キャラを代表するデツキは《ブチヨヘンザ》を使用した 4 c 5 c のデツキと、トリーヴァを基盤に作られたチエンジザドンジヤングルの 2 種。特殊なデュエマにおいてはチエンジザドンジヤングルを好んで使う。尚、雪自身は実物のチエンジザドンジヤングルを所持していない。

魚貝類、野菜類を使用する料理を得意としているが、肉類は苦手。自分からは作らず、頼まれても作ることは少ない。しかし、恩がある人の頼みは断れない為、雪の料理を食べれるとしたら柴崎家の者である。

作中で目覚めた時、凧からは Z 事件の被害者であることを教えられた。記憶喪失なのは Z 事件で脳を弄くられかけたからであるとされている。Z 事件で救出されたとされるメンバー 4 人の中でも目覚め

た時期は遅く、世間では昏睡状態になっていた者は居ないと偽装工作されていた。《チェンジザ》を使用したことで記憶が断片的に蘇っている部分があり、誰かに宿命を託されたことを思い出した。

生徒会長：「ちよつとはオシヤレと女の子に気を向けて欲しいなく？なく??」

キャラ男モドキ：「俺に辛辣な対応してくる時あるのもそういうことだったんすね？（泣）」

柴崎 凧（17）

性別：女性

職業：高校生

趣味：バイオリン、菓子作り

本作のレギュラー人物。柴崎 舞の娘。雪の幼なじみを名乗る。黒髪黒目の端正な顔立ち。可愛いというよりは綺麗な人。お気に入り私服は黒いリボンと白のブラウスに、膝丈くらいの黒のフレアスカート。雪と同じ高校に通う。生徒会の会長を務めているが、真面目過ぎる訳でもふざけ過ぎている訳でもない、色々と平凡な人。校内では陽キャからも陰キャからも一定の信頼がある。

父が家を離れており、雪が家に住むことになるまでは母の舞と二人で生活を送っていた。その頃は今よりどことなく幸薄オーラがあったという。

使用デッキは青緑白のトリイヴァカラーの白騎士。それとも一つあるという勝ちにこだわったガチデッキの2つ。今の所は本編で白騎士のデッキ以外に使用したデッキは無く、ガチデッキの情報も無い。

好きなクリヤーチャーは《アルカディアス》。柴崎家の車の中に2等身ストラップが置かれている。

過去に雪のおかげでデュエマを知ったということや、友人として遊んだという背景から少しばかり恋心を抱いていることが伺える。しかし、本人は恋心を抱きつつも、記憶喪失である雪に過去の雪を重ね

てしまい、自分の知る恋していた雪が既に居ないということに対し、少し傷付いている。それでも外見は同じなので、そのことを忘れている時や意識していない時に恋心を刺激するようなことがあると顔が真っ赤になる時がある。しかし、今の雪が好きではない訳でもなく、普通に今の雪にも恋心ろいうものは存在している。

過去にZ事件について雪に教えることを拒んでいたが、憐や偶然居合わせた竹宮（material worldの本人かは不明）により少しずつ悲観的過ぎる考え方から前向きな考え方になっていった。特に、竹宮から教わった『アフターケアの大切さ』を意識している節がある。

白雪姫（笑）：「乙女度が高過ぎる。こんな出来た幼なじみなんて今時少ないだろうに……」。俺以外にもっと良い人居るでしょうが！あの茶髪のチャラ男モドキとか！」

チャラ男モドキ：「俺に白雪姫（笑）に対してどう接すれば良いのか偶に相談してくるんですけど、何すか？惚気すか？未だに非リアの自分に対する拷問か何かすか？」

伊原 憐（17）

性別：男性

職業：高校生

趣味：読書、TCG大会の観戦

本作のレギュラー人物。茶髪のイケメンであるものの、中身は外見程パリピという訳でもなく優しい陽キャ。クラスの人望はかなり厚い。成績も雪と凧より高く、身長もその中では一番高い。敬っている人物には〇〇つす、と語尾にすを付ける。友人など心から認めた者には偶に語尾に何も付けずに話しがち。意外と読書が好きで、読むのもラノベから純文学と範囲が広い。

使うデッキは黒緑の《バロム》。制作途中の《デスサーク》などから闇文明が好きなことが伺える。プレイングスキルに関しては雪と同等の腕。TCGの世界大会などを観戦し、学習をして強くなる。見て学ぶことにおいては今の所作中一の速さを誇る。プレイヤーとして

は成長の速い天才という見方もある。

作中で見た不思議な夢を原因に雪に対する一種の疑いと友として協力したいという気持ちが混在している。今の所は雪と推理をするなどでZ事件と夢原翔真の真相を突き止めようとしている。尚、本人にも自分も知らない秘密がある模様。

白雪姫(笑)：「雪ちゃん呼びは色々と誤解を招く可能性があるのですが一」

委員長：「そのく、好きな人と親しくなるコツを御教授願えませんでしょうか？」

恵那 由里 (16)

性別：女性

職業：高校生

趣味：絵描き、音楽鑑賞

本作の準レギュラー。誕生日がまだ来ていないだけで雪達と同じ高校2年生。眼鏡を付けていることが殆ど。Z事件の記憶をしつかりと保持している貴重なキャラ。まだ自分がZ事件の生き残りであることは雪達には伝わっていない。絵描きとしては上手く、芸術の評価は常に5。将来は美大に行くと考えている。

Z事件の生き残りの中で唯一茶髪の男の名前だけを忘れてしまっている。あまり絡んだりしなかった上に興味がなかったのが原因。使用デツキはアイラ速攻。

白雪姫(笑)：「早く会って事件について話し合いたい」

委員長：「数少ない同性キャラ……可愛い！」

チャラ男モドキ：「……可愛い」

竹宮 深 (21)

性別：男性

職業：大学生

趣味：ネットサーフィン

material worldの主人公。雪のDM仲間であり憧れの人。現在大学3年生で、就職する為の勉強と卒業論文の作成で忙しい。暗い部屋で一人暮らしており、雪が行方不明になってからは

部屋の暗さと同じくらいに暗い性格になった。しかし、そんな彼にも転機が訪れる。就職したいと思っていた会社に勤める知り合いの先輩から声がかかり、急遽DAKARATOMYのデュエマをしていたプレイヤーの意見などを知りたいとしてCONAMIの社長、大森と会談するはめになる。

それからは大森の語った夢、TCG会社の統一とVR使ったTCGの研究に協力するかを迷いながらも、嘗て雪が消えたことでしなくなったデュエマを再び手にとってみようとしている。

material worldでの使用デッキはダーツデリートと5cデリート、そして青黒ドルマゲドンの3つ。雪からは「デリートの人」という認識を持たれている。隣と同じで闇文明が好きなのかなと言われるとそうでもなく、ハンデスやランデスのような妨害を好む傾向にある。本編で登場した際は《ロマノフ・Z・ウィザード》を使った《デリート》のデッキを使い、凧と戦った。

好きなカードは『Z』と言っているが、どの『Z』かは明記されていない。

白雪姫（笑）：「凧さんと会って僕とは会わないんですか、そうですか」

委員長：「あの時はありがとうございました」

チャラ男モドキ：「気が合いそうだなあゝ……………」

夢原 翔真（不明）

性別：男性

職業：脱走犯

趣味：不明

Z事件の犯人とされる人物。大体コイツのせい。嘗て天才と呼ばれていたが、大事件を起こしたことで今や天災と呼ばれている。凧が一番憎んでいる相手。

白雪姫（笑）：「もう何もしてこないで（切実）」

委員長：「〇ね（真顔）」

チャラ男モドキ：「さっさと捕まれ（直球）」

ざっくり概要

① Z事件ってなーに？

我が国「TCG世界大会、日本は良く負けるなあ……」。せや！育成しよ！天才なら出来るやろ？施設とかプロジェクトとか全部任せるわ！」

天才「りよ。じゃあ育成するわ」

主人公「あ、選手に選ばれた」

←時間経過

天災「普通に育成するよりも殺し合いさせて精神を成長させた方が  
良いわ」

主人公「」

我が国「馬鹿、お前ホント馬鹿」

天災「ついでに脳を弄くって完全記憶能力とか色々人為的に発症させ  
てみるわ」

主人公「」

我が国「」

作中で語られてるのはこんな感じ。雪は弄くられる途中で救出されたので記憶喪失になったものの生還。その後昏睡状態。夢原はタ  
イーホされた。恵那さんは普通に病院に搬送されたけど、脳を弄くら  
れている訳ではないのでメンタルケアくらいで済んだ。

② F専ってなーに？

我が国「天災がやってもーた……。というか脳を弄くられた  
主人公君が何されとるかからの怖い。他の生き残りも何か怪  
しいなあ……。あ、纏めて監視しちやえば良いのでは？無料  
で良いってすれば反省してるようにも見えるし、やだ我天才」

←時間経過

我が国「国立絵札高等専門学校出来たでー」

生徒「長い。絵札専門だからえふ専だろ？じゃあF専って呼び方  
で」

とまあ、語られてるのはこんな感じ。F専って呼び方は後から思い  
付いたものでかなり気に入ってる。

## 第2章

フリー・アー・ユー

雪君が憐と校舎を飛び出したあの日から丁度一週間が経った。あの時、雪君を追って出て行った憐が目にしたのは、過呼吸を起こし苦しそうにして倒れている恵那さんと眠りに着いていた雪君の姿だった。

憐は二人をF高の保健室まで何とか運び、雪君が目覚めるまで付き添っていたという。

そこで先に体調の回復した恵那さんから一体何があったのかを聞いた所、「わからない」と返されてしまい、結局は雪君に何があったのかは、本人にしか分からなくなってしまった。

勿論、雪君はその後しつかりと目覚めた。しかし何処か様子が可笑しく、私と憐が何があったのか聞いても、「関係ないことだから」と話してはくれなかった。

「はあ……」

深い溜め息が口から漏れる。

今、私達の高校では他校よりちよつと遅めの文化祭の準備が始まる時期だ。一ヶ月後の文化祭に向けて、今も目の前でクラスの男女が協力して飾りづけのセットの作成に取り掛かっている。

ただ、そこに雪君の姿は無い。家でも顔を合わせることは少なくなり、話を一度もすることなく、少し寂しい一週間だった。

……雪君があの日、何か自分の中で変化があったのだろうかとは薄々感じていた。一緒に居た恵那さんが過呼吸を起こしていたこともあって、何か大変なことがあったのではと考えてしまう。

——大変なこと……夢原 翔真。

可能性は低いと憐は言っていた。夢原 翔真程の天才が、たかだか高校生一人を確保、処理出来ないなんて可笑しい筈だと。確かにそうだが、記憶だけを処理された可能性は大いにある。現に、恵那さんは何があったのかわからないと言っていたのだ。幾ら過呼吸で苦し

かったとはいえ、何が起きていたのか、少なくとも、何故過呼吸を起こしたのか位は覚えている筈だ。それさえ、彼女は覚えていなかった。

だが、もし仮に雪君の記憶が消えていたとして、今の雪君と前の雪君を比べて、何の記憶が消えたのか自分に分かるだろうか。

いや、分からない。元から私は、過去の雪君——記憶喪失になる前の雪君が好きだった。だからこそ、記憶喪失になり私のことを忘れてしまった雪君と心を通わせ、また元の仲の良い幼なじみという関係を戻そうとしたのだ。

そう、ただそれだけ。今までの私の全ての行動は、全てその為の行動だ。関係を元に戻すことだけを考えて、私は雪君と接していた。だからこそ、私は雪君に対して「慣れたら風と呼び捨てにして欲しい」と言ったのだ。

そうだ、私は、結局今を見ていかなかったのだ。ずっと過去に縛られて、過去の雪君を追い求めて、過去の関係に戻りたくて——

——今の雪君を見ているつもりで、過去の消えた雪君を見ていたんだ。

そんな私に、今の彼が何を喪ったのかなど分かる筈がない。それで良く自分に今の彼のアフターケアが出来ると思っていたなど、今更過ぎるそれに気付き、勝手に傷ついている自分がひたすらに情けなくなり、自らを攻め立てる。

——力になれない友人なんて、必要ないのかもなあ……………なあなんて……………

「あの、会長？ 風さーん？」

「っ、隣？ 来てたんだ」

気付けば隣がすぐ隣に居た。そういえば、文化祭準備の時間は比較的自由行動が許されているからと私が呼んだのか……………

「まあ、今さつき来たばっかつすけどね」

「そっか……………あ、それで恵那さんはどうだったの？」

「体調は完全に回復してるみたいですけど、相変わらずあの時の記憶は無いみたいで。ただ——」

「ただ？」

「恵那さん、面白い物を持ってみたいなんすよね」

これっす、と憐が一枚のカードを胸ポケットから取り出す。デュエマのカードだ。裏面は色がすっかり着いているが、表面のカードのイラストやテキストは完全に脱色してしまってモノクロのようになってしまっている。日焼けカードだろうか？

「この《龍装艦 チエンジザ》なんすけど、あの日雪ちゃんの足元に落ちてて、どうやら、恵那さんがZ事件の被害者から受け取った物らしいんすよ」

「え、それって、恵那さんはZ事件について何か知ってる可能性があるってことなんじゃ」

それはつまり、恵那さんはZ事件の関係者の知り合い、もしくは生き残りの可能性が高いということなんじゃないだろうか……。恵那さんがZ事件の生き残り、もしくはその生き残りの関係者なら、夢原 翔真に狙われるには十分な理由になるっす。恵那さんが過呼吸になった理由は、きっと夢原 翔真の手によるものが原因だと思うんすよねえ……」

過呼吸はパニック、不安、緊張などで起こる現象だ。Z事件に纏わることで、それ程までに精神的ダメージを負っていたのだろうと思うと、どうにも可哀想に思えてしまう。

本当に、何故またも夢原 翔真の手で被害者達は脅かされなくてはならないのだろうか。

「一応、恵那さんにZ事件で何があったか知ってるか、憐は聞いたの？」

「いんや、流石にそれを話すには時間が掛かるってことでまだ。ただ、RAINの交換はしてあるんで後で答えられる範囲で答えますよ。」

「そっか……。うん、じゃあ、憐、雪君と恵那さんのことお願いね？」

「は？」

憐が虚を突かれたように目を丸くする。まるでそう、猫がフレーメン反応を起こしたような感じだ。お前は何を言っているんだ、といった顔をしている。

「いや、会長も協力するんすよ」

「んー、私はちよつと力になれないかなーって思っちゃってさ？正直、雪君のこと、憐より知ってても良い筈なのに、本当は、記憶喪失になった雪君のこと、何も知らなかったから——」

「またネガティブになつて………会長が知つてて俺が知らないことだつてあるつすよ、大体——」

「………無いよ。そんなこと。現在いまの雪君についてなんて、私は、全然知らないんだ」

「つ——そうっ、すか………」

じゃあ、これで失礼します。と言い残し、憐はクラスから出て行った。最後にちよつと怒らせちゃったかな。ネガティブなところを見せて、面倒に感じた筈だ。でも、それだけ今回気付かされた事実は辛いものだったのだ。

誰かにぶつけないと、耐えられなかった。

本当は、泣きたいくらいなんだけどね。

「あーあ、会長、ありやかなりダメーじ入ってるなあ」

独り言を呟きながら、騒がしい自分の教室へと向かう。

またいつものネガティブモードだろうと思っていたのだが、どうやら今回ののは段違いのレベルらしい。

その証拠に、会長は俺の言葉を遮ってまで、自らが無知であると言わせた。……今までの会長との会話で最後まで意見を言わせて貰えなかったのは初めてだ。オマケに表情は何とか取り繕ったロボロの仮面で隠そうとしてる。本当は笑顔なんて浮かべることもキツイのだろうに。

——だけど、事実なのかもしれないなあ……

会長は現在のいまの雪を見ていなかった。それは、否定出来ない。

会長が雪ちゃんのことを好きなのは勿論知っている。だが、それは記憶喪失になる前の雪ちゃんとの関係性に恋をしていたのだ。今もそう、会長は、現在のいまの雪ちゃんではなく、根底では記憶喪失になる前の過去の雪ちゃんが恋しいのだ。だから、記憶喪失になる前の雪ちゃんが居ない今、現在のいまの雪ちゃんに恋していると錯覚してしまっていたのだ。もう叶わないかもしれない恋が報われて欲しいからと、今の雪ちゃんをちゃんと見ていなかった。正に、恋は盲目、と言った所か。

そんな問題の解決を、俺が幾ら嘘をついて遠まわしにした所で、会長は必ずまたこの壁にぶち当たる。これをどうにかするには、もう本人に吹っ切れて貰うか、どうにか雪ちゃんから会長に罰を与えて貰う……もしくは、説得してもらおうしか道が無い気がする。ただ許しを与えられた所で、ああいうタイプの人間はそう簡単には完全には立ち上がれない。それよりは、罰を受けた上で許しを与えられた方が心の底から完全に立ち上がれるからだ。

——ま、雪ちゃんにも問題はあるんすけどね……

「はいはい、戻りましたよー」

教室の扉を開け、文化祭準備に取りかかっている自分のクラスメイトに伝わるようおどけた様子で中に入る。

「お、憐。帰って来たならこの仕事頼むわ。俺、今からGRクリヤーとかオレガ・オーラとかについてカドシヨで勉強してくるか」

「エスケープな．．．．．了解。あー、雪ちゃんは．．．．．居ない、か」

「ああ、白菊君？それなら憐が居なくなつた後、違うクラスの恵那さんとどっか行つちやつたよー」

確認の為に雪ちゃんを探すがどこにも見当たらない。クラスメイトの一人がその発言を聞き、雪ちゃんが恵那さんと何処かへ行つたことを教えてくれた。

『関係ないことだから』

——何か、俺も少し落ち込むすねえ．．．．．

保健室で目覚めた雪ちゃんに言われた言葉を思い出す。友人として接していた人物から拒絶されたようで、酷く心が痛む。今すぐにも、雪ちゃんに協力させて欲しいと、あの放課後の時のようにもう一度言いたかった。

教室からの騒がしい声も聞こえない少し離れた階段で、彼は私との会談を持ち掛けて来た。指定された時間に直接話し合いたいと言われ、今に至る。

「恵那さん、今から聞くことは、もしかしたら恵那さんにとって辛い思いをさせてしまうことかもしれない。それでも、どうしても直接聞きたいことがあるんだ」

「何？」

此方を見る白菊君の顔が、彼の顔と重なる。やっぱりどこか似ている。前に会った時どこかそんな雰囲気はしていたが、私が過呼吸で倒れてからは、もっと似て来たように思える。

私がそう観察していると、白菊君は私の想像していなかった質問をしてきた。聞き間違いだろうか……？

「えっと、すみません。もう一度質問してもらっても——」

「恵那さんは、Z事件に関わっていたりする？あの、夢原 翔真の起こした事件に」

……記憶喪失だというのに、どこからその情報を入手したのだろうか？まさか、外部から漏れたか、もしくはあの時——過呼吸で私が倒れた時に、私のノートを見た？いや、そうでなかったとしても、もうこの顔は確信している。

そういえば彼も、こんな風だったかな？

「……そうだね、うん。私は生き残りだよ」

もうZ事件のことは掘り返さない。そう思い誰にも話さずに居たのだが、今の彼になら、話すべきだと思った。

生き残り、そうだ。私はZ事件の生き残り。きつと一番、あの事件で被害に合わずに居た生存者。

そして誰よりも、逃げて来た者でもある。

「……Z事件で、何があったのかを教えてください。生き残りの名前も含めて。出来るだけ沢山」

「分かった。分かったから……そうだね、どこから話すべきかな……よし、じゃあ、まずは生き残りの名前から。とは言っても、全員を覚えている訳じゃない。一人だけ思い出せなくてね？そこだけは目を瞑って欲しいな」

「分かった」

彼と仲が良かった茶髪の彼だけは、どうしても思い出せない。コミュニケーションを取ることがなかったのが原因だ。どうせなら、彼ともっとコミュニケーションを取るべきだったと、今は少し後悔している。

目の前の白菊君に、生き残りの名前を開示して行く。あの時施設で生きていた人の名前を一つ一つ、間違えのないように。

「二人目、白菊 雪。これはまあ、白菊君だね」

「……」

「二人目、私、恵那 由里」

「……」

「そして、三人目、名前は忘れてしまったけど、茶髪の陽キャそうな男の子。同じ年かそれ以上に見えた」

「背が高かったってこと？」

「そうだね。私達生き残りの中でも一番じゃなかったかな？」

白菊君の質問に答えながらも、最後の一人の名前は、大切なものを扱うかのように丁寧に言葉にする。

今の君と良く似た彼。その姿はまだ見ていないが、今も元気になっているだろうか。

「そして四人目、最後の一人、私達と同じ年で、茶髪の子と同じで、この人もまだ私は見ていないと思う。この学校にも、居ないんじゃないかって思ってる」

「その人の、名前は……？」

「黒枝 雪くろえだ ゆき。白菊君と同じ、雪」

「黒枝、雪……?」

その名前を聞いた瞬間、俺は酷く心が動揺した。

あの時、あの黒男と戦った時に思い出した記憶には、確かに自分と  
同じ年くらいの死にかけの男の姿があった。

あれが、黒枝 雪だったのか……? だとしても、あの状態  
で助かったというのか……?

「その黒枝って人が生きてるのは、確かなの?」

「その、それはちよつと分からない。私は飽くまでもZプロジェクト  
の被害者で、逃げることで精一杯だったから……だから、あ

の夜に警察が突入して来た日の朝に目にした生存者のことしか知らないんだ」

「そうか……」

黒枝 雪が生きているのか。どこに居るのかはとても気になる所だが、他にも聞くべきことがある。

目を真っ直ぐに向け、恵那さんの目をじっと見つめ、次の質問をする。

「夢原 翔真について教えて欲しい。出来れば、表に出ていないような情報」

「夢原 翔真のことは、まあ、聞いて来るんじゃないかなとは思ってた」

ここにきて、恵那さんの雰囲気が変わってきたこと気付く。前は固い口調でよそよそしい雰囲気だったが、今は慣れ親しんだ人と話をするかのように自然体だ。

そんな彼女から、衝撃の真実が語られることになるのは、正直思いもしなかった。

「夢原 翔真は被害者だよ。多分、私達被害者の中では飛びっきりのね」

## 知識と臆病と愚人の決断

夕暮れ時、秋蟬が鳴く中、夕日に照らされたコンクリートの上を歩き一人帰路に着く。

「思えば、もう約1ヶ月も滞在しているのか……」

赤い夕日を眺めながら、歩調を崩すことなくその事実気付く。

「1ヶ月、俺はそのくらい時間を掛けて、やっとZ事件の真相に近づくことが出来た……」

俺は、あの時恵那さんから夢原 翔真の本当のことを聞いた。

『夢原 翔真は嵌められたの』

誰に？

『新たに管理者となった奴に』

ソイツの名前は？

『残念だけど、分からない』

……

夢原 翔真がどのようなことをZ事件でしていたのかは分かった。今伝えられている惨劇よりも前の、まだまともだった頃のZプロジェクトの管理者が夢原 翔真であったことも。

——夢原 翔真は敵じゃない。だが、俺と……黒枝 雪であろう彼は、あの事件で死にかけ、俺は記憶を失い、黒枝至っては、今も生存しているのか分からないままだ。

正直、夢原が憎いと思う気持ちだが、無い訳ではない。

もし話に聞いた通り、夢原 翔真が管理者を失踪という形で辞めることにならなければ、新たな管理者は来なかったのかもしれない。あんなことには、ならなかったかもしれない。

そう思うと、余計に夢原への恨みが増してしまう。

——はあ……いけない。それは駄目だ。その恨み、憎しみは、きつと物事の真実を正しく受け止めるのを邪魔してしまう。

それは俺の望むことじゃない。俺はZ事件の、あの惨劇を引き起こした奴を知る為にこうして今、行動しているんだ。全ての恨みは、その管理者に向けるべきだ。

そう結論付け、住宅街に並ぶ家の外装を見て、自分の中の思いを一つ、口に出した。

「……………この街で出会った人達には、迷惑を掛けたくないな」  
ふと、陽に照らされながら一人思ったのだ。親の代わりになつてくれた舞さん、協力しようとして接してくれた凧さん。どちらも心の底から優しい人達だ。

だからこそ、危険な目に合わせたくはない。例え一人で抱え込むことが間違いだとしても、それでも俺は、一人でやり遂げるべきだと思う。

乾いた風が、雪の体を優しく撫でる。これから戦場へと赴く者に、人が優しく接してくれるように。

「大切な人達だから？いや、違う。そうじゃないんだ、きつと」

もう一人の自分と会話をするように、自分の気持ちの正体を明かそうと頭を働かせる。

答えは、すぐに出た。

「そうだ。俺には、白菊 雪には、まだ大切な人を守ることが出来ないから、守り通せる自信が無いから。だから、危険な目に遭うような行動は、大切な人達にはして欲しくないんだ」

大切な人達だからが原因ではない。自分には守れないから、協力はさせられないのだ。

——協力してもらおう身で協力してくれる人を守れないなんて、そんなのは駄目だ。いくら何でも、無責任が過ぎる。

だから、それまでは……………守れるような力が手に入るまでは、協力させられない。

いや、きつと、力を手に入れても協力させないのだろう。俺は凧さんとは違う。凧さんは守ると、ハッキリと俺に言ったことがある。その時、心の底から驚いていた自分が居た。

彼女は強い。それはデュエマがとか、そういった目に見える情報だけではない。目に見えないもの、心というものが、あまりにも強く、眩いのだ。

それが、俺には無い。誰かへ掛ける言葉の彼方此方に、何かしら

付いて断言出来ないところなど、正に自分の言葉に自信がないことから来ていることなのだろう。

そうだ。俺は、宿命を果たすことでやつとだ。それ以外のことにかまけていられる程、持っている能力は高くない。

「だから——」

バックのポケットから、脱色したかのように見える1枚の白黒となったカードを取り出す。

《龍装艦 チェンジザ》、脱色した3枚のうちの1枚を、俺は恵那さんから譲り受けた。

「……………」

「——」

カードを右手に持ちながら神妙な顔付きで、目の前に立つ黒い男へと語り掛ける。

「……………良いよ。相手してやる」

そう言うと、俺は黒い闇の中へと飲まれていった。

黒い世界。此処に初めて来た時よりも、当たり前だが、落ち着いている自分が立っている。

「……………デツキはある。また、これか……………」

前と同じだ。この空間に入る前に持っていた《チェンジザ》のデツキ。実物を持っていないのにこれが出現するのには、何か理由があるのだろうか？

——まあ、そんなものは今は関係ない。ただ、勝つことだけで十分だ。

デュエルが開始する。先行はまたしても黒い謎の人物から。あの空の人間は、今回も5cなのだろうか。

【empty humanは、手札の《テック団の波壊Goo!》をマナへ置いた(マナ1)】

【empty humanは、ターン終了した】

俺のターンが回ってくる。《波壊Goo!》から推測されるデッキ数は正直多過ぎる。これだけでは、流石にどのデッキを使っているのか判断出来ない。

強いて言うなら、速攻等は考え辛い。大凡入るのは青か黒の入っているデッキだと考えられるからだ。

「ドロー」

引いたカードは《チェンジザ》。少し早いけど、マナを加速出来さえすれば問題はない。マナに置いた所で《ドンジャングル》で出せば良い。

ここはマナ加速と相手のデッキ解析が終了するまで、一旦持ったままにしておいた方が良さそう。

「《v・龍覇メタルアベンジャー R》をマナへ、ターンエンド」(マナ1)

【empty humanのターン】

【empty humanは、カードをドローした】

【empty humanは、手札の《超次元リバイヴ・ホール》をマナへ置いた(マナ2)】

《リバイヴ》か……。成る程、《波壊Goo!》と同色で単色の上に、このターンで緑をマナに置かなかったということは、5cの線は消えたと考えて良いだろう。なら、普通に考えると青黒ハンデス、もしくはドロマーハンデス。ドロマーロージアダンテやドロマー天門といった所か……。

【empty humanは、マナの2枚をタップした】

【empty humanは、《サイバー・K・ウオズレック/ウオズレックの審問》を唱えた】

「《ミクセル》以外に選択肢は無いな」

【empty humanは、相手の手札の《奇石 ミクセル/ジャミング・チャフ》を墓地へ捨てた】

赤紫の禍々しい手がカードから伸び、俺の手札からコスト3以下の

《ミクセル》を墓地へと埋葬する。

俺の手札は《ソーナンドス》、《佐助》、《チェンジザ》、そして《ミクセル》2枚の計5枚。その内コスト3以下のカードは2枚ある《ミクセル》のみ。

2枚ある《ミクセル》の内1枚が消えたが、相手のデッキが分かったのだから十分だろう。これくらいどうという事は無い。

「empty humanは、ターン終了した」

「ドロロー、《佐助》をマナへ、ターンエンド」(マナ2)

《フェアリー・ライフ》は引けなかったが、そこまで問題視することでもない。だが本当に心配なのは、相手がハンデスカードを長期間使い続けられるかどうかだ。

《ウオズレックの審問》として使われたあのツインパクトカードのクリーチャー面は《サイバー・K・ウオズレック》というコスト6のサイバー・コマンド。そして厄介なことに、そのcip効果は各プレイヤーの墓地から2枚までコスト3以下の呪文を唱えられるというもの。

つまり、自分自身の呪文面である《ウオズレックの審問》や、優秀なハンデス呪文である《ブレイン・タッチ》などが墓地から使えてしまう訳だ。

もし《ウオズレック》が出たら、手札があればまあ間違いなくハンデス呪文を2回打って来るだろう。すると、そのターン中に少なくとも2枚のカードが手札から飛ばされる。

流石に後半において、その効果が及ぼす影響は大きい。チェンジザが出るのが先であれば優位に立てる可能性が無きにしもあらずだが、《デモンズ・ライト》や《学校男》、《ドウポイズ》などで処理されるのがオチだろう。

この勝負において重要なのは、如何に早期に攻められるかだろう。ハンデスに対して長期戦を選ぶのは悪手。クリーチャーを出したら即座に殴った方が勝ち目が見えてくるだろう。

——先手を潰すのがハンデスの戦い方だ。その事を竹宮さんとの対戦で痛いほど思い知った。先手を潰すデッキには、如何に此方が相

手を後手に回すことが出来るかが重要になってくる。

【empty humanのターン】

【empty humanは、カードをドローした】

【empty humanは、手札の《S級不死 デッドゾーン》をマナへ置いた（マナ3）】

これで3マナ。まあ間違いなく《ブレイン・タッチ》が来るだろう。

【empty humanは、マナの3枚をタップした】

【empty humanは、《ブレイン・タッチ》を唱えた】

——予想通りだ。

【empty humanは、カードをドローした】

【empty humanは、相手の手札からランダムに《龍装艦

チェンジザ／六奇怪の四く土を割る逆瀧く》を墓地へ捨てた】

またもやempty humanのカードから手が伸び、俺の手札からカードを墓地へと埋葬する。《チェンジザ》が持つて行かれたのは少し不安だが、それよりもマナブーストカードが落とされなかったことを喜ぶべきだろう。

【empty humanは、ターン終了した】

「ドロー、《サイズウミスト》をマナへ、ターンエンド」（マナ3）

まだ、動けない。だがマナを見れば悪いことばかりではない。既の色は整っている上に、《ドンジャングル》で踏み倒すクリーチャーも準備されている。

最悪の動きではない。ならばまだ焦る必要はない。

【empty humanのターン】

【empty humanは、カードをドローした】

【empty humanは、手札の《ZEROの侵略 ブラックアウト》をマナへ置いた（マナ4）】

「っ」

少し目を見開き、驚きのあまり声が出掛ける。

《ブラックアウト》が入っているのは頭から離れていた。確かに竹宮さんも入っていたが、そう入れる人が多い訳ではない。これは正直、困ったことになった。

《リバイヴ》からの《ガンヴィート》出現で《ドンジャングル》が除去されるのは試合中でも1度くらいだ。だが、《ブラックアウト》となる問題がある。このデッキでは相性が悪い。それも頭を抱えてしまう程には。

《ドンジャングル》というクリーチャーは、『マツハファイター』と6000のパンプアップにより、相手のクリーチャーを登場と同時に殴り殺すことが仕事のクリーチャーだ。更に、マナからの7000以下1体踏み倒しと、攻撃誘導を持っている。

だが、ここで問題なのは、その攻撃誘導が可能であるならばという制約があることだ。

攻撃可能、つまり相手のクリーチャーが《ドンジャングル》を攻撃出来る状態でなくてはならない。恐らくだが、《ドンジャングル》の『マツハファイター』は、この攻撃誘導の為にタップした《ドンジャングル》が出来るように想定されて付けられた効果だ。俺自身、『マツハファイター』という能力との噛み合い具合からもそれが正解だと考えている。

しかし、ここで問題なのはドンジャングルが“タップされている”という状況なのだ。先程も挙げた《ガンヴィート》だが、あれは“タップされているクリーチャー”を破壊する効果を持っている。当然、攻撃誘導の為にタップされている《ドンジャングル》は破壊されるだろう。

そう、青黒ハンデス相手では、タップされていることで破壊可能になることが多いのが《ドンジャングル》なのだ。《デモンズ・ライト》でのパワーダウンもあれば、適当な中型クリーチャーで殴り殺すことも出来なくも無いだろう。

そして、《ドンジャングル》はパワー8000。効果で呼び出せるクリーチャーのパワーは最高でも7000。ここで、《ブラックアウト》との相性の悪さが露見することになる。

《ブラックアウト》自体はパワー6000の、バトル中のドンジャングルの足元にも及ばないクリーチャーなのだが、持ち主の場にD2フィールドがある場合、攻撃時に相手のパワーが一番高いクリー

椅子を破壊する《レッドゾーン》を彷彿とさせる効果を持っているのだ。

そう、《ドンジャングル》で呼び出せるクリーチャーのパワーラインが7000以下である以上、《ドンジャングル》を出した所で、パワーが8000より大きいクリーチャーが居なければ返しのターンですぐさま破壊されてしまうのだ。オマケに、《ブラックアウト》は《侵略ZERO》により、《ドンジャングル》の踏み倒しに反応して、そのターンの終わりにノーコストで登場可能だ。分が悪いにも程がある。

パツと思いつく対策としては、《ブラックアウト》の効果を使用可能にするD2フィールド除去、もしくははパワーが8000より大きいクリーチャーを準備することだろうか。だが、D2フィールドに関して是最早運に近い。青黒ハンデスというデッキの性質上、手札が途切れる事はそう無い筈。此方が《メメント》を張った所で、返しのターンに《ダイスベガス》などを張り替えられてしまえば意味は無い。かろうじて出来るとすれば、張り替えられる前に《メメント》の効果で《ブラックアウト》をタップすることくらいだろう。

だが、そうしてしまえば除去呪文によって《ドンジャングル》が退かされるだけだろう。手札に戻してハンデス。青黒ハンデスの常套手段だ。

——困ったな……オマケに《テッドゾーン》入り。嫌になる程相性が悪いな。

《テツゾ》の効果は相手クリーチャー1体のパワーを—9000する効果。《ドンジャングル》は勿論のこと、《ドンジャングル》で呼び出したクリーチャーも破壊されるだろう。

恐らく、今考えているようなことが起きるのは最速でも後3〜5ターン後。マナブーストを考慮すれば、手札から《ドンジャングル》が出てくるのはそれくらい。

最もそれは、自分の手札があればの話だが。

【empty humanは、マナの2枚をタップした】

【empty humanは、《特攻人形ジェニー》を召喚した】

——マズいな、《シャチホコ》のハンデスシステムが出来上がってし

まう。

【empty humanは、《特攻人形ジェニー》の効果を解決】

【empty humanは、バトルゾーンの《特攻人形ジェニー》を墓地へ置いた】

墓地へと置かれた《特攻ジェニー》が、手に持ったカッターを俺の手札にあるカードへと振り下ろす。

【empty humanは、相手の手札からランダムに《フェアリー・シャワー》を墓地へ捨てた】

「……………」

これで俺の手札から手札の枚数を減らさずにマナをブースト出来るカードは消えた。今のハントスはデカイ。これは少々、マズくなつて来たかもしれない。

【empty humanは、ターン終了した】

勝つ為の手段を模索しろ。どれだけ小さな事であろうと、イニシアティブを握ることが大切なのだ。

あらゆる可能性の先に、俺の目指す勝利があると、そう信じて。

「ドロー」

俺はただ、運命を手繰り寄せるのだ。カードを引くのだ。

## 特別編【UA4000突破記念】ホーリー・メール

これは、彼が病院で目覚める前の、記憶の喪失を経験する前の記録です。

僕が記憶していた彼の姿を、ここに記載します。それが、今の僕の使命だと思いましたので。

まず、僕が彼と出会ったのは、Zプロジェクトと呼ばれた大事件の舞台となったある施設です。

最初は少し顔を合わせる程度、隣室に居る合宿仲間のような感じでした。この時はまだお互いに顔しか知らない。カードゲームの強さや人柄、名前も興味を持ってはいませんでした。

そんな関係が暫く続き、ある日プロジェクトの一環として、交友関係を築く時間が設けられた。プロジェクト担当の夢原 翔真曰わく、「君達のコミュ障さには、流石の天才の俺も驚かされたよ。そんな俺からのコミュ障君達への感謝のプレゼントだ。喜んで受け取れ」とのことでした。

その時こそ上から目線の態度に多少の憤りを感じたものでしたが、今では何だかんだ言って、交友関係というカードゲームで得ることの出来る大切なものを手に入れさせようとしていたのだろうと察せられます。かなり不器用なだけで、良く見れば優しさなどがあったのは確かでした。

そうして僕は、彼に触れた。そして少し、同年代の男の子に、尊敬の念を抱いたのを覚えています。

彼の考えというものは独特で、そんな彼の考えは、その頃の僕の考え方を大きく揺さぶったんです。

デュエマの腕は僕からすればそこそこ止まりでしたが、僕は彼の独特な考え方や物の見方に触れることで、自分自身の心の成長を感じられました。

そして僕が救われた言葉は、この時の彼の口から出たものでもありません。きっと彼に出会っていなければ、僕達の未来は、もっと暗いものになっていたかもしれない。そう僕は今でも本気で思っています。

その後は施設内のTCGランキングというものでデュエマでの強さを誇示していた僕の下を訪れ、接戦を繰り広げたことで、それ以降僕や彼に絡むことの多くなる茶髪の友人や、度々その2人が居ない時に現れる僕のゲーム中に現れたVR化されたクリーチャーを絵にするのが上手い同い年の眼鏡を掛けた女子など、夢原 翔真の望んだ通り、カードゲームを介して友人と言える存在が、彼の他にも出来ました。

この2人はアナタも知っている2人ですね。今でも偶に、僕の下を訪れて来たり、PCを使って遊んだりもしますよ。

幾ら国のプロジェクトでも、中学生くらいの年の子にとっては、夜の就寝時間というものは就寝時間では無い訳で、当然僕は灯りの点いている隣室でデッキの改造をしている彼に、最近出来た新しい友達のことなどを自分の事のように少し自慢気に話していたものです。

そんな平和な日々が続いて行く中、ある日、夢原 翔真が僕とコンタクトを取ってきました。

普段は施設内で自室に籠もり、強化選手に選ばれた者達の誰一人として顔を合わせて1対1で話をしたことのない夢原 翔真が、僕に出会い、言の葉を交わしたというのは、とても珍しいことで、何故自分にその話をしに来たのか、とても興味をそそられたのを覚えています。

夢原 翔真は僕の部屋を自ら訪れ、ある言葉を残して行きました。

『君がいつかこの世界の真実に気付いた時、無くした記憶を復元した時、君がこの世界のシナリオを終えるんだ』

何を言っているのか、その時の僕には良く分からりませんでした。ですが、夢原 翔真が、自分達には見えていない何かに気付いていることは明確でした。

その次の日に、誰にも言わず、夢原 翔真は施設から姿を消しました。僕にたった一つの手紙を残して。

手紙には、読み終えたら手紙を燃やすことと、『裏切り者に気をつけろ』という文言、そして、『タイムチェンジャー』のストラップが1つ添えられていました。

夢原 翔真の言う『裏切り者』というワードが何を指しているのか、それはこれを書いて今でも分からないままでしたが、大方、良からぬ意味で書かれているのは分かっていましたから、その時、不安な気持ちで胸が一杯になり、少し苦しく感じたのはとても良く覚えています。

それからの施設は地獄でした。夢原 翔真の代わりを名乗る人物の手で、後に伝わるZ事件の残酷な生存競争が始まりました。

カードゲームで勝った者が、負けた者からカードを奪う。デッキを作れなくなつた者は、カードを奪われるのではなく、実験の被験者になるか、殺されるか。

僕の精神も、彼の精神も、その時にはかなり摩耗していました。これを書く時の自分の一人称は僕にしていますが、僕と彼の普段の一人称が俺に変わったのも、この辺りからだっただけでしょうか？

茶髪でチャラそうな外見をしていた友人も、その時には既に笑顔を見せることは無くなっていました。冷酷に、冷酷に、ただただ非情となり、生き残る為に容赦なく対戦相手を殲滅する。殺伐とした施設に溢れる悪魔のように人を蹴落とし合うTCGプレイヤーでさえ可愛く見えるその人間とは思えない恐ろしい強さから、周囲から『悪魔殺しの悪魔』と呼ばれる、そんな奴になってしまいました。

正直、あの地獄のような環境で、一番見ていられなかった。

そんな地獄の中で、眼鏡の彼女はただただ怯えていたのを良く覚えています。

避けられない勝負を、涙を流しながら勝つ姿。目の前のTCGプレイヤーが泣きながら命乞いをするのを前にし、震えた声で死刑の宣告をする姿。

そして、自分のように人を蹴落とし合う人間を、まるで怪物を見るかのような目で見ている姿。

僕自身も怪物に身を堕としていたのだと、そう認識したのは、彼女が僕にその目を向けて怯えている姿を目にした時でした。あれは、かなり応えました。

勿論、こうなる前に僕ら強化選手は代わりを名乗る人物に異議を唱えていました。しかし、それは施設を監獄とする管理者以外どうすることも出来ない行為により、施設のシステム管理者である代わり的人物の言う通りにしなければならなくなってしまっていたのです。

携帯などのあらゆる情報機器は夢原 翔真が管理者であった時に回収されており、状況を外に伝える手段も無い。そんな地獄で、僕は夢原 翔真から渡された《タイムチェンジャー》のストラップを部屋の中で強く握りしめました。

そしてそれが、夢原 翔真の計画の始まりの合図だったとは、欠片も思いませんでした。《タイムチェンジャー》のストラップが、僕の奪われた記憶というものを取り戻す、いや、補う為の道具だったなんて。

ああ、アナタにそれについて書く必要は無いだろうから、これに関しては詳細は省かせて貰います。

その時の僕は、まるで魔法を見せられたかのような気分でした。僕は即座に、道具に記録された情報を基に行動しました。夢原 翔真の残した金庫にパスワードを入力し、入っていたものを手にとって。

しかし、その行動は読まれていました。施設には毒ガスが放たれ、強化硝子の窓は開かず、換気扇は機能を停止し、本当の地獄と化してしまいました。

僕はそれでも諦めず、何とか管理者の下に辿り着くことが出来ました。まあ、部屋にロックが掛かっていなかったり、ガスが充満している施設から逃げようとする点で気付くべきでしたが、それも勿論、管理者によって仕組まれたものでした。

僕は管理者に金庫に入っていたものを使い、ある空間でデユエマを挑みました。しかし、負けました。先読みの精度の差で、負けました。あれは人じゃない。人の姿をした機械。高度な演算による未来視に等しい力は、人の手では勝てないと思える程に強力なものでした。

敗北した僕は、そこで命を落とすことになる筈でした。しかし、充満していた毒ガスにより、時間が経過したことで体が動かなくなっていた僕は、管理者に死んだと認識され、一人部屋に横たわったまま残されたのです。

徐々に体が冷たくなっていく感覚と、瞼が重くなっていく感覚が、僕に死という避けようのない生命の終着点に辿り着こうとしている

ことを示していました。

ですが、今こうして僕は生きています。それは彼と、夢原 翔真のおかげです。これはアナタも茶髪の友人も、眼鏡の彼女もそう語っていましたね。

夢原 翔真は管理者の計画が始まった時に備えて、施設の周辺に予め爆薬を仕込んでいたのだと後から言っていました。そして、僕がキーホルダーから重大な記録を確認したことが合図となり、その合図から1時間後くらいでしょうか？夢原 翔真は封鎖された施設の扉を爆破。堂々と入り口から侵入し、施設の中から外へと鳴り響く大きなアラーム音が、意識を失いかけていた僕の耳にも良く聞こえていました。

プライドの高い夢原 翔真は、その後どうしたのかは語ってくれませんでした。予想では、そこで管理者に嵌められたのでしょうか。でなければ、夢原 翔真がZプロジェクトの犯人である、とは報道されなかった筈ですから。

ここまで書いていて思いましたが、管理者に見事、僕達は踊らされていたのだな、と感じてしまい、今更ながら悔しい気分になります。

夢原 翔真は嵌められ、強化選手達も、毒ガスで死亡。僕に関してはあの空間でのデュエマの敗北により、毒ガス以外にも死の要因があった訳ですが。

僕が生き延びて今こうして手紙を書けている理由でしたね。話が脱線してしまいました。すみません。

その時彼は、爆破音を聞いて施設の中を徘徊していたらしいんです。そして僕が管理者の居た管理室に倒れ付しているのを見て、無機質な表情で、震えた手で僕の肩を揺らしました。

彼は少し感情が顔に出にくいようで、内心ではきつと不安だったんだと思います。僕も彼の不安を少しでも軽くしようと声を掛けたのですが、どうにも、痺れてしまって会話をするのも難しくなってきたようです。ああ、これは駄目だな、と判断した僕は、兎に角伝えたいことだけを彼に何とか頑張って伝えました。

要約してしまえば、全てを託すと、そう伝えたんです。彼は優しいから、僕の背負っていた果たすことの出来なかった宿命も、代わりに背負ってくれました。

……今でも、悪かったと思っています。僕はあの時最後に、彼に対して呪いを掛けてしまった罪の意識を感じているんです。いくらその宿命を果たすことが重大なことであっても、友人に、大切な友人に茨の道を進ませることになってしまったのですから。

その記憶を最後に、僕は、意識を失いました。人との争いを幾度も繰り返していた僕が次に目覚めた時には、本当の地獄が待っているのだろうと思っていました。ですが目覚めた時に目の前に広がっていたのは知らない天井で。そこからはアナタも知っている通りです。僕は自然と記憶を取り戻し、リハビリに耐え、こうしてアナタに手紙を書いている。僕からすれば、これは夢なのではないかと、本気で思ってしまう。今もそう、笑顔を見せる茶髪の友人や、そんな彼と付き合うことになった彼女の姿が見れるなんて、思ってもいませんでしたから。

僕が事件発生から今に至るまで知っていることはここまでです。

ですが、僕が「アナタに伝えたいこと」としては、事件の出来事でも、彼についてでもなく、彼が僕に言った救いの言葉です。

『人間誰しも、自分自身が世界なんだ。自分が変われば見える世界も

変わってくる。そして、自分を諦めるのは、世界を諦めるのに代わり  
ない』

だからこそ、僕も彼も、あの殺伐とした地獄を耐え抜けた。あの環  
境を変えたいと、心の底から切望していたから、だから戦えたんです。  
人との争いに心が折れることは何度もありました。でも、その度に  
この言葉が僕を支えた。何度も、立ち上がることが出来た。何として  
でもこの地獄を変えてみせる。現状を変えてやる。そうやって世界  
を諦めなかったから、自分を諦めずにいられたんです。

後、彼はこうも言っていましたよ。

『だから、人の数だけ違った世界がある。そして世界というものは、常  
に変化し続けるものだ。まあその、だからね、人から見た『完璧な状  
態の世界』なんてものは存在しない。いつだって変わり続ける、完成  
という概念の無い不完全なものなんだと思うよ』と。

賢いアナタなら、もう分かったんじゃないでしょうか？僕の伝えた  
いことは本当にこれが全てです。

またいつかお会いできたら、その時は――

僕とも、デユエマをしませんか？